

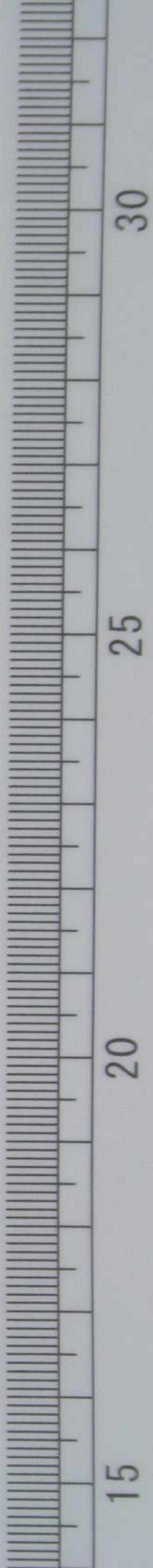
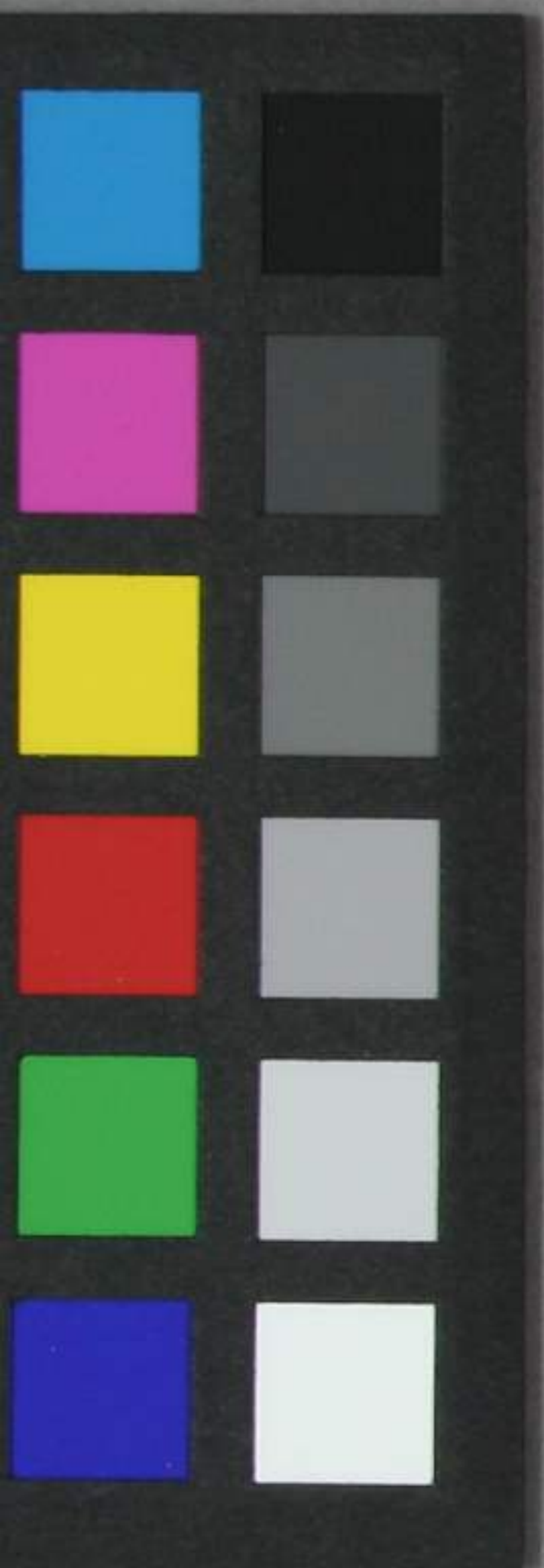
大和田
建樹著

韻文
散文

深山櫻

著者か文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり、今この書は新作の散文韻文二百餘篇を輯めたる者、一たび之を繙かば、櫻の山に分入りて清香衣襟に満つる如く讀者をして、手放つ能はざらしむるの妙あるべし。

東京博文館藏版



韻 散
文 文

深

山

櫻

全

東京博文館藏版



散文
韻文

深山櫻

全 東京博文館藏版



大和田
建樹著

散文
韻文

深山櫻

著者の文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり、今この書は新作の散文韻文二百餘篇を輯めたる者、一たび之を籍せば、櫻の山に分入りて清香衣襟に満つる如く讀者をして、手な放つ能はざらしむるの妙あるべし。

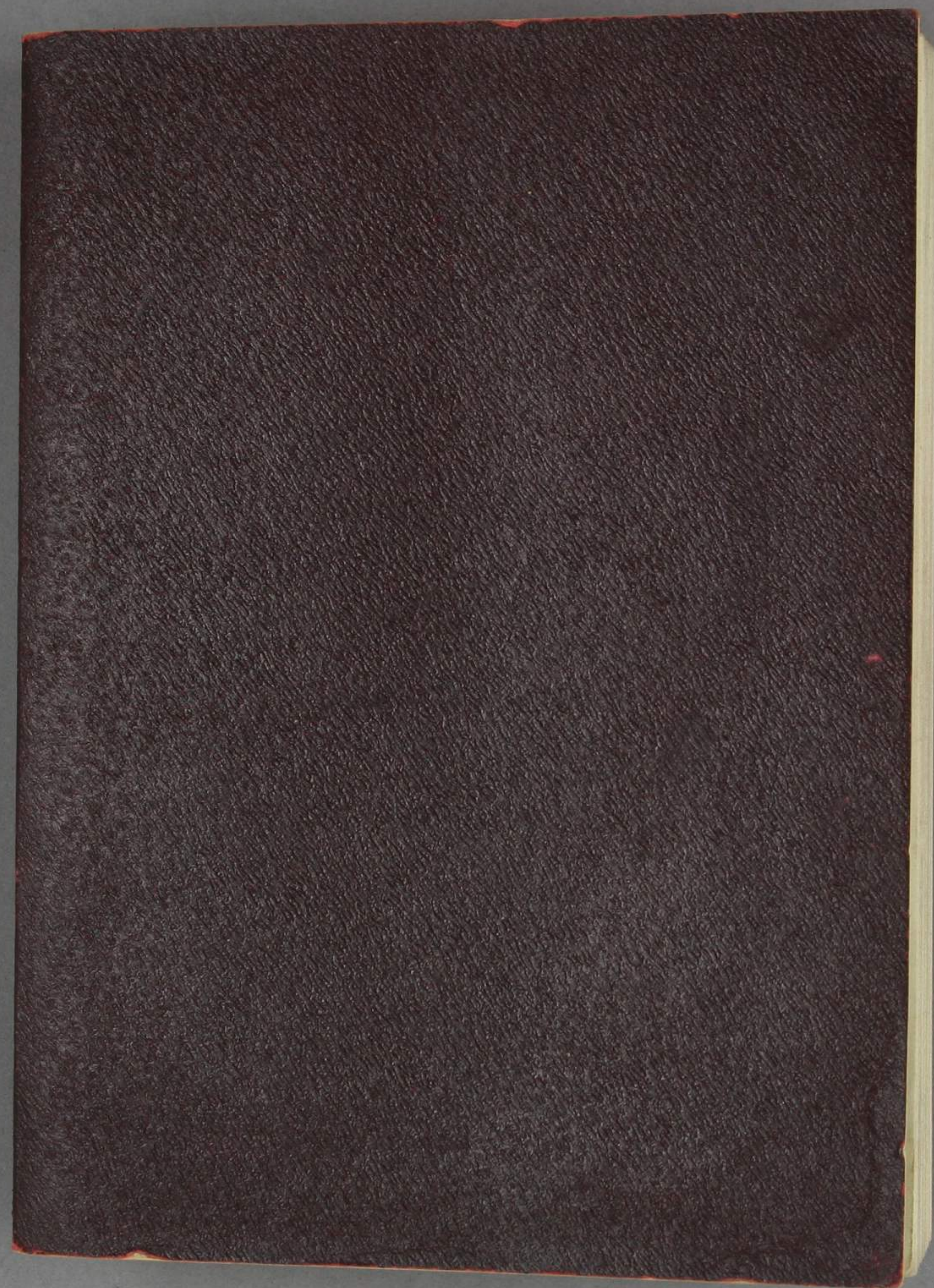
東京博文館藏版

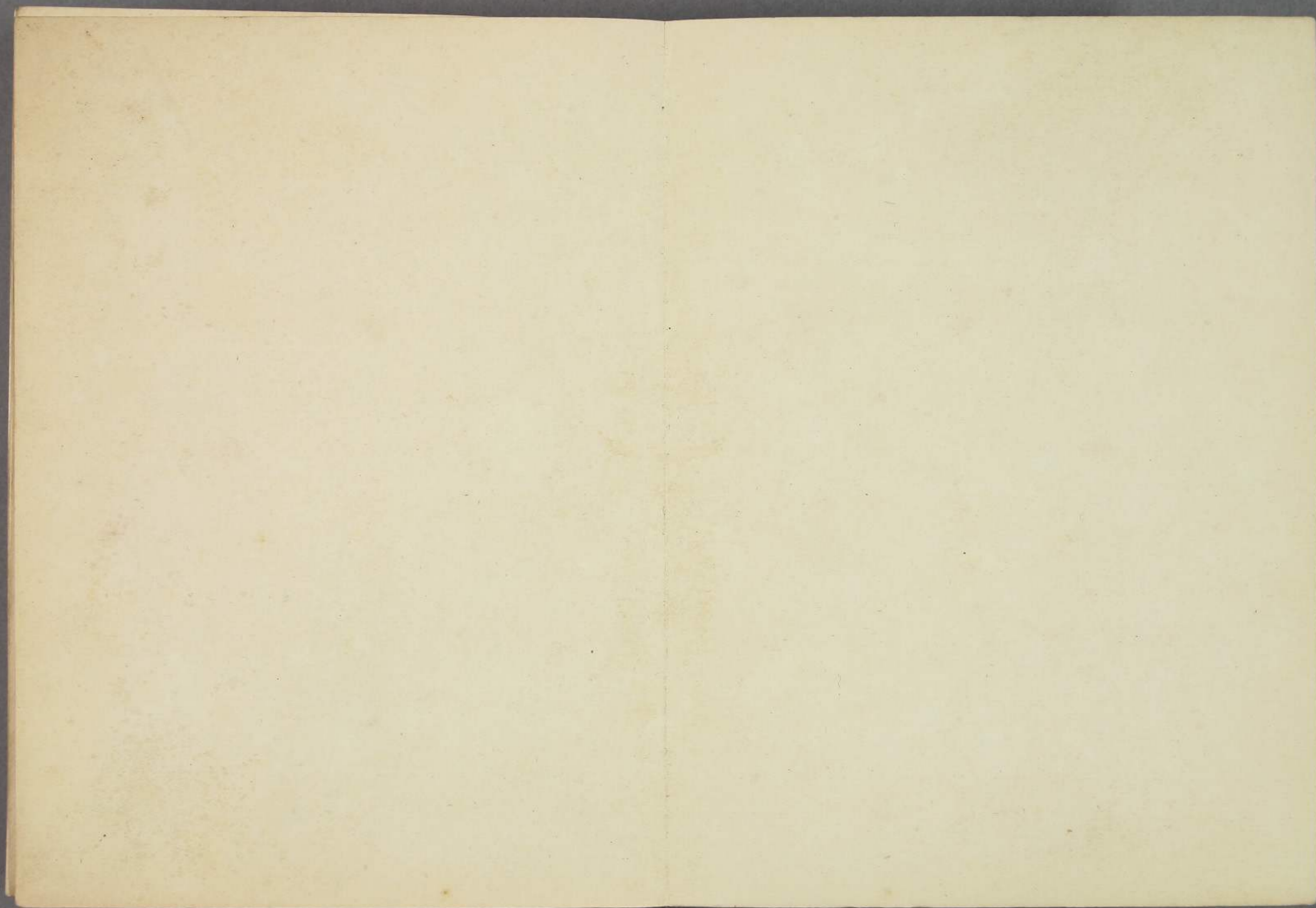
50 55 60 65 70 75 80 85

文韻文散
櫻山深

櫻山深







韻散
文文

深

山

櫻

自序

同じ花にも手毎に折りてご愛でらるゝあり、
いたくなわびそご慰めらるゝあり。あるは絶
えて櫻のご業平に恨まれ降るは涙かご黒主
に惜まれたるなご。いつれあはれの深からぬ
かは。これはさる世の春に咲きまじらんごの
願あるにしもあらず。色も香もなき深山がく
れの薄花櫻。童のすさびに下ゆく水をすくは
せたるのみになん。明治三十二年。春も今はの

夕暮に。目白の寺の鐘聞く里にて。

二

たけのこ

散文 韻文 深山櫻目次

初旅寐……………	一	今はなし(歌)……………	四三
初日影(歌)……………	二〇	水の歌……………	四四
短歌十二首……………	二五	雪の日……………	四四
雪の降るさま……………	二六	何もの、光ぞ……………	四七
奉公の身……………	二九	合羽坂……………	四八
煙草……………	三三	短歌四首……………	四九
神樂少女(歌)……………	三三	出入の車夫……………	五〇
春日山(歌)……………	三四	卷ずし……………	五一
三笠山(歌)……………	三六	納豆賣……………	五一
宮まうで(歌)……………	三六	三月三日……………	五三
豊島が岡(歌)……………	三九	二枚の薙……………	五五
護國寺……………	四三	十とせの春(歌)……………	五五

深山櫻

(一)

霞が浦(歌)	六〇	自然の音楽(歌)	一八八
阿波の海(歌)	六二	嵐山(歌)	一八九
鳴戸の瀬戸(歌)	六三	波の聲(歌)	一九二
淡路島(歌)	六五	わかれ(歌)	一九二
短歌二十六首	六六	三社めぐり	一九四
憂からぬ旅	七三	短歌十五首	二〇一
戀(歌)	七二	若葉の頃	二二六
相摸の海(歌)	七三	玉松	二二六
摘草(歌)	七五	遠くなるをの	二二九
春の旅(歌)	七六	短歌九首	二三〇
土筆	七六	風渡野村	二三三
花の頃	八一	おささへ	二三三
草と莖(歌)	八二	モーリー	二三四
滑床の山(歌)	八四	掛幕毛	二三五
夜半(歌)	八五	久の濱	二三五

通小町	二二六	江の島はどこぞ	二五三
紫式部	二二七	望海樓	二五四
馬よりおりて	二二八	旅店の評	二五四
世泰親王	二二八	通學者	二五五
短歌十一首	二二九	歌よみの詩	二五六
藤波(歌)	二四二	短歌五首	二五六
若緑(歌)	二四三	餅の用意	二五八
若葉(歌)	二四四	胡瓜の苗	二五八
淡路少女(歌)	二四五	梅雨の後	二五九
播磨灘(歌)	二四七	練兵場の隅	二六一
戀(歌)	二四八	短歌三首	二六二
花	二五〇	母未だ語らず	二六三
焼餅坂	二五一	麥搗歌(歌)	二六三
軒の笥	二五二	夕山(歌)	二六五
木曾に山あらず	二五三	撫子(歌)	二六六

人まのほと(歌)	二七	葉山の夏	三二九
宿おりせし家	二七九	短歌三十一首	三七
橋の上	二七〇	神武寺(歌)	三三四
井の頭	二七〇	江の島(歌)	三三六
青田	二七三	田舎の葬式	三三九
七夕(歌)	二七三	大山がへり	三四二
暮待つ宿(歌)	二七五	鍛冶の歌(歌)	三四二
晝顔(歌)	二七六	君恩(歌)	三四四
石堀る人(歌)	二七六	夢(歌)	三四五
貧兒	二八〇	水の歌(歌)	三四七
檀の木	二八〇	宮の山(歌)	三四八
千代に八千代に	二八二	菅公(歌)	三五〇
短歌七首	二八二	母の心(歌)	三五二
麥藁笠	二八四	南信濃路	三五三
短歌十五首	二八七	天龍(歌)	四〇九

親の墓(歌)	四二	あやつり獅子	四三九
朝の歌(歌)	四三	短歌十一首	四四〇
やもめ鳥(歌)	四四	栗の木	四四四
京都は近し(歌)	四六	猿芝居	四四六
雨後の朝(歌)	四七	鹿(歌)	四四七
小穴いち子の柩前に告ぐ	四九	月草(歌)	四四八
短歌七首	四三	月と我と(歌)	四五〇
フルベツキ博士を悲しむ	四五	花と虫(歌)	四五一
短歌十首	四九	貝(歌)	四五三
洋食	四三	送別(歌)	四五四
あとゆく車天	四三	奈良の鹿	四五六
今夜の月	四四	三本足	四五六
黄金の光	四五	故郷人の鯛を贈れるを謝す(歌)	四六〇
萩の紅白	四六	瀧(歌)	四六二
二十六夜待	四六	古さあと(歌)	四六五

堀の内道	四六六	忍耐(歌)	四九九
蝶か猫か	四六八	謠へや波(歌)	五〇一
住みたる家	四六九	詩人の心(歌)	五〇二
物いはぬ石(歌)	四七〇	石橋山(歌)	五〇三
待つらん母(歌)	四七一	夕の空(歌)	五〇五
白石新井先生	四七二	夕暮(歌)	五〇七
秋の雨	四七三	筑波詣	五一一
青山の原	四七四	入日(歌)	五二九
農家(歌)	四七五	戀(歌)	五三〇
神嘗祭(歌)	四七六	齋村(歌)	五三二
盲人の歌(歌)	四七八	小説の君に(歌)	五三七
旅の樂しみ	四八一	筑波山(歌)	五四三
短歌九首	四八五	入日のあと	五四八
ひなぐもり	四八七	秋の蓮	五四八
老木の陰(歌)	四九七	都の秋	五五〇

面白殿	五五二	杵の音(歌)	五七八
櫛の風	五五二	田舎の秋(歌)	五七九
短歌十二首	五五三	なごりの花(歌)	五八〇
福王繁十郎を悲しむ	五五七	露(歌)	五八四
石井一齋を悼む	五五九	さいんくわ	五八六
水(歌)	五六二	短歌十二首	五八九
夕雲(歌)	五六五	小春	五九二
新嘗祭(歌)	五六七	短歌五首	五九五
送る人	五七〇	兵士と少女	五九七
車夫の大聲	五七〇	一つの桶	五九八
印半天の男	五七一	一木の紅葉(歌)	五九九
はとさきもの	五七二	秋のかたみ(歌)	六〇一
一時雨	五七二	短歌八首	六〇三
短歌十首	五七三	夜道	六〇六
天長地久(歌)	五七六	鳥賣る店	六〇六

火のそば……………六〇七
 冬の暮……………六〇八
 松代八景(歌)……………六一〇
 餅……………六二三
 千鳥(歌)……………六二六
 冬の月(歌)……………六二八
 今日も別れ(歌)……………六三三
 氷めぐり……………六三五
 短歌十六首……………六三九
 夕ぐれ(歌)……………六四四
 千鳥の聲(歌)……………六三六
 おどづれ(歌)……………六三七
 千鳥日記……………六三八

散文
韻文
深山櫻

大和田建樹著

初旅寐 明治三十一年一月

水戸—大洗—勿來—平潟

初 旅 寐

鳥打帽は戴けども。肩にする獵銃もなく。ゆきつく先を泊りと定めて家を出でたるは。一月二日の朝なりけり。上野に至れば。二十分あまりして常磐線の汽車發せんとす。此線路はまだ始めてなれば。冬枯の景色見つゝゆくも面白かるべし。さらば今夜の旅寝は水戸にや定めん。

(一)

年の始の事として。至るところに風を揚げ羽根を突く子供等にぎはし

く。國旗こゝかしこに翻れり。田端南千住など過ぎて北千住に着く。停車場には十六七の少女二人。おのゝシヨールを手にしつゝ。上りの汽車を待つさまにて眺めつゝあり。親類へ年始まはりに行かんとにや。希望ある春を迎へて物思なげなるこそ羨ましけれ。六十の老婆は風呂敷包かゝへていと寒げに。日のあたる處に腰かけ居たり。これも昔は花の盛のありけんものをとあはれなるに。そのほか巻烟草を指に挟める書生や。前掛新しき丁稚やと。とりつゝなる新年の笑顔を集め見るも。つれづれならず。我孫子すぎて市川を渡る。紺瑠璃の如き水の上に。胡粉もてかける白帆二つ見えたるは。身にしむさまながら。さすがに晝なり。

取手の驛はづれに橋の下を行く處あり。見かへれば春着せる田舎娘

は。日傘うちかたむけて羨ましげに。我車の方を見おくり居り。わが車の煙は彼等をかすめて。勢よく岸の枯木を埋む。土浦は霞浦を前に控へたる繁華の地なり。左は町の家ども賑はしげに立ち並び。右は天に連なる波路おもしろく。日影やうゝ傾かんとして波を染め舟を彩るさびしさ。春より秋より中々に趣あり。楯形の月は中空に浮びて。歌人の眼には早くも映じぬ。國旗ひらめかしたる小蒸氣船は笛ならしつゝ客まち居るあり。

かすまねどあはれは深し漕ぎつれて

かへる帆舟に落つる日の影

内原すぐる頃は夕陽すでに我汽車を辭して。遠く農夫の屋根にたゞずめり。賤が焼火は紅葉よりも美しく。煙は霞となりて横にたなびくも

さびしきに。日影を背に半ば残せる牛は。童に引かれて今ぞ田の中道を急ぐ。

赤塚に行く頃は。沈みたる日影の名残。はや松まばらなる枯木の林にあらず。空にたいよふ流れ雲の紅粉の色に輝きわたるは。少女の面影にも比へてぞ見まし。

水戸に着きたるは四時半なりき。停車場前の泉屋といふに宿りて。三階の一室を得たり。窓を聞けば。南は鳥友呼ぶ岡の木立と相對し。西は人聲賑はしき停車場を隔て。波靜なる千波沼を望む。さきに別れる夕日は再び姿を見せて。糸の如き光に水を射させつ。今はの譽をかゝやかすもうつくし。右の方には神さび立てる筑波も見ゆ。

今宵あひて明日は別れむ沈む日の

なごり戀しき小筑波の山

湯にも入りぬ。飯もをはりぬ。欄干によりて眺むれば。星の如く螢の如き火は遠近に見えて。夜の景色はた言ふべからず。沼のかなたに見ゆる森は何くぞと問へば。膳を下げに来れる少女。あれこそ下市の明神様よ。此沼の蓮の盛を御目にかけてしと思ひ侍るはなぞいふ。松の梢に見えすく星の光も花の如きに。月やうく影をひろめて。さゝ波の上に銀の盃を浮ぶ。世は望おほし。蓮見にも來ん。梅見にも來ん。

三日は車をやどひて名高き公園を見にゆく。日光の遠山雪白くして風針の如し。既にして梅多きところに出づ。車夫いふ。是ぞ常磐公園なると。右の方に烈公の物せられたる偕樂園碑たり。半ば苦むして先づ昔を忍ばしむ。

更に進めば躑躅あり櫻ありて。何れも珍しき古木と見ゆ。玄關めきたる處にて案内を乞へば。老人出で来てこちらへといふ。いはるゝまゝに此室彼室と見めぐりつゝ。烈公の懸物など拜し。遂に三階に登る。果せるかな千波沼を池とし。筑波を築山として。ひかへたる庭の眺望。何にか譬へん。近くは植ゑけん世も知られざる四季櫻の大木。軒にあたりて枝をかはし。遠くは煙噴く車の道まで。手に取らるゝやうなり。あはれ此樂しみを偕にせし明君の。今もおはさましかば。裏道を下りて。御茶の水といふ井戸見にゆくゝ聞けば。向に見ゆるが櫻山とて花見に人の行くところ。このあたりの田が昔は無年貢にて。千波沼におりゐる鶴を養ふ料なりきなど。例の車夫かたる。常磐神社は公園の南にありて。義公烈公を祭れるところ。めぐりゝ

て此に至れば。笛さこえ筆築ひゞきて。今ど祭典の始まる處なりし。拜しをはりて右の方に至れば神樂殿あり。こゝに据ゑられたる陣太鼓に記せる文字を見れば。震天動地起雲發風六軍踊躍進恩盡忠とぞ讀まれたる。もとは城の櫓に備へおかれたるものなりしとぞ。車夫さきに立ちて。是見給へと指さすを見れば。大砲一つすゑおきたり。思ひきや烈公が寺々の釣鐘を鑄つゝして作られたる。有名の武器にてあらんとは。今よりは心しづかに花を見んと。口ずさみ給ひけんも此ものなりしよ。長夜の眼を攪破して。懦夫の耳聾せしめんとせられしも。此のものなりしよ。さても一夢の世の中とはなりにけるかな。

鐘の音の花に絶えたる夕より

あらしを人の厭ひそめけん

鳥居を出づれば。前は沼の水清くたへて。松青く鳥白く。風光また去るに忍びざらしむ。第二公園は遙か離れて城の邊にあり。鹿島神社を祭れる傍には。烈公の種梅碑ありて。見わたす限こゝも梅おほきは。弘道館中千株梅の名残なるべし。弘道館記は見あぐるばかりの寒水石に刻まれて。八角堂の中に立ちたり。車夫しきりに指さし教へて。あれに見えたるが馬場の跡。こちらが鎗の稽古場なりしなと語るも。尋常の舊跡ならねば。心おのづから改まり聞きなざるゝこそ。處がらなれ。さるにても孔子廟ひとり。瓦落ち草生ひて。雨雪の漏るにまかせたるあはれさよ。

今は幼稚園の遊戯場になり居る講堂の跡をめぐりて。表門に出づれば。

門の柱に彈丸の痕を留めたるを見る。あゝ誰か旅人のために三十年前の昔語を爲すものぞ。聲なき城の松風はそよ〜と來りて。師範學校の國旗を吹く。

つひに水戸の城下を離れて。田の中道となる。まばらに立てる藁屋の中に。焼火しつゝあたり居る農夫の外には。又あたゝかげなるものも見えず。

涸沼川など打ち渡りて大洗に着きたるは。十一時過なりき。宿は小林といふ家に定めつ。

渺茫はてなき青海原より寄せ來ては洗ひ。洗ひては吼え歸る怒濤の中に立てる巖も。ガラスの障子より居ながらに見ゆ。沖には鰯捕る舟。帆かけたる舟。ゆくもかへるもありて賑はしく。右の方に遠く鶴の嘴

の如く見やらるゝは。鹿島岬より銚子のあたりぞといふ。酒もよし肴もうまし。酌取る少女よ。ちと海人の歌ども歌ひて聞かせずや。

飯も終へたれば大洗磯前神社に詣づ。松の緑もて包まれたる山の上にあり。鏡白く幕紫なる廣前。おのづから額突く人の心を新ならしむ。社の右に幣懸の松といふありて。茂り榮えたり。

神垣の松こゝろあらば幣かけし

むかしの事も問はましものを

岸なる茶店に休みて。婆々のすゝむる茶を味ふも浮世の外なり。松のひまふゝより海おもしろく見ゆ。

いわしどる舟は歸りて神山の

松風さむく波に吹くなり

磯づたひして。貝石など拾ひつゝ歸り來たれど。夕方は猶どほし。火鉢を抱へて人も勧めぬ筆取る心地。また文債に攻められ居る昨日の我身とも思はれず。

打つ波を千々にくだきてそゝり立つ

いはほや國のすがたなるらん

日も暮れたれば。漁村の夜景も見て來んとて。運動がてら宿を出づ。

浦里は夕ぐれさびし海人の子が

うたこゑ遠く波にまじりて

松の風しづかに暮れて神山の

つゞみの聲ぞ波にのこれる

並松の木かげさびしく暮れそめて

波の音たかし誰とあそばん

磯の海人が折りたく柴の烟のみ

あたゝかげにも霞む夜かな

松蔭に見ゆる一つの星かげや

こよひ假寝の窓のともしび

天地寂たり。波の音いよゝゝ高く。松の色ますます黒し。

四日は鹿島詣せんとせしに。昨夜の雨は道をあしくしたれば。車進まずといふこそあやになれ。こゝよりすべての道程は十三里。銚田より汽船に乗る便もあれど。是はたよろしき道ならずといへば。遂に水

戸より常磐線に乗りて。勿來の關見にゆかん事に定め。八時大洗を立つ。

遠の山々雪見えて風いと寒ければ。外套のボタン固く合はせつゝゆゝ。さるにても鹿嶋に行かで止むべき残念さよといへば。今おさがりが無くては麥のために宜しからずなど。車夫賤がなりはひの上のみを語る。

汽車の水戸を發せしは十一時二十分なりき。下孫といふ處よりは。絶えず海近く見えて。松青く砂白く。風景畫の如し。

勿來に着く頃は。一天晴れわたりて青色になりぬ。關田村すぎて少し行けば。鐵道線路を踏み越えて行く細道あり。車夫は車を捨てゝ。案内せんとて先に立つ。桔尾花白く並み伏す中を。押し分けゝ進み入れ

ば。つゝらをりに峻しく登る山路に出でぬ。登りはつる處こそ關の名
残なれ。

十もとに餘る老松は。汐風に吹かれつゝ古の聲を残し。誰か植ゑけん
若木の櫻は。道もせに散りけん面影見せて。春まちがほなり。貞任宗
任を祭れる小さき石の祠は。筒井憲といふ人の碑文と共にさびしく立
てり。あはれ此關の名よ。花なかりせばかくまで世には傳はるまじく。
歌なかりせば花も世に知られずして止みなましを。英雄の遺跡を千載
に芳ばしからしむるものは。抑も亦花と歌とにあるか。

道もせに散りしさくらの跡とへば

いそ山あらし松にふくなり

もとの道より海邊に出で。一の茶店に憩ふ。こゝにて碑文の石摺櫻

の化石など買へと勸むれど。摺物は人より得たるがあれば。それより
は熱き餛飩こそよけれとて。老婆が盛りて來るを箸にすれば。けんち
んとて。油揚に胡蘿蔔きざみ入れたる汁そへて出だすも。田舎の風味
すつべからず。今夜の泊など問ふついでに。あるじの翁かたりけらく
勿來の名はあぶなく關本の停車場に奪はるべかりしを。磐城の名所を
常陸に取られてはとて。村人ども強ひて鐵道會社に請ひて望どげたる
が。今の勿來の停車場なりと。地方にはかゝる争。いづこにもある事
ぞかし。

平瀨に着きて阿波屋に宿る。前は入海にて磯には松おほく。右に突き
出でたる處には藥師堂あり。之に對せる左の岡は八幡宮の神山にて。
眺望えもいはれず。浦里は我やとれる家につゞきて。軒むつましげに

立ち並び。物賣る店は海士の住家と相接して。冬も賑はしき一湊なり。

まづかの八幡宮に詣づ。浦風松の梢に聲して。こぼれそめたる山茶花もわはれ浅からず。夕日は早かくれて。名残の空いづかたも薄紅梅に染みたる處を。黒き鳥の三つ四つ二つ。峙に行くとして飛びわたるなど。形ある詩の趣ならずやは。

風呂に入り飯をはりて欄干に凭れば。山の色やうく暮れそめて。碎くる波に黄金を散らし來るは月なり。漁歌とほく聞えて。舟影はのくと煙りわたりぬ。

いそ山の松かげ白く霞む夜の

月にさくらのにははましかば

眠らんとする枕に響くは。旅人の疲れ慰めんとする按摩の笛か。五日は餘りの寒さに歸らんかとも思ひしかど。せめて常磐線のあらんかぎり乗りて見んとて。八時やどりを出づ。白波寒く磯を洗ひて。松吹く風は顔を切る如し。雪ちら／＼と來りていざといへど。今朝は歌袋の口も氷りて解けず。

平潟より關本までは半道なるべし。人皆勿來の關見にゆくには。勿來停車場にておる、事と思ひ。おのれも亦旅行案内によりて左はしたれど。實地は此關本にておりんこそ便利ならめ。

發車までは三十分もあれば。一の茶店に入りて圍爐裏にあたりつゝ待つ。吹きざらしの處にていと寒し。あはれ夏ならば海見つゝ、澁茶傾けんも一興なるべきに。

九時十四分の汽車にて久の濱までの切符を買ふ。きのふの勿來のあたり見つゝ行くに。雪なほ少しづゝ來りて落花に似たり。

うれしくも降りくる雪か名に立ちし

花のあとゝふ人のたもとに

左には雪白き山々をながめ。右には動きて止まざる松と波とに風の寒さを思ひやりつゝ。走る事驛また驛。村また村。たゞ飾なき天地自然の色を見る外には物もなし。ポケットの手帳を探らんとすれど。指氷りて鉛筆も持たれず。腹なる懷爐を握りつめては。手帳のゴムを延ばす事もしばしなり。

平も過ぎて久の濱に着きたるは。十一時十分なりしが。東京行の汽車は二十分に發すとて。人々切符を買ひ居る處なりき。これにはづれな

ば明日を待たざるべからず。さはとて直に今の道をうしろへ向ふ事とはなりぬ。驛夫よ怪しむ勿れ。歌人も種を得んとしては多忙かくの如きを。

雪は止みたれども寒さはゆるまず。足先など感じを失ふばかりになりて。はては外套ひきかぶりつゝ縮み居るのみ。

水戸友部など過ぎて行くほどに。日はやうゝ筑波の左にかくれて。例の薄紅に彩らるゝ山際うつくしく。筑波は影を紫にして。神さび立てるもさびしげなり。鴨か鳥か。幾千の鳥のさと飛び立ちて。木の葉の如く空を埋むるばかりなるを。あれよゝと寒さも忘れて。窓打ち開きながむるもあり。

夕ぐれの空のあはれさ筑波嶺は

別れし人のおもかげにして

高濱土浦も過ぎぬ。月白くさえわたる波の上。燈さむく見え隠れする
里の遠近。もはや見出ださんとする人もなし。
八時半ごろ上野に着きぬ。寒さは何くまで追ひ來るらん。されど手足
のつめたさなど。今朝ほどには思はれず。

初 日 影

一

われは今年の初日かけ

雲の衣をぬぎすて、

み空に立てば世の中は

いつしか早も春めきぬ

松竹たてし門邊には

羽子つく音もたのしげに

二

あはれ昨日は西ひがし

足をそらにて行きかひし

其市人はいづかたぞ

もの賣る騒ぎいづかたそ

笑顔をあげて我かげに

むかふ人のみ里ごとに

三

されどきのふの夕ぐれに

かたむく影をひろげつゝ

老の庵おいほりを訪ひし時

よろこび誰か向ふべき

みじかき日やと爐のそばに

つぶやく聲はひゞきたり

四

あはれ過ぎつる夏の日

露もつ百合を色とりて

少女の顔にてりかへす

五

あはれ過ぎつる秋の日

おつる木の葉をてらしつゝ

つかれし翁おぢを家ちまで

おくりし影も我ぞかし

友なき野邊の夕ぐれに

松ふく風とたゞ二人

六

光見せしも我ぞかし

歌ぞゑ絶たぬ谷水を

はなれぬ我身の鏡にて

言ふな思ふな老人よ

夕日を失意のひかりとは

言ふな思ふな少年よ

朝日を希望の光とは

きのふの冬は今日の春

夕日は朝日の過去ぞかし

七

見舞ひめぐりて新年の

日も夕暮になりにつけり

よろこび迎へ拜みつる

今朝の人々いづかたぞ

早さしこめし窓の外に

残さるゝもの我ひとり

若 水

くみそむるつるべの水にのこるなり

のぞみしまゝのあかぼしのかげ

新年の歌の中に

何となくうれしきものは水いろに

はれてあけ行く年の初空」

今日といへば待たれて出づる天つ日の

ひかりや御代の姿なるらん」

いかのぼり上にくと吹く風を

この一年の心ともがな」

初夢にまづこぎめぐる少女子が

舟やいづこのわたりなるらん」

加留多とる宿のかちどき聲たえて

おく霜しろし門松のうへに」

白つきし人もまじりて小山田の

いはりにぎはふ鞠歌の聲」

一月十一日はかしこくも英照皇太后の御三年にあたらせ

給へば

藤波のかへらぬ春やしのふらん

色のゆかりの雲の上人」

青山の御庭の松をふく風の

かなしき聲も三とせへにけり

雪

夜あらしを降りしづめたる白雲は

中々竹のかたきなりけり」

朝毎にかよひなれたる山の井の

「みち迷ふまで雪ふりにけり」

下にすむ人のありともみやびをは

知らでや橋の雪をみるらん

雪の降るさま

雪の降るさまは何にか似たる。鶯の毛などの軽く舞ひくるにやたとへん。おぼろ月夜に櫻の散り亂るゝにやたとへん。綿をむしりたるに似たればとて。綿帽子なども。幼児は呼ぶめり。支那人は柳の花の飛ぶに比して。詩にも作れるは。櫻しらねばなるべし。はじめて見たる沖繩人は。空にとびかふ榕樹の落葉を思はしむといひ。又とんぼの空に飛びかふさまありといひしこそ。をかしかりしか。

奉公の身

手をうで海老のやうにして。北風寒き井戸ばたに立てる女あり。故郷はいづく。安房か上總か。なれし父母の膝をはなれて。奉公に出づる身のいとほしさよ。

山茶花なる垣のあなたには。美しき琴のしるべも漏れくるものを。同じ人の世にいでながら。われは氷の如き水をも汲まざるべからず。雪の如き菜をも漬けざるべからず。おもへば田舎の餅搗も。もはや近々のうちにやあらん。

烟 草

夜ふけ燈さえて。嵐ひとり閨の戸を打つ。この時あたゝかなる夢を伴
なひ出づるは誰ぞ。蝶とび菜たね咲きつゞく田圃の道に。梅さき鶯な
く里のすみかに。弟か妹か。さては兄となり友となるべき人か。

おのれもとより煙草を好まねばにや。此ごろ世にもてはやす巻煙草に
つきても。いとほるゝ事こそ多けれ。

人と語るとては。嘗めぬらして二口三口すふと見るまに。火ははや灰
となりて。髭にちり膝におつる。まづうるさげなり。

一時間もすれば。吸ひはてたるからは。木賊の如く火鉢のまはりに立

ちならべるも。心づきなきに。灰吹にさしたるは筒を埋めて。いかに
跡とりあつかふ厨女を勞せしむる事よ。

さらばとて歸らんとするにも。一本口にして座敷を立つ。新築の家な
どには。主人あふなしとや心には忌むらん。

車にてゆく紳士を追ひかけて。乞食一文やつてくれさいと呼ぶ。知ら
ずがほにて過ぐるあとより。巻煙草の灰雪のごとくこぼれて。あはれな
る親子の顔にかゝるとの記事は。何かの新聞にて讀みたるやうなり。こ
れも巻たばこに耽る人を。あざけりたるなるべし。

汽車にて。隣りあひたる人の吸ひたつるけむりは。顔をおほひ鼻に入
る。これはどつらき事なし。きらふ人より見れば。たばこ好む人はど
遠慮なきものやはある。

ことに似つかはしからぬは。やんごとなき令嬢など。金の指環はめたる手に。カメオ。サンライズなどいふものを挟みつゝ。櫻の苔なす唇に火と烟とを煤するさまよ。へびくふと聞けばおそろし雉子の聲など評せんは。大にすぐるにや。

中小學校にかよふ少年の。煙草屋に腰うちかけつゝあるは。筆紙かへとて父母よりたまはりしものを。烟にせんとてならし。學校生徒の喫烟を禁せしめんと論ずる教育家の。こゝかしこに起るも。故なきにあらず。

さはいへ。煙草にわが知らぬ徳も多からん。されど乗合なき夜汽車なとに。マッチ忘れて來りし人のつらさを思へば。むしろ求めて樂しまんよりも。始より苦しみを知らざらんには若かじ。

神樂少女

花ならば櫻の苔

月ならば三日月の影

神垣の松のこのまの

朝づく日ひたひに受けて

立ちならぶ六人の少女

雪よりも白きたもどを

ひるがへし舞ふはたが子ぞ

もみちなす赤き袴を

踏みしだき舞ふはたが子ぞ

神歌のすみ行くまゝに

さえまさる手風なつかし

舞の手のさえ行くまゝに

澄みのぼる笛おもしろし

立ちかへり又も来て見ん

舞姫のすがた身にしむ

すみよしの浦

春日山

かすが山のへの若草

春ならば鹿よびがてら

里の子と来てつまゝしを

吾妹子と来てふまゝしを

おく霜の色より外に

花もなき冬の淋しさ

落葉ふく風はとへども

烟たつる少女も見えず

木のもとに鹿は待てども

餌をかはん旅人もあらず

秋ならば紅葉のかげの

草まぐら一夜かりても

月見ましものを

三笠山

いにしへの人の登りし

三笠山けふ来てみれば

海なしときしは何く

國原を底にしづめて

立ち迷ふ霧の浮波

わが戀ふる里さへ見せず

わが思ふ山さへ見せず

薄衣につゝまれ立てる

おもかげや畝傍耳無

北なるや天のかぐ山

かづらきの高ねさびしく

天ぞゝり残るもあはれ

すめろぎの都のあとを

春ならば花つむ妹に

まじりても聞かましものを

秋ならば月見る子らを

呼びとめて問はましものを

霜しろき野邊の遠近

なく鳥の聲も聞えず

ゆく人の姿もみえず

かの森に立てる棹鹿

心あらばこち來て語れ

山のむかしを

宮まうで(謠曲)

おひそむる

二葉の松の若みどり

さかゆく陰は君が代の

千代のちぎりを掛けまくも

かたじけなやな神垣の

鳥居の石のことはに

つきぬめぐみを祈りつゝ

いざ宮まうでせさせん

宮まうでいざや祝はん

豊島が岡

貞宮の御葬式を送り奉りたる歸るさに畏けれど。

大内の山したざくら

咲くと見し昨日は夢か

ぬば玉の夜半のあらしに

さそはれて香さへ残らず

千代かけて榮ゆく春を

祈りつる花の若宮

契りつる松の姫御子

ゆく水のかへらぬ道に

出で立たす名残の御輿

今一度をがまんものと

道に立つ千よろづ民の

なく涙ふりくる雨の

三つ瀬川わたりはいづこ

小石川音羽をすぎて

今こそは豊島が岡の

山ふかく入らせ給へれ

鈍色にびいろの麻衣きて

みをささに御供つかふる

宮人は御旗さゝげて

たがために明日は仕へん

いづかたに今日はかへらん

岡の松かへりみすれば

夕日うすれぬ

護 國 寺

日かげ薄くのこりて。鐘樓の屋根にあり。何となく霞みわたれる櫻の
枯枝。こゝろは馳すれど。春はなほ夢よりさめず。僧は學寮にかへり
て。門の仁王ひとり寂寞の内に残されたり。
あはれ昨日かも送りまゐらせし宮の御墓は。岡のあなたとぞうけ給は
る。松青く風寒し。人かへりて後は。鳥も歌はず春も訪はず。

今は無し

一

ありと見し夜半は夢か

壁にかゝる時計の音

窓を打つ夜風の聲

今宵なほかはらぬを

暗き火影に旅して

眠りし人今はなし

二

江の島の春は夢か

岩にねむる鷗のかけ

遠くかすむ富士のすがた

思へばなほ忘れぬを

濱路たのしく打ちつれて

遊びし人今はなし

水 の 歌

一

月さむき川の床に

水の歌はひびくなり

『水の及風の鞭』

よし切らば切れ打たば打て

たのしき春の少女子は

海のあなたに招くなり

海の遠にて招くなり

『さざ行かんいざ急がん』

二

霜しろき草のうへに

風の歌は響きたり

『わが身をよそに打ちすて』

よし行かば行け谷の水

春のをとめに誘引はれて

來ん日を我は望むなり

來ん日我をは願ふなり

いざ急げいざ別れん』

雪の日

灰色の空より落花の如くひらめきくる雪。いまだ女學校がよひの生徒をして。傘を開かしむるほどこに至らず。

客待する車夫。ケットに身を包みて。ふるひつゝ立てるもあり。

木のくづあつめ來りて。焼火こゝちよげにあたりをるもあり。一瞬

風を切りて走らば。上衣を奪ひ去らるゝ熱を得べき望なきにわらず。

井戸に立ちて水汲むは誰が家の婢ぞ。つるべの綱もつらして見あぐる折しも。雪二つ三つ來りて前髪にかゝる。

何ものゝ光ぞ

あへば言ふ事すくなく。別るれば語らまほしき事こそ多けれ。あはれ我身をして。しぼまぬ花ならしめば。とこしへに折られて人の胸に添はましものを。

松原の入日。枯野の夕煙。人も見つ。我もながめつ。されども樂しか

りし其かげは。皆過去になりぬ。
星は光をくだして水にあり。風は響をおくりて松にあり。あゝわが心に持ち來されて。永久はなれぬは。何ものゝ光ぞ。

合羽坂

夕日は隠れたれど。金の如き光は猶引かれて。焼くるやうなる空にあり。雲すきに立てる森の木立。近きは濃く遠きは淡く。靜なる天地は今ぞ今日のさらばを告げんとす。なごりをし。心は西にむかへど。車はすでに四谷をあとにして。合羽坂をのぼりぬ。

早 春

遠山にのこる夕日のむらさきに

みゆるや霞む始なるらん

春 雪

かたへよりかつきえそめて春の雪

うすみどりにもぬるゝ野邊かな

二月十六日は日蓮宗大檀林にて宗祖の降誕日をいはふための大演説あり。おのれにも一席のべてよとの事なりし

かど。故ありてえゆかぬよしとわりいひやる書のおくに。
 祝のうた一つをへたり。折しも雪いたくふりければ。
 ふるまゝに残る朽木の枝もなし
 妙なる法の華のしら雪

残 雪

梅の花をる子に今日も踏まれけり

つくりすてたる庭の雪山

出入の車夫

家に入りの車夫三人あり。一人は虚弱。一人は冒険。一人はその中に
 位す。虚弱なるは安全なれども。にぶき弊あり。文章にたとふれば古
 學者流の雅文か。冒険なるは快活なれども。怪我なきを保すべからず
 洋文的の新体にやたとふべき。その中に位するものこそ。早きと安全
 なるとの二得をば兼ねたれ。古今折衷の見本に似たり。

卷 ず し

遊山にもものせんとて。家内中とくおきて。辨當の用意などする朝あり
 き。おのれも卷ずしを手にし。切りては重箱につめ。切りては重箱に
 つめて見たれど。なれぬわざとて。切りかた揃はねば。重箱にも思ふ
 やうにつまらず。口をしや落第せりとて下婢にわたせば。無造作に切

りてはつむるさま。只何の用意もなければ。寸法少しも違はず。重箱にはまる事。始より物尺あてゝはかりたるが如し。あはれ何事もわが試みて知りたる事は。よきにもあしきにも感ぜらるゝ事こそ多けれ。

納豆賣

『なつとらうく七色たうがらし』。かなしげなる聲は。横町より折れて門構ある家の前をすぐ。わづかなる籠の藁づとも。十歳の子どもには重荷なるべし。あはれ慈愛ふかゝりし父母は此子を捨てゝ。いづくの土にか眠る。

おもへば今日は三月三日。世はあたゝかに梅さく頃を。ひとり半日の價をあつめて。孤兒院にかへりゆくあはれさよ。深窓に雛もてあそぶ少女。御身も知るや。鶯の外に。此あはれなる聲あるを。

三月三日

桃の節句とて白酒たのしげに汲みかはす子どもを見れば。先づ我むかしこそ思ひ出でらるれ。

二月二十六七日の頃にやあらん。母君は下婢などを相手に土藏より雛箱とりいだし給ふ。頭におはへる吉野紙を一つくにとりのくる手傳をば。命せられねど己れ何よりも楽しみにしては。女めきたりと叱らるゝ折もありき。

座敷の正面に柵をつくりて。その上段には砂を敷き。大きな松の枝を立てたる下に。御殿は廣々と置かれたり。鶏合する仕丁。さては公卿參内の行列など。こゝにかしこに并べ立てらる。

あす節句といふ日になれば。母君下婢と共に草餅調じ給ふ。殊にうれしかりしは。七十にあまり給へる大伯母上ありて。おのが身を誰よりも愛させ給ひ。紅粉くちなしなど持ち出でゝは。米の粉して桃みかん柿栗などを作りならべつゝ。小さき重箱につめては興へ給ひし事なりき。今も菓子屋の前など通る毎に。思ひいづる事すくなからず。

其日になれば。雛遊とて男の子も女の子も。おのゝ重箱を手にし。白酒の徳利などを持ちあつまりて。男は天神の像を。女は雛人形を主人にしつゝ。物とりやりして遊ぶこと。我故郷のならひなり。おのれはい

つも妹と共に近處の友だち集めつゝ。櫻の木陰岩の上などに菫を敷き大伯母上より。めぐみ給へる辨當を開く事のためしは。何ものにか譬へていはん。夕日の花にかたむくを。子供心にもかなしと見し春こそ多かりしか。

あはれ戀しきは。母上大伯母上のおはし、春ぞかし。妹と共に故郷の庭に圓居せし春ぞかし。雛よわが子よ。二十年三十年の後には。汝も又しかこそ思はめ。天下の春はまた來るべしといへども。わが身の春は齡と共に又かへらず。

日影あたゝかき庭に。敷きたる二枚のむしろ。之を領するは。八歳の姉と。六歳の弟となり。姉は人形を其一隅におきて。小さき俎板庖丁の類を。處せまく置きならべ。いつしか摘み集めたる嫁菜たんぽゝ。切りきざまれて皿に盛られたり。弟は太鼓を足に挟みて。箸の如き撥もて打ちならず。紙にて作れる面と。鈴扇とは。そのかたへに散亂たり。

十こせの春

父君の十年祭ついでへける日。

よしの川岩さる水の

早きは月日なるかも

かへらぬは古なるかも

ちゝそばの父の命の

うつし世におはしゝ事は

昨日今日と思ひしものを

天つ星かきかぞふれば

梓弓春も十かへり

小車のめぐり來にけり

夢なれかも現なれかも

建樹わが受け奉りつる

御めぐみの千々のかずく

くりかへし思ひいづれば

舟うけて君が釣せし

ふるさとの海も深からず

筒さげて君が獵せし

我家なる山も高からず

いかにせば千重の一重を

御命のあらんその日に

むくいんと思ふ間に

霞たつ遠のみそらを

ゆく雁の遠き別の

ひたみちに立たしことよ

かくりよのしたべの使

こゆるぎの急がざりせば

七十まり三つの齡の

末ひさに春のこのめの

榮えつゝ今もおはして

牛込のさとゆく汽車の

道すぐに御ともつかへて

小金井の花見やせまし

目黒の藤見やせんと

千代かけてたのしみし事は

ぬば玉の夜のまの嵐

いたづらになりしかなしさ

水の泡と消えし悔しさ

小雨ふる窓の鶯

小金共のまはうちしめり新喪にひものごとも

音に泣く我は

霞が浦

一

夕暮かすむ霞がうら

しづけき影は水の上に

魚も躍らず風も舞はず

たゞ月ひとり空にあそぶ

二

少女は爲めに指さしいふ

水のあなたに黒く立てる

山はつくばよ戀しゆかし

あの麓こそわらはが家

阿波の海

春風に帆を張りつれて

阿波の海わたる舟人
沖なるは布をや積みし

磯なるは藍をや運ぶ

わかめ刈り鯛つりのせて

鳴戸より來しは何れぞ

浦にいでゝ送る妻子の

心さへ載せても行くか

あはち島おもかげ消えて

霞む日の波のをちこち

みだれいづる海士の小舟は

箱庭に散らして浮けし

うなむ子が小笹木の葉の

こゝちのみして

鳴戸の瀬戸

わかめかる鳴戸の瀬戸は

ゆく舟のかしこき道と

むかしより聞きこし海

目のまへに見るは始めて

かの向ふ淡路の戸崎

この立てる阿波の孫ざき

言問へば答ふるなして

向ひ立ち狭き間を

引く汐の引きの進みに

渦たてゝ逆まく波は

世をわたる海人のいのちも

ともすれば奪ふとぞ聞く

かくばかりかしくき海の

波こえて進みゆかずは

鯛すらもよき名を負ひて

世に出でん事はかたきを

人の身として

淡 路 島

ともし火の明石の浦を

朝びらさ我がこぎくれば

神のます岩屋みさきは

迎へつゝ舳さきに立てり

大和島をじまの磯は

ゆく舟の左に立てり

磯づたひ東に折れて

假屋にや今宵やとらん

志筑^{しつき}まで車ややらん

おもしろく霞む松原

なつかしく群れとぶ千鳥

一夜ねし舞子の浦の

波のうへに伏しゝは是か

いぎなきの神代ながらの

あはぢしま山

梅

中々に離れまうきは梅の花

かをる朝けの枕なりけり

落 梅

里の子が来て引きならず鈴の音に

神垣さむく梅ちりにけり

鶯

春雨の晴れたる窓の吳竹に

露ふみこぼし鶯のなく

うぐひすの聲するかたをながむれば

小笹のうへに月ぞ残れる」

今日もまた庵の朝飯あさけはおくれけり
 柴折る山のうぐひすの聲
 谷かげに庵し居れば鶯の
 わすのしらべを夕にぞさく

霞

かすむ日のみそらに残る白妙や
 春におくれし富士のとは山
 いで、こし里は霞になりけり
 畔道づたひ莖つむまに
 三日月のゆくへも見えずなりにけり

いくへ霞める夕なるらん

春 雨

家もあらば宿かさましを少女子が
 すみれつむ野の夕ぐれの雨
 さくらちる宿の春雨けさ見れば
 にはへる雪の雫なりけり
 神樂みる子らはかへりて稻荷山
 梅ちるくれに春の雨ふる
 わび人は都にもあるを春の雨
 つらきは花の上ばかりかは

若草

つみあそぶ頃とはなりぬ春日野の

鹿のふしとの春の若くさ

ふむ人のなきを中々めぐみにて

もえこそわたれ庭の若草

いづくにか駒のり入れんわか草の

むしる敷かざる春の野もなし

芹

うぐひすの聲を山路にきゝすてゝ

野澤の根芹つむ人やたれ

春月

たが里のゆめぢの末にかすむらん

昔ながらの山のはの月

別れつる梅が香こひし獨寢の

寢覺の窓の春の夜の月

それとなく靡く霞のゆくすゑに

急がぬ月の影を残れる

うなる子が蹴あげし鞠のこゝちして

やなぎにかゝる夕ぐれの月

神山のまつりのつゞみおとたえて

ふけゆく花に月かすむなり

歸 雁

ふるさとの空こそかすめ天の雁

かへるなごりの夕ぐれの山

春 風

その人をふくともなしに戀しきは

すみれさくの、春の夕風

春 曙

ふじのねを空にのこして明けそむる

海原さむし春のあけぼの

春 夕

大かたは霞のいろにつゝまれて

夕ぐれさびし春のどほ山

憂からぬ旅

明治三十一年四月

山陽鐵道—門司—博多—宮崎—太宰府—熊本—武雄—長崎—佐賀—
宇佐—別府—宇和島—神戸—男山—東海道

一 夜汽車

饅頭々々と呼ぶ聲に。窓を開けば。汽車は明石に着きぬ。遠近の松原
墨繪の如く霞みて。月おもしろく空にあり。さるにても須磨舞子を夢
の間に。過しつるこそ口惜しけれ。

うきものと旅路を誰か言ひそめし

明石の浦の春の夜の月

淡路島あはとながめし面影を

のこして月の霞むよはかな

窓の内には。夜のやうく更けゆくまゝに話も絶えて。眠しづかなり。
夢は何くぞ。蝶か花か。選挙競争の新戦場か。

寒氣硝子を透して膚を襲ひ。月いよく高くして。森も村も寺も山も。
煙の帳に姿を隠しぬ。水たゞ情あり。月の光を花と散らして聲なき歌
を弄ぶのみ。

三原と本郷との間にて夜は明けたり。曉の冷えたるこそ理なれ。橋の
上。屋根の上。土手の芝も畑の青葉も。霜ならざるなし。月はかつし
か隠れて。空うくつしく霞みわたりぬ。

白市過ぐる頃。雲煙のうちに旭を見とめたり。漸うにして光を地に引
き。花に映じ窓に入り肩を撫づ。見るものとして樂しからぬはなし。
此あたりより。一驛毎に乗込む人『がんへんかいの』調の廣島言葉を加
へゆきつゝ。身すでに第二の故郷へ入りたる思ひあらしむ。三年の遊
學。おのれに日曜の快樂を知らしめたるは。此地なればなり。

廣島を出で、横川停車場へ來る。名物の鬚太豆腐は。當年の風味を留
め居るや居らずや。試験後の休課中。しばく汝が高からぬ價もて。

貧書生の口腹を慰めしを謝す。

躑躅折りくらしたる山も。霞の内に立てり。破れ下駄引きずりあるきし松原も。近くに來れり。菜種の間を縫ひつゝ魚はこび歸る二三人の賤の女。これも昔見し心地す。

己^{こひ}斐すぎて海來る。大石餅が見えると人のいふに。見返れば。げにも遊び馴れたる草津なり。一盆二錢の味。天下に比類なしと思ひし事もありけるを。去るにても箸を并べて談笑せし友は。今何くにか在る。

宮島驛よりは下車する人多し。小蒸氣船は煙噴き笛ならしつゝ渚に待てり。海中の鳥居は面影かはらで姿を見せたり。あはれ戀しき波の上の廊よ。鹿の繪馬よ。

徳山に着きて鶴水館に休しが。舟はや出づべしと言へば。食事も半にして。急ぎ門司行の吉井川丸に乗る。時に四月七日の一時三十分なり。

二 門司わたり

徳山門司の間は二十里の海上。わづか五時間にして達すべし。甲板に立ちて徳山を見かへれば。松の並び立てる間には。白壁の家すがたを漏らし。海上安全の文字ある燈臺は渚に臨みて。出で行く舟を送るが如く。桃やらん櫻やらん。今を盛と咲き亂れたるも遠近に見ゆ。行く舟あり泊る舟あり。客を我舟に送りて漕ぎ歸るあり。後ろには禿山茂山たゞまれかさなりて。薄霞の衣うちきたるなど。心ゆく限なり。

舟出で、ボーイ茶をもて來る。一つ一錢の饅頭カステーラなど。思ひくゝに手に取りあぐるは。穩なる海路のめぐみぞかし。小説よむあり新聞よむあり。過去の撰擧談を戦はすありて。中等室七八人も賑はし

くなりぬ。

此賑ひを聞きさして甲板に登れば。煙とまがひし鎮西の山も舳先に立ちて。緑まぢかく我を迎へんとす。西風はげしく吹いて波は散れども。舟は左程にゆれざれば。まだ酔ひたる人もなし。

船中に門司の人あり。わが爲めに案内を爲しくれたるこそうれしけれ。左に見ゆるが田の浦の燈臺にて。此邊を土地にては鶉鳥御崎ひよどりみさきと呼ぶ。春の彼岸過ぎて初夏の頃までは。九州に住みたる鶉ども。追々中國に

渡り歸る季節とて。此所より朝毎に數百群をなして。彼見ゆる干珠かんじゆまん満珠の島に飛び行くを。鷹その島にありて。來させじと又九州に追ひかへすさま。珍しき見物なれば。これを見にとて。辨當たづさへ人々來り遊ぶなど語るはゞに。壇の浦を右にし和布刈明神を左にして。舟は

早くも早鞆の瀬戸に入る。

和布刈明神の社は松の木の間に見え隠れして。拜殿あり水屋あり。海に下る石段ありて。神さび立てるのみならず。今しも櫻の盛にて。晴れたる雪を見つゝ行く心地すること興ふかけれ。

林の如き帆柱の中に舟は入りぬ。ハシケは來りて。宿屋々々の名を呼びつゝ。手代ども客を迎へぬ。おのれは川卯といふ半纏着たる男に手廻りを渡して。陸に上りたるは。夕陽馬關の空に猶高き頃なりき。

三 硯の海

八日は門司を一巡して。武山三郎君を八幡橋の邊に訪ふ。同じ齡の從弟としなれば。手習に讀書に竹馬に。いつも相隔てぬ中なりしが。東西に別れて見ざることを。こゝに三七年あまりの久しさに。語り出づべ

き糸口もなしとて。互に打笑ふ。其姪きみ子も故郷より來り居るとて。圓居に入りぬ。

十一時頃より主客うちつれて馬關に遊ぶ。馬關門司の間は海いと近くして。狭き處は八町にも足らざる程なれば。三十分間毎に往來する小蒸氣船の便あり。馬關は帶のやうに細く横にのびたる町にて。さして見るべきものもなけれど。古く開けたる舟つきの一市街なれば。芝居などもありていと賑はし。

龜山神社に詣で。岸に臨める一茶亭に休みて午飯す。魚あざらかに料理都めきたり。欄干の際には。八重櫻の笑顔うつくしく立てるありて春いまだ老いず。遠く望めば。和布刈の鼻より門司一帯の海岸。パノラマの如く。右に並み立てる山々は。左の端のが巖流島。右なるが引島なりなど。三郎君の示す方に眼を送れば。去り又來る舟影波どつらなりて。鷺の翼よりも白し。今まで見えたる汽船は何くぞ。香爐の如き煙を空に残して。鳥も通はぬ玄界洋に消えつゝぞ行く。

安徳天皇の阿彌陀寺の御陵を拜す。松青く花白く。春ものさびしき岡の上にあり。石段を高くのぼりて御社に詣づ。人夫あつまりて。廊下めきたるものを作りゐたるは。何ぞと問へば。此社の習とて。祭禮には遊女まづ襦袢姿にて官女の装をなし。廊下より神前に進みて供物を捧げ。終れば始めて神官祭式を行ふ事となれるは。八島内裏の名残を傳へたる風俗なりとぞ。其日すでに近づきたれば準備にかゝれるならんなど。三郎君例の説明す。

山陰に野づら石の古塚十あまり立ちならべるを。讀みもてゆけば。清

經資盛知盛教盛平二位などの文字こそ見えなれ。春に漏れたる白苔の下より。埋もれぬ名を名のり出でたるもあはれなりや。去るにても波の底なる都にての御恨は。いかゞおはしけん。日清戦争の媾和談判ひかられたる春帆樓を右に見つゝ。引接寺といふ寺に出づ。門の柱に。清國媾和大使李鴻章の舊跡と。筆太にしるせる札を掲げたるを見れば。早くも其宿泊處たりしなり。人間萬事春の夢と過ぎ行くこと。豈たゞ平家榮花のみならんや。豊前田の紅葉社といふは。花有る宮とて人も參れば我も行く。恰も眞盛にて。岸の上なる料理屋より三味線の聲ひゞき來れり。舞子なるべし十二三なるが。石段を登りゆくも見ゆ。門司に歸りては。夕かた又そぞろありきしつゝ、和布刈明神まで行く。今

は速戸神社と呼ばれ給へり。遊山なるべし。土地のお婆々ども四五人。辨當ひらきつゝ、拜殿に圓居なしたり。嫁の自慢や始むらん。孫の利口や誇るらん。米の高さも知らず顔なる羨ましき。

千木づくりの御社は大きからねど。御いつ尊く海に向きてぞ立ち給へる。老木の櫻は松の緑と映じわひて。面白さ限なし。落花は風に吹かれて。洗米など散らしたるやうに。ほろり／＼とこぼれつゝ。賽錢箱のあたりに集まる。

十二月の晦日に行はるゝ和布刈の神事は。謠にも作られて名高き事なるが。今もありやと尋ねれば。彼の圓居の一人が曰く。有ることはあれども。神主さんの松明つけて海に入るなどの式は絶えはてゝ。氏子の浦人に和布を刈らすのみと答ふ。思ひ出でたり。東帯乗馬の神官が

卷煙草ふかしつゝ神輿の御供せしと聞きしも。此社にてありけるを。
石の玉垣に肱をもたせて眺むれば。僅かの海を隔てゝ。壇の浦まへに
あり。松まばらに立てる中に。櫻白く咲き交れる山の磯ぎはこそ。平
家が今はの戦せし跡よと思へば。波の音松の聲。何かは恨の反響なら
ざる。

折しも白き影の海を横ぎりゆくは。鷗か千鳥か。はた源氏の旗か。

春の夜の夢は沈みし波の上に

かみよながらの夕風ぞ吹く

あはれ碇かづきし大將は何くぞ。練袴のそば高く挟みし尼君は何くぞ。
夕日うすぐらく霞む水の底には。太刀の折れ鏃の碎け。今も猶錆び残
るものありやいかに。

夜に入れば。馬關の燈火水にうつりて。花の如く星の如し。

今宵たが枕の上をわたるらん

すいりの海の花の春かせ

門司馬關のあたりの海に硯の名あるは。門司を文字と取りなしたる故
ならんともいひ。赤間が關より硯石の出づるによれりともいふ。

四 博多どまり

九日は朝とく起きて眺めわたすに。明けたる波の上雨かきくらしして。
湊にかゝれる千舟百舟。なほ眠の内にあり。鷗も飛ばず。朝飯炊く烟
も靡かず。さはいへ濡れたる帆を五合張りて。ゐさるが如く行く舟一
つ見えたるが。東より來りて西に去りぬ。

春風に帆をはりつれて來る舟の

こゝを出で、又一里程の道を行きて。熊本城の石垣に添ひつゝ。加藤
清正を祭れる錦山神社に詣づ。故有栖川宮の御筆なる神號の額などか
ゝりて。神々しき宮居なり。社頭の櫻に花少し残りて。地に積れるは
二月の雪の如し。

なほ遠く行きて本妙寺の清正公に詣づ。山の半腹にありて境内ひろく。
數町の敷石を挟みて立つる千本の櫻。すでに緑なり。

神前に至れば。大鼓の音。題目の聲。にぎはしさ過ぎていとすさまじ
きに。乞食多くして物を乞ふと勸むるとには。覺えず人をしてにがく
しからしむ。

町をこゝかしこ見あるきて。宿りに歸れば。十一時なり。午飯すまし
て當地在留の友達を訪ひ。旅順口のパノラマを見。尙絢女學校を參觀
す。此地の徳望家。内藤儀十郎といふ人の創立にかゝれる。九州第一
の私立學校なり。現在生徒七百に垂なんとするとぞ。先年東京に出で
、屢々我家をも訪ひつる木村愛子も。教師となりて此校にあり。圖ら
ず面會して互に其健康なるを喜ぶ。

校長内藤氏出で、ねんごろに教場寄宿舎など案内しつゝ。教授法ま
で説明せらる。厚意謝すべし。なほ知る人たづねくらしめて歸る道に。
阿蘇山を人に問へば。あの木の間なるがそれなりと教ふ。夕日かたむ
きて薄淺黄色に見えがくれするも。何とやらん物あはれなり。

花と見し昨日の雪のおもかげに

かすむけぶりや阿蘇の遠山

七 村また村

熊本なる友人は語れり。松橋より長崎わたりの汽船に乗りて。雲か山かの眺めはてなき天草洋を。左に見つゝ行かんも。興なからずやはど。心忽に動きて。十二日の九時五分八代行の汽車に乗る。

松橋に行きて長崎行の舟はと問へば。今は無しと答ふ。島原行はありたれども。其舟修繕中にて出ださずと。聞くこそ失望なれ。昨日木崎屋商店に聞き定めて立つべしと。言ひ呉れし人もありしを。よそに聞きつゝ、此失策を招きたる面目なさ。止むを得ず伊勢屋といふ汽船問屋に休みて。次の上り汽車を待つ。庭の築山に松あり石ありて。三四尺高く延びたる菜の花。石燈籠のうしろに咲きぬたり。

十一時二十九分の上り汽車は来れり。此度は今朝來し線路を跡もどりして。陸路を長崎に行かんとするなり。熊本停車場に留まる事十分。

里人の花見に行くといふ花岡山。窓の左にまぢかく見ゆ。山の上に。

明治十九年の神風連に討たれたる鎮臺の招魂社あり。

こゝにて辨當買ひたるに。箸なければ折の蓋を割りて代用す。總べて九州鐵道は停車場にて物賣る男が。車の右より左より呼び立て。又室内の中にも入り來るは。衆客群集の折など殊に便利なり。草津の姥餅など。我窓の方に賣子の來らざるが爲め。買ひはづす遺憾は。他の線路にて常に多き習なるを。

乗り來れる女づれ二人。姉妹なるべし。おのが前に席を占めたり。おのれは旅行中。その土地の人と人どが。純粹の方言もて互に物語るを聞きて楽しみとする事なれば。今また此打ち解けたる會話に耳を傾けゆく。窓の硝子戸の明かざりしを明けてやりたるより。親しくなりて。

おのが地理の問題にも二つ三つ答へたり。妹は高等小學一二年にや。懐より手帳取り出しては。椿の苔の如き唇に鉛筆なめぬらしつゝ。過ぎ行く停車場の名を記す様なり。

長洲より海近く來りて。帆黒く波青く。遠の山々うちかすみて。有るか無きかの間に立てり。網干したる浦里もまばらに見ゆ。

やゝ行けば。山際に社ありと見えて。祭の旗なびきたる處あり。田舎少女。二三分穂に出でたる麥生の間を。日傘さし續けつゝ群れゆく。

大牟田に着く。小學生徒二十人ばかり。教師に引かれてどやどやと入りきたる。運動會の歸りなるべし。男も女もおのゝ赤き襷かけたるは。握飯を包みたる名残ならん。中は膨れて竹の皮めきたるもの。跡を見せたり。流るゝ鼻水ぬぐひもあへず。がやゝさわぐとひし

めきあるくさまよ。昔ならば祖母に連れられて。花見の歸りに節をねだるが最上の快樂なりし村の童も。嚴師が命令の下に。無邪氣なる小行軍の勇氣を鼓舞す。いかに教育普及の餘徳ならずや。矢部川にて下りたり。

久留米にて。紅白まじりの笈摺かけたる順禮六七人。下車するを見る。手にくゞ白き菅笠を持ち。いそぐと改札所に向ひて行く。是も鐵道開けぬ昔なりせば。豆だらけの足をすりくゞ。杖にすがりてたどるべかりしを。

村また村の春の夕暮。見つゝ行くも徒然ならず。櫻は大かた過ぎて。僅に遅き花を残し。梨子は至る所に盛にて。晴れたる日の雪の如く。西日斜に照らして。花ともいはず松ともいはず。霞み渡れる景色の長

閑けさ。菜種の黄なると麥の緑なるとに包まれて。晝のやうに立てる藁屋どものこゝかしこ。煙ほのかに棚引くあり。家の外には干したる布とり入るゝも見ゆ。流に鍬洗ふ賤の女は。田の中道を馬牽き歸る夫や待つらん。

罪なき顔して汽車の行くをながめ立てる子供を。蓮華草さく土手にのこして。山に隠れたる入日は猶も紅の光を空に留め。少女の頬の如くこゝかしこの溜り水を色どる。

八 武雄の湯

武雄に着く頃黄昏になりぬ。大村までと思ひたれど。乗りつかれたれば此にて下り。東京屋に泊しぬ。

女さきに立ちて一番の室に案内す。昨日の明進館に引きかへて。物毎に清く。心地よき事たぐひなし。

有名の温泉は町の突き當りにありて。町の左右は。旅籠屋軒を並べたる繁榮の一市街なり。先づ湯あみせんとて手拭ひきさげて行く。

階級は六どほりありて。特等五十錢。一等三錢。二等二錢。三等五厘。四等二厘。五等一厘なりといへば。己は三錢の切符を買ひて。奥の口より入る。衣服は東京の如く戸の付きたる棚に入れ置けば。番人は椅子に掛けて中央に見張りつゝあり。

湯場は低くして石もて作られ。僅かなる板の仕切を境にして。女湯と相隣す。またけば互に往來しつべし。わめくあり話すあり。御無沙汰しましたと謝するあり。御めづらしいと辭儀するありて。九州言葉の反響は。雷の如く嵐の如くに轟く。時々ジャラン〜と鈴振り鳴らし

つゝ來るは。汽車の出でんとするに似たり。何ぞと問へば。脱ぎ置く衣類の注意を促すためなりといふ。

ゆあみ果てゝ出づれば。入口に店ありて。蜜柑菓子もてあそび簪など賣る。其賑ひ東京の縁日の如し。土地の娘ども蟻の如くに集ひて。あれよこれよと品評するも。湯もどりの一興なるべし。

宿りに歸れば。寫真賣る男きたり。按摩きたり。宿帳きたり。終に飯きたる。

此地にては女も男もすべて『ない』と返事す。車夫に『東京屋へ遣つてくれ』といへば。『ない』と答へ。下婢に『そこしめてくれ』といへば。『ない』といふ。始めは『なに』と問ひ返すのかと思ひて。繰り返し言へば。猶はげしく『ない』といふにぞ知りぬる。此の地

の『ない』は熊本あたりの『ね』にして。熊本の『ね』は東京の『へ』又は『は』なりしを。

夜やうく更けて。向ふの山影くろく。柵星の光り。きら〜と松の上に仰がれたり。倚樓忍睡數春星と吟せしも。かゝる夜の景色にやありけん。

夜は明けて十三日になりぬ。黒かりし山の端は花になりてぞ見出だされたる桃は赤く梨子は白く。其間に得もいはれぬ薄紅の色したるは。櫻ぞかし。天を撫でゝ峙ちたる巖は松もて圍まれ。緑したゝる木の間に。艶を誇り装を凝らして立てる神女の。とり〜なる姿こそ。美しき限なれ。

あの山に登る路ありやと。煙草盆の火を持って來れる少女に問へば。

峰には虚空藏様ありて人みな御参りに行くといふ。花をうしろにして簀えたる高殿あり。朝日は軒に掛けたる提燈を照らして。其影を障子に落せり。

手拭を肩にしつゝ温泉に行く人かへる人。町は早にぎはひたり。唯熊本第六帥團御定宿といふ旅館の柳のみ。髪ながく垂れて。未だ春の眠より覺めず。

夜は明けぬ日影は山に霞みたり

朝湯やあまん花や見て來ん

八時十分の汽車は出でたり。名残をのこして別れこし温泉の山。よく見ゆ。霞うすくこめて。櫻は躑躅の如く、梨子は卵の花よりも小さし。

九長崎

武雄より先はトンチル處々にあれども。何れも短くして火を燈さず。乗合の一人が。斯かる處などにて盜難に遭ふの恐もあるべきに。何とて火を付けぬやらんといへば。髯ひねりぬたる老人。空氣の通はぬ穴の中にては火の燃ゆる理なし。されば何くにもトンチルにては點火せずと。得意げに語る。九州おのづから別天地ありとも言ふべきか。陶器もて知られたる有田など過ぎて。早岐に着けば。海軍の制服めきたるものを着て。辨當にやあらん。賣りに來る子供あり。佐世保の近きにやあらん大村よりは小蒸氣船にて。五里の海上を一時間に渡る。築山めきたる島々を見つゝ。青蕙を延べたる如き處を行く心地よさ。我さへ畫中の人物になりたるを覺ゆ。

佐保姫が織るや霞のうすごころも

袖うち掛けぬ海山もなし

乗合には愉快なる書生ありて。昨夜野宿をせんと思ひ立ち。観音堂に入りたるに。夜のふくるにつれて餘りの凄さに。遂に得堪へず宿屋に泊れりなど。聲高に語りつゝ。壘の酒を心地よげに飲む。

長與よりは人力と汽車とにて。長崎に着き今町の緑屋に宿る。長崎灣一目に見渡さるゝ樓上にて。愉快限りなし。時に午後二時。たゞちに車を命じて。こゝかして見物に行く。

諏訪神社。いと高き石段を幾つも昇る山の上にある。いと尊し。

玉の浦の春風たえて霞む日に

すは山櫻雪と降るなり

山つゞきに公園ありて。廣やかにいと物さびたり。落花を踏みて遊ぶ

人。多くも見えず。西洋料理などいふ看板ありて。休め〜と呼ぶ小女の聲。うぐひすよりも繁し。

寺町などめぐり見て。大徳寺といふ岡の上に。天満宮のある處に登る。岸に臨める花屋の二階に休めば。名物の焼餅もて來れり。太宰府のは平たくして土器の如くなりしが。此處のは膨れて虚無僧笠の形したり風味も彼と比ぶべきにあらず。

車夫をも呼びあげて共に食ひつゝ。長崎市内の地理晰など聞くこそ樂しけれ。窓の前なる櫻を見れば。小指ほどの實を結びて。風すゞしく若葉を吹くも夏めきたるに。軒端の藤は薄紫にやう〜咲き出でたり。あはれ東京はまだ。向島よ飛鳥山よと浮かるゝ頃なるべきに。

外國人の居留地など見あるきて。日高く宿りに歸りたるに。宿の湯は

破損して今日は立てずといへば。近きあたりの風呂屋にもものして。夕飯の箸を置きしは五時前なりき。

日の影と共にこゝろも長崎の

うらやましきは春の舟人

日やうく隠れて。霞は山を覆ひ。家を覆ひつゝ。紫に緑に藍に薄墨に色どりゆくも。美しき春のながめなり。暮れはつるまゝに。海上こどくく火影となりぬ。

空ならぬ水の上にも星見えて

夜にぎはしき長崎の海

三絃の聲ちかく聞えて。旅の枕つれづならず。何くの室やらん。碁の音たえず響けり。

十 佐 賀

目さめて枕もどの時計を見れば。五時なり。手帳かきよせて物しるさんとせしに。行燈油つきて。搔き立てゝもくせんかたなく。遂に暗を殘して消えたり。よりて窓の下へ机もちゆき。寒けれを障子ひらきて。やうく筆とり居るほどこに。夜は少しづゝ明けて。海の上おもしろく。船の並び居るさまなど。昨日見し景色ながら。又あたらしき心地してながめ盡くべくもあらず。

八時過より宿を出で。停車場におもむく。停車場は宿りより殆ど一里。九時の汽車に乗らんとするなり。

豊國會より得たる割引券を出だし。門司までの切符を買はんとするに。往復ならでは賣らずと言ふ。さる理はあるまじ。官設にても山陽にて

も。現に通用し來たるものをと。押問答したれども。掛員は斷乎として動かざれば。せんすべなく尋常の賃錢を拂ひて乗る。

長與よりの汽船は。昨日と違ひて。甲板の上ならず。階下の一室にて四疊半位の處に。數へて見れば十七人の乗客なり。煙草の煙くゆりわたりて苦しさ堪へがたきに。窓よりは。青き空や緑なる水の丸く小さく見ゆるのみ。昨日は長與に着くの早きを憾ましめし海も。今日は一時間の長さ。三春の思なきにわらず。されど青疊のべたるさまのみは昨日の如く。是のみぞ舟弱きそれがしには。いと幸なりける。

大村を發せしは。十一時五十分なりき。日よく晴れて。山も海ものどかに霞みわたり。袖寒からぬ春風に吹き送られつゝ。麥また菜種の間を。瞬くほどに走りゆく。心地よしとや言はん。残り多しとや言はん。

有田にはまだ陶器の焼かぬものなど。あまた置き並べたる見ゆ。右の方には陶山社と云へる神も立たせり。

四時半過佐賀に着きて。榮徳屋といふに宿る。奥の二階に通されて障子を開けば。盛すぎたる八重櫻二もと軒をおほひ。夏橙の赤く熟したると共に。枝をかはしたり。

日なほ高ければ例の町けんぶつに行く。松原神社といふは。佐賀侯祖先の靈を祭れる處なり。後ろは廣々としたる神苑にて。築山あり池あり。池には橋ありて水には鯉あそび。河骨菖蒲など。青々と茂りあひたり。

茶店に腰うちかけて少女に話などしかくれば。只「なあ」「なあ」と返事す。彼「ねい」なり「ない」なりし詞が。此邊にては又「なあ」と聞ゆるや

うになりぬ。此女のみかど心をつくれれば。車夫も宿の亭主も皆『なわ』
『なわ』とのみぞ答ふる。

梅の實はすでに鈴の大きさとなり。薔薇うつくしく唇を開きて。藤ま
た答をふくらませたり。

町をめぐりて城の下に至る。沼ありて蓮根多く。堀り出だしては。大
八車に山の如く積みぬたるは。外堀の名残にやあらん。城は平地にあり
て。石垣の高きと松の立ち並びたるが見ゆるのみ。白き建物は何ぞ
と問へば。師範学校なりといふ。

城の門前に出づれば。矢倉の壁には。ぼつくと弾丸の跡を残せり。
明治七年暴徒の遺物なりとぞ。鳶の若葉やはらかに石垣を縫ひて。蒲
公英の黄なると。覆盆子の花の白きとが。春知りがはなるもわはれ深

し。門のこなたには監獄署ありて。枳殻の垣には。咲きたる花霜より
も白し。

歸りて湯あみなどするはとに。日やうく暮れて。燈火室に入れり。
宿の娘膳を持ち來りて。宰府に參詣せし話などすれば。おのれもカバ
ンの中なる。飛梅の寫真など出だして見す。誰か知らん無罪なる少女
の會話は。佐賀言葉の蓄音器に取られて。旅人の手張を肥やしつゝあ
るを。

十一 宇佐詣

十五日にもなりぬ。六時の汽車に乗らんとて停車場に至れば。夜は明
け離れて。東の山際紫色に霞みつゝ。鎌なす月は空にかゝれり。
かくて小倉に着きたるは十一時二十分。こゝより乗り替へて豊州鐵

道の方に赴かんとするなり。されど我列車の少し後れたる爲め。行橋行は既に出でたりといへば。次の發車まで二時間待たざるべらず。依りて停車場の一茶店に飲食しがてら休みたるに。乗り下りの客おひくく來りて同じ室にあり。

女づれ三人の田舎客は。膳を列ねて酒を命じ。睦まじげに盃の遣り取りをなす。老いたるは母。中年なるは姉妹なるが如し。日頃信ずる神參りを果して。祝宴など開く心にやあらん。和氣洋々とは此等の人をぞ言ふべき。

一時四十二分小倉を發す。左は海右は山。春日うらゝに霞みわたりに目に見る限り。樂しからざるは無し。

中津を行くころ。遠く烟れる遠山の姿。よの常ならぬが見出ださるゝは。彦山ならずやと人毎に問へど。知りたるも無きこそ口惜しけれ。或は鑿もて削れる如く。又は崩れんとして天に懸れる巖の如し。

此旅おもひ立ちたる頃。まづ第一に探らんとせしは耶馬溪なり。東京にて綿貫君は。中津に泊りて行くべしと教へ。熊本にて吉村君は。久留米より筑後川に沿ひて貫くがよからんと勧めたり。己は久留米よりの道を取らんと決しむるに。數ふれば宇和島に着くべき約束より。一日おくれんとするを如何せん。天道滿つるを缺くところ聞け。残念ながら耶馬溪は。又のついでに延ばさねばならぬ事となりぬるも。浮世の義理の一つぞかし。いま中津々と驛夫の呼ぶ聲。思寐の夢を破るの感なき能はず。

宇佐に着けば五時なり。宇佐とは長洲停車場の。當四月一日より改稱

せしにぞありける。いでや八幡宮に參詣して來んとて。手廻を旭館に預け。外套下着など脱ぎ置きて人力を雇ふ。五十丁一里の道。たかひくありていとわろし。廣やかなる川に沿ひのぼりつゝ。車夫に名を問へば。ヤツカン川と答ふ。藥罐の文字にやと地圖を見れば。驛館川とぞ書きたる。神武天皇を迎へ奉りて。足一つ騰りの宮を造りかけたる。古の宇佐川は是なりとぞ。

舟橋にて此川を渡り。車より下りて山道をのぼる。六七疋の裸馬に乗りつゝいて。歌うたひつゝ下り來る賤の男あり。馬市にても出だすにやと問へば。上の村なる農夫どもの仕事より歸りて。馬を川水にあびさせんとて行くなりと。車夫かたる。あはれ我身を後にして他の勞を慰めんとする心の床しさよ。見かれへば馬は本の間影うせて。覆盆子の花消えのこる春の雪の如し。

宇佐町に着けば。家毎に國旗を立て提灯をいだして。いと賑はしきは。奉祝祭の行はれ居る時なればぞかし。町のはつる所に銅の大鳥居あり。入りて吳橋を渡る。川は小さければとも。網を腕にして魚ねらひつゝ立てる人なども見ゆ。

鳥居内の兩側はすべて物賣る店にて。飯あり酒あり小間物あり。されど時すでに遅ければ。客散じ人歸りて。店には賣れ残りの饅頭などのどかなる夕風に吹かれ居るのみ。

境内いと廣し。馬場あり能舞臺あり神樂所あり。能舞臺は今假に中學校に爲り居るとて。其門札を掲げたり。神樂所は奉祝祭の間。毎日四時までは神樂の聲絶えずとぞ。斯くと知りなば今少し早く詣で。祭の

式をも拜觀してましもものを。謂はゆる跡の祭にて。花の香のみ神さび渡るこそ淋しけれ。

本社は三つの棟を並べて立たせ給ふ。廻りには五色の幄張りわたし。廣前には。木綿取り垂でたる榊葉のおごそかに立て置かれたるなど。かたじけなさに涙こぼるゝとは。斯かる折にやと見えたり。人影すでに絶えて。樂太鼓ひとり残れるは。明日の祭式を待つなるべし。進みて廣前に額つけば。我拍手の聲ものすこく山彦に響く。

此神の御いつによりて高雄山

たかき功もあらはれにけり

あはれ和氣公の誠忠を照らして。皇位を無窮に護り給ひしは此神よ。かへりに御札を受け。寶物陳列場を見る。時間はや切れて番人ひとり

入口に立ち居たれば。遠方より來れるよしを告げて請ひたるに。快く諾なひて案内し呉れたるこそ嬉しけれ。古文書。畫卷物。刀劔。能装束など多し。能装束は細川三齋侯の奉納せられしものなりとぞ。之を着して舞ふさまは頗る見ものなりとて。能の講釋をさへに聞かせくれたり。古文書の日すでに暮れかゝりて。見えざりしのみは残念なれど。如何はせん。奉幣使の立ちたる時に納められたる御装束などもありき。

鳥居を出づる頃は日すでに空にあらず。遠近の山を薄く濃く色とり分けつゝ。霞みわたれる四方の景色こそ。畫も及ばね。夕べは秋と何おもひけんなど。口ずさみゆく。

大かたは霞のいろにつゝまれて

ゆふべさびしき春の遠山

停車場前の宿りに歸りて。夕飯の箸取る頃は。九時にも近かりけらし。清潔なる家にもあらねど。婢僕の行儀などあしからず。

十二 豊後路

十六日は別府まで行かんとて。八時頃乗合馬車に乗る。相客は佐伯の農夫と。孫つれたる老婆と。入湯に行くといふ二十七八の女にて。膝を交へつゝ。すわりながら語りゆくもいと興あり。車には鼠色の幕を引き廻はしたれば。よそ目には田舎祭の屋臺とや見ゆらん。風こゝちよく入りて幕を吹き揚げ。直しても直しても。釘をはづれては顔にかゝる。

驛館川の海に注がんとする處を渡りて行くに。青海苔など取るにや。

籠提げて渚におり立つ賤の女も見ゆ。眺望ひろくと晴れ渡りたる沖の方には。霞みて向はるゝ嶋影もなし。嗚呼我戀ふる伊豫の山は何くぞ。

長洲町すぎてやうく坂道と爲り。馬はかゝしく進まず。馬丁は路のかたへの蓮華草など。花ながらに食はせては鞭うちゆくなり。薄淺黄もて色どられたる山は。左に右に前に立ちて。旅人を迎へ又送る。立石にて車より下り午飯す。いと清らかなる家の奥二階にて。裏は菜種畑を隔て、躑躅さく山と相語るべし。彼女も手製の辨當など携へ來りて膳を並べつゝ箸を取る。乗合の心おきなさはやうく馴れて。入湯ならば。筑前屋が宜しなど。教へ呉れたり。長洲町商家のかみさまにやあらん。

行くも歸るも此立場には集まるところとて。數ふれば十三の馬車あるを見とめたり。發する時は七つ八つ列なりて。先に來着きたる順をもて進みゆくさま。祭のねりものなどゝも見なしつべし。我前なる一馬車は。男一人女三人の一組にて。大聲を上げ歌うたひ。手をたゞき笑ひぞよめく氣樂さ。時々は顔見合せては。我車にても貫ひ笑ひしつゝぞ行く。かゝる心にてのみ常に渡りたらんには。いかに世は面白き物なるべきを。

赤松といふ處にて餅を買ひ茶を飲む。茶は臭くて飲まれぬぞ餅はいとらまし。一人が『ねいさんお前の丸めた餅はうまいなあ』とさへば。『いえ日出ひぢから参りました』とまじめに答ふるも古風なり。

日出古市などすぎつゝ行くに。別れたる海また見えて。宇和嶋領たる

佐田岬は烟の如く。北西の方に横はれり。

沖とほく渡るかもめの影きえて

かすむあたりや故郷の山

別府に着きたるは五時少し前なりき。長洲より十二里の道なりといふ。日野屋といふ汽船問屋に行きて。宇和嶋行ありやと問へば。今夜大坂商船會社の佐保川丸きたるといふに。早くも豫想の先だつものは。明日の今頃の圓居ぞかし。竹馬相なれたる友を集めて。燈のもとに語りあふ心はいかに。

温泉この宿にあれば先づ入るに。溫度あたかも入り加減にて。心地よき事かぎりなし。色は青ずみて見ゆれど。臭き匂はあらず。

浴後のあたゝかさ。シャツとフランネルの單にて町を散歩し。田の中

道をゆく。黄なる花さく雑草の生ひ茂りたる下には。蛙あまた聲立つるなど。海一つ隔てたる爲にや。見るとして聞くとして。故郷に似たらぬはなし。

買物をなし髯を剃り電報を出だしなどして。宿りに歸り。とかくする程に十時にもなりぬ。されども船の來らぬ待遠さよ。

こゝろのみ早くも行きて渡るかな

一夜あけてのふるさとの海

まづ一寝入せよとて下婢蒲團を運び來れり。さらばとて枕に親しむ間もなくブウといふ聲ながく響く。さてこそと時計を見れば。一時なり。手代に送られて波止場に至れば。一天ぬぐふが如く。星は金銀を鏤めて。空の梨子地に蒔畫を爲したり。

ハンケより本船に乗り移れば。手代は手廻を運び置きて去り。ボーイは火を持って來り。茶を入れなごしてもてなす。海はおだやかなり。いでや蝶先づ夢に故郷の花と遊ばん。

十三 佐保川丸

錨を抜きて別府を發せしは。二時五分なりしが。間もなく大分に着き。夢の内に佐賀關も來れり。いつしか夜は明け果てぬ。顔洗はんとして甲板に登れば。佐田岬は近く迎へて舳先に立ち。筑紫の山は名残をしくも。漸ら跡に遠ざかれり。

月くらく春の夜あらし吹き荒れて

夢路ゆるさぬをりもありしを

あはれ去年は此あたりにて。いたく惱まされたりしに。思ひきや斯く

までなきたる天氣を得て。此恐ろしき海上を渡るべしとは。ボーイ來りていざ食堂にと案内す。至ればテーブルの上に朝飯は並べり。二個の生玉子。一碗の豆腐汁。いつもなれば見捨てられて止みぬべきを。船中あたかも家にある心地して。快く箸を取らしめしは抑も誰が恵みぞや。

佐田はいよ／＼舷の右に親しみ來りて。呼べば應ふる程になりぬ。見よあの平なる波の上に。數十の鷗あつまりて。大輪を畫きつゝ飛びめぐるを。魚の群れゆくところに。哨兵線を張れるにやあらん。南の方に近づき立てる薄花田の一霞は。日振島あたりなるべし。

心なくかくす霞か時のまも

はやゆきて見んと思ふあたりを

うらく／＼と照りてこぎ行く春の日は

佐田のみささの憂さも思はず

甲板は風なほ寒し。時々おりては又のぼる。室なる瓶には桃の咲き亂れたるあり。

九時八幡濱に着く。こゝにて我舟よりおろす荷多く。薦包などハシケに山をなしたり。誰落しけん。四斗樽の鏡抜けて飴砂糖の解け流れたるを。あなやと手してすくひ入るゝもあれば。外の荷に附きたるを洗ひ落すもあり。さがなき童は指さしのばして嘗め試むるなど。己をして筆とる手もたしめば。一幅のポンチ畫も作らまほしきに。

陸よりは祭りなどあるにや。神樂太鼓の音とゝろき來るも。早ふるさとの調子なるこそ嬉しけれ。

わが戀ひし波のひびきの外にまた

神樂のつゞみ聞くもなつかし

櫻の盛すぎたる二本ばかり見ゆ。

相なれたる島山。一つくくとやうくと近づきゆくも楽しきに。雪の降りたる如く白く見ゆるは。四手しでの花なり。

ゆふしでの花も昔やおもふらん

あそびなれたる山のとかげに

甲板の掃除とて追ひおろされたれば。戀しさ山も海も。小さき窓よりならでは見えすなりぬ。それだにあるを。掃除の水の流れ落つると。窓の硝子戸をさへ閉ぢ置けといふ。

どかくしつゝ。九島を右に。唯波を左にして。宇和島灣に入れば。城

山低く鬼城高く迎へて前に立てり。

ふるさとの山見る毎におもふかな

あの麓には母やおはすと

山の姿。雲の色。一つとして昔ならざるはなきに。なつかしさ餘りて涙こぼれぬ。

汽笛しばし聲して。遂に住吉の山松影青き處に。錨を投じぬ。時計を見れば一時數分前。樺崎には早人々の待ち迎ふるあり。誰か言ふ世は定めなしと。去年こゝに涙ながらに別れし友。ふたゝび相見て。互に健康を祝し祝さるゝも人界ならずや。

しるべせられて去年も宿りし毛山氏に至れば。戀にもてなさるゝさへあるに。人々訪ひ來りて別後の物語くづしいでたれば。日の暮るゝも

夜の更くるも覺えず。況んや旅路のさびしさをや。青葉吹く春風は時々來りて隔てぬ圓居をめぐる。

十四 ふるさとの上

宇和島の山。宇和島の海。生れて二十年の久しき。蕨採りに茸狩りに。我を遊ばせたるも汝なりき。いかでか見る毎に逢ふ毎に。別後の健康を祝し祝さるゝの思なからん。況んや幼時我を教へ我と戯れし師友親類の。朝に夕に來りて。舊情を語るあるをや。

一週間の豫定なりし滞在も二週間を越えぬ。思へば夢の如く幻の如し。甲の友は曰ふ。隔年かならず下るべしと。乙の友は曰ふ。同じくは毎春來るを習とせよと。翼あらば月をも雪をも隔てぬ窓にて。眺めましものを。

故郷を踏みたる又の日。訪ひまゐらせたるは母上の御墓なり。春深く緑すゝしき木蔭には。苔半ば鎖したる石を残すのみ。後ろの山より躑躅など青葉まじりに折り來りて。花筒の枯枝と挿し替へつゝ。暫くは去りもやられず。

手折り來し花はむかしの春ながら

石となりたる母ぞかなしき

なほ先祖代々の御しるしをも拜し。妹志津尾のも吊ひつゝ。山寺をわなたこなたと縫ひあるくに。卓の下なる石塔の人待顔なるが。あまた見ゆるもあはれなり。

歸り來て祭る子もなき古塚の

鳶の若葉に春風を吹く

小梁川翁を訪ひたるは。其又の日なりき。翁は我父の親友にて。特に謠曲に熱心なる人。着きたる日第一に來りて迎へ。吳々も一會催さんと約し置かれたればなり。

今日は親類朋友合併の集まりにて。おのゝく持寄の酒肴は。山の如く机の上に並びぬ。主人よりは。庭の竹子を大鉢に二つ堆く盛りて出だされたり。曰く。是は大和田君の竹子と稱へて。別に堀り残し置きたるなりと。外には晴れ渡りたる一望千里の菜種畑を眺めつゝ。内には此心づくしの珍味佳肴を受く。誰かまた一曲の吟聲を惜むべき。

客うたへば主人太鼓を出だして打つ。興愈よ添ひ來りて。春の日の短きこと秋にも優れり。名残をし。今まで見えつる三島山は霞の内に影を隠し。庭の山吹また夜の色に包まれんとす。

十五 ふるさとの中

廿日は石崎忠八君より。御濱の別荘に招かれたれば。物せんとして途に豊後橋を渡る。此橋はおのが家の有りし近くにて。少年の頃。あそぶとても手習に行くとても。朝夕ゆきせし處なるが。城の門の石垣には辨慶の足跡とて。足の形に凹みたる石のありしを。踏み試みては。我足跡のそれよりも大きくならん事を。希望せし事もありき。石もし心あらば。御身が足こそ太り給へれとてや。喜ばんとすらん。今は葛あをくくと這ひかゝりて。昔し附けたる草履の土も見えず。

城の門を入りて。我産土なる日吉神社に詣づ。童友達うちつれて。猿の如く登り競べせし櫻楓の木も健康にて。青葉わかやかに瑞枝さしたり。白壁の崩れたると瓦の落ちたるとのみ。昔の面影うせてあはれなりき。

招かれたる別荘に至れば。新樹園に満ちて。遅咲の桃くれなるも心地よく。三十人の賓客。多くは知り知られたる中なるこそ嬉しけれ。白髪盃を廻らすの人。誰か知らん習字の點數を競争せし既往を追懷せしめんとは。

廿二日にやありけん。有志者より謠の會にとて招かれたるは。小梁川翁は此會の牛耳を取りつゝ座にありしが。曰はれけるやう。まさしに絶えんとせし謠を興して。漸く我宇和島に盛ならしめんとするは。全く君が昨年歸郷せられたるの賜なり。今この上は。能を物せんとするまでに至らしめんとすること。希望する處なれば。狂言も亦必要ならずや。狂言を藩命によりて幼時に習ひたりし人。こゝに二人あり。松本繁前田海山これのみ。今より呼び寄せて。忘れしや否やを試みん

は如何と。

時の間に二翁來りて座に入りぬ。興闌にして。二千石と神鳴との二番は演せられぬ。近くの古道具屋より借り來りし古上下に古脇差。装束こそ不完全なれ。天晴昔仕込の藝は違うたものかなど。人をして感に堪へざらしめたり。二翁は共に今年六十八歳。みづから曰へり。廢してより五十三年目にして。珍しく狂言をしたりと。あゝ是より起らんとする宇和島の能樂界に於ては。此二翁と小梁川翁とを以て。名譽ある持續者と推尊せざる可からず。

廿六日の事なりき。餘り快晴に催されて毛山氏と祖父が森山に登りぬ。藤さかりなる朔日田神社を過ぎて。麥生緑なる中を縫ひつゝ行くに。蓮花草こゝかしこに縁を取りて。咲きゝはひたるも面白し。あはれ十

三四の齡にて。培察といふ藩校の塾に物學びしける頃。友のひたづさへて散歩せしも。此あたりなりしよと。思ひ出づるに唯ならず。峯に登れば。九島惠比須山より。海を隔て、住吉山唯波が鼻など。築山の如くに並び立てる間を。白帆うつしく行きかふさま。我庭の心地するも夢かうつゝか。

見るかぎり昔ならざるものもなし

父と來しやま母とゆきし海

あなたに越えつゝ見おろせば。小梁川翁の家は唯眼下にあり。鵬越めきたる坂を下りて。平家の陣に似たるあたりを指しつゝ。眞下りに下れば。豆木もて自然に作られたる門の前に出でぬ。

毛山氏茶を一つ乞はんは如何といへば。入りて音なふに聲もなし。庭

より裏口より。三聲五聲かくれども。遂に人影をも見いだす能はず。

後ろの藪に竹の子ほりにや出でられけん。などいふく。垣根の山吹に結びつけたり。

ものいはで立てるもつれな山吹の

花の下露汲まんどおもふに

十六 滑床

宇和島を距る三里の奥山に。滑床といふあり。幽趣愛すべき絶景の地なれば打ちつれて再遊を爲さばやとの評議いでたるは。公會堂に多数の有志者より招かれたる日の。席上なりき。遂に三十日を期して山踏の約を履行せんとす。

回顧すれば。始めて遊びしは明治二年の昔。我年僅に十三。かの培察

にて詩語碎金などひねくり居たる頃なりき。時は陰曆二月の廿四日。四十餘名の學生。前後呼びかはしつゝ山路にかゝりしは。明の七つ時どぞ覺えし。詩を吟ずるもあり。學理を戦はすもあり。少年の長き春日を太古に似たる山に暮して歸りし事。たゞ一夢の如し。此時の友いまは何くぞ。山こゝろわらば將に言はんとす。大和田晴太郎君無事なりしかど。然り大和田建樹が汝と初對面を爲したる時は。前髪結ひたる大和田晴太郎なりしなり。

當時の同盟多くは四散し。今は僅かに土居禮。清家節の二君を此地に残すのみ。二君己が爲めに盟主となりて再遊の快を得しむ。如何なる天の恵ぞや。土居君は宇和嶋町長に任務し。清家君は身を實業社會に置く。建樹の飄然風雲に従ふ如き境界と相距る遠しといへども。手を取りて相語れば。今なほ藩校燈火の下に。机を並べ居る心地することなつかしけれ。

同行は二君の外に。毛山正廉本多敏常の諸君を始めとし。あはせて十人。荷持の男は辨當酒樽茶釜をさへに。枴に付けて荷なひ行くなり。甲は曰ふ。石楠花は見頃ならん。乙は曰ふ。昨日の雨に雪輪の水の多すぎはせずや。丙は曰ふ。蕨を採るも一興なるべし。あはれ一步一步と希望の高まると共に。危ぶまるゝは空の色なり。されども諸君憂ふる勿れ。濡るとも花の陰なからずやは。

楽しみ前にあれば。草鞋履きしめたる足の軽きこと飛ぶが如く。今まで下に見えたる金剛山は早くも失はれぬ。宇和島灣やうやう遠く低く小さくなりて。城山九嶋惠比須山大高嶋堂崎の鼻など。箱庭の置石に

似たり。

董躑躅覆盆子の花は至る處に咲き亂れ。花白く葉赤き山櫻の。谷を隔てたる木がくれに見やられたるも。面白からざらんや。

こゝの岩角かしの木の根。腰かけくも興深きに。昔の友は指さしつゝ。十九年前に誰かゝ滑りしは。あの木陰に似たりしよなといふ。

細き山水に手拭ひたして。顔の汗を拭ふもあれば。早くも用意の鎌を振ひて。手頃の竹を杖に伐り來るもあり。あはれ此自由なる一日の遊よ。人をして俗界より脱せしめ。又老より若がへらしむ。

猫嶽なといふを打ち過ぎ行けば。向ふは満山ことごとく岩躑躅にて。下ゆく水は落ちて瀧となり川となり。響を残して遂に谷深く隠れ行く

浮世は何くぞ。夜な〜此橋を渡りて春風と歌ふもの。神か仙かはた天使か。

佐保姫の歌のしらべやまじるらむ

花の下ゆく山みづの聲

雲に聳ゆる杉の林を右左に見つゝ。櫛が森といふを過ぎて。尙山深く分け入れば。俄に道の幅狭くなりぬ。曰ふ是れ新道より舊道に入る處なりと。げにも草高く木しげく。落ちつもる枯葉は。春の光をも知らず顔なり。

行くこと暫くにして。左の方に少し入れば。兜岩といふ石立てり。苔に埋もれて神さび立てるあたりには。いと美しき紅の躑躅も見ゆ。

うづもれて苔むす山のかぶと岩

をさまれる世は人も来て見ず

このあたりよりいよいよ深山めきて。立てる老木ども幾抱か有るらん。餘りの大きさに手を廻し見たれば。四人にて抱へらるゝ程のものもありき。

苔むし蔦はひ花さき若葉さすなど。見るとして何れか目を新にせざる。一もとをだに根ながらにして。家土産にもがなゝど。見る人毎にいふ。おはつ岩といふが道のかたへにあり。昔おはつといひし女。夜こゝを通りかゝりて進む能はず。此岩の上にて一夜を明かしたる跡なりとぞ。形の飯櫃に似たるをもて。おはち岩の訛りたるには非ずやと戯るれば。清水といふ處にこそ。おはち岩はあれ。柴こりに行く山賤ども。其岩の陰に辨當を入れ置く故の名なりと。山の事に委しき一人は語る。毛山

君歌あり。

おもしろき春の山路に月まちて

いも寝すこよひ花にあかさん

岩の名を折句にせしこそ面白けれ。

横嶽に出づ。道の傍に少し下りて。榎と楓の大木二もと立てる間より。恐るゝ打ちのぞけば。下は十丈にも餘るべき谷の。削れる如き岩をもて壁となし。底に生ひたる木々の梢は。遙に三階の高殿より。庭の萱など見おろしたるやうなるも心細し。我立ちたる處は。其崖に突き出でたる木の根の上なれば。此木一たびゆるがば。身は忽ち幽靈とやならん。暫しもあられず。止めよ若き人達。石を落して徒に山彦を驚かすことを。

谷を隔て、白嶽といふ山見ゆ。山の肌白くして雪の如きに。毛の如く
生ひたる松は色いよ／＼青く。今や石楠花の盛にて。此處彼處桃色に
染み渡れるも。里にて得られぬ春のながめなり。毛山君例の口ずさみ
けらく。

白たけと名にこそ立てれ石楠花さくなげの

花にうもる、滑床の山

おのれも。

母のなき故郷かなしさくなげの

花は昔の色にさけども

昔は此花を折りて家に歸りしに。喜び迎へ給ひし母上もおはしつるも
のを。小階子大階子などいふ處を過ぎ。倒れし木をくゞり枝ふみこえつ

布が瀧の下に出づ。瀧は名の如く一幅の布となりて落ちくるが。
糸とほつれ玉と亂れて。飛び散るさまこそ面白けれ。岩つゝ、じの水を
挟みて紫に咲きはこれるも。歌よむ人まちがほなり。

辨當は岩の上に座を占めたり。木の葉は莖となりて敷かれたり。毛山
君の供なる男は。早くも柴をりくべて釜を掛け。瀧の流れを結び入れ
ては。酒を湧かし茶を煮なとしつゝ。用意至らざるなし。いざ來れ。
瀧見つゝ、盃を手にし歌を口にする人。いづれか李白ならざるべき。思
はざりき清家君が實景寫生の。知らぬ間に出來たらんとは。

布さらすあたりには散るは山姫が

手にまく玉のみだれなるらん

こゝを立ちて霧が瀧を見る。水少なき故にや。昔し見たるほそに散り

來る狭霧もなし。近年木を多く伐りたる爲かなと言ふものあり。さはいへ木の間より烟の如くに落つる水。よのつねの物とは見えす。土居君歌あり。

うちそゞ雨かど見れば空晴れて

しぶきにむせぶ霧ふりの瀧

輿に乗じて。歌ひつゝ語りつゝゆくほどに。遂に川原に出で。鳥居岩を見る。一つの大石二つに割れて。其上に他の大石のかぶさりたるが。鳥居の形に似たればとて。名づけしなり。笠木なしたる岩の上には。木々生ひ茂りて。薄莉萱などの如く見ゆるにても。其大きき知らるべし。

下をくゞりて彼方を抜け。岩の上にて眠るもあり。矢立ぬきいだして

何やらん記すもあり。日は長し友は多し。いざや手ん手に巖折り集めんも楽しからずや。鶯をちこちにこちへ〜と呼ぶ。

万年橋など見めぐりて後。雪輪の瀧さして川上へと急ぐほどに。早くも嵐の如く雷の如き響きは林を隔てゝ聞えぬ。既に未來の希望あり。如何でか木の根岩角の險しき道を厭はん。あれよあれよ。あれに見えたるこそ雪輪の瀧よ。

瀧は晝にかきたる雪輪の如く。丸くなり楕圓になりて。斜なる一枚岩を下りおつるなり。水の多少によりて佳き折と佳からぬ折とあるを。今日は少なき方なりといへど。何にか比べて言はん。雪か氷か銀河の水か。岩も見見る間に流るゝ如く。水と共に落ちては碎け。岩と共に碎けては散る。實に是れ造化の妙工。天下の美景。唯をしむ。西遊記の

筆者をして足一たび此地を踏ましめざりしを。

瀧壺の右には。かなたこなたより水の落ち合ひて。大なる岩を穿ち。其下に深き淵を爲したる處あり。名づけて落合の淵といふ。大蛇の住むなど昔より言ひ傳へて。其碧の色の凄き事かぎりなし。石を投げ込めば山荒るゝとて。柴人などは固く戒しむ。

此處より。昔は川原づたひに。苔むす岩の上をすべりゝ行く事なりしが。今の新道にては。是を見おろしつゝ山ぞひの道を行くなり。千疊岩とて。一枚石より成りたる川床を走り過ぐる水の流れこそ。浮世の外なれ。滑床の名は此石よりぞ出でけらし。

今朝より催しつる雨は遂に來りぬ。緑の衣着て立てりし山は。忽ちに雲の外套を引き覆ひぬ。傘なき人々。汗と雨とに身をぬらしつゝ。飛ぶが如くに急ぐあり。おいゝと聲かくれども。姿はや遙の松陰に隠れて失はれぬ。さのみな急ぎと。露もつ石楠花を手折りのこすも惜しからずや雨やみて日やうゝ暮れんとす。樵の歌の聲たえて。鶯の山彦ひとり谷間にあり。

春くれていちご花さく深山路に

うぐひす絶えず鳴く聲のよさ

見おろせば。夜色はやくも宇和島町を襲ひて。城山黒く海うすじろく晝がきのこされたる淋しさよ。星の如き光のこゝかしこに浮べるは。漁火か燈火か。

友も疲れたり。行きには絶えざりし話聲も。今はとぎれぬ。問ふ諸君の足の豆は幾つぞ。いやゝ歌袋の重さ今朝に増る幾倍なるぞ。

友は別れておの／＼東西に去りぬ。餘勇なほ瓢の酒をあたゝめて。晝見し山を評し花を品するや否や。おのれは毛山君と燈を中にして。今日の遊を繰り返す事つきもせず。

盃いで、夜また更けたり。寝るも惜し。さりとして名残をのこして歸りつる山。夢ならで又いつかは逢ふべき。

十七 ふるさとの下

明日立たんとする日。暇を告げんと再び母上の御墓詣す。春暮れて夏に入らんとする寺山。風ものいはず。誰と共に花の名残を忍ばん。

一年に一たび拜む御しるしの

石よ物いふ世ならましかば

つれづれに待つらん君を此山に

のこして獨ゆくぞかなしき

親類を訪へば。一年一度の下りよと思へば。七夕に似たる君かなと恨まれ。友人に逢へば。明日よりは。散りたる花の咲く時またん久しきよと嘆かる。故郷の山青く故郷の水白し。空飛ぶ鳥よ。我身を乗せて屢ば行きかふ翼かさずや。

十八 別れの舟

五月二日いよく別を告げざるべからず。雨くらし。送られて住み馴れし毛山氏を出づれば。質素なる親戚故舊は。車にも乗らで。泥を蹴上げつゝ舟に乗るべき處まで来る。

樺崎に海水浴場あり。こゝにて送別の一宴を開かんとて。人々既に待ち居るも多し。おの／＼肴一重に箸一膳。猪口一つづゝ携へ来るの約

なりしとて。見る間に雛遊めきたる佳肴珍菓は並べられたり。雪に似たる鳥賊。紅葉の如き蒲鉾。なごりをし明日よりは汝とも別れんとするなり。

心を残して乗船せしは十一時。大坂商船會社の汽船にて大野川丸とぞいふなる。舟まで來りし人々の歸るを見送らんとて甲板に登れば。恰もよし。陸なる人々は彼海水浴場の縁側に立ち並びて。手を舉げつゝ送別の意を表しむたりしが。汽笛一聲。今ぞ進行を初めんとする時。大和田君萬歳と唱ふる聲。波を隔て、二三度おこりぬ。忽にして鼓の聲ひびき出でぬ。『なごりおしてる海づら遠く』と聞ゆるは。唐船を謠ひ居るなるべし。

ひとりゆく海原さびし波ならぬ

鼓の聲を陸にのこして

舟は出でぬ。謠も鼓も聞えずなりぬ。雨ますく暗く。波いよく白し。今まで忘れ居たる旅の心は俄におこりぬ。

十九 伊豫の海

又の日雨やうく晴れて。午後四時今治の湊を出づる頃は。夕日はなやかに窓よりさし入りたり。甲板にのぼれば。斜陽波を射て。近きは紅に紫に。遠きは緑に藍に。霞みわたれる山々の景色。いどのぞかなり。沖には帆かけゆく舟も見ゆ。陸には煙立つ家も見ゆ。口々によきなぎなりと言はぬものなし。

何くならんと舟子に問へば。あの雲の上に聳えたるが石槌山。多度津は早あれに見えたりなど。巻煙草の灰ふるひつゝ教へ呉れたり。さら

ば伊豫路も別なるべし。

きのふ逢ひて今日は別る、伊豫の山

うれしと見しも春の夜の夢

暮色やうく波に浮べり。人は何くぞ夢は何くぞ。思へば昨夜へだてぬ菴を照らしつる火影は。今宵たが面影を畫きつゝか風にまたく。

二十 神戸

夜はわけぬ。顔あらへとボーイにいはれて階子をのげれば。淡路島なかば過ぎたり。日はやうく出で。かすみわたれる海の上に。舟の帆の。こゝかしこあらはれたるもおもしろし。舞子おくり須磨むかへて。神戸は早くも來り立ちぬ。

浦人の藻鹽やさしは昔にて

舟のけむりを波にかすめる

棧橋にとまりしは六時半なりき。ボーイかひくしく。手廻の大行李二つ荷ひいだせば。持夫は肩に打ちかけて。車夫の待ち居る處まで持ち行く。

宿りは行きにも來りつる吉田屋に定めて。朝の間に人訪ひめぐり晝すぎてより和田岬に遊ぶ。空よく晴れて。心地よさいはん方なし。

岬には水産館あり。見はて、出づれば。小高き處に茶店ありて。休めくと呼ぶ。望海亭と名づけたり。名の如く海の上のこりなき處なれど。今日は霞みて見えざれば。紀州はあれか泉州は是かと問ひ試むるに。今少し右によりて。鳥の飛び行くあたりならんなどいふ

庭をわちこちへそゝるあるきして。和樂館といふに入る。魚貝などの

陳列品を見て二階に登り。又三階に登れば。眺望さきの望海亭の如きにあらず。更にはるかなり。難波より播磨かけたる海のおもては。油のやうになぎわたりて。舟の帆かげのひまなく行きかふさま。水の上の落梅にやたとへん。嵐の前の木の葉にやくらべん。鯨のさましてゆるらかに横たはれるは。淡路嶋にて。麓は消えつゝ。高嶺のみ藍もて畫がゝれたるは。津の國の山々なり。近くは園ゆく人。田におりる水鳥の如くに小さく見ゆ。歸りには和田神社に詣づ。境内ひろくして松多く。前には大きな石橋かゝれり。嚴めしき神輿庫など。社のうしろを守る。平相國の墓を訪ふ。仰ぎ見る五輪は玉垣もて圍まれつゝ。あたりに木高き松立てり。

築島寺にて平相國の遺物みするといへば。物せしに。住持るすなれば今日は叶はずと答ふ。堂には經嶋山といふ額かけたり。境内に祇王祇女の塔とて。小さき石塔二つあり。若葉の風すゞしげに。幾世の苔をめぐりて吹く。

今夜夕飯の箸をおきて窓に向へば。ステーションに出で入る車の提灯花の如く星の如く。街には『すし』『くはし』『うどん』などしるせる燈火むつましげに隣をならべ。織るが如き人の下駄の音。靴の音。ひきもきらず。何くやらん花火さへ時々見えて。夏めきたる夜のさまなり。薄墨く遠く霞める松原は。湊川のあたりにやあらん。螢に似たる火影も木のまに見えて。烟あはくこめたる空には。銀泥もてかきたる月。ひとり夜をまもれり。

二十一 男山

五日 は 京都 に 立ち やらんとて。六時 の 汽車 に のる。

なには がた 霞む あした に 見わたせば

水なき そら に 舟ぞ うかべる

歸るとも 行くとも したらで 波の上 に

うかぶ 小舟 を わが世とも かな

浦江 の あたり。菜種 すでに 遅し。

ゆく時は まだ しかり つる 菜の花 の

さかりも 過ぎぬ 人や 待つらん

京都 に つきては。一日 を 東山 に 遊び くらし。一日 を 豊公 の 遺物 を 陳列
せし 帝國 博物館 の 見物 に 費やし。三日 目には かに 思ひ たちて。男山 の

八幡宮 に 詣づ。

山崎 にて 汽車 を 下り。かち にて ゆけば。日よく 照らして 暑き 事 夏の 如
し。橋本 の 渡舟 に のりて 淀川 を 横ぎれば。かなた よりも 客わたし 來
る 舟あり。藍 の 日傘 を 傾けたる 少女 あり。紺 の 風呂敷 負ひたる 老婆 あ
り。前垂掛 の 商人 あれば。頬冠 せし 農夫 も あり。渡守 權 とり直して。か
なたに 押しこなたに 突けば。わが 舟と すれちがひて。袖に 散る 水玉 の
如し。此あたり にて 東より 來れる 木津 は 淀川 に 注ぎ 入る。

八幡宮 一 の 鳥居 の 前に 茶屋 二軒 あり。左なる は 千歳屋 といひ。右なる
は 錦清樓 といふ。庭ありて 見入れ 清らなれば。午飯 せんとて 右なる か
たに入る。山崎 より 此處 まで 三十丁。これより 本社 までは 八町 なり。
京都 東寺 の 出口 より 鳥羽 街道 を くれれば。三里 半 なりとぞ。此家 の 女ある

じはかたる。

車夫を案内にたのみて。一の鳥居を入れれば。道の兩側に蓮花草うつくしく咲きつゝき。櫻の時におくれたるも一もと立てり放生川は左に流れて。春風に神歌を奏す。

二の鳥居を入り。神幸橋といふを渡りて。まがりくねりゆく坂路となる。落葉の上には。藤の花どころくこぼれたり。

石清水といふは。四角に切りたる右の中にたへたる泉なり。參る人毎に。浮びある水草をかきのけ。檜杓して土器に受けつゝいたゞく。石清水の社といふも立たせり。

高き處にのぼりつむれば。打ち晴れたる眺望いふべくもあらず。淀見坂と名づけしこそことわり。近くは木津川淀川。白布を引きたる如く

に見え。遠くは宇治あたりの山々。あさぎに藍にかき消されたり。霞ふかゝらずは。京都も奈良も唯一目にて問ひ答ふべきに。

本社は南向にて。赤の玉垣に圍まれつゝ。神さび立たせ給ふ。東御門といふより入りて拜殿にぬかづき。社務所めきたる處にゆきて。寶物拜觀したきよしをいへば。今日はしまひたるあとにて叶ひがたしと。白き袴はきたる番人いふ。さらば内陣の黄金の樋をといへば。御扉を開き案内して見せくれたり。長さ十三間織田右府の奉納とて。名高きもの、一つぞかし。

廣前には。金燈籠のかゝりならびたるも神々しきに。羽音を立てゝ。胸薄紅なる鳩の。飛びおり飛びのぼるあり。御庭のつゝじ。今も神代の色をもて春の暮を装ふ。

かへりは正面なる南御門より三の鳥居を出づ。此あたりにて。厄除の御守といふ矢の羽のかんざし。杓のかんざし。竹にてつくれる鳩の杖など。店を並べて賣る。我も人まねに一つ二つもとめて。土産の數に入れたり。

男山わかばのおくに聞ゆなり

御代をいのりの八開手の聲

山を下りて車に乗る。左には鳩峰高く聳えて。松ものふるく。右には木津川きよく流れて。淀川のかたには。帆かけたる舟五つ六つ見ゆ。霞に消えて山もなき遠近の空うちながめつゝ。蒲公英などを咲きたる堤をゆく心地よさこそ。忘れがたけれ。入日は美しく浮びて水の上にあり。

山崎にて六時四十八分の汽車に乗る。霞いよ／＼深うして。四方のけしきも見えず。

ゆく春のなごりさびしき男山

かすみに消えて日も暮れんとす

菜の花は黄に。麥は緑に。蓮華草は紅に。色とりわけつゝ暮れわたる田畑のながめこそ。美しき限りなれ。

七條にて車と別れ。鴨川に出で。東の岸を川づたひするに。風こゝちよく顔の汗を拂ひて。夜のけしきも中々に興あり。水音にまじりくる笛のしらべは。いづくなるらん。

二十二 上り汽車

八日にもなりぬ。今日は東海道の上り汽車に乗らんとすれば。雨を侵

して。朝とく下加茂の社に詣づ。
朱の鳥居を入れれば。廣前には葵を摺れる白布の御帳さがりて。若葉のかげいとしめやかなり。御手洗の水ひとり。玉をまろばすやうに聲たてゝゆく。

ねぐらたつ鳥のつばさにかゝるなり

たゝすのもりの榊葉の露

京都を立ちたるは。二時五十一分なりき。雨すこしもをやみなく降りかゝれば。窓を開く事もならず。ガラスを隔てゝ。静なる琵琶湖を狭く見いだすのみ。山はすべて雲にかくれ煙に消えて。尋ねれども來らず。苗代と小田と若葉の林のぬれたる色を。すゞしげにながめつゝゆくも。さはいへど心ゆく春のくれなり。

名古屋につきて。萬丸樓といふに宿る。床の瓶には春菊をさしたり。いでや夢と親しまんとて枕を見れば。古風の乗合舟などにて。見なれたる木製の品なり。括り枕はなきかと問へば。残らず洗濯せしに。雨ふりいでゝまだ乾き侍らず。御客さまには御氣の毒なり。何とか趣向して參らすべしとて。暫くして下婢の持ち來れるを見れば。浴衣を三枚ばかりたゝみて。其上を手拭もて卷きたるなり。枕といふ名にも叶ひたるをかしさよと。興味かへりて湧き來れるも。作れる主には更にわからじ。始めて知りぬ。此風致ある枕を取りて。静なる窓の雨を聞く旅寝の一夜こそ。人しれぬ楽しみなるを。
夜ふけて。着く汽車いづる汽車。雷の如くひゞきて。夢ゆるさぬも中々にうれし。明けなば我を家路に運ぶもあれぞと思へば。

戀

一

あす見んと待ちし初花

一あらし夜のまに過ぎて

わが春はまた歸りこず

世はかなし唯人戀し

二

うぐひすの友よぶ聲に

夢さめぬ空は白みぬ

初花はつぼみ破りぬ

世はうれし春はきたりぬ

三

朝日かげ花にのぼりて

春風は世に吹きいでぬ

たれか知る今日のこゝろを

神ならで其人ならで

相摸の海

戀しきは相摸の海

戀しきは鎌倉の山

十二にて父にわかれ

十四にて母にわかれ

たよりなき身とし爲らずは

よそにのみ昨日は聞きし

鹿島がた波の浮寐の

假まくら我はせましや

磯波の同じ響きも

浦風のかはらぬ聲も

わが身には嘆きの叫び

見し夢は早く破れて

江の島の山松あをく

おもかげに残るもかなし

かの見ゆる沖の白帆は

ふる里の叔父を載せたる

舟かあらぬか

摘 草 (唱歌)

末野の土筆も籠に満ちぬ

川邊の嫁菜も籠に満ちぬ

歸さの道には董つみて

たもとを満たさん夕日たかし

二

唱歌の本にもありし花よ

むかしの歌にもよみし花よ

そこにも三つ四つ袖のしたに

つぼみは残して踏むな友よ

春の旅

海ゆけば舟こそあれ

陸ゆけば車こそあれ

いそぐべき旅にしあらねば

今日も又かちよりせんと

雲雀なく野路の朝露

ふみしだき我立ちくれば

此をかの小笹がくれに

有明の月ぞさえゆく

かの岡の煙の末に

一ひらの花ぞ見えゆく

その影を踏みつゝゆけば

その花をとめつゝゆけば

旅寐のうさも忘れつ

旅ちのつがれも止みぬ

二日路は四日になしても

旅せんはかちこそよけれ

ゆきくらすとも

花の頃

世はいつしか花の頃にもなりぬ。思へばなほ戀しきは故郷の春ぞかし。おのが家には老木のしだり櫻ありて。山よりさしのぞきたるが。庭をおほひて咲きはこれるさま。今も目の前をはなれず。妹と共に祖母上より賜はりたる辨當たづさへ。雛遊びせしも此陰よと思ふに。

叔母上の家には庭のやり水こゝろよくながれて。八重ざくら美しく影をうつせり。年ごとの花見の宴に。父上の御ともして招かれし事もありたりしを。今はあるじ變りたれば。をどいしも去年も。高間の山の峰の雲とのみこそ。見て通りしか。

歌まなびに通ひたる穗積翁の庭には。殊にすぐれたる大木ありき。一年還暦の祝ものせらるゝとて。歌よみたち五六十人も集まりしは。おのが十六の年にやとぞおぼゆる。頃は大陰暦二月の末つかたにて。花も半ば咲きいでたるが。夕日にかゝりひて。歌のむしろを照らしがほなりしこそ。忘れがたけれ。かく盛なりし歌の圓居は。前にも後にもなかりしと思ふに。翁の徳さへ思ひ出でられて。三十年前のこゝちもせ

す。翁が先代は藤垣内の教子なりしかば。大平大人のかゝれたる櫻垣内といふ額は。床の間にかゝりゐたり。來の村の三嶋神社といふは。半道ばかりの所にあり。いつにかありけん。少年にて培察といふ藩の學校に通ひたる頃。詩會のありし夜いたくふけて。歸らんとせしに。あまりにも月おもしろかりしかば。友だち打ちつれてそゝろあるさし。かの社の花を折りて。月は花林を照らして皆霰に似たりなど吟せし事もありき。あはれ其時の友は何くにか今年の花を見る。當時の同盟今は四散すなど口ずさむもの。吾ひとりやあらずや。

土 筆

雨はれて日かすめり。土筆あさるには何くかよけん。まづ近くよりとて。籠やうのもの手にくたづさへつゝ。あくがれ出づ。關口より落合のあたりまで。なほも曹司谷の邊までも。

時に春季皇靈祭の後三日。雲なく風なく。霞をちこちの森を籠めて。塙は道のかたへに首をあげたり。さらでだに楽しき野邊を。袴はきつれて立てる法師の。人待ちがほなるこそうれしけれ。得たりと一人がいへば。二人も三人も一ところに集まりてさがす。先だゝんとて田の水に足ふみ入るゝもあれば。後れたるは中々に摘みもらしたるを。三つ四つ五つも折りもてゆく。

のびすぎて瘦せたるあり。肥えて首なほ土に埋みたるあり。水筆ゆき

て和らかきあれば。眞書に似てこはきあり。長さ短き多き少なき。くらべつゝ競ひつゝ。時々に見せつ見られつするも。樂しき遊ならじやは永き日を摘みくらして。歸さは夜にも入りぬ。疲れたれば。目白より汽車に乗らんとするに。月おもしろく霞みて。遠き梢は探れども見えす。夢かうつゝか。鶯の聲なは残りて堤の木にあり。

草ご堇

一

花もなき春野の草葉

少女子につみのこされて

われも又堇となりて
獨り音になく聲きけば

うつくしみ受けましものを

人戀し花うらやまし

二

花籠につまれし堇

いつしかと投げすてられて

獨り音になく聲きけば

なかくに花とうまれて

めでられし身のくやしさを

朝の榮え夕べの嘆き

滑床の山

なめとこの山に瀧あり

布といひ霧とよび雪輪と名づく

山姫の手玉もゆらに

さらすらん様も面白

旅衣そでもしといに

散りかゝる様もおもしろ

岩床も氷るばかりに

雪と落つるさまもおもしろ

蕨とり石楠花折りて

春の日のかたむくまでに

思ふとち遊びしは夢か

おもひやる波路は遠し

山ははるけし

夜半

天しづか地もしづか

木のえだにぬぐらあらそひ

さわぎつる鳥はいづくぞ

吠え狂ひ牙噛みたけりて

友よびし犬はいづくぞ

おく山の穴に住む熊

大峰の木に巣ぐふ鷺

晝のまの慾もわすれて

蝶と飛ぶ夢はいづくぞ

春の夜は今こそ半ば

里人の見すてゝにし

花の上に遊ぶはひとり

夜嵐の聲

二

山しづか海もしづか

柴人が妻木の斧の

音たえて鳥も歌はず

舟人が漕ぎゆく楫の

おとたえて帆影も見えず

山ざとに糸くる少女

磯ぎはに貝ほる少女

世の中の戀もわすれて

丸寐する枕はいづく

春の夜は今こそ半ば

浦風のさめて友よぶ

波の上に歌ふはひとり

朧夜の月

自然の音楽(唱歌)

一

琴の音もおもしろし

笛の音もおもしろし

人は寐たる春の夜半に

あそぶもの風と水

二

たれか来て舞をまふ

たれか来て拍子をうつ

人は寐たる春の夜半に

あそぶもの風と花

嵐 山 (唱歌)

一

春風うづむ嵐の山

空まで花の絶間もなし

吉野の種をうつしてこゝに

植ゑしは昔めぐみは今

二

戸無瀬も花の上よりおち

大井も花の下をぞ行く

春おもしろき名所の氣色

つたへて見るも古人の徳

波 の 聲

一

磯に見はる海士の子と

馴れ遊びしも唯しばし

夕山嵐ふきおちて

しづかに暮るゝ和田の原

のこれる聲は我ひとり

とゞろく磯に岩に

二

月なき春の夜は更けて

はや漁火の影もなし

人は眠りて聞かずとも

我こそ歌へ我うたを

いつもかはらぬ調べにて

とゞろく磯に岩に

三

世は春秋の花もみぢ

咲き散る毎に移りゆく

人の心よよしさらば

我こそうたへ我うたを

千代にかはらぬ愛をもて

どろろく天あめに地つちに

わかれ

岸に立ち小舟うかめて

おくりこし友は目にあり

その聲はなほ耳にあり

夢さめて顧みすれば

住吉の松はいづこぞ

樺崎の岸はいづこぞ

宇和嶋の城もかくれて

波路とぶ鳥のつばさに

風さむく吹く

三社めぐり 明治三十二年四月

香取—潮來—鹿島—息栖—銚子

一 香取

同行五人。本所のステーションに集まりて。三社めぐりにと思ひ立つ。時は四月の一日。曉より曇りつる空やうく晴れて。日影あたゝかに八幡の桃林を照らせり。中山に着けば。鬼子母神の山門手に取る如く見ゆ。

佐倉より乗り替へて佐原行となる。酒々井しすかにて下るゝ人の多きは。宗吾靈社の參詣なるへし。青き赤き手拭かけならべたる茶屋よりは。少女出でゐて頬に休め〜と招く。

成田にて下車し不動に詣づ。堂の前の櫻は七八分咲きたれど。山の上なるは未だし。今や晝護摩の焚くる處とて。參拜人詰めかけ居り。僧かひぐしげに薪を取りては燃すを。外なる人々格子よりのぞき居るなど。いづこか春の賑ならざる。

久しく遊びて再び汽車に乗りたるは。四時半に四分足らざる頃なりき。一天くまもなくなりて。霞おもしろく遠近をこめ。ゐるかなきかの間より馬の耳なしたる筑波山。地平線上に顔を見せたり。滑川なぞ過ぎてゆく。白帆の木の間にはれたるは。利根川近くなりけるならし。寫生せばやといふもあれば。一首しづみたりと戯むるゝもあり。

佐原より香取までは三十二町。何も興なきところなれど。風さむからず吹いて。菜種の色に暮れゆく村道。歩み心地あしからねば。小謠

うたひつゝ、早くも鳥居前の笹川屋に着きぬ。湯をはりて膳出でたり。吉川氏の歌評。御舟氏の畫論。旅の圓居なか／＼徒然ならず。明くれば二日。朝露を踏みて香取神宮を參拜す。こぶかき杉の林をうしろにして立たせ給ふ檜皮葺の神殿。神さびたりなどは世の常なり。櫻こゝかして咲き出で。晴れたる日の雪の如し。

芦原の國ことむけし御いさを、

あふげば高し森の神杉

伊藤泰歳氏は當社の禰宜なり。一見故友の如く。寶物何くれと捧げ出で、机に載せ。自ら箱の紐解きつゝ、恭しく説明せらるゝ、これを嬉しけれ。曰く鐵の楯。是はもと内陣の左右に納まりゐて。一年に一度。大禰宜その御扉をかゝげ。宮司一目拜見するの式あるのみ。他の人は神官といへども。見る事だに許されざりしを。維新の後。教部省の許可を得て。あまねく貴顯紳士の志ある方々には。縦覽をゆるす事とせりと。

之と始めとして。古器物古文書あまた見たる後。案内せられてうしろの神苑に伴なはれ行く。櫻の馬場といふ處なり。いと廣やかなる飛鳥山風の芝原にて。老木若木の櫻多く。楓も近頃植ゑたりと見ゆるが。心地よげに生ひ並べり。苑の岸に臨みたる處に亭あり。名づけて三觀亭といふ。こゝより見れば。利根川は白布を引きたらんやうにて。西より東に走り。よだ浦の海よりたどり／＼て。湖末もそれかどばかりかすかに見ゆ。菜の花おもしろく霞みわたりて。李の花桃の花。村の遠近を飾れり。いたくもてなされて酔ひぬ。紙いで、御舟氏杉の老木を

畫がきしかば。おのれ贅をなす。

波のほに立てし劍の御いつより

吹くか梢の夜あらしの聲

目前の眺望を寫生せし上に又かく。

此山の春おもしろし急がずは

いたこの花も見てこましものを

酔ひたるは我のみならめや。よろめく足を踏みしめつゝ。神山を
向ふに下りしは。四時頃なりけん。風ひやゝかに顔を撫でゝ。足の輕
きこと風前の落花に似たり。津の宮まで十八町の道といふ。

二 潮來

小舟を雇ひて大船津まで行かんといへば。船頭。もはや遅ければ。潮
來に泊り給ふべし。明朝は同じ舟にて早く送り參らせんといふ。さら
ば言はるゝまゝにせんとて。舟に乗れば。竿とりなほしつゝ。濱の鳥
居を右に見てゆく。此景色特によしとて。懷紙とりいで筆なめぬらす
は御船氏なり。

利根に別れて枝川に入り少しゆけば水廣くなる。新左衛門河しんざゑもんがといふな
り。顧みれば香取の山杉おくるが如く。夕日のとけく水に浮べろは。
畫にもかゝれず。詩にも作られず。

向は右の方より探りて。中洲長島筈島などいふ處々見ゆ。すべてを名
づけて十六島といへり。遂に磯島を右にし扇島を左にして。舟又小川
に入る。岸の菜種かげを浮べて山吹より美しく。角々む若芦一寸ばか
りも水を離れたり。

折れて加藤洲かとうすずに入る。いはゆる十二の橋のかゝれる處なり。片側に假初なる欄干を附けて。棚の如く渡せる板の下くゝる事も。早六つ七つになりぬ。左右の岸には藁屋などありて。桃紅に柳緑なるも。春おもしろき名所なり。

潮來の岸に舟は着きぬ。船頭お客さままだよといへば。宿屋より小女出で來りて。傘風呂敷包など持ちつゝ案内す。家の名は角菱樓とぞ言ひし。

襖を隔てゝ酒飲みぬたる客ありしが。俄に出でゆきたるあと。恰も夕立過ぎて雷の聲やみたるに似たり。給仕する女は曰ふ。お隣の且那方は菖蒲けんぶつなりと。

菖蒲とは如何に。若葉もまだ出でざるべきにと言へば。女わらふ事甚し。知らざりき。菖蒲とは此地の名物なる踊の名なりしものを。娼妓八人より十二人までの人數が。輪をなして並び立ち。三味線小太鼓大太鼓の拍子につれて。ぐるりゝと足踏を爲し手を拍ちつゝ踊るなりとぞ。女しきりに見に物せよと勤むるを。笠尾氏知らず顔にて。徳利の代りをのみ早くゝと催促す。

三日は九時頃に立ちて。昨日の小舟に乗る。船頭待ちゐて竿取り直し。かなたこなたと押しめぐる程に。早くも廣やかなる水の中央に出でぬ。

此邊の農夫は。おのゝ一艘の小舟を所有し。耕すにも耘るにも。之に乗りてゆきゝする事なれば。かなたよりも來りこなたよりも行き。川を横ぎるもあれば岸に着くるもありて。娘も妻も巧に櫓をあやつり

つゝ。澄みわたる水の上に影を落せり。

蘆の若葉心地よく萌え出で。左も右も口なし色なる菜種の間。桃李などの交りたるを處々ながめ行く。いと樂し。一つ二つ又は四つ五つなど見やらるゝは。かの舟人の家なるべし。汀に出で、鯉を網にしたるもあり。

わが舟にては吉川氏語り。笠尾氏吟じ。淺井氏黙し。御舟氏畫がけり。たゞ如何にせん己が歌袋の口かたくして。出でんとしては又引き込むを。蓋し餘りの景色に負けたるなるべし。

小舟こぐ妹が袂もわたゝかに

眞菰の若葉はるかせぞ吹く

延方のすがたといふあたりを過ぎて。北浦に出でぬ。右に續けるは浪逆なせかの海なり。

り。風しづかに眠りて水に壓なく。霞みわたれる遠近の山。やう／＼墨畫の中に隠れて。力なげに並べる帆影。遠きは少しも動かざるが如し。

舟の帆も眠げに見えて浪逆の海

波に覺めたる春かせもなし

爪木の鼻といふを左に見つゝ大舟津に着きぬ。鹿島の一の鳥居の水に面して立てるところなり。御社までは二十町なりとぞ。

三 鹿島

御社の前に至れば。御船氏は早くも寫真器械を立てゝ。取るべき位置を定めぬたり。鳥居のあたり櫻白く咲き亂れて。糸打ち垂れたる柳の下に。繫ぎ捨てたる田舎馬こと。名所圖繪にもかきつべき面影なれ。

笠尾氏と浅井氏とは鳥居の臺石に腰を掛け。吉川氏と己れとは。柳の
 かなたこなたに立ちなどしつゝ景色を装ふ。人物の位置も定まりぬ。
 唯恨めしきは。寫りたるさまを直に見る能はざる事これのみ。
 苔ながらなる白木の鳥居は。雨に打たれて半ば朽ちたる。かへりて尊
 し。千歳の緑を打ちかはしたる老木の杉は。千木を圍みて晝もをぐら
 く。春しづかにて。拍手の聲は山彦に答へつゝ神代に似たり。
 北向に横折れて拜まれ給ふ廣前には。詣でし人の奉りたる洗米の打ち
 散りて。落花よりも白し。

是やこの東の海の波のうへに

君が代まもる神のみあらか

世にかをる神のみいつや示すらん

鹿島の森の山ざくら花

御社のうしろには。奈良の春日に似たる杉の木立ありて。忘れては鹿
 や何くと問はまほしくぞ思はるゝ。

ぬれたる落葉を踏みしだきゆけば。高き梢に鳥の聲して。散りくる露袖
 に寒けし。何くやらん嵐の聞ゆるはと言へば。太平洋の波なるべし。
 こゝより磯までは一里なれど。雨降らんとする日は近く響くと言ひ傳
 へたりなど。吉川氏かたる。

治まれる世にも忘れぬ男たけびの

御聲を波のおとに聞くかな

地震の鎮めとして神の置き給へりしといふ要石は。玉垣いかめしく結
 ひめぐらしたる中にあり。大きな一本の榊。さては雲に聳ゆる樅の

木もて覆はれたる邊りには。紅梅もありき。

御たらしとて。御供水の湧き出づる處あり。廣やかなる池をなして。澄みわたる色鏡の如し。一尺ばかりの鯉三つ四つ遊びゐて。尾も鱗も黄金色にぞ打ちきらめく。

岸より生ひかゝりたる椎の老木は。水の中なる烏居を杖にて。更に又生ひ廣がり。幹には苔むし葛はひたるさま。八岐大蛇やまたなごちの面影ありとや言はまし。さるにても半ば朽ちたる烏居の笠木は。苔青やかにむして。春日のめぐみに漏るゝ能はず。

歸るさは。菜の花うつくしき遠近のながめを。我物にしつゝゆく楽しさ。男の童一人。猿のやうにかきつきて櫻を折れば。下に待ちゐて其枝此枝と差圖する又一人あり。一枝乞ひ取りて寫生せんとする御船氏

あれば。おのれは小枝の分配にあひて。胸のカクシに挿みたり。來れ胡蝶よ。春風と共に息栖までも。銚子までも。

大舟津に歸りて午飯ものす。前は浪逆の海原廣くながめやられ。汀の烏居に位置を取らせつゝ。近くには緑烟れる柳あり。遠くには半ば霞に消されたる白帆あり。浮雲低く水の面を撫でんとしては。繋れる舟人に苦の用意を促すさまなるも。筆新しき春雨の圖案といふべし。

四 息栖

風の出でぬ間にと急がされて。苦の屋形したる小舟に乗れば。今まで見合はせぬたりし雨は來りて。雫は苦の下にも漏り込みたり。されど已れは猶雨見んとて。吉川氏と共に苦の間より首さしいだし濡れつゝ行く。襟に入る雨。氷よりもつめたく。顔にかゝるしぶき。糸よりも細

し。

岸の松黒く家黒く。墨筆もて塗り消されゆくも面白きに。菜種ひとり口なし色の汁ながしたる心地して。家まばるなる村里を春になしたり。枯芦のもとに浮べる鳥は落梅に似て。水を衝く雨の力。針ならば絹針ならん。

舟は利根川に出で、息栖に着きぬ。こゝも水中に鳥居ありて。其下にいたる大瓶二つあり。参詣の舟は必ず之をのぞき見る習なりとて。船頭竿とりなほせば。人々われもくくと船ばたに首さしいだしつゝ。舟は片乗になりて水も入りぬべく傾く。

息栖の御社は。舟よりも見入れられたり。鹿島香取の如くは深からねど。なほ神さびたる森に包まれり、立たせ給ふ。櫻も面白き處なり

ま。

例の寫真器械は。隨身門より外に向ひて。鳥居の間に海を望みつゝ、据ゑられたり。人々かはりくくに蝙蝠傘さしかけつゝ。寫す人を濡らさじと守れば。浦の子守等は珍しがりて。六七人も打ち連れ歌ひつゝ、來りしが。おのが袖をひかへて。オビキクンチャイヨくと口々にわめく。オビキとは何ぞと問へば。錢よといふ。錢は持たぬぞといへば。

此旦那一等旦那。えい着物きてをる一等旦那とはやし立てゝ。少しも去らず。さるにてもオビキは何の心ならんといへば。笠尾氏オブクなるべし。越後にては神佛に奉るものをオブクとこそいへと曰ふにて。研究は終りぬ。御船氏は器械を方附けつゝ、曰ふ。先生のお蔭にて。お景氣にオビキ娘を寫し添へたりと。

舟宿にあがりて待つ程に汽船は來りぬ。ハシケニ乗れば雨ますく力を加へたるに。風さへ吹きいで。水のうへ墨を流したる如し。八時頃鏡子に着きて大新といふに宿る。先づ大テーブルを取り圍みて。鯛の鱠を箸にしたる心地は。昨日の鯉に引きかへて。忘れがたき愉快の一つなりき。己れ早く酔ひて枕取りたる後。諸氏の興いかに閑なりしぞ。

五 銚子の上

四日は雨やみたれど。風つよく空くもれり。磯めぐりせんとて。先づ觀音に詣づ。堂より見れば。利根の出で、大洋に接する處眼下にあり。之を川口といふ。常陸の波崎水はざきをへだて、手に取る如し。川口の明神は。白紙神社とも呼ばれて。小高き岡の上に祭られ給ふ。

寄せ來ては碎け散る白波。たゞさながらの霧となりて空に立つも見ゆ。打たれては防ぎかへす巖の上には。鷗二つ三つ疲れし翼を休めたり。下りて葦たんば、踏みしだきつゝ。更に前なる岡に登る。名づけて千人塚といへり。波は足もとに碎けて雷の如く。顧みれば蠣殻もて葺きたる浦里の屋根。さながら雪景を覺ゆ。

磯づたいして波に逐はれ。又芝山ふみこえつゝ行く。芝の上に白き紫なる莖。又は黄なる紫なる蒲公英など咲き競ひて。雲雀の聲をちこちに聞ゆ。

折り敷きて蓐にすべくなりけり

雲雀さく野の春の若草

海苔とる子等に物問ひつゝ。沖の帆柱。とんび岩などいふを見て。あ

しか島を前にせし處に至る。島は海中に膚をあらはしたる岩にして。白波おもしろく洗ひ居る上に。何やらん黒きものゝ見ゆるはといへば。處のもの。鵜なるべしとて。家より遠目鏡もて貸しくれたり。げにも黒き翼を打ち並べて。樂しげに休み居るさまよ。岡一つ越ゆれば。問はでもしるき犬吠崎の燈臺は目の前に立てり。右には緑ふかき松山ありて。此あたりを霧が濱といふ。

亞米利加の海までつゞく波の上を

照らすや國の光なるらん

燈臺の岡に立てば。さしてゆく曉鷄館は。たゞ足もとながめおろされたり。あはれ居ながらにして太平洋と歌ふべく。寐てヴワンクーパーと語るべきは此家よ。曉鷄の文字は如何にと問へば。此地トリアケ

の名あるを以てなりといへり。

着きたる頃より雨また來りて。波の上たゞ薄墨と胡粉との外に色なきさびしさよ。されど家には湯あり酒あり友ありて。知らざりきいつのまに日の暮れたるをも。夜の更けたるをも。

折れかへる波の穂白くさよふけて

ともし火高し犬吠が崎

六 銚子の下

五日は海上の日の出を見んとて。とく起きたれど夜はまだ明けず。波の色のみ百足の如く寄せ來るに。明星よりも赤く輝きては。帚星に似たる尾を引くもの。雲透に高く仰がれたるこそ燈明臺なれ。遠く波を射る光。その凄さ何ともいはれず。

やうく明けゆけば。砂を踏みて散歩す。雨は落ちぬど。朝日は遂に
ありかをだにも知らせずなりぬるこそ残念なれ。

白妙の衣かさねぬ岩もなし

波のふいさや如何に寒けき

濁世の夢ものこらずなりにけり

岩噛む波のあかつきの聲

湯に入りなぞして。ゆるりと曉鶏館を立ちたるは十時なりき。館より
右に見やられたる鼻を長崎といふ。海人が家居これかれあり。今日は尙
磯めぐりせんとて。かなたをさしてゆく程に。大きな翼を伏せて砂に
おりぬる鷗こそあれ。魚やねらふと近づき見れば。こはいかに。体な
ほあなゝかなれど。動くべくもなかりけり。

されど疵も見えず銃丸の跡もなし。寫生の材料に持てゆかんと。御船
氏いへば。面白しとて吉川氏は。傘の柄に掛けて荷なひゆく。遠くに
なりて此さまを寫生し居るは浅井氏なり。寫生する人までも又材料に
收めゆくは誰ぞ。なほ後ろに人あり。岩に腰掛けつゝポケットの手帳
を取る。

戸川犬若の村々すぎて。岩の細道よちのぼりつゝ。入日見る處に至
る。雨また降りいでたれば。茶店に茶をすゝむる老婆も居らず。ぬれ
たる板に外套うちおき。わづかに汗をぬぐひ。草鞋の紐しめ直すに止
まるのみ。さはいへ打ち開けたる海上の眺望。何となく腰越を右にひ
かへて。江嶋に向ふ心地もせらるゝかな。

これより海と別れて。銚子のステーションに物せんとす。されども波

なほ名残をしげに。暫くは左のかたに伴なひ來れり。

妙見堂に詣でなぞしてステーションに來れば。惜しかりき一時廿分の汽車は。今ぞ運轉を始めつゝある處なりしは。

歸らじと思ひし波は歸り來て

かへらぬ烟雲にかくれぬ

笠尾氏は足を痛めて曉鷄館に残りたれば。或は今日は歸るまじなぞ言ひゐたるに。早くも近道より來て待ち居りたればなり。

七 山中

三時の發車にて横柴まで行く。一昨日別れたる坂東太郎は。時々松の木の間より顔をあらはし。日影やうく菜の花の上に霞みわたるぬ。

横柴にて下りたるは。同行吉川氏の故郷を訪はん約なればなり。わづ

かに一里半の村道。昨日の雨にて道いとわろし。

古寺の前を過ぐれば。椿の花おほく落ち重なりて。小川の水をせきとめたる。深くも春のなぞ口すまるゝさまなり。顧みれば急がぬ夕日も早横になりて。黄なる紅なる花の上にはひわたるこそ。身にしむ夕べなれ。

道の半に寺方といふ村あり。さゝやかなる茶店に休めば。床に足らずとて盃を重ね酒樽を置きて之に代ふ。二十貫目のからだ持てあますはかゝる時にあり。人々は樂々と腰打ち掛けても。おのれ一人は木の切株に安んぜざるべからず。

泥深き道に靴をしぼく取られんとしつゝ。全く暮れて後。山中といふ里の吉川氏に着きぬ。おのづから浮世に遠き一天地。又斧の柄も朽

たしつべき處ぞかし。

つひに歸るさ忘れて。又の日も其又の日も遊び暮らしぬ。うしろは山。前は田にて。犬の聲鳥の聲まで仙家めきたるに。春雨しめやかに烟りて。歟かたげつゝ行き歸る農夫も。畫中の趣に見やられたり。あるじ朝より盃もちいで、勸むるを見れば。一升入の武藏野なり。滿場一致の議決によりて。先づ笠尾専門家の前にぞ据ゑられたる。

松風は吹きをさめたる君が代に

いつまで波の引きのこるらん

など戯れたる酬いは眼前。めぐりくし満月は。しかも二つながら己が處にこそ集まりけれ。

日は一ヶ月は二つの二川を

三夜四夜五夜いつか別れん

などいふく傍へを見れば。御船氏は筆なめぬらして。請はるゝ唐紙に揮ひ居り。何ぞと問へば。天狗の鼻を蜂のさしをる處とぞいふ。酔は早十二分なり。くだらぬ替も一興なるべしとて。

三吉野の高嶺の花に遊ぶ身も

腰の劍は離さゞりけり

果は書畫會になりて。筆とらぬ人なきに至りぬ。への字なりの富士。馬鈴薯の岩。かゝる時には歌人も畫師に譲るべきかは。

之を見るとあるじの家人は悉く座敷に集ひぬ。親戚知友また訪ひ來りて。名刺を贈れるも多し。其間に奔走して。厚くもてなさるゝ主人の心づくし。酒もあれど肴もあれど。尙その外に無からずやは。

かくて暇を告げたるは八日なり。盧生の夢さめたるも斯くやありけん。別に臨みて母人の歌一つと乞はれしかば。

行くどくと立ちよる毎に若がへり

いや榮えなん庭の松が枝

其名をとく子といはるればなり。

道にて栗山川をわたる。若蘆もえいで、水の流いと清し。

別れとし里みかへれば栗山の

川風さむく雲雀なくなり

やがて持ちたる扇にしるして。歸る車夫に託し。家に留まれる吉川氏に送りたり。

今日は日うらゝかにて旅路さびしからぬに。つれとし雁の一羽を殘し

たるなん。物足らぬ心地せられて。

蝶

少女子の草つむ袖に山吹の

ちるかど見えて飛ぶ小蝶かな

すみれ

捨小舟ふみかたむけて里の子は

岸のひたひの莖をぞつむ」

ぬきすてし古木の卒都婆ふみこえて

寺の庭まで摘むすみれかな

雲雀

大空のものとながめし古寺の

塔より高くなく雲雀かな

浦花

夕しほにかへさの道をかくされて

いそ山ざくら今日みつるかな

落花

むれあそぶ鯉のゆくへも分かぬまで

ちりてはよする花のしら波

遊糸

さは姫の霞の衣ほころびて

空にみだるゝ春のいとゆふ

呼子鳥

よぶこ鳥ともよぶ山の夕まぐれ

秋はかくまで物や思ひし

岡巖

わらびおり今日もくらしつ岡寺の

松に夕日のかけおつるまで

野遊

少女子が力くらべのすまひ草

袖にあまれと暮れぬ野邊かな

暮春

いづくまで春のわかれを追ひゆかん

末のゝわらび葉となりけり

春のうたの中に

春ふかき片山はたの土大根つちおね

泣り残されて花さきにけり

旅の歌の中に

つゝとさく春の山邊は賤の男が

石さる槌のおとものをけし

駒どめてしばし水かへ川上の

山ざとをとめ布さらす見ん

梨子の花ちりてながるゝ谷川を

かちわたりする人はたが子を

若葉の頃

我は花よりもむしろ若葉を愛す。何となくしめやかなるながめなればなり。我は春の時よりも。むしろ若葉の頃を賞す。たのしみ長く望満ちたればなり。況んや吹けども厭はれぬ風は。そよ／＼と來りて。梢の露を拂ふの快あるをや。

雲とにはひしあたりは何くぞ。雪とみだれしあたりは何くぞ。薄く濃きけぢめこそわれ。たゞ一色のみどりもて。塗りわたされたる遠近の森よ。木陰には櫻の實を拾ふ子供も書如く立てり。聲のみ聞えて木のまをゆくは。桑つむ少女なるべし。

麥の穂長くのびたる畑には。新茶を籠に満たして。かへりくる老婆も見ゆ。

柳の茂りすぎたるは。あまりなつかしからねど。梅の若葉すゞしげに榮えて。鈴の如き實を見せたるは。いふべくもあらず。楓はすべて。緑なるも紅なるも。夏おもをしろきを。秋の物とのみめでそめしこそ。いぶかしけれ。まして影を水にひたして立てるあたりを。小魚の鱗ふりあそぶなど。何にたとへてかはめでまし。

みどりの中に咲きまじる花。野には白きいちごあり。山には紫なる藤あり。人手を借らずして装ひ立てる垣根のいばら。ひとり打ちかをるあたりには。日の長さ事。ことに年の如きを覺ゆ。

男の童は學校よりかへりて。池を堀らんと若葉の陰にあつまる。頭は日に照らさるれども暑からず。手は水にひたさるれども寒からぬは。此頃の空ぞかし。椎の花ときくこぼれて。土まだ乾かぬ築山に。雪を見せたり。

竹の子は衣をあらたにぬぎて立ちぬ。窓の月に墨繪の笹をかくも。近きにやあらん。少女の庖刀にかゝりて手桶となれりしは。昨日とおもひしものを。

玉松

ある日上野より歸るさに。地の端の本屋にて。玉松といふものを買ひ

たり。五冊の寫本にて空穂物語を校合せしものなるが。細井貞雄の玉琴とて世にある本の。初稿にやと思はるれば。家に歸りて比べ見るに。大方は玉琴より疎なれど。なほ互によしあり。

是に就きて思ふに。わが著述にもあれ歌文にもあれ。吾一人して取捨せるは。悪しとて捨てたるにも。却りて善き事少なからねば。人にも見せ自らも度々かんがへて。いかにせんと躊躇せらゝは。成るべく残しおくべきなり。本居宣長翁が古事記傳の原橋には。今の板本に優る處かれこれありしと。見たる人の語りし。

遠くなるをの

福地櫻痴居士と共に能見たる時。居士曰く。遠くなるをの沖すぎて。といふ文句の俗加減は。ごとつくだの鐘のこゑ。に劣らずと。されども彼は雅に此は卑しく聞ゆるは。前後のつゞげなしにも因るべし。

戀

春風のふくとはすれど山吹の

花ものいはず露もかたらず

春風のくればみだるゝ青柳の

糸こそおのが思なりけれ

ちるが上に又ちりつる櫻花

はらひかねたる戀もするかな

草鞋

ぬきすてし春の山ぢのわらぐつを

うづめる雪に風かをるなり

雲

袖でぬらす袂の露となりけり

ほのみし山の峰のしらくも

眺望

熊野の海くぢらしほふく波の上に

うかぶみどりや阿波のとは山

帆

いそぐともみえぬ帆かげのたゞ一つ

のこるもさびし夕ぐれの海

獸

くれそむる軒端の山のこずゑより

けふも落ちくるむさびの聲

山家

水こはん麓は遠しいかにせん

わが山の井の秋はぎの花

風渡野村

武州の大宮より岩槻の間を行く事あり。道のかたへに天満宮ありて。旗竿たつる石に風渡野村と彫りつけたり。詩句に似たれば對句あらんとて。片方の石を見るに。猶同じ文字なれば。車夫に尋ねしに。風渡野村といふ處ぞと。答へしもをかし。

おさきへ

家に女の書生あり。毎夜寐る時におさきへおやすみと。句讀なしに言

ふ。これにては主人に先へ寐よといふ意味に聞ければ。おさきへにて息を切るべし。是れ朗讀法の心得なりとて笑ひし事ありしが。翌朝出入の青物賣來りていふを聞けば。こんには八百屋でござい。同じ文法も有るものかなとて。書生も主人も又笑ふ。八百屋不思議なる顔して臺所口に立てり。

モ—リー—

今はむかし。故文部大臣が自身の姓を羅馬字にてモ—リー—と書きしとて。新聞紙にて攻撃せられし事ありしが。此頃青山を通りしに。佛人ジブスケといふ人の墓標に。治部輔としるしたるこそをかしけれ。しやれがきは何れの國にもあるものよ。さるにても墓にはいと珍らし。

掛幕毛

明治五六年の事なりけん。わが故郷の縣廳にて神武天皇の遙拜式あり。士族みな麻上下にて出頭せしに。遙拜の詞を稱ふべしとて。奉書の紙に掛卷毛畏支云々とかきて揭示せしを。人々なにのことも分さがたかりしに。ある人。これは式場に掛けたる幕が恐れおほしとの意ならんと。解釋せし可笑しさは。今に忘れられず。

久の濱

おのが地名の讀方にて困りしは常磐線なりき。水戸より久の濱まで乗らんとしたるに。ヒサノハマカクノハマか。更にわからず。讀み違へて笑はれんもさすがなれば。切符賣る人に此線路の終はりは何處ぞと問ひて。始めてヒサノハマなるを知り得たるをかしさよ。是は仙臺まで未だ續かざる時の事なりき。

通小町

家に下婢あり。釘の折のやうなる平名假にて小使帳つくるが力かぎりなりしに。或時謠本を見て通小町をカヨヒゴマチと見事に讀みたり。何とて去るむつかしき文字が讀めたるぞと問へば。萬御道の通の字と。

小町紅の小町の字となればなりと答ふ。應用の妙とはかゝる事にや。

紫式部

或田舎に行きたりし時。小學校の先生來りてシ、キブが云々と言ふ。シ、キブとは如何なる人ぞと問へば。思ひきや紫式部ならんとは。何がし雜誌に假名つけて有りしを。覚えぬたりしといふなり。百人一首にて學びたるムラサキシキブは珍しからずとて。世人の知らざる稱に誇らんとするは。村夫子のみにも限らじ。右にて書くを面白からずとて。左字さては口書などを珍重するたぐひにこそあれ。

馬よりおりて

紅葉狩の謠に。馬よりおりて沓をぬぎ。道を隔て、山陰の。岩のかけ路を過ぎ給ふといふ文句を。或人讀みて。惟茂いかに貴女に憚るとて。沓を脱ぐには及ぶまじきを。さても無氣力の大将かなと評したり。されども是は女の席を避けんとて。道も無き方を攀ち登るが爲めに。馬を捨て素足になりたるのみ。粗漏なる批評家は。しばしく斯かる言をいふ。

世泰親王

吉野の如意輪堂に詣でし時をかしき事あり。ある書生も來りあひしが。世泰親王の御墓を案内者教へてトキヤス親王なりといふ。案内者いやトキヤスなり。書生いやセイタイなり。と争ひたり。世の生學者にて實地に疎く。また實地のみに通じて學問なきもの、争には此類多し。

首夏

わかば山つゆふみこぼす鶯の

ゆくへかくれて夏は來にけり

卯花

谷川やふめばゆらめく橋の上に

こぼれてにはふ岸の卯の花」
卯の花の雪もこぼれて山里は

夕ぐれさむし訪ふ人もがな

時鳥

家入はながめやをらん時鳥

夕山どえの雲になくなり」

なか／＼に鳴かぬもよしやほどゝぎす

歌よむ人は皆ねたる夜に

旅の歌の中に

若葉山あさかせすし旅人は

米のあたひも何かおもはん」

里人が簀きてかへる小山田に

夕日うかびて雨はれんとす」

夏山の木の芽つむ子が帯のいろを

まじるつゝじの花かどぞ見し」

ほどゝぎす待つらん里の家どとに

夏の木の芽をつみてはしたり」

少女子がをよびのたけにのびにけり

水をはなれし小田の苗代」

夏の来て藤さく谷の岩かけに

おりて水のも鳥もありけり」

藤 波

英照皇太后の御事ありける年青山を過ぎて。

むらさきの雲井のそらに

仰ぎ見し花の藤波

こぼれても草にぞにはふ

くだけても四方にぞかをる

見し夢のなごりを訪へば

青山の大宮どころ

響くれて物戀しげに

鶯のなく

わかみごり

誰が琴の調べかまじる

わか緑おほふ木陰を

はしりくる水もなつかし

花つみにあひし少女の

面影は今もみゆるを

まぼろしに今も浮ぶを

春かへり梢しげりて

人どほく里へたゝりぬ

あはれその吹きくる風に

言とはん夢とすぎにし

春のゆくへを

若葉

月白し露白し

此夜半を何にたとへん

月青し露青し

此夜半を何にたとへん

すゞしげに茂る若葉の

花よりも勝れるみどり

裁ちぬはぬ神の袂か

人ならぬ少女の袖か

風青く空青し

此夜はを何にたとへん

一年の花にもまさる

木々の若葉を

淡路少女

ともし火の明石の浦に

たゞ向ふ淡路島山

舟子にも此身をなして

明暮にゆきかよはんと

夢のまも戀ひしは昔

ふく風に何ことづけん

飛ぶ鳥も何うらやまん

わが母は今は無き人

霞立つあの山もとの

松影に獨り物いはぬ

石をのこして

播 磨 灘

旅衣はりまの海の

朝なぎに我こぎくれば

あはと見し淡路の嶋は

舟ばたの右にぞ立てる

藻鹽やく須磨の家居は

松原のひまにぞ見ゆる

波の上に木の葉うかべて

亂れいづる千舟もふね

親と子と櫓を押しつれて

近くゆく様もおもしろ

うれしきは今日の朝和あさなき

うすがすむ波路の末に

少女子の眉引まゆびきなして

たてる山いづこと問へば

舟人の答へ語らく

あれこそは蜜柑のいづる

紀路の遠山

戀

あけぼのは置く露さく花

たがために心なやます

夕ぐれは松風山風

たがために心なやます

きのふまでかゝる心は

夢にだに知らざりしものを

世の人の戀とはこれか

空にあらば星と生れて

其人の夕べの窓を

今日も訪ひ明日も訪はまし

野邊にあらば百合と生れて

其人の手につまれつゝ

明暮の友とやならん

たがための天つ使ぞ

雲まより翼ひろげて

我をまねくは

花

西洋人は日本人に勝りて花を好むといふものあり。されども。かれ花を瓶にさして珍重すれば。われも活けて賞翫し。かれ花を人におくる事あれば。われも同じく歌など添へて贈物とし。かれ花を模様とし

記章として用ふれば。われ又桔梗の紋花の丸などをつけ。かれ死人の柩を花もてかざる事あれば。われ又葬儀の行列を生花造花にて装ふ事あり。たい花賣のかれは美しき少女にして。我はあはれげの老人なるど。花の香をかれは鼻につけてかぎ。我は風のしるべにまかせて味ふとの別はあるべし。兼好もし世にあらば。花のもとにはねちより立ちよりの次に。鼻につけてかぐなどの言葉をや入れんとすらん。

焼餅坂

歌に妹の山とよめるは。脊の山といふがあるにつきて。假りに設けた

る名なりと。古人はいへり。牛込に焼餅坂といふがあるによりて。その左右なるを男坂女坂となづけしも此類か。

軒の笥

軒のとひを直させたるに。大工曰く。是は板葺のころにかけたりしを。瓦をのせて後もそのまゝに用ひ給へる故に。雨のなかれ入るところ狂ひたるなりと。時勢はうつれり。風俗ひとり古のまゝに留まるべからず。

木曾に山あらず

人あり。木曾に旅して此先に山ありやと問へば。いや山は候はず。谷こそ候へと答へたり。木曾人の眼中には。谷のみありて山あらず。

江の島はごこぞ

葉山より海上はるかに望みたる江の島の姿は。常に小兒も心得たり。或日ともなひゆきたるに。今まで見たるとはいはりたれば。江の島はごこぞと問ふ。こゝよくといへど。遂に解する能はざりしこそをかしけれ。世に遠くに見ると近くに見るとの。いたく異なるは。江の島のみにはあらず。

望 海 樓

江の島の岩本に。望海樓の額あり。山にて海を望むところならば面白かるべきを。海邊にては。萩の枝に此は萩の花なりといふ札つけたる心地こそすれど。ある人のいひし。

旅 店 の 評

家こぞりて江の島にあそびし時。いつこの旅店が殊に込み合ふならんなど評しあひしに。一人は曰へり。臺處のもやうをのどき見てこそ知るべけれ。賑はしげなる店先のいらっしやいは。あてにならずと。

通 學 者

わが十二三の頃。學校に通ふには。幼きは本の包を脇にかいこみ。長じたるは懷にしてゆきぬ。一二冊にすぎざればなり。二十前後洋學校に出づる時は。手のひらにのせ乳のあたりに捧ぐる事となりぬ。四五冊の洋書石盤。ずるぶん重ければなり。此頃中小學校にゆく生徒をみれば。肩より釣り提ぐるが多し。カバンといふ便利よきものゝできたればなり。名づけて通學出立の三沿革とやいはまし。

歌よみの詩

女生徒の歸省して家にかへると。島田にゆひたがるは何故ぞと。髪ゆひの問ひしに。藝妓の束髪にして見たがるに同じと。新聞記者の答へし事。何かにて此頃よみたり。歌よみの詩。詩人の歌。とかく我道ならぬ事をして見たがるは。是も無邪氣なる少女藝妓のたぐひか。

螢

ともし火を吹きけす窓の夜嵐に

一の螢のながれ來にけり

雨晴

うれしくも散りゆく雲の見ゆるかな

あすは門田の田うゑはじめん

夏人事

けふも又松ばらごしに響きくる

田うゑの歌のおもしろさかな

紫陽花

あぢさゐは浮世のさまに似たるかな

さのふの緑けふの紫

世のさまにくらべてぞ見るあぢさゐの

日ごとにかはる花のいろかを

餅の用意

葵の花も大かた散りぬ。西の山際わからみたるは。梅雨の晴るゝにや
あらん。姥よ餅の用意せよ。出でゝ賣るべき祭の市はあすぞ。

胡瓜の苗

胡瓜の苗は。若葉すゞしけに生ひたちぬ。いつか垣に這ひのぼるら
んと。待つより外のたのしみなし。

みどり子の手をさしのばすまして。やうく竹にも這ひつきぬ。い
つか小指の如き瓜をならせて見んと。更に望は高まりたり。子をもの
親の心よ。まさるとも劣らじ。

梅雨の後

五月雨晴れたり。日影まちえし草葉の色。梢の色。植ゑそろへたる早
苗のいろ。何ものか嬉しげならざらん。笑顔ぬれたる百合の花には。
白色の蝶来りて落梅の如くひらり〜と飛ぶ。

菅笠かぶりたる女の二三人ならび居るは。あまれる水に流れんとする
苗の根などさしとむるにやあらん。今二三日も待ちなんには。この日
和にもあふべかりしを。袂も裾もしとゝにぬらして。田植しつらん事
よ。藁屋の軒には。簑笠はしかけたるも見ゆ。麥やらん米やらん。蒔

に入れたるをひろげ居るなど。畫の如し。

玉蜀黍の地を離るゝ事四五寸。莖を薄紅にして。そよふく風にゆらるゝも涼しげなり。これに境せられたるかなたの畑には。瑠璃の玉を見せたる茄子あり。勢よくこなたに生ひ立ちたるは。唐辛子なるべし。秋風の身にしむ夕。もゆる如き紅の色を。見るべき望もなきにあらず。水のおもては波しづかにして。魚も躍らず。鳥も浮ばず。たけたかき少女の心地して。友まちはほに咲きいでたるは。杜若なり。影を倒にせる拓榴の花。火よりも赤し。

日はやう／＼天に中して。人間を焼かんとす。蟬の聲松の上に聞えてきのふの夕の静なるに似ず。午後に至らば。雨を戀ひんとする人もあるべし。雨もとよりにくからず。晴の日のこゝちよさ。またいふべく

もわらず。名残の露水晶の如く。日の光り黄金に似たり。

練兵場の隅

しげる夏草折りしきて。練兵場の一隅に居並ぶ兵士。二三十人あり。鐵砲ならべつゝ。敵ねらふ様學ぶ勇ましさよ。苜蓿の花は雪の如く。膝を埋めて咲けり。往來の少女は。日傘かたむけつゝながめぬたり。一たび畫師の筆に入らば。泰平の頰にも代へて見るべし。さるにてもあの寺山に残れる人の。冷かなる夢はいかに。飛びくる矢玉の聲は。嵐と共に夜な／＼墓の松をぞめぐる。

上加茂

落葉かく少女のかげも神さびて

夕日さむけき上がもの森

嵐山

ちりとまる小笹の雪もあらし山

春みし花のおもかげにして

大井川

花に寝てきかましものを大井川

ぬせきをこゆる夜あらしの聲

母はまた語らず

妹は土間に蕙敷きて繭を煮れば。かたはらにありて姉は餘念なく糸を引く。田家六月の業こそいそがはしげなれ。此糸もて織られたる衣。誰が肩にかゝりて。此村の祭に花をかざらんとすらん。母いまだ語らず。蝶は友おひかはしつゝ。庭の撫子をめぐる。

麥 搗 歌

望さく野邊の細道

春風にふきおくられて

此村に來つるはきのふ

花嫁と呼びはやされて

此家に入りしはきのふ

秋も過ぎ春また暮れて

麥搗歌いまだにきはふ

いざ我も交じりて搗かん

いざ我も共に歌はん

歌へども搗げども悲し

とる杵を劍にかへて

出でゆきし夫おもへば

二年の残る月日を

糸車くりかへしつゝ

いかに數へむ

夕山

わが宿に今宵はゆきて

旅衣露はらはんと

いそぎつゝ越ゆる夕山

あの松の木の間立たば

なつかしき家も見えんと

いさみゆく麓の方に

早苗とる歌こそひいけ

吾妹子の聲こそまじれ

里もとゝるに

撫子

少女子が朝ふむ庭に

笑の眉まゆひらく撫子

白露を涙と受けて

立てる色たれにか似たる

ちからなき少女のゆびに

その涙うちはらはせて

起きかへり上ぐる面わの

その匂たれにか似たる

去りがてに花のあたりを

飛ぶ蝶よいづれに花の

品定めする

人まつほど

村雨のはれゆく空に

ほととぎす一聲なきつ

橘の花ちるかたに

四つ五つ螢ともしぬ

心ゆく夜にもあるかな

契りおきし人待つほどの

つれづれをなぐさめがてら

苔清水むすびて來んど

庵の外の畔みちづたひ

わがゆけば松の葉ごしに

月もほろりぬ

宿おりせし家

或る家の二階に鳥籠あり。新しき衣着よそひたる一人の少女は。うれしげにのぼりきて。籠をのぞきつゝ指さし入れなぞす。あたかも別れしはらからなぞに逢へるやうなり。

おもへば今日は盆の十六日。主家より稀の暇とりて。やどおりせし家ならん。鳥こゝろあり。少女の健康を祝しつゝ。小さき口を開きては歌ふ。

橋の上

橋の上。風すし。欄干に脊中おしつゝ詩を口ずさむもあり。水に浮ぶ月を詠むるもあり。話の聲をのせたる小舟は。川上より下り来る。とりなほす竿のしづくは。螢と見えつゝ。黄金いろに碎け散る。

井の頭

雨の降る日。遠足に出かけたる事あり。いづこをあてともなかりしが。遂に井の頭の辨天にと。方向は定まりぬ。伴なふものは書生二人。かはるゝ握飯の小包を提げつゝ。濡鼠の如くになりて。野を過ぎ田を過ぎ。又村を過ぐ。よそめには狂人と見るらん。みづからの愉快はいふ

べからず。木の下露は霞の如く玉の如く。傘にふれてはしげくちり來て。襟に入り懐につたふ。

中野の町を経て堀の内に出で。やゝゆきて大宮の八幡宮にまうづ。遠く見入れたる廣前のさまも神さびたるに。雨に打たれては靡き伏す撫子。此世のにはひならず。

井の頭は思の外遠くして。至りつきたるは一時前なりき。五里ばかりの道なりとぞ。辨天堂は池の中島に獨り立ちて。濁世のさまも知らずがほなり。雨くらくけむりわたれる水の上には。三つ四つ鳥の浮べるも静にて。夏ふかき岸の柳の。波を掃ふさまなるこそ面白けれ。

拜殿のかたへに上りて。握飯を片手にしつゝながめわたせば。遠近の森うすくこく霞みて。水のおもてに穴をあけ輪をゑがきゆく雨の足。

晴れたるよりも中々興ふかし。あはれぬれずは。此樂しさも知らざらましを。

わが三人の歌ならでは。山彦かへすものもなきに。あやしや靴の音するはとて。見かへれば。一人の巡査は石橋をわたり來れり。曰く諸君は遠足ですかと。知りぬ此あたりを巡廻する道にて。雨のつよさに。暫しの足をやすめんとして來れるを。かれは告ぐるに。此地の紅葉の他にまされるを以てす。霧の深さが故なるべしといへり。

おのれは常に東京のもみぢの西京に及ばぬをなげきゐたるが。今此言を聞きて。更に望をおこさるるをえず。みわぐる梢は大かた楓なるべし。あはれ今日の雨よ。秋の時雨ならましかば。

青田

春風に吹き青まされて。水の上に一寸のびたる苗代は。いつしか早苗となりて。千町田すゞしく植ゑわたされたり。おのれ或る學校にゆく道にて。その榮ゆくさま見るを。何よりの樂しみとす。今や七月も半にて生徒は試験の時を迎へぬ。早苗はすべて青田になりて。秋の望を半は見せたり。

七夕

此暮はいかなる暮ぞ

織る機の踏木をわたし
久方の天の河原に

玉くしげ二つの星の

こひくへ逢ふ夜は今宵

少女子は琴かきならし

風流男は歌よみあそび

手向すといふ夜はこよひ

いざ子供水くみいれよ

星合の影を盥に

うつしてや見

暮待つ宿

うすずみの夕空すゞし

風ならで訪ふ人は唯ぞ

とぶ螢ゆくへいづこと

あふぎ見る少女のまみの

おもかげにかゝやさそむる

天つ星三つ四つ二つ

ちりのこる雲間くくに

見えかくれ添ひゆく光

白玉か花か夜露か

七夕の暮まつ宿の

垣ほには萩はこるびて

琴の音ぞする

晝顔

朝顔こそあしたに咲きて

朝日にしほむといへ

夕顔こそ夕べに咲きて

夕露にひらくといへ

その朝の日をも恐れず

その暮の露もたのます

あらかねの土さへ裂くる

夏の日のあつき日ざかり

さきはこる晝顔あはれ

朝顔のにはひもたねぞ

夕顔の光もたねぞ

おのが身を葉陰におきて

はこらはぬ花のこゝろよ

かぎりなき花のすがたよ

此岡に茅刈るをのこ

心なく鎌をな入れそ

花のあたりに

石堀る人

山岸の石ほりだすと

工等たくみらのはたらく見れば

一人ひとりはかたへの岩に

足かけて槌うちふるひ

一人は上なる松に

身をよせてゆるがしむたり

踏みはづし巖と共に

八千尋の谷に落ちなば

身も碎け命たえんを

わやふしと思ひもよらず

憂きわざと厭ひもはてず

猿のごと傳ひ走りて

安々とふるまふさまよ

よそ目には苦しと見つゝ

手に汗を握るものとも

その身には知らじ思はじ

見る人と見らるゝ人と

かくまでに替はれる物か

世の中のこと

貧兒

十二叢に貧兒あり。池におよぐまねして。客の鯉にあたへし麩をあつめもて行く。世もかくまでになれるはと。心ぼそし。

櫃の木

櫃の木を伐らせたるに。其陰におほはれし楓の青葉は。ことごとく枯れしぼみぬ。いかに日の光を防ぎたるかを思ふべし。くらべられてあはれなるは。親に捨てられし孤子こそあれ。

貧女

門に立ち引くや少女が琴の緒の

ほそくもわたる世をいかにせん

千代に八千代に

おのれ老松を謠ふとて。千代に八千代にさゝれ石のと發聲せしを。幼稚園に通ふ子供の聞きゐて。おとツさまは唱歌を謠にしてうたひ給へりとして大に笑ふ。謠曲八島の文句を琴唄より取れりとして。或教科書に引用せしも此類か。

盆の草市みあるさける夜

市にうる花もつゆけし亡き靈の

かよふ空よりおつる涙か

夏月

露は皆ほたるとなりて更くる夜の

月は野邊こそすゞしかりけれ

夕顔

中々によそめなつかし賤がやの

よろばふ門の夕がほの花

晝顔

何となきむぐらの中に晝がほの

花わらはれて夏ふけにけり

夏井

月ながら結ぶもすゞし行きくれて

やどかる寺のいさらぬの水

雨を喜ぶ

まちわびし賤がこゝろや洗ふらん

笥にあまる夕だちの雨

秋ちかし

瀧みんとわけ入る夏の山かげに

一むらすゝき穂にいでにけり

麥藁笠

明治三十年八月

葉山―曲輪村―神武寺―鎌倉―江島

一家七人。今歳も例の麥藁笠をかづきつれて。相模の海の潮をわびん

とす。されども去年までは鎌倉に人の家を借り。今年は葉山に已が廬を結びたれば。境界おのづから異なり。かれも忘れがたくこれも又樂しかざらんや。

廬は逗子の停車場を去ること一里。森戸神社の松林を前に扣へたる。平山の半腹にあり。遙に望めば。牛の形したる江の嶋。呼へば應ふる如く。扇を倒にせる富士の高嶺は。朝日に夕日に色をかへて。其左に立てり。こなたには鎌倉の浦々より。七里が濱腰越のあたりまで。松緑に波白くながめ渡され。磯近くは。頼朝の遊びしといふ菜嶋の岩に居る鳥までも。手に取る如し。

東京の夏を捨て、此に來りしは。八月二日なりしが。やうく二箇月前に工を埃へたる新室なれば。何事もまだ整ひてあらず。終日西へ東へ奔

走して。土突を握る。釜を掛け。米を買ひ。井の水もらふ約束を爲すなど。いそがはしきうちに日は傾きぬ。今は又夕風に吹かれつゝ。椽側に寐ころふ外には。用もなし。

暮るれば。遠近に燈細く見えて。波の音の親しみ來るも涼し。小兒は螢か星かなどいひつゝ。二つ三つと赤き光を數へゆく。

三日は朝早く起きて。廬のあたりの草深き山路を。露ふみあるく。いとすゞし。殊に多く見いださるゝは螢草にて。岸の姫百合。畔の野菊と共に。自然の美をたゝかはせつゝ。夢はや覺めたり。子供は喜ひ駆けまはりて。床の花瓶には。是よからん彼よからんと。父呼びとめつゝ品定めす。手を切るなよ。花のあたりには茅多きぞ。

濱に出づれば。貝ひろふ人。潮あびる人。書物かゝへつゝ散歩する人。

犬を呼びつゝ岩に休む人。こゝにもかしこにも。あまたつとひて。脈はしきこと。都の朝市にも劣らず。引きてはかへる波のあとには。薄紅の貝。朝日にかゝやきて。籠を片手に。走りくる少女の髪は。松の下風にそよ〜と動く。

四日も朝とく。三歳なる小兒に起されて。之を肩にしつゝ。近きわたりの光徳寺に遊ぶ。荒れはてたる鐘樓。苔むしたる地藏。ものごとくに身にしむ古寺なり。木の間より見わたさるゝけしきも面白きに。日ぐらし絶えず。遠近の梢に鳴き出でたり。

今日は朝と夕と二たび潮あみす。三歳の小兒は殊にめづらしがりて。姉に母に手を引かれつゝ。水を蹴立てゝ飛びまはるさま。いとうれしげなり。その姉は十二と八つ。やうやく二人して築き上げたる砂の山

を。忽ち波に奪はれて。あれよくと叫ぶ。いかに學校にて習ひし事を波に奪はるゝ不覺はなきか。

かへる道にて見渡す海づら。今ぞ入日を浮べて。花よりも紅葉よりも美し。紅もゆる如き波に映じて。薄く淡く面影のこせる富士のさまなど。筆もて更に形容すべくもあらず。

黄昏酔うて出づれば。半月かなたの松にかゝれり。興に乗じて森戸神社の森を過ぎ。磯邊の岩に腰うちかけて。月の光を碎きつゝ、寄せ返る波を見る。森の中には。波をや喝菜の聲と聞くらん。獨り大聲あげて。演説の稽古する人あり。又詩吟の聲もいづくにか山彦かへして。涼しげに聞ゆ。

月すゞし相模の海の波の上に

舟かけ黒く見えかくれして

明くれば磯に下りて波を友とし。暮るれば山に歸りて風に枕する事もはや一週間にあまりぬ。いでや今日は今少し遠く歩きて。名所見めぐらんは如何といへば。妻は曾て遊びし事を思ひ出で。長者園のあたりまでも行かばやといふ。九日の午後にはかに思ひ起して。曲輪村子産石といふを見にゆく事に定めたり。

森戸の松をあとにして。岩に碎け散る波を見つゝ。北白川宮の御別邸。伊太利公使の別荘など打ち過ぎ。濱に出でゝは波に追はれ。村を縫ひては草を踏みつゝ。興じ行くとはすれど。大人も子供も。滴る汗は背をも通しぬ。況んや小兒を負ひ。赤兒を抱きたる人に於てをや。暫く風を入れんとて。道のかたへの饅頭屋に休みたるは。二時頃にやありけん。

見れば前なる小高き岡の上に鳥居ありて。大神宮の社立たせり。石壇を登りて拜殿に至れば。村のものなるべし。ぢゝば、四五人も。神前狭しと。大の字になり『く』の字になりて。午睡たけなはなり。松高く蟬の音して。木蔭の撫子ときく風に靡く。

長者園のあたりの海は遠淺にて。潮あびに出でたる人渚を半ば埋めたり。大崩にかゝれば。海のけしき更にかはりて面白きに。危き岸に咲き出でたる百合の花の。火よりも赤さが。三つ四つ招きがほに見ゆるこそ。いとねたけれ。

いたづらに見てや過ぎなんおよびなき

岸のひたひの姫百合の花

からうじて人家ある處に來りぬ。少し休まんとて。左の方に朱の鳥居

を見つけて高き石段を登るに。社は草葺にていと古く。半ば朽ちたる拜殿にあがりて。おのゝ拜をなし。行列立てたる蟻うち拂ひて。腰を掛け顔の汗を拭ふもあり。麥藁笠もて扇ぐもあり。兎角するほどに。下里の子ども三四人。われらが來れるを見て。ものめづらしきにや。下よりのぼり來てながめられたれば。此神様は何様にやと問ひたるに。中に年上の十二三なる女の子が。お宮様よと答へたり。さても住吉ならん。いや鳥居赤ければ稻荷ならん。難船の繪馬あれば金毘羅ならんなど。口々にいへば。何くにか祭神をしたる處あらんとて。正殿の格子を見入るれど。『神燈』『寶前』『神祇』など書きたる提灯の外には。何も見えざりしが。遂に振鈴の紐のうしろに。熊野神社といふ札の。雨に風にさらされたるを見出でたるにて。論も止みぬ。神木ふかく茂りあ

ひて海は見えぬぞ。磯ぶりの響き地震の如くに聞えて。清き風の吹き來るこそ。立ち去りがたれけれ。

さて子産石のある處はと。彼の娘に問へば。此下の濱なれど。今は潮の下にて見られずといふ。されど其うみたる小石は。娘の家に持ち居るといへば。さらばそれ見んとて。伴はれゆくに。母にやあらん。椽の下より七つ八つ持ち出でたり。親指の先はどなるもあり。小指ほどのもあり。又團炭はどなるもありて。何れも色白く丸し。

そこに荷をおろして酒のみ居たる男のありしが。説き出でけらく。親石は濱にありて。潮干の時ならば見ゆるものを。惜しき時にもおはしたるかな。今こゝにある如きは極めて小さきものにて。いくつも其あたり落ちたるを。拾ひあつめたるものなり。大きなは一かへは

どもありて。既に大宮様の行啓あらせられし時。御前にて掘りて奉りしは。八人がゝりの大石なりき。今も御用邸の御庭にありとぞ承る。など語りぬ。日もやうく傾きたれば。二つ三つ小さきを求めて。再びもとの道を歸るさに向ふ。

一色村にて。風呂屋を見つけて入浴し。こゝちよく汗を流して。濱邊づたひに歸り來れば。日暮れて月白し。江の島うすくかすみて。波の音は我爲の音楽に似たり。此時のこゝろ。此時のたのしみ。我等の外に誰かは得まし。誰かは知らまし。

月に送られて廬に歸れば。庵の老婆は。榮螺を壺焼にして膳に並べたり。家内六人箸を並べて夕飯を終へ。蚊屋を約らせて横になれば。隣の枕には。鼾の聲はや高く響く。

沼間村の神武寺といふは。此地に來りて遊ぶ人の多く行くところなれば。我も見ておかんとて。例の家皆たづさへていづ。十一日の十時頃なりけり。空くもりて涼しげなれば。思ひ起しつるに。日蔭の茶屋あたりより。雲散りて暑さ刺すが如し。

妻は二つなる小兒を抱き。下婢は三つなる子供を背負ふ事なれば。あまりの苦しげさに。中止せんとの評議も度々おこりしが。笠摺まで來りしに。濱に片かけて海に臨める涼しき茶屋あり。暫く立ちよりて喉をうるほし。携へたるむすびの包を開きなどす。老婆あり。ねんごろにつめたき水を盥に入れて。顔あらへなぞすゝむるにぞ。皆々少し息吹きかへしたる心地せられし。

かくて。一たびはおのれ一人こゝより行かんとまで。定まりしが。折

角おもひたちたるものをと。妻も奮發し。下婢も勇めば。遂に決心して十一時半こゝを出づ。日はますゝ炎威を逞して中天にあり。

田越橋より逗子ステーションの道に別れて。葦の茂りたる川に沿ひゆく。時々木蔭ありて。思ひしほどにも苦しからず。

家に居て晝寢の枕とる人は

知らじなかゝる木蔭ありとは

道を問ひく。後々は焼かれ焦れて。横須賀行の鐵道線路を横ざり。

山の片陰に山門を見つけたる時の嬉しさ。風こゝちよく來りて。顔の汗を吹き散らすこと村雨の如し。子を負うて立つ人。門の柱によりて立つ人。人相顧みて今までの暑さを言ふ。されど前途なほ遠し。是より坂路を登らざるべからず。

登りはわづかならんと思ひしに。ゆけどもゆけども寺の屋根も見えず。松陰に休みて顔を拭き。岩角に腰かけては帽子もて扇ぎ。あへぎつゝ、うめきつゝ、ゆくほどに。話も出でず。子供が唱歌の聲も響かず。さはいへ秋草の花など。道を挟みて咲き出でたるは。いさゝか心を慰むるに似たり。姉なる少女は晝顔を摘み。妹なるは合歡の花を折りもて行く。

寺見えたりと先なる下婢は呼ぶ。我等すでに焦熱地獄にあり。いかでか彌陀來迎の響を聞くの思なからん。後れたるも走り先だちつゝ、勇み立てり。老樹枝を交へたる間より。岩切り割りたる自然の山門は。見出だされたり。其兩壁には岩烟草といふ草一面に生ひ茂りて。おのづから唐草の紋を。畫がきわたせるも涼し。葉山の我家よりは。一里半

もあるべきか。

寺は天台宗にして。神龜元年行基菩薩の開基なりといふ。境内すべて岩山にて圍まれ。見あぐるばかりの大伽藍は。其中央に立てり。僧に案内して。本堂の椽先に腰うちかけしが。先づ音に聞きたる冷水こそとて。盥を借りて井戸に馳せゆくは。顔さへ足さへ洗はんとするなり。その清さつめたさ。今までにはじめてなりなど。叫ぶ聲さへ聞ゆ。僧は庭に掃除してぬけるが。殊に衣ひきかけて茶盆もち來り。もと叡山に居たりして。その話などくづしいでたり。三つなる小兒は。此間に廣き廊下を我ものがほに走り歩き。七つなる少女は。佛の數をかぞへなとす。浮世の外の風たえず來りて。薄紅なる佛前の曼陀羅を吹き。又庭の蓮の荅を動かす。

本堂の右なる石段をのぼれば。朱塗の樓門ありて。上に藥師堂あり。狐格子より見入るれば。鏡の影さら〜として。我影のうつるも物凄き心地す。これに並びて山王の御社もあり。あたり人なく。唯ひぐらしの山彦を聞くのみ。かくてなほ岩屋見んとて。山の上へ〜とのぼれば。道細くなりて。薄笹など生ひ伏したり。ゆけどもゆけども岩屋めきたる處なし。僧は草刈男の登りてあれば。問へといひたれど。その男さへいまだ見えぬ。眼鏡をはづしては汗をふき〜休むに。何くよりか鶯二聲さこえ來にけり。

谷水の音よりもまづうれしきは

秋まつ山のうぐひすの聲

草の上に半纏の横たはれるは。人の居るなるべし。間もなく丈にもあまる草の奥にて。鎌の音も響き出でたり。さて岩屋はと路を問へば。あたかもよし。此男のうしろを。木につたひ落葉ふみわけ。危き岩路下りゆく處なりけり。山に片そひて。軒の如く突き出でたる岩の下に。疊四枚も敷くべき岩の床あり。こゝに觀音の石像と。石の祠めきたるもの並び立ちたるが。共に雨に打たれ風に吹かれて。形もさだかならず。見あぐれば。天井となれる處は。岩のさま凸凹に屈起して。龍の如く渦の如く。いと奇なり。白苔のひまより見れば。前は底深き谷にて。梢のかさなり〜低く見ゆるも興あるに。遠くは廣やかなる青田の末に田家の立てるなど。木の間より見やられたり。此ところ殊に日ぐらし多く。此木に

鳴けば。直に彼木に答へて鳴く。

顔の汗を両手に受けつゝ、本堂に歸れば。湯をさしかへてもてなざる、茶の味。たれかは知らん。八百善の料理よりも精養軒の洋食よりも。すぐれたるものならんとは。

すゞみつくして時計を見れば。三時も過ぎぬ。いざとて禮を述べて寺を出づれば。僧は送りをはりて庫裡にかへりぬ。我一行に従ひて下るは山風のみ。松の聲のみ。

夕日は雲にかくれて歸さはいとすゞし。されど疲れし足は碓の如く。少女やいかにと思ひやらるゝに。泣きもせずつぶやきもせず。父より母より先に。すたゝと行く。おもへば暑き日によしなき遠道させたることよと。いとあはれなり。

來つる時に休みたる鑑留の家にて。一体みす。海には入口の名残なほ消えのこりて。紅紛を流したるやうにかゝやくも美しく。舟には黒き人影の漕ぎゆくさへ。羨まし。

全く暮れてのち廬に歸れば。留守もる婆々は。夕飯の用意してすゝめたり。足洗ふすなはち親子主従膝をまじへて。神のめぐみの箸を取る。なほ物語は寺山の上にあり。日ぐらしの聲。岩苔の色。今夜幾人の夢にか入るらん。

初更すぎて雨ふり出でぬ。喇叭の近く響くは。水泳に來り居る近衛兵士の。夜を侵して金澤に越ゆるなりと云ふ。月出でよかし。雨晴れよかし。

十八日は。東京より來れる友を携へて。江の島まで遠足せんとす。空

よく晴れたる海の上に。富士ひとり涼しき影を見せたり。

逗子停車場にては。發車の時間なほ五十分をあませり。時は十二時を過ぎたれば。待つ間に食事せんとて。鮎飯屋に入る。一昨々年。同行六人こゝにて午飯せんとせしに。其家なくしてあちこち頼みあるき。特に飯を炊かせ豆腐を買はせて。腹を満たしつる事ありしを。思へば逗子も。年一年と開けゆくかな。

鎌倉にては先づ鶴岡の蓮を見て。長谷の大佛より観音に遊ぶ。こゝより望めば。波打ち寄せては歸る由井が濱の景色。また更にいふべからず。松緑に砂白きところ。人か蟻か。今しも盛に波に出で入りつゝ。戯れ居るも見ゆ。折しも石段の上を上り來れる西洋婦人。帽に葡萄の實を戴きたるもあり。百合の花を飾りたるもあり。年やゝたけたるは。

黒き羽根又は紗のきれをつけなぞ。さまざまの装したるが。木陰に集まり居たる里の子供を打ちながめつゝ。佛前に立ちて目禮せり。あはれ寺守る僧の心は。日に俗になれるが多きと聞くに。寺を尋ぬる洋客の心のみ。やうく雅にうつりゆくも奇ならずやと。友はつぶやく。然り今日來し道の古寺に。和尚みづから寫真器械を庭に持ち出で。日に照らされつゝ。本尊うつしむるもありけるぞや。知らず涙を流して今昔の感をなす人は。何くにかある。

うしほあむ人も訪ひ來て鎌倉は

夏こそ寺のいのちなりけれ

權五郎の社を過ぎ。星月夜の井を右に見て。極樂寺の切通にかゝる暑さは暑し。玉なす汗はばちちと落ちて。少しの山路も中々のくるし

みなり。されど此くるしみありてこそ。未來の望はあれ。稻村崎を左にして七里が濱に出づれば。汗は何くにか吹き去られて。波面白く巻き來りては足を洗ふ。

片瀬の沙山うちこえて。波打際を興じゆくに。風にはかに來りて。帽子を奪はんとす。あなやとおさふる隙に乗じて。先づ眼鏡をこそ奪ひたれ。隠したるもの波か沙か。尋ぬれども見えす。悔ゆれども歸らず。今まで見えし江の島も霧かゝりぬ。面白かりし富士の嶺も雲へだてぬ。波も布にて覆はれたるが如く。山も墨もて塗り消されたるが如し。おのれもとより九度まで進みたる近眼なれば。眼鏡なくては人も景色もさだかならず。蟹に捨てられし海月の境界。今日の今夕を如何にせん。

江の島に渡りて貝細工の店を見れども。いづれ簪やらん貝屏風やらん。たゞ霞める山の花紅葉。遠目にながむる心地して。物足たらぬことおびたし。されども馴れたる土地なれば。友を案内して宮めぐりし。黄昏山を下る。

鳥居すぎて橋にかゝれば。潮十分に満ちて。心地よく袂を拂ひ。楽しさかぎりなし。見給へ富士こそ紫に染められたれど。友は叫べど。おのが目には。薄黒き『へ』の字なりに立ちたりと外は見えず。此あたりこそ我目と別れし處よと思へば。恨むするべくもあらず。

何事もさだめかねたる世にもなほ

はなれぬ友と頼みしものを

あの波の底にや今は眠るらん

風うらめしき波のうへかな

うちつれて今朝わがやとを出でし時

別れてかへるものと知りきや

片瀬より車にて藤澤まで行く。夕日の名残の雲は。こゝかして薄紅に
ほひわたりて。美しさいはんかたなし。歌なからずやといへば。あ
となる車より。鳥の飛びゆくこそ面白けれど叫ぶ。あなかなし。それ
までは見る能はざるよ。

藤澤より大船まで同じ汽車にて。それより友は東京にゆき。おのれは
別れて逗子に向ふ。今までは友こそ蟹の目となりて。海月の我身を助
けたれ。今よりは鈍き目をもて。何ものをも見ねばならず。

汽車に入りくるは。帽子かぶりたる男と見しに。近くすわれば。島田

ゆひたる娘なるこそをかしけれ。窓の外に迎へ送るは。木か家か山か
畑か。たゞ黒き影の間々に。紅なる燈と銀色の星のみ打ちかゞやく。

逗子よりあるきて。養神亭の火影を。河のかなたに打ち見つゝ行くに。
何くやらん琴の音するかと思へば。又一方には三味線も聞え。こなたの
二階にはハンドオルガンの打ち響くなど。そよめく人影は分明ならね
ど。聲はよく聞き取らるゝこそ。せめてもの慰なれ。しばらく行けば。
それも又耳と別れぬる。いとさびし。

琴の音のきこえし宿を見かへれば

岩こす波の音ばかりして

明暮のながらにながめおろさるべき。森戸神社を隔てゝ立てる一村の
松林あり。これを我山里の遠隣。秋田子爵の別業なる。子爵此頃東京

よりおはしぬとの事なれば。廿三日はじめて訪ひまゐらせたり。庭には櫻あり又かの松ありて。松には青鳶の心のまゝに這ひかゝるも。心地よげなり。軒端には藤棚ひまなく設け渡して。花の時おもひやらるゝ陰なるに。今は小暗きまで茂り榮えて。西日を覆ふなど。あるじの用意たゞならず。

眺望は江の島を真中にて。右には腰越のかなたに大山そびえ。それより左へ〜と目を注げば。足柄箱根雲の絶間に見やらるゝなど。すべて我廬に似たるながめも。處かはれば又めづらし。

かくて日影もやうやう薄くなりたれば。こちへとあるじのいはるゝに。庭下駄はきて伴なはれゆけば。岸に臨める小亭に來りぬ。倚子あり寢臺あり床几もありて。中央には二つの丸テーブルを据ゑる。其一のには

碁盤の目を盛り。今一つには將碁の目を盛りてあり。あはれ此心地よき晚風に吹かれつゝ。主客黑白を闘はす時の樂しみはいかに。おのれも一勝負こゝろむべき腕あらば。華族なりとて負かせでは置くまじきに。

姫君は手づから酒肴運び來りて勸め給ふ。子爵は頻りに。其始め此地を手に入るゝ事の困難なりし有様を説き。あの細川侯爵に繼ぎての葉山開闢者なることを語り誇られたり。酔めぐりて後。おのれ御庭の松こそ。我小屋の眺望を妨ぐる恨侍れといへば。それでも君は我山の櫻をたゞ見給ふならずやと。子爵こたへて互に笑ふ。

廿六日は隣村の祭禮にて。村人の踊ありといへば。子供等つれて黄昏より見に行く。社は諏訪明神にて。いと高さ石段の上にあり。神燈よば

ゆく燈しわたして。參詣の群集甘きに付く蟻の如し。

舞臺はやゝ下りたる處にて石段の右手にあり。正面には葎簀一枚かけたるのみにて。樂屋は火影あかるく見透さるれば。黒き顔に白粉塗り居るも。赤裸にて太鼓しめ居るも見ゆ。

はじめはチャンチキの柏子にて唄おこり。女方一人出で、踊りたり。それより百姓出で坊主出でしが。何れも相應に踊りて。間には滑稽もあり。さはりめきたる事もありしが。殊にめづらしかりしは。例の赤裸の男五人六人樂屋に立ちて。地の唄をうたひ居る様。あたかも影畫の心地して。舞臺のうしろなる簾より見えたること是なり。又白地の浴衣頭からかぶりたる男出で來て。始終踊手に付き添ひ。扇をひろげて扇ぎあらくも。様かはりて可笑し。さても東京の芝居には黒坊を使

ひ。田舎の踊には白ん坊を使ふ事よと。歸る道々語りあひつゝ打ち興じぬ。

麓の方には菓子や何やと賣る店いでゝ。東京山手の縁日に似たるこそ不思議なれ。踊は二つばかり見て歸り來れば。うたふ聲わらふ聲。遠くまで跡に響く。

九月七日にもなりぬ。明日は歸らんとすれば。又もしばく來り遊ぶべき處とはいへど。見るものごとに名残おほし。夜に入れば。月さやかに照して波の聲も琴笛に劣らず。

これをおきて明日や別れん暮るゝ夜の

森戸の松に月ぞ照りたる

おもしろくさえゆく月の光かな

七里が濱もこゝもとにして

八日は雨ふり出で。晴れぬべきけしきも見えず。

月もよく雨も又よし我やどは

江の島近くとはにながめて

森戸神社に詣で。こゝかして逍遙しつゝ歌よむ。

神松の本の間に見えし江の島も

今朝はかくれて秋の雨ふる

わかれをも告げんと思ひし富士の嶺は

雲にかくれぬ雨こゝろなし

庵をどざして立ち出でんとしつゝ。ふりかへりみらるゝも幾たびぞ。

雨いよゝく暗く。後ろの山は雲低し。

あすよりは見ん人もなき我山の

萩の下枝に雨ぞかゝれる

あはれ笠摺の山。逗子の海。きのふは歡びて我を迎へ。けふは悲しみ
て我を送る。車また車。拾ひ集めたる貝を袋に。寶と握れる子もあれ
ば。亂るゝ髪を搔きもあへず。娘の顔の黒くなれるを喜び勇む母もあ
り。さるにても土産はいかに。森戸の沖の魚か。いな。一家七人の健
康のみ。

陣笠

小山田に立てるかゝしの笠みれば

矢玉しのぎし昔をぞおもふ

茶碗

宇治山の夜露うけよと朝がほの

花に似せても誰つくりけむ

羊羹

肝をねり身を切られての後にこそ

人の口にはかゝりそむらめ

麥酒

たふれ伏す骸どはかなさうたかたの

あわと立つ名も唯しばしにて

巻烟草

まさこめし妹がこゝろ末つひに

烟とならんものと知りさや

香水

吾妹子が手ゆひの髪にふりかゝ

雨やいづこの花の下つゆ

肩掛

少女子が肩のかけぎぬ編みかへて

春まつころと早なりにけり

電話

天ならで知らじと人を思ふなよ

壁にも耳のある世おそろし

自転車

ゆけばゆき止まれば止まる小車も

人をたのまぬ世にこそありけれ

靴

吾妹子がとりてはかする革靴の

爪さき寒き冬は來にけり

銅像

ますらをが研く心の赤がねに

のこる夕日の譽れをぞおもふ

輕氣球

水もなき空ゆく舟は海月なす

たいよふ國のおもかげにして

裁判所

利鎌とて心ゆるすな麻を刈り

蓬をのこす人もこそあれ

教育會

秋のいろをいかに染めんと初しぐれ

そらにや雲の道さなむらん

盲墜院

春山の木の芽のみかは口なしも

花さく秋はある世なりけり

お

葉山の夏

明治三十一年八月

あまりの暑さに。

この夏も葉山おろしに吹かれ來ん

咲きなば告げよ庭の秋萩

とて家を出でづるは。七月の日數を三日あましたる朝なりき。葉山の吾廬。ちひさしといへど。一家七人の膝と風とを容るゝに。十分ならずとせんや。庭草掃はせたる村の童は。撫子の花を刈り残して。朝毎の

露見るよすがを留めたり。

一つの土突。二つの手桶。臺所いと貧しけれども。後ろの山より拾ひ
來りて柴折りくふれば。煙は白く軒に靡きて。飯は熟しぬ。

主人が物書く爲めとて。窓の下に据る置かれたる小机は。代りて食卓
の勤をなし。楽しき家庭を一つに集めて。神の惠の箸を取らしむ。八
百善の料理さもあらばあれ。天下の美味何物か。此唐茄子の味噌汁と。
白瓜の鹽漬とに及ぶべき。飽きて唱歌する子もあれば。海をしの富士
に見入りて。箸の進みを忘るゝ父もあり。

涼風に枕すれば。相摸灘は寝ながらにして望むべし。波路のあなたに
左なるは富士。右なるは江の島。七里が濱は。遠眼鏡あらば。白衣に

團扇かざしつゝ行きかゝる旅人も。數へらるべく。大山は江の島と腰

越の鼻との間に遠く姿を見せて。霞みまで藍に染めたり。あはれ前な
る岡の松なかりせば。森戸明神の濱に潮あむ賑までも。眺の内に入る
べきを。

後に山を脊負ひたれば。月は中空よりならでは見えず。波まづ白くさ
らめきて。光の内になりゆく海原。なか／＼に黄金の鹽を見とめぬ間
も。樂しみ深し。夜の更くるまゝに。波の聲いよく澄みまさりて。
螢の如き燈火のこゝに三つ四つ。かしこに二つ三つ。滅え明りするな
ど。富貴も王位も物の數かは。

森戸明神は。葉山村の中程より海に突き出でたる處にして。頼朝の勸
請に係ると傳へたる社。松青く砂白く。打ちよする波の捧げ出だせる
巖の頂に。小さやかなる社殿は立ちたり。少し離れて波に洗はるゝ岩

の上には。千貫松といふ松ありて枝を垂れ。常に波の花さく名島の磯は。十二町ばかりの沖に出で。鷗の翼ならべつゝ、休みをるも。近くに見ゆ。

鳥居を入りて社殿に詣づる間は。いと廣き松原にて。木蔭の芝生こそ。旅人の公園とも名づけつべき様なれ。夕飯をへたる頃。そゝろあるきしつゝ見れば。釣床を木と木に張りわたして。ゆられつゝ本讀む人あり。日本の浴衣に三尺帯しめて。玉投の遊する四五人の洋客あり。赤き裳裾かゝげて。貝ひろはんと走せゆく少女も。畫中の風景ならざらんや。かたへに一つの茶店ありて床几を並べ。澁茶水菓子などを勧む。松原すぎて後ろの濱に出づれば。江の島富士の嶺近く來りて。夕日の名残うつくしく。雲も波も帆も鳥も皆紅なるに。頬を半ば薄桃色に

照らさせて立てる少女は。先に急ぎし子なるべし。吹き亂されたる髪の毛を撫であげつゝ。片手に貝籠を提げたるさまよ。貝は櫻貝か紅葉貝か。我幼兒も打ち交りつゝ。父の作りし唱歌をうたふ夕もあり。此度は來じと思ひし波は。忽ち來りて足を洗ひ。裾をぬらしつ。さてはと用意をすれば。二度目は音高く岩に碎けて。二尺ほど遠くにて引き返しぬ。砂の流るゝこと瀧よりも早く。岩のとゞろく響き雷よりも凄し。

暮色は松の間々を縫ひ襲ひて。人やうゝに去りぬ。去りぬる人の宿はいづくぞ。或は鯉釣りて歸りし海士が焼火のそばに。或は馬に湯あまする農家の火影に。唯よろこぶ此村なほ古風にて。一家一年の生計を夏六十日の間に占めんとする座敷がしの。割合に少なさを。跡に響

くは神松の聲のみ。岩波の音のみ。

明神の森を南にして。入江一つ隔てたるこなたに砂濱あり。入江は濱の後ろに注ぎて。森戸川の流を呑み。汐満つれば大舟をも浮ぶべく。汐干れば草履のまゝにても渡るべし。濱の砂こまやかにして。日影に黄金の砂子をかゝやかし。散り交る貝の色。雪の如きあり紅紛の如きあり。海は相摸灘の一方なれども。明神の鼻もて小さき灣をなし。遠淺にして波あらからねば。婦人小兒をもあびさするに適したるは。獨り此濱こそあれ。浦人は曰ふ。海水浴はじまりてより此方。森戸の濱にて客の溺れたる例あらずと。

汐あびる人もて埋めらるゝは。殊に午前九時十時の頃と。午後三時四時の間とをもて盛なりとす。手と手と取り合ひて立てるは。また昨日

今日の人なるべし。蹴るが如くに波を踏むあり。流るゝが如くに身を横たふるあり。見よ海に並びたる麥藁笠は。不忍の池の蓮より多さを。磯にあがりては。焼砂の上に伏しまるびて。火鉢を出でたる薩摩芋の如くに身をなすあり。濡砂ほりあつめては。富士を築かんと三人していたづくあり。怒濤はどつと打ち寄せ來りて。半なる工事を洗ひ去りつゝ。人間の遊戯のはかなさよと笑ふ。

山寺の鐘の響くは。十一時半を報ずるなり。田に山にある男女は。晝飯せんとて鍬うちかたぎ。家路に急ぐを見る。

我もかへらんとて身を起せば。濡れたる海着の重き事石の如し。竹に通してかつが人も興あり。子供よ前を持って。我は跡棒とならん。

曉めさめて戸を開けば。入方の月は赤く光りて江の島の上にあり。此

時いで、露ふみあるく。又心地よからずや。

瑠璃の色して葉がくれに咲くは。螢草なり。げによく見れば。花のさまこそ羽根ひろげたる螢に似たれ。薄紅なる愛らしき姿して靡き立てるは。撫子なり。まだ戀知らぬ少女の風ありとや評せまし。一花折らんとせしに。根まで抜けたる心なさ。百合は小高き岸より頭をあげて。こちくと招く。前に川あり。渡りかねてたゝすむ人。わが外にはいまだ見えず。

幼子は父の行方追ひ來りて。朝顔つみたりとて指し示す。それは晝顔ぞと言へば。それでも朝咲いて居りますと。論ずるもをかし。日はやうく昇りて鯉舟の出づる聲。浦の方に聞ゆ。廬に歸れば。妹なる子は。摘み來し花を一輪さしにさして。机にする

たり。姉なる子は。鉛筆いだして日記しるしつ。曰く。六日朝早く起きて。父上と撫子螢草を取りに行きたりと。

葉山の庵に夏をのがれける頃よめる

月すやし磯ばなれなる岩のうへに

詩をうたふ人の聲ばかりして」

心なくつむな少女子あすもみん

朝ゆく道のなでしこの花」

のりすてし磯の小舟に枕して

けふもすゝまん夕日かくれぬ」

いそまつの梢をわたる海士小舟

ゐながら見るも涼しかりけり」

田草とる少女の歌もそらにして

おぼゆるまでに住みなれにけり」

わがものとなれる江の島ふじの山

むかへば語る心地のみして」

たが閨の夢路やぶりし末ならん

わがすむ山にかへる松風」

浦里は人みな寐たり乗りすてし

舟のあるじを月にゆづりて」

舟の上にぬぎわすれつる夏衣

ゆふべ戀しき浦風ぞふく」

わがものといひてや人にはこらまし

うしろの山の日ぐらしの聲」

山水をすゝりにうけて長き日に

歌おもひをれば日ぐらしのなく」

夕立の雲間に立てるふじのねは

ぬれたる雪や空にはすらん」

夕しほのみちのすゝみに捨小舟

風さへのせて流れ來にけり」

海の上は夕日うつくしさかさまに

うつれる富士も紅にして」

なれて聞く身にも夕はあはれなり」

どなりの寺の入あひの鐘」

けふみれば森戸の松に入りけり

べにより赤き天つ日の影」

岸高く川に水ありみどり子の

ほしがる花は前にさけども」

武藏の金澤に遊ぶ道にて

しづのをが荷なひて出づる瓜の上に

けさわたらしき露を見るかな」

山水をもろ手にうけて口すゝく

少女もみゆる山どえの道」

あたひなき寶なにぞと人とは」

まつ風こゆる夏の山道」

朝のまに越えんとおもひし山道の

右も左もなでしこにして」

ほにいでぬ薄も多し秋まちて

さらにやこえん月も見がてら」

金澤にて

名に立ちし八つのけしきの外に又

風もありけり金澤の海

かへさは暮れたり

なでしこもかへさは見えすなりにけり

水のおとのみ遠く聞えて

星もなき闇路に入るとおもひしは

きりとほしたる山の中道

ゆあみする賤が伏屋の夕ぐれを

てらしがほにも飛ぶ螢かな

葉山にかへれば月白し

かへる人ありと知りてや我山を

いでゝむかふる夏のよの月

又ある時は江の島に遊びて岩本樓にやどる

時々白くよせくる波の上を

よるゆくものは秋風の聲

こぎつれて歸る親子の海士小舟

磯のよそめもすゞしかりけり

いそぎは、夜風や寒くなりぬらん

閨の内にも飛ぶほたるかな

大山にかゝると見えし夕雲は

まことなりけり軒の玉水

神武寺

斧とりて誰が打ち割りし

あとならん此岩山は

鑿とりて誰が削りたる

まゝならん此岩壁は

岩かべを四方にめぐらし

神さびて立てる寺山

佛さび見ゆる寺庭

じんむじ神武寺と其名さゝつぎ

相模がた汐あむ人の

つららおり嶮しき道を

あへぎつゝ尋ね訪ひ來て

めではやし見るもことわり

松の聲そらに聞えて

夏しらぬ寺は此寺

くすはしき岩は此岩

岩むろの佛をかみに

道に伏す薄おしわけ

草ふかく猶ふみいれば

日ぐらしの山彦さむく

よへば答へて

江の島

一

星月夜かまくら出で、

磯づたひ七里が濱の

こぼれ貝ふみつゝくれば

袖に吹く汐風すゝし

裾ぬらす白波きよし

かへりみる稻村が崎の

夕日かけ名残はあとに

迎へ立つ片瀬の山の

松の聲のぞみは前に

いそげ子どもら

二

えのしまの鳥居はあれぞ

貝ひさぐ店はかしこぞ

折れかへる波のうへゆく

長橋もなかば過ぎたり

右に立つ富士おもしろし

雲ゐるや雨降の高ね

左にゆく舟うらやまし

かすめるや三崎のあたり

いざ一夜こゝにやどらん

波まくらして

三

苔のむす石のきざはし

かぞへつゝのぼる子供よ

北條の三つの鱗を

さづけしといふは此神

風あれて一夜のほかに

湧き出でしと聞くは此島

春ならば花もにははん

秋ならば紅葉も染めん

それよりも涼しさうれし

岩屋まうでせん

田舎の葬式

相州葉山にて

ほのかに聞えたる打鉦のおとは。やうく近くなりて。一群の村人は葬を送りつゝ。今ど穂に出でそめたる田の中道を。こなたへとねり来る。鉦打つ人。銅鑼打つ人。造花もつ人。あるは白飯を團子を。折敷にもりて捧ぐる人など。先に立ちて。小さやかなる柩は。白布の上に淺黄

の小袖かけたるが。六七人に昇がれて。しづくと進めり。諸行無常など。筆ぼそにしるしたる旗は。小笹のさきにひらめきて。柩の前後をかこみたり。白き手拭もて頭を包みたるは。佛の血すぢなるべし。女五六人もかゝるいでたちして。そのあとよりぞねりゆく。あはれ送らるゝ人は誰ならん。幼児のこして逝きたる母か。老父に別れて死したる子か。供に立つ人。たがひにさゝやき合ひつゝ。鼻打ちかむもあんめり。

さして行くところは光徳寺とて。我暫く住み居るあたりの寺。葬儀の着くを合圖に。鐘樓の鐘をどんくと撞く。柩は行道三返して。本堂にすゑられたり。僧は家より導き來りて。これより式をはじめんとす。送り來る人々。庭の松陰に腰うちかけて。扇つかふもあり。地藏のう

しろにたゝすみて。汗をぬぐふもあり。

さるほどに。寺庭せましと集まれる子供等のさわぐを。何ぞと見れば。赤き白き干菓子を盆に堆くもりて。施行の爲めに。打ちまくなりけり。音楽なくして空より降るは。花か紅葉か。足をふまれて泣く子もあれば。奪はれたとてわめくもあり。本尊もし心あらば。得るも得ざるも同じ世にとや笑ふらん。墓は後ろの山なるべし。蟬の聲するあたりに。新らしき土を掘りかへしたるが。木の間より見ゆ。夕ぐれがた再び此寺の前をすぐるに。さしも賑はしかりし人は散り。旗も柩も。早いづこへか影をかくしぬ。風寒し月青し。今夜佛燈のもるゝところに残れる人。また誰とか語らんとする。

大山がへり

汽車神奈川に着く。童子三人待合室の窓よりのぞきゐたりしが。来たよ〜。武の字の笠さげてと。一人がいへば。皆々見えたく〜と喜びわめく。父なるべし。六十ばかりの老人。二十前後のむすめをつれて。大山まゐりに出かけしと見えて。汽車を下り橋をわたりて。改札處にいたる。早くも父のたづさへたる風呂敷包は兄の手に。菅笠は弟の肩にかゝれり。

鍛冶の歌(唱歌)

一

絶えず振りあぐる槌の響

絶えず飛び散る槌の火花

樂し我世はきのふも今日も

とツてんかちかち

とツてんかツち

二

もゆるおき火は家のゆづり

にぎる鞆は親の形見

樂し我世はあしたもくれも

とツてんかちかち

三

髪に散りかゝる灰を友に

顔にまみれたる煤を友に

樂し我世はゆふべもあさも

どってんかちかち

どってんかツち

どってんかツち

君 恩 (唱歌)

山路に日暮れぬ樵歌せうかの聲

花を今宵のあるじにして

君が代のめぐみ何くまでも

二

波路に日暮れぬ漁笛ぎよてきの聲

月を歸さのしるべにして

君が代のめぐみ何くまでも

夢 (唱歌)

こゝは過ぎにし年

友と遊びつる岡の小松原

いつか家をでゝいつかこゝに来て

遊ぶか共にかはらぬ野邊に

二

谷に下りて飲む

水もこゝろよし風もいとぎよし

友は我を呼び我は友を引き

柴折り敷きて休むも共に

三

夢か今の友

夢か今の岡さめていかにせん

窓の月もなほ軒の風もなほ

おもかけ見せて再びこゝに

水の歌(唱歌)

一

夜露にうまれて苔地にそだち

おひゆく水の流れば何く

櫻のかげに

青田をうるほす功も知らず

堤を切るべき罪をも知らず

二

世なれぬ我は

落葉にうづもれ草葉をくさり

苦しむ水のゆくへは何く

大川さして

日に増す力は岩きるばかり

とゞろく響は山さくばかり

世に出し我は

宮の山 (唱歌)

いつも遊ぶ宮の山

今日も行かん明日も又

水の流れ下に見て

鳥の聲もおもしろし

二

今日も遊ぶ岡の森

明日も行かん其次も

花の笑顔つねに見て

松の風もいさぎよし

三

鳥も謠ふ宮の山

風も遊ぶ岡の森

夕日落ちてなごり惜し

風よ鳥よ明日もこん

菅 公(唱歌)

一

行末くもる筑紫の空

都の月日はいかならん

心にかゝる嵐の雲

ながめにさはる波路の霧

沈まば沈め我身は海に

都の月をいかにせん

二

今なほこゝに馴れてぞ見る

清涼殿のおもかげを

おもへば戀し去年の秋

おもへば戀し雲井の月

月こそ照らせ水底まで

築紫の海のきよき身は

母の心(唱歌)

一

糸を繰る^か棒のひき

母は旅の我子に

風は烈し露はさむし

おもへ母の心を

二

衣を縫ふ針のいそぎ

母は遠き子の身に

火影くらく針はほそし

おもへ母のつかれを

南信濃路

明治三十一年八月

長野線—沓掛—保福寺峠—浅間—松本—塩尻—諏訪—

伊那街道—飯田—天龍川

相摸灘の潮あみて歸りし又の日。信濃人は來りて。山分衣思ひ立たず
やと勸む。昨日の海。明日の山。人間萬事變化こそ面白けれとて。伴
なはれ出でたるは。八月十四の朝なりき。

燈の下に箸とりて立たんとする時。雨はらくとこぼれ出でたり。

信濃路の露分け入らん旅衣

まださぬるゝも涼しかりけり
 されど強ひても降らず。上野を離れて後は。日の影やうくく汽車の窓
 に來らんとす。

涼しとはいひつるもの、藍の色に

晴れゆく空はにくくしもあらず

戸田川を帆懸舟の下るも。晝の様なるに。走穂見えたる青田の末には。
 秩父の遠山雲間を出で、。言葉をかはすが如し。

ゆきくして。汽車は妙義の石門を天の一方に仰ぎつゝ。碓氷峠にかゝ
 る。日影すでに怒れるが上に。横川にて車輛を減たれば。五つの桶に入
 れたる味柑を。三つの桶に詰め替へたる心地して。もはや風を入れるべき
 赤地もあらず。況んや暗きより出で、暗きに入るの熱國を過ぐる事。

二十六回の多きあるをや。かの雪よりも白き谷水の流と。晝なほ暗き
 山松の陰と。ことなる天の恵も。空しくよそに見て過ぎざるを得ず。
 賣りに來れる氷かはんとて。窓毎にさしいだす手の。百走よりも多か
 りしは。熊の平にての見物なりき。

輕井澤すぎて追分の原を行く。汽車の進み早ければ。あれよといふ間
 に。咲きはこる女郎花も桔梗も。忽ち後ろに走り去りぬ。穂に出でた
 る薄さへ交れり。

秋風は車に乗りて越えつらん

さく花はやし追分の原

上田より汽車と別れて。千曲川を渡る。水あびんとて子供ら集まりた
 るが。岩の上下にあり。おはれ汝も海國男兒。海外萬里の遠征を試む

べき練習を。數千尺以上の山川にや爲し居る。陰なく水まれなる新道を。一直線に歩みゆくこと三里餘。かりそめなる茶店によりて澁茶を啜る外には。暑さ慰めん便りもなし。井戸は何くぞ。流れて止まざるは満身の汗のみ。

同行者はさし示しいふ。あの前なる山こそ夫神嶽をかみだけなれ。これを左に見て南に折るゝ處を。青木といへり。そこまで行けば先は近しと。望ある先達の一言を力に。ゆけどもくゞ道の果は見えず。夫神嶽おなじ三角形を天に捧げて。前途を遮る始の如し。その右にはづれて見ゆる後ろのはと問へは。冠者嶽くわじやがだけなりと教ふ。げにも稚子の髪ゆひたる様したるとや言はまし。

あつかりし晝の旅路も忘れけり

身にしむ鐘の夕ぐれの声

暮れはて、奈良本を過ぎ。沓掛に着く。温泉宿七軒あり。家毎に燈火赤く客にぎはし。

角屋といふに宿を定めて。案内せらるゝまゝに。二階の階子を草鞋にてあがり。廊下に紐ときすて、一室に通る。地盤高ければ我樓よりは庭のあなたなる隣家浴客の賑を。下界の如く見おろすも興あり。室の一隅に棚ありて。楯盆楯木俎板庖刀などを置き並べたるは。自炊の客に貸さんとなるべし。

まづ湯に入る。浴室は此町共同のにて。廣さ四疊半もあるべきか。いとぬるく日向水に似たり。笥より瀧のやうに絶えず流れ出でゝは。浴客の脊を打ち顔にはどはしる。

歸りて膳は出でたり。鹽引鯽に椎茸の玉子とぢ。山家の料理これも悪しからねど。何か酒の肴になるものなきかといひしに。暫くして平鉢にうづたかく盛りて出だせるは。瓜の切りたるなり。白瓜にも胡瓜にもあらず。何ぞと問へば。眞桑に似たる瓜にて。此邊にては轉ばし瓜といへり。小縣ちひさかたの名物にて侍るといふ。げにも甘みありていと香ばし。思ひ出でしは。曾て姥捨の月みたりし秋。冠着山の拜殿にて村人にふるまはれしこそ。此ものなりしよ。

十五日晴れたり。五時に立つ。是よりが聞き及びし保福寺峠なれば。脚半を堅くし草鞋引きしめて。やうくのぼりかゝるに。右も左も野原ひろくとして。夏草秋草の咲き亂れたるこそ樂しけれ。百合あり桔梗あり萩あり葛あり。粟を蒸せるが如き女郎花は。紅の糸を散らせ

るが如き撫子と。色を交へたるさへあるに。鶯たえず春にもまさりたる聲して鳴く。

うぐひすはいつまで春の聲ならん

薄穂にいづる山かげにして

笹栗の木おほくして。實は落ちたれど。拾はんとする童もなく。まだ土くさき早蕨の拳を握りて打ち靡くなど。何ものか仙境の趣ならざる。

穂に出で、まねく薄の下蕨

折りてやゆかん栗やひろはん

湧き出づる汗は熱湯の如く。顔に流れ手にながれ。襟をうるほし脊をうるほして。つひにシャツさへチョッキさへ。水につけたる如くに爲したり。同行者は茅折り敷きつゝ。前途なほ遠しとつぶやく。

嶺の八丁手前といふ處に茶店あり。楓の大木の陰に。丸木もて結ひ構へたる床几見つけて。風呂敷包おろしたる時のうれしさ。都にて日曜待ち得る書生の知るところならんや。谷に臨みて風とほしよく。昨日雲井に仰ぎつる三角山は。我蹈む足と同じ高さになりて顧みられたり。鶯しきりに谷の底より山彦かへして。ほうほけきよと歌ふ。

此茶店の軒に下げたる御嶽登山講社の手拭。あるひは赤く青く白く。雨にさらされながらも美しければ讀みもてゆくに。講社の名をしるしたるもの三十に近し。曰く信盛講。曰く泰平講。曰く報國講。曰く白翁講。曰く神樂講。曰く松風講。曰く常盤講。曰く千秋講。曰く高崎講。曰く大和講。曰く何。曰く何と。彼山の神徳いかに盛ならずや。嶺にも茶店ありて。餅など搗きむたれど。寒さはと吹く風を後るにし

て下りに向へば。乗鞍岳げにも馬の鞍なして。雲の上に簞え。飛彈境にや雪さへ見ゆる山々あり。

春風は吹き忘れてや置きつらん

雪まだ白し飛彈の遠山

十八丁くだりて。商人澤といふに休む。筧に受けたる山水。とうくと流れて心地よし。冷索麵といふ札かけたるは。此水につけて食はせんとなるべし。風も思ふまゝに入れたり。喉も思ふまゝに濕ほしたり。いざ一奮發とて蝙蝠傘を杖に身を起せば。保福寺川笙の如き聲して。道の左に伴なふ。

保福寺町に入らんとする道のかたへに。鳥居赤く松林もて圍まれたる社あり。津島神社といふ。町と峠との名を得たる保福寺は。同じ山つ

いきに川一つ隔てゝ立てり。藁葺の仁王門に。例の大草鞋かゝれるを見て。同行者は曰ふ戯れ。履き替への草鞋は彼處にありて君を待つ久しど。思はざりき我肥え過ぎたるが爲め。仁王の攝待にあふの幸あらんとは。

町の米屋にて午飯す。杳掛よりこゝまで四里。これより松本まで三里といへり。

思ふ事一つ叶へば又一つ。保福寺すぎてひなくら稻倉峠また來る。ことに炎天の日中なれば。汗ながるゝ事いよゝゝ急なり。ひとり此苦界中より我を助けて導くものは。松の風と水の聲のみ。

都にて何に氷をおもひけん

ひなくら山の松の下風

峠をこゆれば。松本町は一幅の圖となりて。目の前に廣げられたり。女鳥羽川めごばかは左に。奈良井川は右に。布ひきのばして夕日を反射す。あはれ此山こえて松本に來れど。いひつる人の家は何くぞ。烟こまやかにこめて。其墓のある山も知られず。

岡田なといふを過ぎて。淺間の温泉につきたるは三時半。こゝにて先づ湯あみし。夕方まで涼まんとするなり。家の名をば菊の湯といふ。樓は東南に向ひて眺望よく。青田を隔てゝ。烟にぎはしげなる上淺間の家々も。一目に見るべし。軒端には。今を盛りなる百日紅の咲きひるぞれるあり。隣室には。碁の盤に觸るゝ音も頻に聞ゆ。山路の暑さもこゝまでは追ひ來らねば。心すでに安んじたり。況んや温泉と美酒とあるをや。

長く休みて車をやれば。夜は、や魁して松本の町にあり。同行者服部君の家に宿る。

十六日。町をそゞろあるきして。城の天守に登る。瓦落ち壁くづれて。見る目あやふき高殿を。青鳶ひとり心地よげに這ひかゝりて。縫ひとめんとするもわはれなり。日影うとく風入れぬ方には。蝙蝠巢ぐひて。人音すれば飛び來り。始めての御城見物なる田舎老爺を。驚かすことも幾度ぞ。床板やぶれ欄干かたむき。踏むごとにめきくくと動き。ぎくくとゆらめく。

窓のながめは遠近のこす處なく。昨日越えつる山も見えたり。明日ゆかんとする。も見えたり。風わたる稻葉の間には蓮の盛なるが。赤く打ち靡くなど。涼しきよそのみかは。ともすれば。のどきをる

人の帽子さへ。奪ひ去られんとす。

こゝかして知る人訪ひ暮らして。夜かへりきたれば。帷子きたる肌を通して。風の冷つくを覺ゆ。

十七日。朝より暑し。中澤さく子の案内によりて。小穴いち子の墓を訪はんとす。木澤の祥麟寺といふ處なり。總門を入れれば鐘樓門あり。本堂は藁屋にて。棟には鯨瓦を置き。又小笠原菱の紋つけたるは。先の城主小笠原氏の建立なればとぞいふ。前には鳳來山といふ額を掛け。庭には老木の枝垂櫻などありて。一たび見るより。先づ浮世の外なる禪宗寺の感あらしむ。さく子といち子とは共に我門下に學びたる人。されどさく子は近頃東京より歸りたるをもて。いち子の墓を訪ふこと今日はじめてなれば。其有處は我と共に未だ知らず。

寺を右にして。石碑多く立ち並べる山あり。露にぬれ蜘蛛の巣にかゝりつゝ。こゝかしこ尋ねめぐりて。遂に得たり。一片の石。一掬の涙。我言はんとすれども。彼答へざるを如何せん。草葉かきわけ。撫子の花を手折りてさく子が持て來たるを。前なる筒にさしたり。

松本にきたれ〜と言ひし人

今日とむらへば唯草の露

墓の前に立てよと誰か蒔きつらん

木澤の野邊のなでしこの花

岡つゞきなる城山にのぼる。今年八つ九つなるさく子の妹も伴なへり。かしここそ此春學校の運動會に來りし處よとて。先になり案内し勇むはせに着きぬ。

山の上には小高き岡四つありて。一の城二の城など呼ぶとかや。松あり櫻おほくて。いと涼しき陰なるが上に。松本の城松本の町は。畫圖の如くに見えて。打ち晴れたる方の眺望を富まし。稻青く川白き間に置かれたる村里は。見え隠れして木の間の風景を装ひたり。公園地なれど。暑さを厭ひて我外に遊ぶ人もあらず。番人小屋より。かの姉妹が運び來れる茶器と。袂よりあらはれたる饅頭とを。半朽ちたる腰掛の上に廣げて。あはれなる墓のあるじの昔語などす。あはれ此山。月に登り花に遊ば。興さらに幾ばくぞや。さはいへ月花ならぬ時に來りて。里人の未だ知らざる松風の味を試む。旅の愉快は足れりと云ふべし。

十八日。晴れたり。六時に松本を立ちて諏訪に向ふ。同行は服部君と牛齋子との三人。朝風こゝちよく乗合馬車を送りて。桔梗が原に來れり。武士の草むす屍年ふりてと詠じけん跡は何くぞ。見わたす限り。桑原の外にはものもなし。

さきに城山をうしろになしける時。

一もとの柳のかげにかくれけり

きのふ遊びし岡の松原

鹽尻の宿にて馬車を下り。人は和服なれば。腕まくり尻からげの姿となり。我は洋服の上着を脱ぎて。荷物と共に肩にかけつゝ、峠にかゝる。時に十一時すこし前なり。近しといふに従ひて舊道を行くに。秋草れ

の咲き亂れたる並松の陰。風いと涼しく。處々清水などありて。思

ひし程に苦しからず。牛齋子は語りぬ。此山巖の頃ことに面白く。茸狩また興ありと。

音に聞く芝茶屋に休まんは如何といへば。牛齋子といめて。絶頂にすべしと主張す。よき茶屋ありやと問へば。假初なる藁屋一つあり。逢坂ならば蟬丸の舊跡とも名づけつべきかといふ。さらばいそがん。知るも知らぬも立ちよると聞くこそ。なつかしけれ。

牛齋子先登第一を呼び。服部君二番鎗を入れたり。茶店は道の右手にありて。菓子氷水などを賣る。先陣ははや寫生帖とりいだして。下り上る旅人のさまなど畫がきつゝ、あり。しんがりせし身も。豈歌なからんやといはれて。

いつかはと思ひし諏訪の水海は

松の木の間に見えそめにけり

前なる高き處に登れば。諏訪湖たゞ眼下にたゞへたり。逢坂こえて琵琶湖のぞむにや比べん。九覽亭より金澤灣みるにや類へん。海のこなたに並木のあるは下の諏訪。八つが嶽の陰に見ゆるが上の諏訪。それより右にたどりて舟なす白雲の下あたりこそ。神宮寺ならめと。先達の二君は説き聞かす。

いで一休せんとて。松の木の根に腰うちかくれば。茶屋の主は。四角なる蔭を三枚もてきて。敷けといふ。茶は出でたれど。地斜にして置く處なければ。茶碗と急須と別々にして。或は木の根の間に挟み。或は土の上に置く。何か食ふものありやといへば。黄色なる麥饅頭の油皿はどなるを。おの／＼に一つづゝ持て來れり。我より外は。共に諏

訪を故郷とする人。見るもの味ふもの毎に。なつかしからぬはあらじ。初旅人は唯めづらしと思ふのみなるを。

富士見るは此時を第一とすと聞きゐたれど。南の方の雲もて鎖されたるこそ生憎なれ。さるにても八つが嶽つきて。山の左右に開けたる間より。富士の顔を出ださしむるやうに作りたる。天の工のいみじさよと一人がいへば。舞臺いかにいみじくとも。太夫の樂屋より出でざるを何とせんとて。皆々笑ふ。

比叡の嶺を二十かはたちさねし面影に

おく雛形や鹽尻の山

寸の馬。豆の人と。今まで見おろしつる坂道を。滑るが如くに下りはて。三時に近き頃。下の諏訪に着きぬ。松本より七里なるべし。

春の宮を大鳥居より遙拜して町に入り。まづ午飯せんとて某屋にゆく。湯をば巴の湯といへり。草鞋ときすて濯ぎもてこいといへば。旦那の前まへにありと老婆こたふ。げにも下ゆく下水めきたる流こそ。病癒ゆてふ温き水なりけれ。鰻焼く烟庖ゑんぼうになびきて飯も熟しぬ。白衣菅笠の御嶽まゐりと室を同じうして。山路の暑さなど聞きあつめつゝ。箸を取る。何事か旅は面白からざる。

夕涼待ちつけて下諏訪の社に詣づ。謂はゆる秋の宮なり。木陰をぐらき岡に立たして。こけらぶきの宮居こそ。いと神さびたれ。大きな杉のひまより湖の少しづゝ見ゆるも。涼しからざらんや。服部君は十何年目にして諏訪を見舞へる人。昔此あたりに住みし事ありしとて。社

の内外うちめぐり見つゝ。去り難がたにす。

濱にいで。附木を合せ作れるやうなる舟一つ雇ひて。湖水を渡る。風つよくして。波うち入るゝ時もあり。岸送り岸迎へて。一里の海上。はやくも上の諏訪は近づきたり。あれこそ我産土なる手長神社よと。服部君左を仰げば。氷の上に神幸かみゆきのある衣渡川の川口も見えたりとて。牛齋子右を指さす。

すはの海夕風すゝし鹽尻の

山わけごろも袖かわくまで

價どらせて船頭に別れつるは。黄昏なりき。本町の小澤氏を訪へば。家こぞりて喜ばるゝ事限なし。叔父様くゝとて。はや馴れたはむるゝ。幼児もありて。旅寝忘るゝまでの圓居になりぬ。三人内湯に入り。蟬

丸茶屋の興など語り更かして。枕に就けば。柱の時計一つ聲あり。十九日。上の諏訪の社に詣でんとて。牛齋子と共に出づ。空に雲なく道に陰なければ。身は風呂の中に置かるゝ如し。上町。角間。清水。神戸など打ち過ぎて。江渡川えのさかはを渡る。川水こゝちよく流れて。手網打つ人。四つ手おろす人。こゝかしこに立てり。何が取るゝぞと問へば。手網なるは鮠はや。四つ手なるはヨナなりといふ。ヨナは天龍などよりや上りけん。昨年より湖のほとりの川々にて。取るゝ事おびたゝしく。諏訪名物の一つにも。今は數へらるゝに至らんとすと。昨夜小澤氏は語れり。形は芝浦のジャコに似たれど。風味は鴨川の鷺不知も及ばじ。

此川と六斗川とに挟まれつゝ。島なせる處に白狐の社あり。木立いと

涼しければ。田の中道を焦れつゝ來し人ゆく人。こゝを命と石に腰かけては休む。めづらしき風湖水より來りて。芦を吹き稻を吹き。社壇の御幣を靡かす。

飯嶋畷にかゝれば日影いよゝ／＼焔を鋭うして。襲ひ來れり。何くやらん。手を拍ちてはホウイ〜と呼ぶ聲聞ゆ。田面の鳥追ふ農夫なるべし。畑には桑つむ賤女も見えたり。

上の諏訪の社は。北に璃瑠たゝへたる湖水を控へ。西に碧したゝる守屋嶽を脊負ひて。森深く境きよらなる處に。藁葺の屋根からぐしく仰がれ給ふ。茶屋あまたある町を過ぎて。大鳥居を入らんとする處に。噴き出づる清水あり。名づけて点滴の水といふ。いかなる旱といへども涸るゝ事なく。雨なき年は遠國の農民きたりて此水を汲み歸り。天

に祈れば必ず降るなど言ひ傳へて。明神七不思議の一つとなりしも。是なりとよ。

境内には廻廊あり。神樂殿あり。繪馬殿あり。勅使殿あり。廻廊の長さ三十九間。半ば埋むるに。戦利品奉納の額を以てす。參詣群集の顔みな天井に向ひて行くも。理りぞかし。刀の折れ鋒の碎け。いたづらに古戦場の土に朽ちずして。我國民を奨勵する具となる。あに聖代の餘澤ならずや。

社の四隅に天を突き立て立ちたるは。謂はゆる御柱おんはしらなり。是ぞ七年目に八つが嶽より伐り出だして。立てかふると聞き及びしもの。かの二十七八年役の折。半より折れて敵國の方角に向ひ倒れたりとの話も。傳はりたるものなりき。

廣前に捧物して拜をなし。社務所に岩本宮司を訪ひたれど。今日は非番にてあらずといへば。御沓石などいふを見て鳥居を出で。かどの茶屋の樓にのぼる。牛齋子むかふの茶店を寫生せりとて示せば。餘白に歌かく。

旅人に汲みてすゝむる釜の湯の

つきぬや神の恵みなるらん

風は涼し。客は少なし。遂に三時間の久しき。よく此鼓腹の民をして。華胥に遊ばしめしは。一瓶の地酒と。一椀の豆腐汁との賜なりき。驚けば時計の針すでに四時を指しぬ。日は傾けり。いでや一里半の道を急がん。

白狐の森に来れば。富士はじめて江渡川にうつれり。相摸の海に我物

どながめし山を。誰か持ち來りて此川上に置きつる。

別れたる人に逢ひたる心地して

信濃の空に富士を見るかな

一つのみ見るだに富士は乏しきを

水の上にもあらはれにけり

夕風に送られつゝ。黄昏かへり來れば。待ちわびたりと小澤氏いふ。夜に入れば風寒さまで燈を吹きて。歌語出で謠はじまり。牛齋子絶えず秀句を吐く。

二十日。雲出づ。唐澤山こそよからめと。昨夜主人の言ひしを案内に。松本以來の旅客三人。山路の朝露踏み分けんとす。主人は醫師なれば。病者の脈みるために忙はしくて。何くの案内も出來ざるが残念なりと

て。道は斯く行け。寺にて斯くせよと。父翁と共にさし示さるゝ事。

ねんごろなり。見よ妻君が心づくしの握飯は。服部君の手に。肴菓物は牛齋子の手に。而して翁が殊に注意の大瓢箪は。肩より掛けて肥大なる男の腰にあるを。

精進湯とて入込の温泉ある前を過ぎて。高さ石段を登り。手長神社に詣づ。宮は大きからねと木立すゝしく。眺望晴れて湖水一目に見ゆ。

社の後ろより山路にかゝれば。顧みらるゝ海の面。一步々と開けゆく心地して。更に妙なり。

水海はいよゝく廣くなりけり

昨日見ざりし舟も浮びて

天龍川に注ぎ出づる處は。片口の口などのやうに見やられたり。その

左なるが花園。それに續けるが小坂とぞいふなる。

道の傍に山神の祠あり。苔むしたる石の鳥居玉垣して。あたりをぐらく老木どもの立ち茂りたれば。日を避けんとて。草刈も道行人も皆立ちよる。中に楓の大きな一つあり。秋ふけて紅葉する頃は。人の顔まで染みわたれりと。腰かけぬたる里人は語る。日は雲を離れたり。此處より海は見えず。

なほ登れば水また見ゆ。見ゆる處半なれば。却りて入海などのやうにて。更に廣くなりたる如し。秋草道を埋めて。穂のなき薄はや秋風になびけり。

唐澤山は羊の腸なせる道の上にありて。草ぶかく木ぶかく。世ばなれたり。寺を法國山阿彌陀寺と呼ぶ。冬籠堂。本堂。觀音堂。おのゝ高

き石段を隔て、三所にあり。入りて音なへば。老僧いで、觀月臺を貸すべしといふ。

臺は冬籠堂よりや、離れて。削り立てたる如き岩山を右にしつゝ。南の崖に臨める處。前は人の丈ほどもあるべき月見草。口なし色に咲きはこれる間より。寝ながらにして湖水を見るべく。東の方は。老木枝を交ふる谷を隔て、松山長く裾を引き。其上に澄みのぼれる月の。海上かけて照らすらん面影まで思ひやられて。面白き景色なり。筧に受けて冬籠堂に引きたる山水。天人の笙を吹くに似たり。

此幽境を我物としつゝ。瓢を傾け辨當を開く。更に樂し。狂歌よむもあり。詩を吟ずるもあり。木炭筆を取りて紙面に向ふ人。あふのけに伏して一六居士の題額よむ人。なにものか浮世をよそに忘れしめざる。

況んや小澤氏手植の林檎は。諏訪湖新産物のヨナと共に。主人に代りて酒をすゝむるをや。晝の料なる拳ほどの握飯さへ。九時にして蓋きぬるを如何にせん。遂に約せずして同じく夢路に逍遙し。目をさませば日まさに午ならんとす。

僧來りて茶に湯をさしそへ。俳諧の話などしつゝ。是からは上が涼しければ。ちちおはせとて先に立つ。

廣やかなる本堂には。佛あまたきらめき立ち。身の長六七尺もあるべき寢釋迦の像など。安置せられたり。雲に聳ゆる巖の側より。とくくと走りおつる水をつめたさ。雪か氷か。指をつくれれば切るゝ心地す。

堂についできて庫裏あり。奥の間の床には。畏くも崇徳院の宸筆を石摺

にせる。六字の名號を掛けたり。こゝは東に向ひれば。月出づる山のために隠されて。湖水の南の方は見えす。片口の口に似たりし天龍は。更に土瓶の口となりて。四五町もやと思はるゝまで。一筋白くあらはれたり。あの雲かゝるこそ御嶽なれど。牛齋子指さす。

諏訪の海にうつしてぞ見る夏さむき

木曾のみたけの峯の白雲

僧の住むところは冬籠堂にて。本堂よりは遙に低し。頻に大聲あげて。どなたかちよと来て下されと呼ぶ。何ぞとて服部君ゆきみれば。播盆に饅頭を冷したると。手鍋に飯の焦げつきたるとを渡して。是めしあがれといふ。すべて此山寺に住み居るは此僧一人にて。事足らぬがちなるべきに。客もてなす事一方ならず。みづからは剃り立ての頭に濡手

拭を戴きつゝ。つゞきて饅頭の醬油と茶器とを携へ來り。次の間なる大圍爐裏に柴折りくべ。ふすぶりたる藥罐を沸かし始めたり。忝なしとて箸を取るに。うどんのつめたき事。身も冷ゆるばかりなり。服部君戯むれて。氷の如くなるうどんを食ひて。胸のあたりを刺し通し刺し通さるれば。など口ずさむ。藤戸の謠を思ひ出でしなり。觀音堂は更に高さ山の上にあり。壁なせる巖に片掛けて作れるさまこそ。浮世の外なれ。前には清水の舞臺めきたる臺ありて。一たび身を此處に置けば。世界小さく。湖水には金魚を住ましつべきの思あり。小澤氏は今朝注意せり。唐澤は夏も寒ければ。シャツ着て行くべしと。げにも風にあたりをれば。肌さむきこと月見の頃に似たり。見るべし。寺の庭には霜に傲る黃菊の苔もちたるを。

どかくする間に。雲俄に景色たちて。雷聲遠くより近くに來れば。降らぬ先にと急ぎ僧に謝して山路を下る。風くるひ木の葉舞ひて。銃丸の如き雨つひに我道を要撃せり。よし撃たば撃て。山鳴り谷こたふる聲は。ことごとく炎熱を降伏せし凱歌の反響なるを。

二十一日。地藏寺を訪ふ。松もておほはれたる山門。萱葺の本堂。心まづ澄みわたる境なり。庭にいと廣き池ありて。鯉すゞしけに遊び戯むれ。石の寛より瀧となりて落つる水。千筋の白糸の如し。夏なき池の上には。苔なめらかなる石段を道にして。愛宕の社。高く木深き岡を占む。

手長山を越えて温泉寺にゆく。舊藩主先塋のある處なり。本堂は先年焼けたれば。城内にありたる能舞臺を移して。之にあてたり。橋掛を

少し前に出だして。玄關廊下とし。鏡板の松をやがて玄關の壁に用ひたるなど。たいなるよりは。風流ならずやは。

門前は並木の杉たちつゞきて。見入ことに畫の如し。寫しおかずやといへば。牛齋子答へずして鉛筆を袂に探る。

歸れば時いまだ午に及ばず。病客や藥取やと遠近より集まりて。玄關に市をなしたり。壁を隔て、方言の會話を立聞するも。旅中の學問の一つにこそあれ。

夕日斜に庭の林檎を照らす頃。主人少し暇を得たれば。公園地見にゆかずやといふ。公園は高嶋城の跡にて。天守臺の石垣なほ其まゝに。

苦むしつゝ立てり。之を縫ひ包みたる蔦。その葉陰より花を見せたる樵子。いづれを見てか懐古の涙なからん。

この城。いにしへは海に臨みたりといへば。風景のすぐれたる思ひやるべし。されど今は青田のなかにて。何の目を引く姿もあらず。

富士の嶽漕々海士の釣舟。と詠せし衣崎を左に見つゝ。江渡川をわたり。弓張暇を過ぎて歸さに向ふ。日影は水を辭し梢を別れ。僅に山の巔に残れり。

二十二日。今日は立たんどの豫算なりしに。昨夜安間氏來りて。小坂觀音行をすゝめ。小澤氏また。僅か一日の延期にてすむ事なりとて。留めらるれば。遂にその情に羈されて。六時江渡川の川下より小舟に乗る。

服部君は用事ありて今朝松本に歸り。小澤氏は病後にて行く能はず。安間氏を主として。牛齋子とおのれと二客從へり。船頭二人爐にあり

て竿を取れば。舟は飄々として。稻荷の森など右に見つゝ。湖に浮び出でぬ。

海は鏡の如く平にて。藻を刈る舟。海老とる舟。おほく出でたり。ながめやる四方の山々。雲の帷より或は隠れ。或は顯れて。鏡の面に影を見せたる。さながら油畫の趣とやいはん。

今日はわが身をおく舟を波の上に

うかぶ木の葉と人や見るらん

先には鹽尻峠より。手長山より。唐澤山より。地藏寺より。よそに見つるは此水なりしを。近づけは早くも。我世界となれるものかな。

小澤氏より贈られたる酒肴は。安間氏の携へたると共に。舟にならべり。盃を手にしつゝながめゆくは。舟は直線を湖上に引きて。早

くも岸に着きぬ。諏訪八景の一つに。小坂の秋月と歎へらるゝこと。即ち是なれ。

観音堂のある寺の名を。龍光山といふ。東北は海に望みて。木の間に沖ゆく舟の見えかくれするなど。似たりといはゞ。鎌倉の長谷など近かるべきか。

諏訪の名産の一たる。平石もて葺きたる鐘樓あり。禁早鐘と記してあれば。遅鐘はゆるさるゝにやと戯むるゝを。安間氏しかなりく。撞きて見給へといふ。鐘木の繩とりて。えいやくと二つ四つ動かせば。手に應じてごんとなりたり。

手ずさびに我つく鐘を名どころの

ものと聞くらん遠の浦人

岸に臨めば。浦つゞきに花岡などいふ村見ゆ。境内には杉の大本おほく。堂の後ろに立てる三十三番の石像。蜻蛉の外には訪ひよる人も無げなり。

下るを待ちつけて。船頭はや舟に乗れとすゝむ。日も暮れぬるにといふ墨田川にもあらぬをど。つぶやけば。水を焼く燄。やうく堪へがたくならんとすと説く。さはとて舟に歸れば。風また來りて歌かく紙を奪へり。さるにても富士は如何と。そなたを見れども。美人なほ九華の帳にかくれて。姿を見するは。侍兒として簾外に立てる八つが岳のみ。

歸りて後は小澤氏にありて。歌よみ物書き。地圖を調べ。主人と語りなせして。日を暮らし夜を更かす。あはれ後ろの海。前なる山。明日

は別れを告げんと思す。馴れては數日の友となりつるものを。

二十三日。曇れり。夜をこめて牛齋子と共に立つ。ねんごろなりつる。小澤氏の心づくしを謝して。車に乗れば。口々に氷見がてらの再遊は如何など。いはるゝ聲。いまだ耳を去らざるに。早くも富部に來りぬ。星か螢か漁火か燈火か。遠くまばらに消え明りつゝ。猶暗かりし湖の上。やうく白みて明けそめたり。朝風寒く身にしみて。幾度か顧みらるゝは。手長山の麓なり。赤堀より別れて牛齋子は松本に向ひ。おのれは南して伊那街道を行く。暮雪に名を得し戸川を渡り。平野村にかゝるまでは覺えしが。いつしか睡魔は身を襲ひて。車上に船を行かしむ。行きちがふ村も少なからぬを。さても如何なる見ものなりけん。思はざりき左と思ひし天龍川の。早くも右に來りてあらんとは。

川のあなたは山みな雲に包まれて。今にも降り來らんとす。水の上には梁こす波の。雪より白きあり。糸うち垂れつゝ釣する人も見えて。夢は忽ち奪ひ去られぬ。

行く事五里ばかり。平出と云ふ町あり。宿屋寫眞郵便電信局などありて。繁華なれども。我やすみたるは車の立場なれば。缺けたる器。青くさき茶。ものとして穢からぬはなし。されども車夫は。いと心地よげに索麵など喰ふ。

こゝを出づる頃より晴れそめて。後は暑き日になりぬ。青田桑畑などを隔てゝ。遠からぬ天龍の見え隠れに伴ひゆくもいと興あり。伊那路橋といふを渡りて。再び天龍を左にし。松嶋北殿々村などいふ村々。來りては忽ちとなりつゝ。坂下町に着きぬ。時まさに十一時。午飯

せんとて玉川屋に入れば。鉢の朝顔。椽の下の秋海棠。美しく咲き競ひて人待顔なり。カナリヤ頻に籠の中を飛びまはりつゝ。軒に嘯づる。水なき大田切川を歩みわたりて。赤穂の町に入りぬ。上の諏訪より飯田まで二十里の道。あと七里半を残せり。例の立場におろされて。車夫の物食ひをはるを待ちつゝ見れば。主婦庖にありて杓子手に取り。大鍋の中より盛り出だせば。下婢受け取りては膳に載せ。爛徳利そへて運びゆくさま。少しの隙もあらず。勘定をと呼ぶもあれば。飯をと注文するもありて。店先も奥も二階も。客ならぬはなし。

かく忙がしげなる中にも。女ども髪あたらしく。島田などに結ひ立てたるは。今日陰曆の七夕なればなるべし。げにも過ぎ來し道すがら。村ある所には。家毎に短冊つけたる竹を立て。茄子瓜玉蜀黍大角豆な

ぞ。机に戴せたるもあり。徳利瓶などに。桔梗や女郎花やと挿し添へたるも。あまた見たりき。硯を手向くるは何くにもある事なれど。櫛を大きな小さな積み重ねたるは。此邊のならばしと見えたり。此家の内庭にも。松の木に竹を結ひつけ。其下に蕎麥打臺を机とし。櫛に盛りたる野菜を供へたるがありて。何となく今夜山暮れ星見ゆる頃。これを取り巻く田舎節の唱歌の聲さへ。想像せしむ。

車の上よりなれば。よくは見えねど。短冊の文字を讀みもてゆくも慰みの一つなり。「七夕」「天の川」「星合の空」などは。鄙も都もかはらねど。「しろはにはへ」と「アイウエオ」「一二三四」など記せるは。不就學の村なきを證するに足るべく。「大勉強」など書きたるは。商家の廣告などより學びしにや。とこころなくに見受けたり。「帝國萬歳」は新らし

くて勇ましく。「天龍川」「大井川」は「天の川」より轉じ來れるならん。

川の縁にや「文政之元十一月」と筆太に物せしさへ。靡さるたる珍しき。

星まつる紙の文字にも開けゆく

學びの道のあとを見るかな

かくて中田切。與田切。小田切などいふ川々の。橋うちわたりて。口陰坂を越ゆ。我車夫は諏訪を出でしより。此處彼處に取り替へて三人目なり。最後のは飯田のといへは。家近くなりぬとにや。阪ともいはず。平地ともいはず。いとかひなくしく轆く。淺黄地の車の前掛に。鯛めし^母の文字を白く染めぬきたるは。料理屋の廣告にやあるらん。問はまはし。海無し國の鯛めしは味ひ如何と。

原を過ぎ橋を渡り。村を出で村に入る事。いくたびなるを知らず。山

越にかゝれば右も左も花ある草原なるに。蕨の若さが生ひまじれるなき。暑き中にも心ゆく旅路ぞかし。山中なれど一つ二つ家ある處には。なほ七夕笹の涼しげにそよぐあり。

里はまだ來らざるに。大粒の雨は叩くが如く來れり。山みな崩るゝが如き雷鳴の音は。稻妻を先だてゝ來れり。車夫はあわてゝ母衣を掛け。笠をかぶりたれど。雨は母衣を被るが如く突き。饅頭笠しばく風にちぎられんとす。友なき空にて思ひやらるゝは牛齋子なり。

わかれつる人は夢にや遊ぶらん

夕立わびし伊那の山みち

やうく晴るゝ頃。出原を過ぐ。短冊はそぼぬれたれど。露の玉ぬく七夕笹。なか／＼に涼し。若き男女の着かざりたるが。ぬれたる道を

飛び／＼に遊びあるくも。樂しげに見ゆ。

宮崎橋などわたりて。日は暮れたり。

夕立の雲はのこらぬ山の端に

とき／＼青し稻妻のかけ

飯田の町に入りしは八時なるべし。車夫の案内にて廣小路の巴正木といふに着く。女あるじ出で來て。よき御座敷が塞がりて居りますから表二階にてよろしくはといふ。さらば頼むとて。草鞋ときすて樓に登れば。下婢は風呂敷包と蝙蝠傘と持ちて。先に立てり。町に直に向へる室にていと賑はし。

膳に向ひて箸とる折しも。わいしよくと町を通るあり。見れば高さ竿の先に。提灯かゝげたるを持ちたるが。音頭になりて。數十の小提

灯さげたる子供に圍まれつゝ。東京の樽天王のやうに呼び行くなり。すゞみがてらに。ぞろり〜と従ひゆく娘子守等。雲の如し。家の子にや十二三の小女來りて。丁寧に辭儀をなし。これをどうか濟みませんがとて差し出だすは。皴になりたる巻紙の切端と矢立なり。宿帳かと問へば。へいと答ふ。すべて此家は下婢も娘も行儀よく。出で入る毎に頭を下げ。障子など立ちながらに明くる事なし。夜半また雷雨あり。あすの天龍川。舟や止まらんと危みつゝ枕に着く。二十四日。四時に來れど。車夫に言ひつけたれば。起きて見るに。一天雲なく。星もて鏤められたる。まづ何よりも嬉し。されど車夫も來らず。宿も起きず。おかれて舟の間に合はではど。度々手を叩けば。やう〜下婢おき來りて。蚊屋をはづしつゝ曰ふ。舟は八時なるべし。

まだ馬車も發せねば大丈夫なりと。

向に高く聳えたる山の名を問へば。權現山。その右なるは虚空藏山と答ふ。古歌に風越の峯とよみしは是か。峯に白山權現ありと。地誌に説きたるを思へば。

車夫待ちつけて。立ちたるは五時五十分なりき。町をはなれて松川を渡り。こゝかしこに村ある田圃道をゆく。水車ところ〜音して。朝早ければ。見るもの聞くもの。涼しからぬはなし。八幡町龍丘村などいふを過ぎて時又に着く。

飯田より一里半の道なり。天龍川の岸に臨める會社にゆきて。舟の賃金表を見るに。中の町といふを終の場所に記してあり。さらば其處まで乗らんといへば。切符賣る男の曰く。此舟は鹿島に一泊すれば。明

朝ならでは中の町に達しがたし。其上鹿島より下は池水を行くが如く。天龍の妙は更にあらずと。依りて鹿島までと定めて乗る。舟賃二圓三十錢なり。時又鹿島の間は二十八里。それより中の町までは五里なりとぞ。

舟は四五間もあるべきか。薄き板もて蓋なき箆箱のやうに作り。底を平にして。舳と艦とに鶴の嘴の如き尖りある。調はゆる鶉飼形なり。底には丸木を渡し。其上に荒蕪敷きたれば。波多く打ち入る時は。居處も皆水もて浸さるべし。草鞋ぬぎすて、左の舷に座を占むれば。人は曰へり。そこは波かふるべし。真中にし給へと。

乗合おひく集まりて。二十人に餘りぬ。洋服に脚半掛なるは。郡の檢疫掛にて。赤痢流行地に行くといへり。故郷の村を訪はんといふ。

茶屋の女あるしめきたるものも來れり。東京に上る兵士あり。任地に赴

く巡查あり。浴衣に金縁の眼鏡もあれば。三度笠にシャツの出立もあり。彼等をして逆さまに我身を觀察せしめば。何と見るらん。古洋服に脚半草鞋は。鐵道の技師なるべしと。牛齋子の笑ひし事もありき。鹽尻峠にては。手帳に物書きゐたりとて。新聞記者と思はれたり。思ひさや此舟の船頭に。早くも身の上を看破せらんとは。船頭扇四本を出だして。ごせんせいさま。酒手に何か書いて下されといひしこそ。いかに考へても不思議なれ。これは満島に着きての事なりけり。

七時五十分に舟出づ。屋根なければ。風は吹けどもいと暑し。舟子は舳と艦とに各二人。左右に立ちて櫂を漕げば。舟はさいくとい響きつゝ。矢の如くに進む。

兩岸せまり來りて。日影たちまち暗く、削りなしたる數十丈の巖は。笋の如く劔の如く。天を摩して立てり。その間に懸れる一筋の橋は。晴天の虹とやいはん。天の浮橋とや仰がん。柴を背負ひて我舟をながめをる樵夫。犬よりも小さし。

舟は落つるが如く飛ぶが如く。水逆巻き波躍る中をゆく。右手の岩に彫りたる文字は。炯々潭と讀まるゝやうなり。坂谷朗盧翁の文もて傳へられたる天龍峽は是なりしか。

あれよ〜と人のいふに。左を見れば。虚空に聳ゆる巖の半に。龍角峯の文字こそあらはれたれ。目下部鳴鶴翁の筆にして。峯の字の長さゝへ六尺あり。なぞ口々に評す。このあたり紅葉がよしといへは。さや鄭圃こそといふもあり。さはいへ。八月寒風に吹かるゝの外。われ

又何をか望まん。

仰ぎ見る巖ちひさし我舟は

いく八千尋の下をゆくらん

水せまりては開け。開けては又せまる事。いくたびぞ、せまる處は波怒りて。岩を噛む聲雷の如く。渦となり泡となり瀧となり。舷にふれては。人々頭よりかぶるもあり。脊より打たるゝもあり。顔を突かれ。胸を襲はれ。あはやといふまに。満身すばぬれになりぬ。防禦線を張ると稱へて。廣げたる蝙蝠傘は。水の力に勝つ能はで。骨一つ折られたり。舟かゝる急流に至る毎に。人みな快と呼べは。舟子は權を右に左にして。舟をあやつり。前にあたる岩をよけんとしては。竿もて突きつゝゆく時もあり。その突く竿は。岩と舟との間近くして。弓

の如くに曲る。

真下りに下る小舟の舳さきには

岩も片よる心地こそすれ

水はやし舟こゝちよし行きちがふ

いはほの松もあとに走りて

舟走れば共に走り。舟とまれば同じく止まる山の緑の。滴るが如く若やかなるは。新樹の頃ともいひつべし。木の間くくに。躑躅と見え黄ばみ赤ばめるは。秋に先だつ葉の色か。夏と秋ゆきかふ空を棹すにも似て。身は羽化登仙するの思あり。

岩の上には松楓なぞ枝をかはし根をあらはして。そのひまぐには。

珍しき本草眼を奪ひ。苔なめらかに。葛葛なぞもて纏はれたる處も多し。葛の花野菊おもしろく咲きまじりては。波の響にゆらくと揺る。し

山開くる處に村あり。又は山ながら。其半腹に作れるもありて。大かたは板屋に丸石おきならべたる家屋の。或は玉蜀黍の間より。或は松の木陰より。或は竹の葉末より。半面もしくは全身をあらはしたり。主は何くぞ。子供は何くぞ。山に生涯を送るもあらん。水に身命を任すもあらん。雪より白き石もて敷かれたる汀の方には。小舟おほく繋ぎならべたるを見る。

大島添岸などを経て。満島に着く。人家おほし。巡查と檢疫掛とは此處にて下りぬ。雇はれたる十二三の少女きたりて。身にあまる客の太行李を脊板に載せ。跣足に焼石ふみしだきつゝ里に持ち行くも。生活の一つにやあらん。

船頭も晝飯せんとて。飯櫃かへて行きたれば。人も我もこゝにて辨當ひらく。兩手を廣げても握り切れぬほどのむすび二つは。飯田の宿にて包みくれたる。我今日の命どかし。中には刻みたる味噌漬の茄子を入れ。海苔もて巻きたる手際はともあれ。其味いかでか天龍下らぬ人の知るべき

こゝを出でたるは一時なりけらし。日あつく照らして。水も石も焼けなんどす。されども流急なる處を行けば。岸馳せ樹翔りて。寒風たちまち肌を刺せり。波よ泡よ。身を打たば打て。舟越さば越せ。馴れて恐を忘るゝは唯汝のみ。

信參遠の境も過ぎて。西渡にしんさうに着く頃。村雲にはかに迷ひて。夕立さつと落し來る。水叫び山答へて。天地六合。千軍萬馬の聲の中に立てり。

暑さは何く。日影は何く。されども雷は昨日の如くに響かず。

岩の上になびく草木の風見えて

夕立くだる天の中川

これより下は。川やうゝに急流すくなくなりて。兩岸の人家も。一村ごとに開けたり。さはいへ。二見の浦めきたる岩の立てるなぞありて。見るべき景色は少なからず。

雨やみ雲散りて。紅粉に似たる夕陽は平なる水に浮べり。牙なす岩と戦ひし波も。今は怒を収めて平和の歌や歌ふらん。帆懸舟の心地よげに上り來るもあり。岸に沿ひては。から舟引きつゝゆくも見ゆ。此舟時又まで歸るには。何日かゝるぞと問へば。急ぎて四日。いそがねば七日なりとぞ。船頭は言ひし。

二又にて上る人の多きは。中泉のステーションに近ければとぞ。川す
でに人間界に出でたり。信濃の山雲深うして。顧みれども既に見えず
一日の快遊夢かうつゝか。

六時半鹿島に着きぬ。神社の木立ものふりて。家にぎはしき漁村なり
車馬ありやと問へば。明朝ならではなし。されど別仕立ならば。唯今
にてもといふ。こゝより濱松まで五里。普通は一人三十錢。別仕立は
十五錢増にて。四十五錢を六人分拂ふべしとなり。あたかもよし。兵
士や商人や。同行五人を得たれば。事すみやかに調ひて。夜道を走ら
す。村祭などありて。提灯にぎはしく。行きかふ少女。袖すゞしげな
り。

濱松にては。いつもゆく朝陽館に一泊し。翌朝汽車にて。昨日別れし

天龍川を渡る。雨糸の如く亂れて風あらし。あはれ六十里の水の上に住
む友。わが無事に下らん事を祈りつゝやあらん。さるにても此雨きの
ふならずして。舟路の妨を爲さざりしこそ幸なれ。諏訪の大神の御惠
かうむれるに似たり。

天 龍

みすゞかる信濃路いで、

參河の岸うちあらひ

遠江に走りながら、

天龍は國の早川

眞くだりに船さしくれば

前に見し千尋の岩は

見るが内に舳先かすめて

たちまちに跡にさかりぬ

さかさまに走りゆく山

立ちながら躍りゆく松

しばらくも舟はとまらず

時のまも岸は休まず

あはれこの岩きる水に

舟の道たれつけそめて

陸くわのかば三日ゆく道を

十日にて下し初めけん

川上の諏訪の水うみ

川下の遠江灘

よそならで呼ばへ答へん

艦に舳さきに

親の墓 (唱歌)

一

松風さびしき親の墓に

詣でし心を誰か知らん

こぼるゝ涙の水よ雨よ

とゞくか聲なき苔の下に

二

此身を育てし親のめぐみ

戀ふれどかひなし今は夢よ

わするな我友父母のある日

つかへん心を朝に暮に

三

慈愛の笑顔も夢には見えぬ

教への言葉も耳を去りぬ

うつゝに残るは墓のしるし

おもへや親ある人の身にも

朝の歌 (唱歌)

一

月影しろく霞に消え

雲雀の歌は野末に満つ

今こそ朝よ急げ里に

柴賣る少女花賣る翁

二

春風やぶる小蝶の夢

朝露しめる堇の床

今こそ時よ急げ野邊に

菜を摘む少女木を伐る翁

三

雲なき空に日ははや出で

色とり添へし梢の花

今こそ春よ急げ小田に

耕す牛も種蒔く子も

やもめ鳥 (西詩翻譯)

一

あはれ一羽のやもめ鳥

わかれし夫や慕ふらん

音もかなしげに冬枯の

森のこずゑに今ぞ鳴く

北風は枝を拂ひ

さゝ波は木かげをゆく

二

木の葉はいつしか散りはてし

森にはのこる陰もなく

土さへ秋をとめねば

水車の聲ひとり

にはひを送る花もなし

寂寞のうちにひびく

京都は近し

さゝ波や志賀の湖

窓ちかく波うちよせて

雲のゐる比叡の高山

たかづくに笑みてぞ立てる

わが戀ふる京都は近し

わが車のゆみは早し

かへりみる粟津の森は

いつしかと姿かくれぬ

逢坂山うしろになりぬ

あしびきの山科すぎて

稻荷かむへて

雨後の朝 (西詩翻譯)

一

夜もすがら吹きあれし

風も雨もなごりなし

晴れゆく空に昇る日の

光は今ぞしづかにて

小鳥は遠の森に鳴き

鳩はわれから美しき

其音に聞きや耽るらん

鶺鴒さぎぎの歌に鶯かしらり鳥の

こたふる聲もまじりつゝ

水おと清くひびくなり

二

天つ日を好むもの

たれか家にこもるべき

朝を喜ぶ空のいろ

かいやきわたる草の露

こゝちよげなる野兎は

見よや汀に走り來ぬ

足搔あがきにちらす白露の

霧と立つさへ妙なるに

日かげは更に立つ霧の

けむるかたにぞ映じゆく

小穴いち子の柩前に告ぐ

あはれ小穴いち子の君。君は我家に生れざれども我子の如く相したし

み。君は父母を異にすれども我妹の如く相なれつるものを。思ひきや年月長じたる我を置きて。齡みじかき君の先づ逝くべしとは。

思ひ出づれば君の我門に入らんとて來りしは十一年の昔なりしが。志を立て、此地には出でたれども。たよるべき親類もなく。事はからはん朋友もなければ。家に置きてよと請はれたり。まだ見も知らざりし君なれども。いかでかゝる志ある人を。教へ導かばやと思ふ心切になりて。遂に諾なふ事となしぬ。是ぞ君と相知るの初なりける。

のち女子高等師範學校に入るとては我を證人とたのみ。卒業して任所に赴くとは我を中宿とたのみ。去る時來る時。憂ある時喜ある時。互に訪ひ訪はれ慰め慰めらるゝ事いくたびなりしぞ。

先の妻うしなひたる時。われを慰めて悲を相分ちしも君なりき。今の妻ひかへたる時。われを祝ひて喜を相共にせしも君なりき。君が一身に集まり來れる年頃の不幸を訴へて。未來の力とたのむは先生のみと言はれし詞は。今なほ耳にあるものを。思ひきや頼まれし我は残りて。頼むと言ひし君の先だちゆくべしとは。

君の福井女學校に赴任するとて。故郷より我家に來り宿りしは。去年の四月上旬なりき。折しも我は伊豫をさして旅立たんとする時なりしかば。打ちつれ東海道の汽車にて。花見つゝ行きし楽しさは。忘れんとしても忘れず。藤澤の桃。山北の櫻。此春も共に見ん人を待ちてやあらん。

俄に腹いたみて堪へがたかりし我を濱松の宿に看病せしは。獨り君なりしものを。思ひきや看病せられし我は健康にして。今はの君を看病す

るの人とならんとは。

いにし十三日の夕べ病おもくなれりとの知らせを得て。急ぎ君の病床を見舞ひしに。君は雙の眼を見開き。長々お世話様にと言はれし聲は。針の如く氷の如く我胸に響きしものを。思ひきや之を最後の詞として。又共に相語る能はざる面影をのみ留めんとは。定なき世にもあるかな。いち子の君よ。君は眠らんとして枕すべき父母の膝もなく。末期の水さゝぐべき姉妹の手をも持たずして。遂に旅寢の床の露と消えぬ。今はの心細さ如何なりけん。されども同窓の友あまたありて後の吊をなし。千年の形見を此青山の野邊に留めんとす。せめてもの喜と思ひ慰み給へかし。

此世の別に今又何をか言はん。言はんとすれど。胸せまり涙あふれて

唯打ち泣くのみ。あはれ悲しきはいち子の君よ。

芝

靴ぬぎて踏みごちよくなりけり

すみれもまじる野邊の芝草

樵

つまぎこる已が響きの外に又

友なき山に今日もくらしつ

灸

身を焼かんものとも知らで春の野の

若葉のよもぎ摘みぞのこしゝ

鐵

射とほしゝ人のかひなに比ふれば

うすさやいかに黒金の楯

軍

みだれちる玉のしたにも大丈夫が

ゆく一すぢの道はありけり

死

あすは身の上ともしらで古つかの

ほとけの名讀むあはれよの中

塚

はひかゝる鳶も青みて古つかの

あるじ戀しき春風ぞふく

フルベツキ博士を悲しむ

三十一年

夢ならば覺めよ。幻ならば消えよ。フルベツキ博士逝けりとの悲しむ

べき音づれは。

然れども遂に夢ならざりき。遂に幻ならざりき。博士の靈柩は三月十日をもて名残の門出をなし。住みなれたる赤坂の家に別れて風寒き青山の墓地に送られたり。相會する數百の朋友。たれか追慕懷舊の涙に咽ばざるべき。柩を飾る花束の色も。墓を圍む讚美歌の響も。今や再び博士の眠を破るに由なし。

おもへば一昨年の春なりき。余が始めて博士の家を訪ひしは。博士一冊の古びたる書を棚より搜りて示されたるは。貝原益軒の文武訓なり。博士曰く。是は私が文章の御師匠様で御座りますと。見れば紙毎に青き赤き黄なる緑なる鉛筆もて。漢字には假名を附し。妙句には文法を解剖し。餘白もなきまでに愛讀の跡を残せり。宜なるかな博士が和文の。よくも彼翁の面影に髣髴たること。

博士又曰く。余は御國の雅言を深く愛す。其語調の優美なるは。漢語俗語の遙に及ばぬところなればなりとて。てにをは係結の妙味ある説など述べられたり。博士は尙も自ら作れる日本文法の一覽表を出だしこれを今一たび訂正せばやと思ふこと久し。夏の休などにや着手せましとて。熱心に意見を語りつ問ひつせられしは。昨日今日の心地するを。其事つひに成らずして。再び語らぬ人となる。いかに定なき世の中ならずや。

いつにかありけん。余は暇を告げて歸らんとせしを。玄關まで送り來つゝ。一室にありし盆栽を指さして。是は英語にてメイデン、ヘアと名づくる草。乙女の髪とも譯してんやとて微笑せられし事。なほ目

に耳にあり。

わはれ博士が演説と文章と。之を聞き之を讀みたる人は世に少なからざるを知る。然れども博士が遺されし和歌あらんとは。思はざる人こそ多からめ。一日余に示されたる三首あり。曰く。

常にかく我をわはれみ給へれば

なほいつまでも永くわはれめ

常にかく我をいたはり給へれば

なほいつまでも永くいたはれ

常にかく我をさきはへ給へれば

なほいつまでも永くさきはへ

是れもとより賛美歌として詠せられたるもの。常の和歌もて之を見る能はざれども。其風調の高きは。人をして敬服せしむるに足る。

博士よ。博士は我國に來り留まること四十餘年。その間我國のため。朝に野に文明の指導者となりて。盡されし功業の大なるを謝す。博士よ。博士の魂は長なへに天父の側に在らん。然れども其徳と其譽とは。印して永く我國民の上に留まる事を信せずんばあらず。さるにても春色やうく浮ばんとする愛宕の山。品川の海。あすよりは誰が爲めにか主なき葵坂の家を見舞はんとする。

月前雁

月かけのそこにおちくる聲すなり

秋も夜寒の衣かりかね

月の歌の中に

中々にふきのこしたる軒端より

もるかげうれし夕ぐれの月

おもしろき竹の墨繪を窓の内に

かけるや月のすさびなるらん

月みんとこよひも人にとはれけり

野邊よりつゞく庭の通路

山のはの松のこすゑにたゆたひて

おちこぬ鞠や秋のよの月

ほりすてゝ人は別れし故さとの

池こそ月のすみかなりけれ

をとめ子取る針ならで秋のよの

月も雲間や縫ひてゆくらん

露

稻のうへにおきたるみれば夕露も

うれしき色はある世なりけり

虫

いづかたに枕さだめん我いほは

西も東もむしのねにして

秋雨

たびごろも薄き袂をいかにせん

すゝきにかゝる秋の夜の雨

洋 食

白布おほひたるテーブルは。窓に面し壁に添ひ。又は中央に横たはりて立ち。半ば開きたる赤菊に。梅もどき折りそへてさしたる花瓶は。その上に飾られたり。

之に臂のきよせて向ひたる客。こゝに三人。かしこに二人。あるはナイフとフォークを左右にして。肉を切るもあり。前なる器を引きよせてソースを注ぐもあり。ボーイは時々來りて。次の料理を前の皿と取りかへてゆくも。忙がはしげなり。

誰か知らん。窓の外に乞食の來りて。あはれなる聲に呼びつゝあらんとは。唯見る肉は櫻の花よりも紅に。酒は春の水よりも濃きを。

あごゆく車夫

車にて丸の内を行く。車の十や十五や並ぶとも妨なき道を。はらたしくも我車夫は。人の車のあとをくゞとゆくなり。何とて廣き方をゆ

かぬぞといへば。此方がらくなりとて猶すゝむ。宇宙は廣し。然るに世には此たぐひのみこそあれ。

今夜の月

いで、見よと言ふ聲は。戶外にひゞけり。聞く人いかでか。今夜の月にそむきて臥すべき。迎へがほなる鈴虫は。聲ふりたて、遠近にあり。送りがほなる白露は。玉をみがきて葉毎にあり。あはれむかし故郷の窓に。父上と見しも此月なりしよ。月あに二つならんや。影たゞ一つならぬ心地こそすれ。

黄金の光

三更戸をさゝんとして窓を開けば。晝よりもあかるし。出で、庭をあゆむに。綿の如き雲のひまより。さえわたる月。黄金の光を散らして。笹の葉（#）に。萩の葉に。芋の葉に。薄の葉に。霜ときらめき氷とかいやくさま。寫真も及ばじ。況んや筆かぎりある繪をや。虫の聲遠く近く聞えて。小川のながれ音楽よりもすみたり。知らず今夜の月を。此里に賞する人。我外に又ありやなしや。夜を守る火影のみ。簾のあな。たにはほのぐらく見ゆ。

萩の紅白
庭の秋萩はころふる頃となりぬ。赤きは。多く咲きたるを。遠くに見るにうつくしく。白きは。一枝折りとりて。瓶にさしつゝ見るもいとなつかし。色によりて趣をことにす。

二十六夜待

ふけゆくまゝに。一天ぬぐふが如し。芝の愛宕山にのぼりて。二十六夜の月を待たんとす。わが住む處は牛込の奥。人はいへり。今夜の月は近くて目白。遠くて九段などこそよからめど。されど賑見るも又興あらんとて。十時に家を出で。徒歩して彼の山につきしは。十二時なりき。

をなし。垣の外に垣をつくる。呼ぶあり叫ぶあり。押されて泣くあり。突かれていさかふあり。木にのぼりたるは巡查におろされ。一人五錢づゝにて。七八人の客を立たせたる椽臺は。重きに堪へずして折れたるを。わが見たるさへ四つに及びぬ。臺折れ客たふるゝを見て噤し立つる鬨の聲。雷の如くにひびく。電気燈ひるよりも明るく照して。氷うる店。すしうる店。菓子を賣り。梨子を賣り。酒を賣り。煙草を賣る店。道をはさみて。數へもつくすべからず。大きな笹を頭にのせて。枝豆くゝと呼びあるく女は。梅の鉢植さしあげて年の市縫ひあるく男よりも。かひくゝしげなり。

おのれは女坂をあがりたる處の岸にのぞみて。桶の蜜柑の如くもまれながら。人と共に待つ。汗ながれて瀧の如くなれども。肩すれ腕まじは

りて。手巾持つ手を顔にあつる事だに叶はぬ苦しきよ。

さもあらばあれ東はいづくぞ。渺茫天に接する武藏野の原は。たゞ暗黒の色に包まれて。市民百三十萬の帝都。ただ寂寞たる眠のうちにあり。月は何くよりか出づらん。あの二つある電燈の右なるべしなど。しばし見たりしといふ人は語る。

一時も過ぎぬ。新聞によれば。二十七分に出づべしといふもあれば。二時ならではといふもあり。富貴功名なものかある。億兆心を一にして望むところは。彼蒼天の月のみ。彌陀三尊來迎の姿のみ。

三尊來迎の時は來れり。待ちに待たれつる月人男は。ほのぐらき地平線の上に水蒸氣を破りて立てり。拍手のひびき。喝采の聲。ねぐら定めつる森の鳥をも驚かせんとす。

然れども我見たるところは。海にうつれる燈火の如き赤き光の。地を離るゝ二尺もやと思ふあたりに。あらはるゝまもなく。石燈籠の窓めきたる形になりて。紅の色うつくしくのぼりゆくを。見とめしに過ぎざりしこそ遺憾なれ。

千里打ち晴れて雲なき今宵。世にいひさわぐ三体の姿を。さだかに仰ぎ得ざりしは。水蒸氣の濃かりしたためか。抑も年によりて月にも出來不出來あるか。言ふ勿れ。未來に多望にして現在に失望なるもの。人間世界にも何がし内閣のあるあり。獨り二十六夜の月ならめやは。

あやつり獅子

二つの人形に使はれつゝ走り出づる小獅子。身は數十の糸につられて。人の手にあり。笛三味線の音にあはせて。人さまごとくに指をうごかし。或は口にくはへて伸べゆるむれば。獅子は頭を振り身を躍らして。舞ひ狂ふさま。活きたる人間も及ばぬに似たり。或は頭をまげて尾をかき。或は口かみわはせて息づきすれば。人形は足ぶみをなし。聲も立つるばかりに興がり遊ぶ。見る人拍手して妙と呼ばざるはなし。名づけてあやつり獅子といふ。知らず今日の政界。此たくみなるあやつり手ありやなしや。

日蝕の日の朝雲の少しいでたるを見て。

あくるよりまたる、空のけしきかな

心のくもはれくもりして

月にのみいとひなれたる浮雲の

ゆくへあやふき朝日子のそら

汽車の出でんとする時。ふと線路の上に取りおとしたるものあり。係りの役員に届けおきたれば。次の停車場につくや直に窓よりわたしくれたるにぞ。乗合の人々その速なるに驚かぬものなかりし。

おちたるを拾はざりしは昔にて

ひろひてかへす御代のうれしさ

米の價たかしひくしなぞ人々の言ひあらそふを聞きて。

高しとも低しともいはし落つるかど

おもへばあがる杵のゆくすゑ

人の一週忌に墓まうでして。

きのふまで掘りても見んとおもひしを

石どかはりし君ぞかなしき」

わかれつる形見の野邊を來てみれば

日かげにのこる露もありけり

河合幼稚園の子どもにあたへんとてよめる松竹梅のうた。

此園におひたつ松のわかみどり

雲ゐる峰のものとなるまで

おほし立てし心をしりて眞直なる

節をなかへそ園のわか竹

春ごとに色かをそへて咲きもいでよ

まだつばみなる花のをさな子

石黒知雄翁の古稀にあたりし年。夫婦して寫させたる肖

像あり。此人一家をおこして先祖と仰がるべき人なれば。

肖像と共に長く寶とせまほしきに祝の歌よみてと。其子な

る人の乞へりしかば。

玉くしげ二見のうらの二つ岩

うごかぬ宿は千代に八千代に

石黒守稻翁は信州屋代の人なり。八十七の齡をもちとはで。

雪ふみわけつゝおのが宿りを訪はれしかば。

われも又君にすがりて分け入らん

千代のおく山みちしるべせよ

栗の木

曉より吹きあるゝ風に。我屋をおはへる栗の木は。すこき聲して半より二つに折れぬ。下枝は地におきながら。大きなるかたをば。瓦の上にはらばひ伏せたり。

子供は橋なりとよろこびて。枝の下をあちこちへくゞりぬけつゝ。落ちたる實を樂しげに拾ふもあり。上なるいがに頭をさゝれて。首をちゝむるもあり。大人もまじりて集めたるいが栗。大きな籠に三つ四つに及びぬ。

あはれ此風。今十日もおくれて吹かましかば。時いたりてゑみたる木の實を得つべかりしに。あはれ此栗。今一日もおくれて此風にあはましかば。枯葉ちりはてたる枝の輕さに。禍をもまぬかれましもを。夜ふかき燈のもとに。からりと聲して落つる聲さくは。又いづれの時

ぞ。朝とくおきて小兒と共に拾ひあつむる樂しみは。又いづれの時ぞ折れたる木ふたゝびかへらず。過去の樂しみ重ねて來らじ。おもへば我屋のために風おほひしこそ。汝なりしものを。

猿芝居

赤城明神の祭にまうで。子供と共に猿芝居を見る。熊谷いで、おういゝと招けば。敦盛かへり來て切合となり組打となり。一たびはゆるさんとせしに。平山に呼びかけられて。哀しみながら首うちとるに至るまで。よくも人に似せたるものかなと。喝采せざるはなし。世に歌の大家と唱ふる人ありて。或は景樹の風なりととなへ。或は文雄の調なりとはこり。其口のきによくも似ん事をつとむ。何ぞ猿芝居に類するの甚しき。

鹿

朝狩に露ふみならし

夕かりに草ふみしだき

ますらをが分け入る山の

谷陰に鹿ぞなくなる

なが妻の取られし知らで

なが親の狩られし知らで

夜を寒み鳴きて戀ふらん

風をいたみわびて呼ぶらん

明けぬまの命のこゑを

待ちつけてうれしと昨日

何おもひけん

月草

晴れわたるみそらの色に

装して立てる少女よ

谷川の草葉がくれに

見えかくれ靡く姿よ

香ににはひ時めく花を

よそに見て垂れ伏すまみよ

ゆく水に裾をひたして

涼しげに打ち笑むさまよ

里の子が螢とよびて

うつくしむ少女ぞ汝はなれ

歌人の月となづけて

もてはやす少女ぞ汝は

おくりけん愛あいのしるしか

朝霧の手づからかけし

露の白玉

月と我と (唱歌)

一

さしひく汐は鼓のしらべ

岩こす波は太鼓のひびき

晝見し路はせまくなりて

たゞ二人月とわれと

二

島かげ黒し波路の末に

月のみ白し汐路の遠に

晝見し釣舟いまは失せて

たゞ波と空とわれと

花と虫 (唱歌)

一

集めよ花を野邊にいで

なでしこすゝき女郎花

こゝにもまた我木香

あれにもまた藤袴

かへらば父の瓶にさして

博物學のさらへせん

二

集めよ虫を籠のうち

すいむし又はきりぎりす

あれにもなほ飛ぶ蟹

こゝにも鳴く齧虫

かへらば草と水をやりて

博物學のさらへせん

貝

春秋の花も紅葉も

一さかり盛すぐれば

朝雨にしぼみこそゆけ

夕風に散りこそ失すれ

散りも失せずしぼみもゆかで

どこしへに美しきものは

砂の上に波のよせくる

いろくゞの波の花貝

こぼれたる梅にも似たり

山茶花の散りしにも似たり

ぬれたるは拾ふをとめの

くちびるに似て

送別

開發社副社長辻武雄氏の教育視察にきて清國に出で立てる時

泰山の高さ幾ばく

楊子江ながさ幾ばく

地誌讀みて童も知れり

地圖を見て少女も知れり

その山はよし高くとも

その川はよし長くとも

國民の知識みじかく

人草の心低くは

四百州なにゝかすべき

北空に口を廣げて

睨ひ居る鷺なからめや

我國は隣のよしみ

よそに見て過ぎましか

國弱く民おとろふる

源を窮めざりせば

救ふべきすべこそなけれ

君が行く旅路たのもし

執る筆を劔にかへて

國のため世のため盡す

教育の視察のつとめ

成しをへて早立ち歸れ

夏の日に雲見る如く

天の下仰ぎ待つらん

旅にやはあらぬ

奈良の鹿

旅人あり。奈良の春日にまうづ。茶店の嬸に呼びとめられて。煎餅を買ひ鹿にあたへしに。あと追ひ來りて。皆になりたるをも知らず。はては鼻先のばして袂に突きつけ。手にさへ食ひつかんとす。

旅人叱りて曰く。鹿よおのれ今まで與へざりし時は。乞はんともせざりしに。一つやれば甘えて其二をねだる。さればこそ古人は汝を馬と共に。おろかなるものには數へしなれど。

鹿いはく。さなのたまひそ。思になれて本をわするゝは。人間界にぞ多きと聞く。なぞておのれをのみ責め給ふやらんと。旅人又言ふあははす。更に煎餅一つ投げてこそ去りにしか。

三 本 足

今より八年のむかし。牛込にうつりし頃。神樂坂を散歩するに。十四五歳ばかりなる盲目の少女。片手に三味線を取り。片手に青竹の杖をつきつゝ。人の門にたどりより。杖をば俣に挟みて。調子もとゝのはぬ唄うたひ。弾きならしをるを見たり。おのれ戯むれに。杖の兩足と共に並び立てるさまをもて。三本足と名づけつ。

かくてゆけば必ず見ぬ日なく。見ればいつも撥音をさく事。久しくなりぬるまゝに。家は山吹町にて。酒のみの母ひとりを持てり。之にかふるにいと孝行ふかく。おのが貰ひたるものは。大かた其飲みしろにあつるなどの。嘶もつたはりしかば。雨の日雪の日。見るたびにあはれとおもふ心も。いよゝかきなりぬ。

はじめは唯その盲目なるがために。ものあたへつゝ聞く人もありしが。今は撥づかひさえわたりて。聲こそよからね。音色おもしろく聞きなざるゝにいたりしは。月日の功とはいへ。其わざに執心ふかく。日毎につとむるが故ぞかし。

ひと日常磐津をしふる人の門をどほりしに。三味線もちたるまゝ。格子に耳をつけつゝ。餘念なく聞きをるものあり。早くもかの女なりける殊勝さよ。心さへとめなば。世に何事か師匠ならざらん。よき師につきてだに進みかぬる目あきは。これに耻ぢざらめや。

半町ゆきてかへりみれども。猶うごかず。一町ゆきても同じさまにて。聞きとれるたり。冬の日はせまりぬ。あはれ今日えんとするもの。暮までにいづくばくぞ。

故郷人の鯛を贈れるを謝す

春の日の霞むあしたに

散る花の浮べるなして

釣にゆく舟こそ見ゆれ

秋風の寒きゆふべに

もみぢ葉の散りかふなして

網引せし舟こそ歸れ

筑紫路にたゞに向へる

宇和の海は網子よぶ聲の

朝夕に賑ふところ

すなどりの榮ゆるところ

ぬば玉の夢にうつゝに

今もなほ心はゆけど

ゆきかぬる身をあはれとや

百重波へだゝる海路

はろくによせし此鯛

紅のひれもうろこも

さながらに生けるが如く

ともすれば撥ねも出でんと

思ふまで見ゆる此たひ

いざ子ども酒とく湧かせ

神にまつり羹にして

妻に子に共にわかたん

友のなさを

瀧

一

解きみだしさらせる布よ

かせに掛け繰り引く糸よ

山姫のこゝや機殿

白妙の簾ぞおろす

なかばより谷は絶たれて

ふかみどり影もうつらず

汝ひとり世にうつくしき

ものはありけりな

二

一時ひとときに落つるいかづち

千軍ちいくさの蹄のひびき

山は裂け岩はくだけて

わが上を今にも打つか

吹きおろす松の嵐も

汝が路にふるれば消えて
汝ひとり世に心地よき

ものはありけり

三

白雲の空よりおちて

うたふ聲つゞみ打つ聲

この山をつくりし神の

神代より變はらぬ調べ

流行りゆく手にもさはらで

あめつちの板にぞ合はす

汝ひとり世に心たかき

ものはありけり

古きあこ

松風にのこる響きや

糸竹の調べのなごり

青柳に見ゆるすがたや

そのかみの舞の面影

きのふこそ薨つらねて

立ちなみし大殿小殿

いつのまに春は歸りし

いつのまに秋は來りし

石ずゑの跡も知られず

落ち散りし瓦も見えず

踏みわけて訪はんとすれば

いかにせん丈にあまりて

しげる蓬を

堀の内道

太鼓のおと遠近に聞えて。日蓮宗のお會式も明日になりぬ。いでや堀内の賑ひ見んとて。市谷より新宿まで汽車にのる。

秋草も。しりに黄ばみそむる堤のけしき。稻穂の末にうちなびく賤が屋の煙まで。みるものごとくにゆたけき秋なり。

あゆみて淀橋をわたるに。青葉をぐらくしげれる中を。走り下る水の色。藍地に胡紛なを散らしたるやうにて。ゑかくとも及ばじ。あゆみつかれては橋の欄干による人ごとに。紅なる顔の汗をふきつゝ。あな心地よやと呼ぶ。

中野町すぎて。いよ／＼田舎道にかゝる。ところ／＼に椽臺をすゑて、柿をならべ焼栗をひさぐ姫あり。知らず日毎に設けうるところいくばくぞ。

手ずさびに薄の穂をぬきゆく少女。こゝにもかしこにも見ゆ。空よく晴れたり。枝柿さげてかへる人。かちにて車にて。いくむれとなく向

より来る。學校よりかへりて家に待つものは。孫かむすめか。時は正午をすぎたり。しがらきといふ茶屋を出で入る客。うしほのわくが如し。奥には飯よ酒よと手を拍つ聲。下碑の答ふる聲。ひまなくひびく。此家一年の生計は。多く此二三日の内にあるならし。門前の乞食。慈善家を待ちえて。しばし文久一文の齋につく。

蝶か猫か

長女は琴をさらへ。次女は讀本をくりかへす。此間に眠靜なる幼女は。夢みるところ何事ぞ。蝶か猫か母の乳か。三歳の男兒は今しも幼稚園よりかへりて。民草のくのと呼ぶ。

住みたる家

市谷にかつて住みたる家あり。門前を過ぐる事ありしが。春毎に賞しなれたる櫻の梢は黄ばみそめつゝ。あはれにも門をおほひて立てり。日なたぼこりすとて寐ころびたる椽。子供遊ばすとて鞠なげたる軒など。健康に見入れられたるなつかしさよ。書齋としたりし四疊半には、今もあるじやすむらん。洋服かけたる影さへ。障子どしに見ゆ。隣には杜若つくるに妙をえし老人すみしが。いづちゆきけん。家は失せて。草原と荒れたるこそあはれなれ。見よやかしこに胡蝶の飛びゆく窓こそ。亡き父上のすみ給ひし御部屋よ。

物いはぬ石

たがために折りたる花ぞ

たがために汲みたる水ぞ

物いはぬ石のおもてに

ゑりつけし名さへ隠して

むす苔の色こゝろなし

今さらに思へば夢か

かの見ゆる岡をりのぼり

妹どわが紅葉見し秋

花つみし春

待つらん母

土に引く光もきえて

秋の日は早入らんとす

森さして寐にゆく鳥

三つ二つ消えたる跡に

のこさるゝ天地さびし

いざ我も家路いそがん

うすもみぢ染めたる山の

露ふみて歸りくる子を

母や待つらん

白石新井先生

落ちつもの木の葉ふみわけてゆけば。石の玉垣したる中に。三尺にも
足らぬ石婢は二つならべり。左なるは白石新井先生。右なるは其婦人
よと告ぐれば。おとなる人。この簡單なるものがと驚く。

おどろくなかれ。無情の苔は碑上の文字をかくすとも。先生が千載の
名をばかくす能はじ。折りたく柴の煙ふきつる風は。今も來りて枯葉
と共に墓をめぐる。

秋の雨

『春雨と呼ばれて。花まつ人の望を屬せられしは。吾なりき。夕立と呼
ばれて。暑さ畏るゝ人の心なぐさめしは。吾なりき。

秋ふけて歌人の窓をとへば。開きすてたる書二三卷。かきさしたる料
紙と共に机にあり。あるじは露もつ菊をらんとてや。花ばさみもて庭
にいでぬ。いでや傘もるしづくとこばれて。傘成りたる上の句をおど
ろかさんも。興あるべし。

石燈籠のかなたには。琴のねも聞えたり。軒端の芭蕉をつたひて。歌
きゝがてら見舞はんはいかに。

たゞあはれなるは。貧しきあたりぞかし。なりはひの餅賣にも出でられず。土はこびにもゆかれざるは。わがしわざよと思ひやるこそ。心ぐるしけれ。今もひとへの衣まとひて。破傘わづかにかたむけつゝ。豆腐屋よりかへる少女も見ゆ。垣根の萩にかけたる露も。かれらが目には玉とも見ゆまじ。』

青山の原

夕ぐれ青山の原を過ぐ。風さむらして行きかへる人まれに。いろづく遠近の森は。日影と別れて。やうく煙りわたれり。をりしも鳥のつ友におくれてとびゆくなど。すべてあはれなる秋の心ならぬかは。いさくわれも家ぢいそがん。あたゝかき埋火のそばに。

農 家(唱歌)

一

門田の露にさらめく朝日

鳴子の音に群れたつ雀

小牛をつれて野にゆく子供

鶏よびて餌をやる少女

たのしきは田舎やすけきは農夫

今年の秋も八分のみゆり

二

藁屋をのぞく老木の松に

留守をあづけて田に出で暮らす

小犬はあとをおくりて畔に

小鳥は道をひらきて森に

しづけきは田舎たのしきは農家

肥えたる水はとなりの田にも

神嘗祭

一

八束穂の穂なみのたかに

なびき伏す小田の遠近

ひるがへる旗も見えたり

煙とむ家も満ちたり

たのしさは同じ心の

百千民うたはざらめや

神風の伊勢の宮居の

神祭おもひやるだに

かしこき今日を

二

里の子がどろろくと

うちならず神樂のつらみ
神無月けふの祭を

千代かけて祝ふとならし
しうどめに嫁もまじりて

搗く餅の音こそひつけ

いざや子ら今年の早稲の

新しぼり神にさゝげて

われもいはん

盲人の歌

一

木の間より漏るゝ夕日を

織り掛くる水の文

みどり伏す草葉を打ちて

わかれあふ波の雪

おもしろの小川の姿

忘れんとすれども去らず

その色はわが胸に

その聲はわが耳に

二

薄霧になかば沈みて

旅こそおもしろけれ。花の春もみぢの秋はさらなり。身さへ焼かるゝ
夏の日にも。指さき切らるゝ冬の夜にも。旅にまさる樂しみやはあ
る。

旅の樂しみ

女郎花ふぢばかま

面影はよそなれど

追風のにほふもふはれ

花の香のちりまじり來て

汝が時のうつくしさ

過去もなく未來も知らぬ

くれのこる寺の塔

こゝかしこ色づく木々の

照り返す夕げしき

わが心いまもさまよふ

入相の聲をしるべに

見し夢はのこるなり

聞く聲はなうりつゝ

三

謠ひつゝ野路のかたより

聲々にかへる子よ

汽車の道にて風景に富めるは。先づ東海道。つぎに山陽。さては九州なるべし。中にも田子の浦わを。富士見つゝゆく心地。外にたぐへつべきものこそなけれ。春日あたゝかに霞むころ。見わたすかぎり菜種なる中を。はしるたのしみは。大坂と神戸との間にあり。おのれ常にいふ。東海道線路の名物は。一に富士の雪。二に東寺の霞。三に箱根の紅葉。四に浦江の菜種と。なほこれに數へもらすまじきは。涼しき風に吹かれつゝ行く。濱名の海の鐵橋ぞかし。

宿屋はよきありあしきあり。一々品定すべくもあらねど。心ひかれしは岩淵の谷屋と。馬場の中村屋なりき。家のよきにはあらず。待遇のすぐれたるにもあらず。目の前にながめいだされたる富士の姿と。寐ながら見られし琵琶湖の景とに。笑顔よくもてなされたるためなりけり。

水戸の和泉屋にやどりしは。一月のはじめなりしが。仙波沼をへだてて。夕日のゝちの筑波をながめたるおもしろさ。今に忘れず。

土浦の笹本は。筑波のかへりに一泊して。日かげあたゝかなる二階の一間に。終日ものかきたるがため。親しみ外よりも深し。頃はもみぢの秋なりき。

信濃の岩村田にて。泊りし家を笹川といふ。淺間の煙ながめわたされ。夜なほ何となく心しづかなるやうに覚えしは。汽車の音の聞えぬ里なればにやあらん。此家の床の上に。わが作れる謠曲通解をかざりおきたりしは。今夜とまると。しりてにやあらずや。

長崎の縁屋より長崎灣にむかへる心地は。おのづから別世界なりき。

春の日やうく落ちて。海の上うす紫に霞みわたり。暮るればかゝれる舟ことぶく燈火になりて。赤く青く。星の如く花火の如くに。海をみたせる美しさよ。夜ふくるまで。風のひびきに三絃なぞ聞えて。おもしろき旅寐なりけり。給仕の少女ねんごろにもてなして。欄干によりつゝ地理説明の勞を取れりき。

京の三條萬屋にて。大文字火みしこそ面白かりしか。夜ふくれば。鴨川の水おと涼しく聞ゆる樓の上。いつまでも端居せまほしうさへ。おぼえられしを。

舞子の龜屋。あはれ今一度ゆきても宿らばや。霞みわたれる夕ぐれの海に。淡路嶋の火影をながめやりたる春の旅寐こそ。わすれがたけれ。
我身も須磨の巻の中に。おかるゝ心地せられて。

秋風

水のうへを低く飛びかふかげろふの

つばさに秋の夕風ぞふく

衣うつ槌のたえまに聞ゆるや

遠ざとをのゝ秋風のこゑ

秋花

秋の日の短くなりし夕べより

さきそめにけりつはぶきの花

秋雲

秋風にぶきのこされて山のはを

ひとりさまよふ雲のさびしさ

初紅葉

秋の雨はれたる暮にながむれば

一むら赤し産土うぶすなのもり

十月の末つかた碓氷時をかちにて越の

えだかはす紅葉のそこに聞ゆなり

谷ゆく水の山びこのころ

月のいろは紅葉の上に見えながら

片峯あかし残る日のかげ

さびしとも思はざりけり我かげの

ゆけばとномふ月の山道

もみぢ葉を踏めばこたへて山彦の

すこくも月にひやく夜半かな

ひなぐもり

明治三十年十月

小諸―碓氷峠―坂本

ひなぐもり碓氷峠の紅葉も見がてら。上野より汽車に乗りたるは十月三十日の朝ばらけなり。霧いと深くして見わたすかぎり海の如し。思はぬところに黄なる湖の出で來たるは。穗波ゆたけき小田なりけり。薄墨に畫がゝれたる藁屋。三つ四つ濡れつゝ立てるも。やうく見ゆ。

大宮すぐる頃より晴れわたりて。旭花やかにのぼれり。田に刈る農夫。川に濯ぐ少女。いづれか楽しげならざらん。菊咲く垣に板よせかけて。張物干し並べたるは。孫に着せんどの冬のいそぎか。抑も又田舎の市に賣らんとの賤が手業か。

高崎を出で、安中磯部とゆくほどに。先づ迎へ立てるは妙義なり。天を

摩せる奇巖怪石。粧ふに黄なる樺なる秋の色を以てす。若し碓氷山靈の招くあるに非ざりせば。かの見ゆる石門のほとりに。一夜の夢を結ばましものを。

いてふあり。ぬるであり。葛あり。葛あり。これと定めぬ山路の秋また捨つべからず。げにも二月の花よりもとはまこと。青葉の中にこゝかしこ染み交れるは躑躅に似て。紅の玉を貫きたる寺の柿あへ春に知られぬ趣あり。

碓氷にかゝれば。里やうく遠くして木の葉の色いよく深し。見あぐる峯。見おろす谷。紅ならざるは無く黄ならざるは無く。岩を染め水を照らして。風また酔はんとす。あはれ肱を伸ばして手折らば手折りもしつべきに。何の心ぞ。トンネルは忽に來りて。我眼界を奪ひ去

る事もしばしくなり。

風にはかに狂し來りて。枝を吹き葉を吹き雲を吹く。あれ見よ金砂もて
蒔きたる千鳥の。友よびつれて飛びのぼり。又舞ひくだるを。造化も時
には此戯をなして。人間の美術模造品を作る。

今日は峠をかなたに下りて小諸に宿る。里人來り語るも多くは紅葉の
上なり。或は淺間の麓の何がし寺こそと説き。或は歸りに碓氷を徒歩
にて越えよと勸む。心二方に迷ひて未だ決せざるに。立田姫は來りて
早や夢枕に立てり。

ひまもる風は身を刺す心地して夜も明けぬ。女の童火を十能にもち來
りて曰ふ。めづらしいものが來ましてと。驚き窓を開けば。米の粉に
似たる雪。ちら〜と枕邊まで散り來れり。げにめづらしくも信州

に宿りて。紅葉があるのに雪がふるの實景を見る事よ。硯はいづこぞ。
端書にしるして都なる家人を驚かさんとす。

旅衣うすきたもとに降りくなり

もみぢまじりの秋の初雪

もみぢ葉を染めし時雨の色みれば

花に似たるもめづらしきかな

今朝は小諸學校にて文學上の講話をなす事あり。聴衆およそ八九十。
皆これ文學に教育に熱心なる有志の人々。あるは二里三里の道を遠し
とせずして來れるさへ多しと聞く。亦樂しからずや。

講堂の窓に向へば。蓼科山藍の如く。其や、東に白き頂を見せたるは。
富士なるべし。あゝ彼山の雪と此岡の紅葉と。清潔なる地方人士の希

望を反射して餘あり。

十一月一日空よく晴れて春に似たり。宮原小次郎君は坂城より來りて昨日の會に列し。今朝歸らんとせしを。同じくは我を送りて碓氷まで行くべしといふ。嬉しくも此友を得しかば我志は決しぬ。

十一時何分の汽車にて先づ輕井澤までゆかんとす。與良佐野神津等の諸君は。送り來りて停車場に立てり。汽笛は鳴れり。小諸學校も早おどになりぬ。黄ばみわたる野山の色。うつくしからぬはなく。面白からぬはなし。

かくて輕井澤を立ちたるは十二時半なりき。宮原君は裾高くかゝげて身輕の装をなしたれど。我は脚半の用意も無ければ。依然たる着流しに。外套日和下駄の出でたち。誰か之見て。天下に名立たる峠を越ゆる

の客と思はん。然れども飄然羽化して既に信濃上野の境を打ち過ぎ。漸う谷深く人無きところに入らんとす。山靈知るあらば來りて我吟する歌に和せよ。花皆枯れて見る色もなき秋の山路の物さびしさ。蒸せる粟の如き女郎花は何くぞ。露さへ染めたる萩は何くぞ。夢は昔の草の枕に。立ちのこれる尾花。雪よりも白く。龍膽わづかに一盛見せたり。

入る事いよ／＼深うして紅葉いよ／＼深く。紅葉いよ／＼深うして山いよ／＼静なり。道を挾める梢の色。谷を埋むる木々の光。花か錦か。目見るべくして口言ふ能はず。時に和歌を記さんとして手帳を探れば。紙さへ紅の色に匂へり。

輿に乗じて道の險しさも覺えず。語りつゝ歌ひつゝあくがれゆけば。

谷水の聲ひとり遙に山彦を返す。

谷を隔て、見わたす山々。龍田の屏風を廣げたる如く。高尾の友禪を展べたる如く。口なし色に煙り唐紅に輝きて。其美しさいはんかたなし。あるは骨あらはれたる岩を粧ふあり。さては松の緑さへ奪はんとして。四面より圍めるもあり。雌黄もて朱もて燕脂もて代赭もて。誰か此色さまざまの秋を畫がき出だせる。造化心あり此工をなして。はかなき人界を慰むる事いくばくぞ。

落葉踏む音われながら凄く聞えて。鳥の聲かすかに梢にあり。時に一人の翁かなたより來りて。足早に過ぎんとす。見れば籠には芋と柿とを満たしたり。やよ柿賣らずやといへば。うなづきつゝ、荷をおろしぬ。人も我も喉かわきたる折からなれば。何ものゝ美味か又之に若くべき。

袂にも入れたり兩手にも持ちたり。噛みつゝ歩くも此中の一興ぞかし。

思はざりき紅葉ふみわくる奥山にして。斯かる仙菓を味ふべしとは。

夕陽やうやく隠れて光なほ峯の半面にあり。かたへは濃く。かたへは薄く。霞みわたれるが内に。夜霧の色は麓より一步々々と進まんとす。

此時の心。神ならずして誰かは言ひ得ん。空山寂として伐木の聲も聞えず。樵夫の歌も響かす。

忽にして遠雷の來りつゝ、漸々に近づくあり。雲なきに何の聲ぞ。電なきに何の響ぞ。知り得たり汽車の此山を貫き過ぐるなるを。窓を開きて夕ばえを見るの客。思はぬ木陰に我等の立てるをや怪しむらん。煙は紅葉の上に横たはりて。雲と集まり又霞と散る。

日既に沈みて木蔭なほ赤し。古人の愛せし楓林の晩こそ面白けれ。行

く人われらが外に又あらず。薄白く岩黒く。片破月は道しるべして。水の如き空に懸れり。夜霧深く前途を鎖して。顧みれば峠もなく紅蕪もなし。時間をもて之を測れば。輕井澤は三里の上にあるべく。横川は二里にして遠からんとす。石よ小石よ。汝もし情あらば。我疲れし足をして躓かしむる勿れ。

坂本に下り着きたるは。六時も過ぎたるべし。十年前には此に宿れる事もありしを。今は驛すたれ里あれて。又旅人を迎へんともせず。暖かげなる圍爐裏のそばには。鍬取りつかれし一家庭の。和氣洋々と圓居するを見るのみ。寒月いよ／＼白し。彼等は此に眠り我は更に霜を踏みて進まねばならず。

横川より汽車にて遂に磯部に宿りぬ。いにし年も草枕せし處なれば。

思ひ出づる事多し。打ちつれて妙義に登りつる友。今夜いづくにありて何事をか夢む。うしろに流るゝ碓氷川の水は。曉寒く昔の秋を語るに似たり。

明くれば宮原君は別れて再び峠に向ふ。霜白く旭かすめり。碓氷の山靈もし問ふあらば我ために傳へよ。今朝歌袋富まして東に歸りし客。深く汝の賜を謝しむたりと。振りさけみれば。淺間見えて烟かすみの如し。

老木の陰(唱歌)

わが故郷の川端に

立てる老木の柳陰

こゝに釣せし祖父上の

時の話を誰かする

たゞ老人はわがために

二

枯野に残る古塚の

苔の下なる文字はなに

先祖がこゝに戦ひし

時の話を誰かする

たゞ歴史こそわがために

三

岡邊の松の左手は

城のやぐらの跡と聞く

先祖がこゝに名をわけし

時の話を誰かする

たゞ歴史こそわがために

忍 耐(唱歌)

一

明け暮れ汲む井戸の繩

井桁を切るためしあり

つとめよや

二

たゆまず打つ雨の水

石をも掘るためしあり

つとめよや

三

あつまりては蟻の穴

土手をも抜くためしあり

たゆむなよ

謠 へ や 波 (唱歌)

一

唱歌を自由に謠へや波

自然の聲にて盡させぬ聲にて

岩越す波磯うつ波

二

踊を自由に踊れや波

足踏そろへて足踏そろへて

上ゆく波下ゆく波

三

遊を自由に遊べや波

友だちさそひて友だちさそひて

渦まく波飛び散る波

詩人の心(西詩翻譯)

汝が淺き心もて

詩人の心な苦しめそ

はかり得ぬ其ために

詩人の心な苦しめそ

流るゝ川のそれならて

清きは詩人の心なり

かゝやく光のそれならで

照らすは詩人の心なり

なほ涼しきは風に似て

石 橋 山(唱歌)

一

うしろを見れば石橋の

山風さむく吹きおちて

ひびくは園の聲やらん

伏木をのがれ更にまた
波高し敵ちかし

二

たのむ小舟はたゞ一葉

行末みれば安房上總
かすみの中に見えかくれ

むかふや味方敵ならん

また白旗の影もなし

海ひろし春あさし

たのむ小舟ははや陸に

三

舟には生死もろとみに

誓ひし武士の聲たてゝ

いさむや棹の歌ならん

あらしも波もあとに見て

陸ちかし敵とほし

たのむ味方ははやあれに

夕 空

一

うつくしの空の色

入日のあとに紅の

翼ひろげてゆく雲は

誰がおもかげを畫がくらん

戀しきは別れし人

二

なつかしの雁の影

友うちつれてあの空を

こゝろのまゝに渡るぞや

自在のつばさ楽しき身

戀しきは海のあなた

夕暮

一

遠山寺の鐘のこゑ

ひしく方より暮れそめて

林をこむる夕けむり

日影のこさずなりにけり

二

そびゆる杉の枝高く

つばさかすめて行く鳥の

ねぐらもそこにしめつらん

われより外の影もなし

三

たなびき残る雲間より

おちくる星のうすあかり

神のゑがほの面影か

海山とほく照らしゆく

四

海を家なる舟人は

たゞ汝が顔をしるべにて

波路に楫やすゝむらん

千里のそらに向ふらん

五

やどりおくる、旅人は

汝が影ひとりたよりにて

知らぬ山路やたどるらん

末野の里やたづぬらん

六

焼火たきびのそばに繰る糸の

ほそき山家のなりはひも

ひと目に見ゆる村つゝき

あはれ身にしむ夕べかな

七

この夕空のさびしきに

つれゆく鴈をかぞへつゝ

波のあなたに別れこし

人おもふ身やいかならん

八

春はすだれに散るさくら

夏は軒端に飛ぶはたる

秋の村雨冬の月

いづれも思のつまなるを

筑波まうで

明治卅一年十一月

筑波山—土浦

芋肥え柿あからむ頃、筑波山の紅葉見にと思ひ立つ。汽車の土浦に着きたるは二時なりしが、これより筑波町までは二里。急がば暮れぬ内に着くべしといへば。車を雇ひて土浦町を離れ。田の中道にかゝる。長さ松原を左に折れんとする處に茶店あり。柿蜜柑など并べて賣る。真直に行けば水戸街道なり。

間鍋村といふには。油障子もて圍ひつゝ、菊を見事に作れる家も見ゆ。此あたりに干しならべたる傘。秋山の茸に似たり。

藍もて天の一方に畫がゝれたる筑波山は。やゝ薄緑にて。鼻の耳立てたる如くに向はる。其ふもとに横たはれるは。小田山なりとぞ。

麥は一寸ほと伸びて。春待ちがほなるに。畑の境を咲き埋めたる黄菊。

すぎにし春の菜種山吹に劣るべしやは。水白く大根白き里川に。獨り
 黒きは鍬洗ふ少女の腕のみ。

薄き濃き木の葉の色。いたる處に畫師をや待つらん。

中々に秋おもしろし口なしの

下染まじる岡の松原

銀杏よりも黄なる蜜柑の。皮むきつゝ唇に送る少女。夕日の影に立
 り。

小田町ゆく頃は。日すでに里にあらず。今を梢を去らんとする光。山
 を樺色に染めたり。

秋さむき片山里の夕日かげ

ほしたる綿を霜かどぞ見る

日全く暮れたり。暮れのこるものは。うねりゆく野川の水と。堤の野菊
 とのみ。

北條町の半より。左に折れて山路にかゝる。空の色水よりも淡し。

天地の境を見せて暮れのこる

山やわがゆく小筑波の峰

白井といふ處にて車を下れば。車夫は提灯ひきさげて案内す。石多くし
 て歩みぐるしき路なり。町までは北條より一里。白井よりは半道なり
 とらふ。

顧みれば。海の如く廣々と霞みわたれるながめの末に。盃伏せたらん
 さまの黒きもの見ゆ。車夫は。あれこそ富士の山よと教へたり。

大空に今宵かたらん友もなし

富士のたかねと丈くらべして

石の鳥居を入れれば。鋸の如く峻しき石段の道となる。左右にところ
く家あり。燈火の下に箸とりて夕飯する宿の。樂しげなるなど見つ
ゆく。汗うるほひて。寒かりし夕風も。忘るゝまでになりけり。

筑波町は來りぬ。思はざりき此山中にして。頬白く唇赤き魔縁の住居
する。不夜城のあらんとは。

宿りは車夫の導くまゝに結束といふに定めたり。窓を開けば。象のや
うなる山ひくゝ横たはりて。空の海には。眞珠の如く青貝の如き星。
人に迫りて輝く。

夕飯をへたれば。直に床とらせて。寐ながら物書かんとするに。尺八
の聲ちかく聞えて。ホウカイなを唄ひくる乞食あり。何くやらん砧な
らぬ太鼓の音も響きて。秋の山彦おもひしほどに寒からず。

明くれば雨になりぬ。さりとて止むべきにもあらねば。ぬるゝ覺悟に
て朝飯を促し。箸とるゝ見わたすに。谷も山も霧こめて。雨いよゝゝ
しめやかなるに。軒近き桐の梢には。雀の飛びかふも見ゆ。行く道な
らずは。却りて興ある景色なるべきに。

昨日の車夫に案内させて宿を出づ。雨やみたり。石段を登りて拜殿に
ぬかづく。入口には御神橋とて。赤き欄干わたせる太鼓橋あり。雲に
簷ゆる樓門あり。寶前の額は。忝くも彰仁親王の御筆にて。神號の文
字たふとく仰がれ給ふ。櫻の紅葉のいとつやゝかなるが。銀杏の黄な
ると相映じて立てる美しさよ。

左へ坂を登れば。男体山道といふ石立てり。是より木の根岩角。すべ

る足を踏みどめつゝ。階子の如く急なる道を攀ぢのぼる。時々こぼる
 梢の露は。雨よりも繁く。燃え立つ顔に降りかゝるも。中々にくか
 らず。

枝さしかはす松杉は。天をおほひて晝も暗きに。立ちまじる木の葉の
 いろ。松明の光と見えて。道照らし顔なるも面白き山路なり。ことに
 美しきはぬるでにて。楓はあまり多からず。何やらん山彦かへして呼
 びこたふる鳥。わすれたるやうにて折々鳴く。

櫻塚といふに名木の櫻あり。藁葺の東屋には。ぬれたる床几を殘せる
 のみにて。茶をすゝむる姫もぬす。見わたせば。來し方の紅葉。松の
 木の間を染めて花よりも美しく。谷水の聲かすかに響き出でたるは。

畫師の筆にも寫し取らるべしやは。

うすからぬ色みせんとや村しくれ

夜の間は神のくだしそへけむ

山より走り出づる水を。笈に受けて注連を張りたるところに。石立てゝ
 みなの川としるしたり。戀ぞつもりての御製に入りたる水の譽は。
 流れての世にも盡せじと見ゆ。

此あたりより。楓やうゝ目に附きたり。青葉のまじりて見ゆるは。
 山ひろくして。神のたくみのいまだ届かぬにやあらん。

つくば山谷のもみぢば誰まちて

秋一しほの色のこすらん

登りつめたる處を。五軒茶屋といふ。平にして北の方打ち開けたり。
 まづ目の前に。波の如く魚の脊の如く横たはり伏して。ながめおろさ

るゝは蘆穂山。その右なるが我國山。左なるが加波山なりと。車夫をしふ。其こなたなる一村の人家は眞壁。遠く霞めるあたりや。木綿もて知られたる眞岡ならん。白くうねりゆくこそ櫻川よと。聞くにもなつかしさたゞならず。雲を隔て、「へ」の字なりに見えたるは。何くの山ぞ。いな山にはあらじ。雲ならんといふもあれば。たしかに山なりと論じ返すもあり。道づれならぬ旅人さへ交りて。物語にぎはしくなりぬ。茶店のあるじ呼び出だして判者に立つれば。あれこそ奥州境のやみぞ山なれ。二十番の観音ある處よといふにて。争はやみたり。判者言葉を繼ぎて曰く。此處は水戸浪士の籠りし時に。切り開かれたる跡にて。私共が茶店を出だし。此景色を御客様方にもてなし申すも。浪士のお蔭なれば。その大將たりし藤田小四郎様の御筆を額にしつゝ。

常に忘れずとて。指さし示す方を見れば。依雲亭の文字は黒くふすぶりたる板に残りて。藁屋の軒に仰がれたり。歴史といひ字句といひ。げにも由ある名物の一つとやいはまし。

此店にて夫婦餅といふを客に進む。搗きたる餅を小土器の大きさに作りて。田樂ほどの串の先にさし。大薬罐かけたる圍爐裏の廻りに。十も二十も立て并べて。遠火もて炙り居るさま。團扇にても乾しつらねたるやうなり。

焼くれば味噌つけて。杉の青葉敷きたる盆に載せ。又焼かぬまゝなるをも盛りませて。持て來れり。教へ曰ふ。焼きたるは女餅。焼かぬは男餅なり。男餅は包みて土産にし給ふ習なりと。一二三四といつまで羽根を筑波山と焼印せる。鳶の茶臺など求めて。こゝを出づ。

こゝより更に道をかへて。左の方に登らざるべからず。道いよゝく峻しく。紅葉いよゝく美し。最早そめのこしたる梢も見えず。花か錦か。黄なるさへ樺なるさへこきませたる。秋のわざこそ工なれ。

夜なゝに神や錦を急ぐらん

露と時雨を織姫にして

あへぎゝ嶺にのばれば。風寒くして。汗も何くにか行きつらん。千木高知る神の宮居は。南面してぞ立たせ給ふ。

こゝより女体山を北に望めば。同じ千木づくりの宮の雲透に見えて。呼べば忽ち答へつべく。旅人もし我より先にあらば。蟻の形してや見出だされなん。あはれ二柱の神代にかへりて。天の浮橋を此間に渡さましかば。

廣前より下を望めば。切り立てたる如き岩の底には。松の緑のひまゝに。紅の梢をこきちらせるさま。彩色よくせる土佐繪に打ち向ふ趣あり。若草に似たる松。躑躅に似たる紅葉。誰か此あたりに。隨身ぐしたる物見車を書き忘れし。今朝いでゝこし筑波町。遠く小さく見えて。いよゝく我立つ巖の天に近きを覚えしむ。

下りて木の間をくゞり。岩ふみしだきつゝ。立身石といふを見にゆく。十丈もあるらんと見えて。壁の如く立てる岩のおもてを。垂れたる鎖りつたひつゝ攀ぢ登るなり。仰ぎ見てさへ肝消ゆるところを。いかでか階子にて屋根に登るにも足ふるはるゝ男が。二十貫目の身を犠牲にして足踏みかくべき。止みなんといへば。さらば裏口よりといはるゝまゝに。後ろのかたに廻れば。げにも岩根づたひに行く道は附きた

り。

木を握り膝を突きつゝ。是もたやすくはあらねど。鎖の道ほどには如何でかわらん。

岩の上より見おろせば。腰をめぐる紅葉小さくして。仰ぎしよりも更に恐ろし。さるにても立身石見に来つる身の。鎖を得のぼらざりしかひなさよ。のぼらば大臣までは及ばずとも。次官くらゐにはなるべかりしものを。

五軒茶屋に歸りて。預け置きたる傘外套など受取り。是よりは女体山さして右の方に入る。雲やうく晴れて。日影たのもしく漏り來れり。

もみぢ葉を片敷き伏して筑波山

神に一夜の宿やからまし

鶴鶴石中岳の神社など拜み過ぎて。女体山の巔にいたる。社には宮守ゐて。御酒いたゞけと勧めたり。こゝも風さむくして震はるゝばかりなるに。神のめぐみの下露は。一脈の暖氣を腸に傳へぬ。

後の巖にのぼれば。眺望のとるころなく。霞が浦を案内にして。近くは土浦より。遠くは鹿島銚子のあたりまで。霞みながらも見やられたり。刈りはたたる田つらには。おりゐる鳥さへ見ゆる心地して。豊けき秋の煙たのしげに満ちわたるこそ。飽かぬさまなれ。さてもそなたの空に雲なかりせば。富士の雪とも物言ひかはさるゝと聞きしを。

この山の麓につゞきて。松林に包まれ立てる一むらの紅あり。車夫に問へば。白瀧なりといふにぞ。歸りに廻らんは如何にといへば。一里

半もあるべしとて。澁々なるを。強ひて勸めて下りに向ふ。赤き欄干の橋ありて。天の浮橋と名づけたり。渡る折しも。飛び散る雲の戯むれにや。顔に時雨を打ちそゝぎぬ。

引きあげし矛のしづくの面影に

村雨わたる天の浮橋

是より道また急にて。鎖の力を借る事も處々にあり。風神の窟。大黒岩。出舟入舟石などいふ類のもの。見つゝ過ぎつゝ。あまたある神社拜みめぐりて。胎内くゞりを抜け。高天の原といふ岩のものを經て。辨慶七戻といふに出づ。

いかめしき岩の二つに割れたる上に。又一つの大岩かぶさりて屋根となりたる處を。くゞりゆくなり。傳へ言ふ。武藏坊ある時釣鐘を脊負

ひて。女体山に登らんとせしに。屋根なる岩ゆるぎて落ちんとせしかば。七たびまで跡しさりしつゝ。遂に得くゞらずして止みにきと。唯をしむ。安宅の關には機智を出だしつる辨慶が。此山にては。上なる石をはねのくる智恵さへ。力さへ。出ださゞりしを。

ゆきくゞて木陰なき山を。うらがれの秋草ふみしだきつゝ。すべるやうに走り下る。いと心地よし。我本香の穂先。黒く残りて立てるも淋しきに。龍膽りんだうの紫ふかく咲き亂れたる。今一さかりを誰にとてなるらん。折り取りて胸に附くれば。惜むにやあらん。虫の音あはれに。ちんちろりんと鳴く

かへりみる神の高嶺は。雲うすくかゝりて。帷の中なる錦みる心地しつゝ。名残は盡せず。千木のかげ紅葉のいろ。晝よりも美しく夢より

もかすかなり。

薄衣かけたる雲の絶間より

こぼれて見ゆる神の面影

見かへれば雲より上になりけり

わが分けきつる山のもみぢ葉

白瀧のあたりは殊に木深くして。見あぐる梢もみぢならぬは無し。その間より晒せる布の色して落つる水。誰かは人界のものと見るべき。不動堂ありて。瀧の水を笕に受け。幾筋も落させたるあたりには。人宿す家立ち並びて。二階づくりいと静なるが多けれど。見に来る人は夏を主とすれば。今は戸を閉ぢて人影もせず。唯我と車夫とのみ。思ふさまに瀧を評し紅葉を賞すれば。水また自然の聲して。秋とも冬とも知らずがほなる歌をうたふ。

歸さの道は山の麓をめぐりて。直に筑波町に向ふ。観音堂の山茶花。うすくれなゐに咲き亂れて。岩の下くゞる水。さらに浮世の外なり。結束に歸れば。十二時も三十分になりぬ。午飯して急ぎ出でんとするに。少女は蜜柑の折枝もていで。家づとにせよといふ。店先に並あべたるものとのみ心得たらん都人に見せなば。いかに神子の持つ鈴に似たりとや評せん。

日は全く晴れて。春日おぼゆる空になりぬ。白井より昨日の車に乗りてゆくに。一家笑ひとよめく聲あり。何ぞと見れば。俵を荷なひて。互に力をくらぶるにてありき。秋ゆたかにて。物思ひなげなる山里の羨ましさ。川に大根あらふ女。菊さく宿に米ついはむ庭鳥。いづれ歌

袋を富ますの種ならざる。

夕日長く車夫と我との影をうつして。土浦に歸りしは四時半なりき。今夜は泊る事に定めて。車を下り。昨日休みつる笹本にあがる。

暮れゆくまゝに。火影遠近に見えて。水たへたる田に。星の如くうつる景色。思ひしよりも夜更に興あり。

又の日は一天ぬぐふが如く。霞みわたれるさまも心地よきに。朝日わたたかに差し入りたれば。遂に筆もてあそびて。半日をこゝに費し。町をそゝろあるきなぞして。二時四十五分の上り汽車に乗る。

霞が浦群青の如く青きに。胡粉もて畫がける白帆の。二十三十並びて浮べるは。明石の朝ばらけにも比しつべし。顧みれば。筑波山うすむらさきに霞みて。もはや紅葉の色も見えず。

入日

並み立てる松の木の間

紅の鞠ぞかゝれる

天少女あそびつかれて

夕空に置きや忘れし

雲間よりまろびや落ちし

ほつれたる黄金の糸を

引きのこす光あはれに

今日の日も暮れんとぞする

雲も皆わかれし人の

おもかげにして

戀

一

花おほく有るが中にも

我めづる花は紅梅

我めづる花は撫子

なでしこの其の花よりも

紅梅のその花よりも

我めづる人ひとり有り

二

花のうへに置く白露か

わすられぬそのおもかけは

露と見て散らせを散らす

その人よ撫子ならば

手につみて身にそへましを

明暮の友とせましを

三

夕日かげ山にかくれて

くれわたる遠の松原

誰がのこす形見ぞあれは

戀のうた歌ひつれつゝ

わたりつる小川のながれ

今もなほ響きは涸れず

齋 柱

わが故郷なる宇和津神社の造營の成れる故よしを子孫に傳へまほしければ長

歌によみてよき祠官毛山正辰ぬしに請はれて。

霜八たび置けどかはらぬ

賢木葉さかさの榊はのもりに

千木高知り鎮まりませる

宇和津彦神の宮居は

世々絶えず毛山の氏の

つかへこし故ある社

しかはあれど其宮づくり

年をへて柱むしばみ

軒端朽ちふりもて行くを

今にして造りかへずは

我つかふるかひもあらじと

此家の十代のあるじ

正木づら正廉の君

其祖父延妙ぬしの

立て初めし真心ならひ

其父正典ぬしの

固めてし心うけつぎ

一筋に思ひさだめて

事はかり相かたらへば

御氏子の千々の御民等

葛城の神のこゝろと

一言にうべなひたすけ

力あはせ事はじめつれ

工等たくみらは忌斧もちて

奥山の真木さきりいだし

岩がねのこゝしき道を

木やり歌こゑもとゝろに

道びきて白げ削り

礎のかたきが上に

忌柱太く突きたて

子の親に仕ふるなして

臣の君に従ふなして

招かぬに來りあつまり

日にいそぎ月につとめて

造りたる是の御殿みちらか

いたづきし此宮づくり

大神の見はるかします

いよの海の清き渚に

よる波のいやしくぐぐに

八千かへり年は行くとも

八百萬代はかはるとも

子孫こひごに毛山の氏の

八十つゞき忘れて思ふな

明らけく治まる御代の

時をえて心とげたる

おやのいさをし

小説の君に

一

花ちりしあとの春日を

君なくは誰と暮らさん

打ちけむり降りくる雨に

野に出でん心もたえぬ

かゝる時ひちまくらして

君と語る事ぞたのしき

二

ゆきかへり梢をつたふ

うぐひすの歌にも飽きつ

池水をかすめ飛びかふ

つばくらの舞にも飽きつ

かゝるとき窓によりゐて

君と語る事ぞたのしき

三

暮れかゝる夕べのそらに

二つ三つ星みえそめて

やり水の響き涼しく

篠すだれ風ぞ吹きまよく

このひまも猶わかれうし

君が顔みえずなるまで

四

虫のこゑ切れては續き

わたる雁とほく聞えて

夜はふけぬ世はしづまりぬ

眠らんとすれど寐られず

この時も君にむかへば

君は猶さめてぞ語る

五

花もみぢ盛はしばし

美酒も飲まば盡くべし

なつかしき少女とあそび

むつまじき友とかたるも

逢ふは遅く別れは疾きを

君とかたる愉快は長し

六

神にあひ古人にむつび

魂あへる友をも得たり

舟車かよはぬ國も

時のまに見て歸り來ぬ

この愉快たれか得させし

たゞ君が自在のちから

八

死にもせず夢にもあらで

極樂に我をあそばせ

矢も飛ばぬ方に立たせて

戦ひのさまをも見せつ

この愉快君ぞ得させし

想像の翼にのせて

九

時をえぬ人のなげきも

まゝならぬ戀のうらみも

成り成らず合はせてぞ聞く

さまぐくのあはれ世の中

我のみか人もかくよと

君と語るひまは慰む

十

君こそは造化のこゝろ

世の人を撰びもてゆき

そこに又なき世をつくる

おもしろや美しの世や

いつまでもそこに行きかひ

たのしまん君が翼に

身をばまかせて

筑 波 山

其一

筑波山みね二つあり

南には男の神いまし

北には女の神立たす

女の神の立たす高ねに

秋ふかく登りて見れば

空近く人どほし

海山を寫さん筆の

たちから
手力もがな

此神の見はるかします

晚稻かる賤も見ましを

鳥のごと田に立ちならび

遠眼鏡もてこんものを

このながめかねて知りせば

昨日來し道もかくれず

心あての土浦まなべ

ゆく舟の末はるくくと

ながめくる霞が浦は

うなる子がすさびに作る

箱庭にたゝへし水か

水や空々や海なる

海ごしの富士の高ねは

庖女くりやめが洗ひて伏せし

盆の上のその盃か

舟よする鹿島のあたり

波かゝる銚子の入江

おもかげに見えてぞ霞む

其二

男の山は南に立たし

女の山は北にならびて

神代よりちぎり久しき

二なみの山は此山

霞が浦かすむ朝に

のる駒の耳かとはかり

藍の色に見えしもこれぞ

千波の海おつる夕日に

別れつる人のおもかげ

ゑがきつゝ立ちしもこれぞ

露しぐれ織姫にして

おりかけし秋のにしきは

女の神の峰や機殿

男の神の峯や染殿

遠く見てよかりし此山

わけ入れば更に奇しき山

はれくもる雪のたえまに

天の原高知る千木も

見えかくれして

入日のあご

入日のあごの西の空。焼くるが如く燃ゆるが如くなるに。紫ふかく晝
がき出だされたるは。九段の燈臺なるべし。富士は何くぞ。遠くは夕
霧あはく引きて。心あての姿も見えず。黄ばめる木の葉地をうつめて。
家路に歸る人。しばらくもどまらず。

水をへだてたる土手の上には。いてふの葉を拾ふ人。雲透に二三人見
ゆ。半面は松と共に黒く。半面は空と共に紅なり。

秋の蓮

忍ばずの池の蓮は枯れたり。破れし傘。折れたる莖。今は見るかひも

あらず。

あはれ過去をおもへば。春くれ夏きたる頃。錢の如く小皿の如き若葉
を浮べて。南京玉に似たる露を受けたるも。汝なりしを。

水を離なる、一寸の上に。半ば巻葉を廣げて。魚見る小女の袖ふく風
に。ゆらめき立ちたるも。汝なりしを。

水のおもてを打ちおほふ廣葉に。待ちつけたる夕立の音を聞かせ。暮
るれば蛙すしげに鳴き立てたるも。此かげなりけり。

夕日のあごの空よりも美しき。花みんとして。すゞみがてらに來りし
頃は。水さへ風さへ。たゞ色香もて満たされしぞかし。

秋風さむく柳をふきて。辨天にまうづる人も今は稀れなり。瘦せたる
とんば。ひとり夢のあごを訪ひつゝ飛ぶ。

都の秋

二重橋秋ふけて。ときは木の木のまゝに。口なし色なる梢の。美しく立ちまじれる。申すも畏き御あたりにては。いかにながめさせ給ふらんなど。ふりさけみつゝぞゆく。

櫻田門にかゝれば。堤の木の葉。同じ口なしの色なるが。木かげに散り敷きたり。掃き集めゆかんとする。もつこやうの物おきすてゝ。人はあらず。此上にも早みだれ來りて。こぼすが如し。

赤阪見附をいでゝゆけば。辨慶橋の際に大きなるいてふの木あり。土を埋めたる千々の木の葉。更にたとふべき色もあらず。客まつとて置

きならべたる車さへ。車夫さへ。書にかきつべし。

堀には水鳥あまた浮びゐて。鏡の如き水の上に。影おとしたる堤のみどりも美しきに。胡蝶のやうなる落葉を。ひらくとさそひきつゝ。舞姫の如くに弄ぶ秋風。歌人のこゝろあるに似たり。

面白殿

石の鳥居を前にして。枝さしかはす杉の老木は。道を挟みつゝ生ひ茂れり。其ひまゝに染めいだせる秋の木の葉は。黄なるが紅なると打ちまじりて。下照りわたるこそ。得もいはれぬ美しさなれ。

知らずく足とゞまりて。見あぐれば。鳥居の額に金王八幡宮とぞか

ゝれたる。木かげの錦ふみわけつゝ深く入れば。水屋のあたりにこぼれ重なりたるいてふの色。又いふべからず。神樂殿ものしづかにて。風の吹き入れたる落葉も。心ありげなるに。額の文字面白殿と讀まれたるなど。中々神さびたり。あはれ我より先に今朝まうでつる人。ありやなしや。拜殿の鈴に結び下げたる桃色の紐。獨りさびしげに。誰をか待つあるに似たり。

櫛の風

花筒の菊おほかたしをれて。水仙南天のみ美しげに立ちかはり。雨の如くふりたるいてふは。わづかに木のもとに五葉六葉をのこしつゝ。

かれぐの櫛ふく風のはひ。いづことなく身にしみわたるは。誰が眠れる墓なるらん。櫛がけの少女來りて塵をはけば。老人は數珠を片手に。柄杓もて水をそゝぐ。

擣衣

衣うつ槌のひききもよわりけり

ふけゆく風を松にのこして

賤が打つ砧のおとやむかしわが

母と月みしあたりなるらん

菊

菊のかの枕にかよふよなくは

かべなき宿のうさもおもはず

秋蝶

菜の花にまがひし蝶のいつまでか

秋の木の葉にちりまじるらん

秋晴

はれわたる秋のながめの行末に

富士と筑波を見いでつるかな

秋時雨

月のまへゆくともしらで村しぐれ

秋の木の葉や染めいそぐらん

秋旅

家におきし乳兒やねぎめてしたふらん

あかつき寒き秋風の聲

秋人事

猿おひてかへる翁も見ゆるなり

秋ゆたかなる小田の細道

田家秋

もちひ搗く音もひびきて豊年の

祭にぎはふ葛飾の里

かりしほの秋のとよみに都人

祭もまたで歸しつるかな

たがために打ちいそぐらん小夜砧

しづが鳴子田風にまかせて

暮秋

色あせて一花のこる朝がはの

かさねさむけき夕ぐれの雨

福王繁十郎を悲しむ

花散りて風なほ香ばしく。鶯去りて聲なほ枝にあり。福王は誰に脇師を譲りてか此世を辭せる。繁十郎は誰に能樂を託してか彼世に去れる。

あはれ明治三十一年の三月十三日は。如何なる凶日なりしぞ。

さしにも長き能樂堂の橋掛を。數珠おしもみつゝ。シテを前にして跡しさりせし道成寺の面影は。尙ありくゝと目前にあるものを。威風凜然床几にかゝりて。御教書を常世に投げ與へたる鉢木の面影は。尙あ

りくくと目前にあるものを。誰か此訃音を傳へて。徒らに我等を夢幻の間に迷はしむる。

今日の能樂世界實に人少なし。物の數にも足らぬ小役者だに一騎當千の價あるに。況んや天下有數の良脇師に於てをや。前には稀世の老手春藤六右衛門を奪はれ。今また絶代の敏腕福王繁十郎を失ふ。斯道これより落莫たらんとするを如何せん。

福王嗣子ありや知らず。未だ舞臺にあらはれざりしを見れば或は無からん。唯門下の流を汲むもの。花咲右衛門一人あるのみ。豈かなしからずや。

余は獨り福王流のためにのみ悲しむにあらず。能樂世界全躰のために數滴の涙を濺いで。再び得がたき名人の死を悲しまんとするなり。あ

い。

石井一齋を悼む

雪來らんとして未だ來らず。風は刃の如く氷は鎌の如し。霜に傲る寒菊に比したる一齋石井翁の先づ奪はれたる。天わに恨なからめやは。翁は大鼓の名人なり。その舞臺に出でんとするや。いかにたやすき曲にもせよ。家にて打ち試みたる上ならでは行く事なし。とかく間に合せを事とする世の中に。翁が摸範を示したるの多きは。他を推すべきなり。

いつにかありけん。星が岡の茶寮にて囃子會の催されし時。すこしも

休まで幾番もく打ちつけしかば。何がし伯おどろきて。石井の指は鐵にやあらんと宣ひし事。なほ耳にあり。指いかに鐵なりとも。身まづ灰となれるこそ哀しけれ。

おのれ嘗て入門して其家に通ひしが。教授の懇篤なる。時としてはおのが他に行くべき時間の迫りて。時計を出だしつゝあせるにも拘はらず。張扇を止めざりし事いくたびなりけん。翁つねに曰く。同じ時に一人ならでは稽古の約束せざるが自分の定なり。されば拙者は多くの弟子を持つ能はずと。

おもへば一昨年の二月なりき。英照皇太后の御葬儀を送り奉らんが爲め京都に同行せしは。時は節分の前日。ことに夜汽車なれば寒さ氷をわびせらるゝが如く。外套を二重にかぶりても猶ふるひるたりしに。

名古屋に着くや。翁は窓打ち開きて冷酒を呼び。舌打ち鳴らしつゝ。

いざ一つ氣附めされよとて。盃を廻されたり。その時の氣力よ。いまだ三年も立たざるに此訃音を傳へしめんとは。誰か思はん。朝飯を共にせし佛光寺町の家。ひとり今も健康なるべきに。

感時花濺涙と谷子爵の揮はれし額の下に。謠うたひつゝ座したりし青山の石井翁は。又かへらず。薄紫の紋付に萌黄の袴して床几に掛かりし舞臺の一齋は。又起たず。あゝ哀しいかな。

去年の暮には小杉本祐を失ひ。今また其師家なる翁を奪ひ去らる。石井流こゝに至りて東京に跡を絶ちたり。天なんぞ能樂界に不仁なる。

抑も老いたるを隠して後進の徒を奮はしめんとするか。

水

一

あそべく春の水

氷の間より夢さめて

はしる歩みのさわやかさ

梅も櫻も汝が胸を

愛して顔をうつすらん

霞にねむる遠山の

影を載せてぞ歌ひゆく

歌へく春の水

二

をどれく夏の水

いちごの下葉あらひつゝ

蓬のもとに別れつゝ

怒る日かげをよそに見て

草はら深くゆくほどに

すいしき風もよそひきぬ

にぞらぬ月も宿しきぬ

歌へ躍れ夏の水

三

めぐれく秋の水

まねく薄の袖に觸れ

垂るゝ稻穂の髪を打ち

たのしき朝も憂き夜はも

語らふ友は風ひとり

くるみ流るゝ山川に

たゝすむ暮や如何ならん

なほ旅めぐれ秋のみづ

四

やすめく冬の水

一つら白き野邊の道

また舞ひあそぶ影もなし

老いたる草のかしらには

霜のみ凝りて日も寒し

いざや岩根に枕して

未來の春を夢に待て

しづかに眠れ冬のみづ

夕雲

一

くちなしの

裾うちかけて山の端に

しばし休らふ黄昏は

浮世の戀のおもかげを

あつめて畫がくわが姿

二

獅子と舞ひ

龍とおきふし神のゆく

橋わたしゝも我たくみ

あらしのあとの青空に

かゝる命の危さよ

三

足もとの

山をなかばの薄紅葉

かたみにおきていざいなん

わが故郷は霧のおく

鹿の音とほく響くかた

新嘗祭

春雨の

ふるの山田に齋串立いぐして

氷口まつりみなぐち豊年とよとしを

いのる心もゆたかにて

苗代水や餘るらん

軒の玉水ひまもなく

ふるは涙か五月雨の

ほと時すぐと鳴く聲に

晴間も待たで急ぐなる

露の玉苗とりづくに

うたふ田歌も君が代を

千代にと祝ふ民心

神代今の代かはらめや

土さ 裂くる夏の日を

小笠にさけて田草取る

そのいとなみの末かけて

頼みも深き秋風に

なびくや早稲の花も咲き

露の晩稲田ほにいで、

靡き伏しよせかへる

黄金の波ぞ楽しき

月に友よぶ島の名の

いざ刈り收め豊年の

新稲神にさげん

神のみまへに供へん

送る人

おくる人玄關にあり。送らるゝ人車上にあり。夕日は將に沈まんとして。松の木のまにかゝりぬ。地上を辭したる光。なほ名残をのこして。一方の空を染めたり。車は遠く去りて。もはや響も聞えず。紅の雲やうゝ消えんとしつゝ。少女の顔を照らし。窓の硝子を射る。

車夫の大聲

車をのせて走る車夫あり。大聲あげて叱りつゝ。一直線にわがゆく方に進めば。前にわたるもの皆避けざるはなし。快何ぞたへん。又一車夫あり。右によけ左によけつゝ恐るゝすゝめば。かへりてよけたるものとも衝突する事。しばゝなり。果決勇進の政治家は。前なるものに類し。優柔不斷の外交家は。後なるものと相似たり。

印半天の男

信濃より來る汽車の中に。印半天の男のりゐたり。かたはらの人にかたりて曰ふ。拙者は田舎まはりをして芝居を打ちたる歸りがけなり。その大當りなりし事はんやうもなしと。皆人目ひき袖ひき。何といふ役者ならんなど。ゆかしがりしが。後團子坂の菊見にゆきてみれば。木戸番に彼男すわりゐて。評判ゝなど叫びゐたり。

ほごきもの

初更家にかへれば。下婢どもし火のもとにて。古着をほごきむたり。
いざ我れも手傳ひ試みんとて。片手に持ちそへ。糸ひきぬきつゝ下婢
の手つきを學ぶ。げに何事も作るよりは亂すこそ易けれ。

一時雨

一時雨さと來りぬ。さらでだに短き冬の日を。誰しの足かいそがざら
ん。商人走り。貴人走り。兵士走り。書生走る。おのれも車の母衣をかけ
んとして。ふと見あぐれば。夕焼の色なほのこりて。八幡のいてふの
木にあり。

弘法大師

千代かけて高野のおくに、ほふなり

ちりぬるいろの花の言の葉

護良親王

世は春にならましものを花ざくら

かまくら山の霜にかれずは

水戸烈公

中々に春のねむりやさますらん

ひがかぬ鐘のあけくれの聲

鈴屋翁

ぬき垂れし三十の小鈴ふりし代の

道は君こそしるべしにけれ

俊寛

みなれぎをさしすてられて残る身の

うらみや舟にのりてゆくらん

道成寺

ちる花のうらみもそへておこたりの

夢おどろかす鐘のこゑかな

少女

手ずさびにふきてふくらす紙まりの

まろきおもわをいつか忘れん

兵士

國にすてん命もゝのか旗たてゝ

おくらるゝ時の心おもへば

天長節

天長くつちまた久し君がよは

千代萬代のたぐひならめや

さきそめし雲井の庭の菊の花

千代にと祝ふ今日にやはあらぬ

天長地久

天長く地久しく

光あまねき朝日影

くもらぬ空に出でそめし

今日の吉き日の吉き時を

祝はざらめや國民の

聲は四海にあふるまで

さかゆく御代ぞめでたき

賤のをも

八千里かけて八束穂の

足穂の稻を雁がねの

雲の上人もろともに

ゆたけき秋や祝ふらん

われもいざ菊の酒

くみて君が代うたはん

君萬歳ばんざいと祈らん

杵の音

八束穂の足穂の稻を

刈りつみし里の遠近

搗く餅の音を聞ゆる

君が代のゆたけき秋を

家ごと今日いはふかし

村人は今日うたふらし

そのふこし嫁もまじりて

取る杵の音を賑ふ

里もとゞろに

田舎の秋

一

あなおもしろ田舎の秋

柿は梢に菊は垣に

落葉ひろひて歸りくる

少女のかげは松原に

二

あなおもしろ田舎の秋

大根は白く密柑は黄に

稻かりはてゝ歸りくる

わらはの歌は小道より

なごりの花

一

黄ばみゆく草をちからに

なほたのむ朝顔あはれ

色うすく身も瘦せがれて

ささのこる一花ひこはなあはれ

二

のぼる日は花にむかへど

まばゆしと顔もそむけず

老いはてし秋の垣根を

いまもなほ杖とぞたのむ

三

咲きそしめ汝なが世の始め

かゝらんと誰おもひさや
姉妹ともにしほみて

たすけなき一花あはれ

四

有明の月のしづくを

身にかゝる玉とよそほひ

つくろはぬ笑顔さゝげて

世に立ちし朝もありしを

五

吹きあるゝ夜半の嵐に

その夢はよし破れても

やぶられぬ花笠さゝげ

ほこりつる朝もありしを

六

たよりつる薄はたふれ

したしみし小蝶は失せぬ

時々花落つる木の葉も

身を打ちてよそにぞ過ぐる

七

敵あたと見し日のひかりさへ

けふはその命となるに

親と見しきのふの露は

身をころす霜とかはれり

八

あはれその花のみなし兒

あはれその榮花のなごり

ささだつも残るもしばし

いざねむれ神のたまへる

土のまくらに

露

有明の

月まだ残る秋のゝに

露と呼ばれしそのかみは

萩をみなめし八千草の

花を隔てぬすみかにて

神のよそひの白玉と

あざむかれよる少女子の

袖に碎けしをりもあり

又ある時は山姫が

おるや錦の機殿に

わが色ならぬ紅の

たくみ見せしも我ぞかし

そのほか八束穂の

足穂のうへにゆたかなる

秋のひかりを見するまで

露よ玉よとめでられて

ほこりしは夢なれや

頭の霜と身は老いて

花の仇あたぞと人は呼ぶ

さぶんくわ

小春の日影に咲きいづる花の中に。菊よりも水仙よりも。おのれは殊に山茶花を愛す。濃くつややかなる葉の間より。少女の唇の如き蒼を

見いでたるうれしさは。たとへんにものなし。咲くかと思れば早くこぼれて。霜白き枯草の上を。紅に色とりたるは。紅葉の散りたるにかでか劣らん。子供はやがて拾ひつゝ。唾して双の頬につくれば。お龜の面よとて笑ふもあり。上下の唇に附けて。べになりと戯むるゝ子は。おぼえず木にふれて。あたら露もつ花を又ちらしぬ。

わが故郷の庭には。苔むせる石燈籠のそばに。いと美しきが一もとありしを。今も其時節になれば。思ひ出でぬ事なし。築山をくづして畑にするどて。父君の堀りのけ給ひしこそ悲しかりしか。

東京に來りてのち。市谷にすみける頃。此花しきりにほしくなりて。神樂坂の市より購ひかへりし木は。今も庭に二もと立てり。一つは深紅にて躑躅よりも美しく。一つは白くして紅に隈とられたるさま。わが國

のクリスマスローズとや名づけまし。一枝をりて瓶にさし机におけば。硯の上にも散りかゝりぬ。筆とりさしては花に心をうばはるゝ事。いくたびなるを知らず。

いにし年番町なる友の家を訪ひしに。庭に大きな木のあるを見て。一枝をと乞ひしかば。夜の事なりしが。主人は蠟燭を手にもちて廊下に立ちつゝ。この枝その枝とさしづし。家僕を木にのぼせて。をしげもなく多く折らせくれたる事ありき。おのれはいまだ此花の木のかく人のぼすばかり大きなは。前後に見ざりしほどなりしに。その家も今は人手に渡りて。あるじ住まぬところとなりぬ。あはれ夕日のかげは。今もなつかしき梢を照らしつゝありやいかに。

小春

ちりのこる紅葉をやがて山かげの

花になしても霞むそらかな

かへりさく櫻もみえて山里の

日かげうらゝにみそさゝいなく

初冬

しづの女が大根きりほす山里の

日かげしぐれて冬はきにけり

山里は麥まく頃もすぎにけり

のこれる菊の霜おほひせん

残菊

庭もりが霜おほひする木のもとに

いつまで菊のさきにはふらん

村しぐれ晴れたる窓の月かげに

わすれし菊の匂ふ夜半かな

初氷

さしぬらす筆のほさきの何となく

さしむや氷る始なるらん

冬花

鶯のゆめあたゝかに霞む日の

冬山ざくら袖にちるなり

冬夢

冬さむき軒端の梅とうぐひすの

夢やいくたびゆきめぐるらん

霜

注連ひきて人もわたらぬ神垣の

板橋しろく霜おきにけりし

焼きすてし落葉の上におきにけり

灰より白き庭の朝霜

霜夜

霜しろき小笹のうへにふけにけり

今はむかしの春のよの月

小 春

八幡の森を入れれば。梢のにしき半ば土にうつりたるも美しきに。水屋

のあたりには。櫻の歸り花さへこぼれそひて。のどかなる日かげ春に似たり。風ひとりのしげに。神樂殿のいてふを舞はせ。子守唄の罪なきしらべ。隨身門のそとに響く。

面影橋の欄干によりて。水のうづまき流るゝを見る人。書師にやあらん。歌人にやあらん。堤のすゝき雪よりも白く。傾く夕日口なしよりも黄なり。稻は刈りはて、村に積まれ。水もて大根洗ひをる男。こゝにもかきこにも見ゆ。

山吹のちりうく川水。菜種のさきはこれる山畑。あかざりしは春日のながめなるを。まさるともおとらぬ色もて人目を引くは。いてふなり。心もなくて氷川神社の鳥居を入れれば。庭に散りかさなりたるさまこそ。筆にも口にもうつしがたけれ。小兒は早くもはだしになりて。扇に似

たる落葉のうへを踏みあるき。その姉なるは。書物の間に挟まんとて。ことに色よきを拾ひあつむ。掃除おこたる宮守。けふのみは心あるに似たり。

ゆき／＼て鬼子母神にいたれば。黄なる胡蝶は戦ひたはひれつゝ。梢より下り。枕ならべて地上に眠る。秋更にあはれふかし。芋のでんがく焼きゐたる女は。客の少なきやかこつらん。團扇とゝめて母めきたる人とさゝやく。さはいへ。すゝきもて造れる梟は。海軍帽子きたる少年の手に捧げられたり。

汽車にのらんとて。目白停車場にいたる頃は。日すでに暮れて。水よりも白き月。枯木の枝にあり。堤ゆく人。あるは獵銃を肩にし。あるは大根車を引きたるが。雲透に黒く畫がさいだされたる面白さよ。黄なる柚の實を。枝ながら持ちたるあれば。緋の色したる紅葉の葉を。

髪にさしたるもありて。乗客いとにぎはし。

汽車は來りぬ。空いづことなくうす紫に霞みて。月の色あたかも花まつ頃に似たり。あはれ窓ちかくかをり來たるは。梅か菊か。

鷗

あらかりし風はきのふのわたの原

ねむる鷗の夢ぞしづけき

兔

かりの人のはらひすてたる露のうへに

月おもしろし出でゝあそばん

蝙蝠

かはほりにすみかゆづりて古寺の

岩屋のほとけ世にも知られず

蚯蚓

月になく聲は雲井にすむものを

つたなき文字の身とな嘆きそ

海老

あまの子が汐干ににすくふ芝えびの

しばし網かせ家づとにせん

兵士と少女

汽車青梅を發する時。室に近衛兵の東京に歸るあり。少女二人と相對して掛けたり。兵いはく。三年は何でもなきやうなれど。待てば中々立たぬものかな。女いはく。私の村の喜四さんは御無事ですか。兵いはく。入營して知る人の居たるほど。うれしきものなし。はじめより寐床ならべて寐たる人は。たゞ喜四君のみ。女いはく。白ひきの時節

にも。あの人がゐなくては歌が引き立たずとて。村中誰も思ひいでざるなし。兵曰く。さもわりなん。酒なくては一日も居られずとて。飲めば歌ふ愉快の人は彼君のみ。汽車はいでぬ。話はやみぬ。女は東京の空をながめ。兵は故郷のかたをかへりみる。風寒し。星二つみえたり。

一つの桶

一つの桶は擔はれて寺に至る。送るもの朋友たゞ二人。位牌を捧ぐべき族もなく。花手向くべき親類もし。

木魚ひいき讀經はじまりぬ。燈火くまなくして。棺ひとり廣き堂の内にさびしげなるをいかにせん。

生前したしくせし人はいづこぞ。愛し愛せられたる兄弟はいづこぞ。

夜風の外に又來りて。幽魂を慰むるものあらず。

式をはりて遂に冷なる土の下に眠りぬ。線香の烟糸の如くのぼりて。

寒月すこく天にあり。

一木の紅葉

歌をしふる人のために。

秋ふけてさびしき庭に

ひとり立つ紅葉うつくし

立田姫おなじ梢を

紅に口なしいろに

うすくこく色どりわけて

たが秋の形見とすらん

かくばかり物いはぬ木も

露にぬれ霜におかれて

おりいだす錦のひかり

かりそめのすさびならめや

此もみぢ友とながめて

此まどに筆とる人よ

きさらぎの花にもまさる

歌なからめや

文なからめや

しんせふる深山里の

秋のかたみ

うなる子ら掃ひな捨てそ

わが門につもる紅葉は

秋風のおきつるなごり

霜の上を照らす日かげに

ぬれかへる色もうつくし

少女子ら流れしな遣りそ

山の井にうかぶ木の葉は

立田姫のこせるかたみ

消えぬ間の霞をのせて

はしり舞ふさまもおもしろ

さびや子らこゝにつとひて

拾ひ來し落栗やきて

しばらくの秋をながめよ

しづかなる我山里の

秋のかたみを

赤

もみぢ葉にたいうづもれて稻荷山

秋は鳥居の色もわかれず

青

ほのかすむ山こそ見ゆれ大空の

いろにすみゆく水のみなかみ

黄

口なしのその皿もてて筆とりて

籠のかなりや書にうつし見ん

白

よそはひてつくる少女が顔ばせに

おもかげうつる雪のふじのね

黒

むら鳥かへる夕の山かげに

いそぐ法師の袖もみえけり

高

ふじのねも下にみるまで朝ひばり

あがるや何の願なるらん

長

あめりかにありてふ川をいく千たび

かへして君が御代をかぞへん

大

天地を大きなりとはたれかいふ

神と君とのめぐみ知らずて

夜道

ともしびまばらに見えそめて。夜の色は村里を包まんとす。竈に煮え
たつ湯。ゐろりに焼かるゝ柴。いづれも楽しき家庭をあたゝめたり。
うしろの小川に大根あらひし娘。霜どけの山路を馬引きてかへりし父。
ひとつに圓居して。今日の寒さをや語りあふらん。

笹ふく風身にしみわたりて。道ゆきおくれし人わが外にあらず。村を
はづれて石白く見ゆるは。誰が墓ぞ。訪はれぬたましひ。夜半いづこ
の空か迷ふらん。あはれたのしきも人の世。はかなきも人の世。

鳥賣る店

鳥賣る店あり。するどき庖刀の下には。桃の花より紅なる肉。たえず
切られつゝ客の手にわたりゆく。思ひきや。此なまぐさき組板を天井
としつゝ。今なは樂しげに遊び居る鳥のすみかを。網張りわたしたる
中に見いださんとは。風寒し。雪なゝめに來りては。未來みじかき運
命を知らせがほに。毛と共に飛ぶ。

火のそば

冬は火のそばこそ樂しけれ。埋火に炭さしそへつゝ。おもふとち語り
ふかすは。更にもいはず。風ふき霞みだれて寒き日ぐらし。巨燧の上
に好ましき書どもおきならべて。かれやこれやと讀みゆくなど。心の

たのしみ。又いふべからず。

學校にいたれば。ストーヴの石炭。花の如き燭を散らして。教場に待ち居るもうれし。休みの時間など。新聞を持ちながら。片手して椅子を近づくるに。生徒は來りて。親しく物問ひなどするをりもあり。窓の外には普請の事ありとて。大工ども集りゐつゝ。焼火を取りまくも。見いだされたり。

さるにても此あたゝかき光をよそに見て。橋の下にふるひ居る親子やいかに。

冬の暮

汽車は國分寺を離れたり。右の方には松原おもしろく續き立ちて。薄紅に霞める夕空。たえづくに見ゆ。

なごりをし。鞠の如き入日は。今ぞ森の下枝を別れて。半ば姿を地上にかくしぬ。力なく招きたてる尾花。薄墨に包みわたされたる賤が屋。これもかれもあはれ身にしむ冬の暮なり。

畑の中道にかへりおくれし人影。大根を家にやはこぶらん。枯草を牛小屋にやおくるらん。聲はすれどもさびしげなるは。春秋の夕のたぐひならんや。

驛夫の四谷と呼ぶ聲ひよく。かへりみれば夕日もなく。松原もなく。忘れがたき山かげのみ。星の光のうちに立てり。

松代八景

尼巖夕照

まつも皆もみぢのいろに染めなして

夕日ぞにはふあまかざり山

千曲歸帆

千曲川きりおもしろく晴れそめて

くだる帆かけの數も見えけり

海津晴嵐

うちなびく煙も見えていにしへの

かいづの御城に嵐ふくなり

廣田落雁

雁ならで稻葉にさはる聲もなし

廣田のおもの秋のゆふぐれ

離山夜雨

夜あらしはみそらに消へてはなれ山

おとなき松に雨ぞふけゆく

象山秋月

竹山の竹の夜風を身にしめて

ほきやの峯の月を見るかな

惠明晚鐘

花はまだ見あかぬものを麓寺

かねの音たかし日やくれぬらん

飯綱暮雪

天地はしづかにくれていづな山

雪と星とになれる空かな

餅

今年もわづかなりと。口々に言ひあへる頃。餅つく音の響き出でたるこそ。さはいへど春いそがるゝ心地して勇ましけれ。東京にては引きずり餅と名づけて。臼杵釜まで荷なひあるきつゝ。市の街にてさへあつらへらるゝまゝに搗くあり。上るとすれば下る杵。からぎをよりも軽く。掛聲に應じて拍子あはする音。まだきに萬歳の鼓を思はしむ。雲雀さゝつゝ朝とく田舎道をゆけば。柳ある茶屋にてぼつゝといふ音聞ゆ。日よく晴れたり。草餅つきて。神まうでする旅人またんとにやあらん。おもへば明日は上巳の節句。半ば雛棚の手向なるべし。秋すでに老いて豊年いはゝぬ村もなし。鎮守の森には新しき祭りの旗

みえて。神樂太鼓のとほろく方にぞ。娘どもは走せゆく。老人夫婦に嫁もまじりて餅米ふかし。白よ杵よと取りいだす家。かけて干したる八束穂の間より見えたり。

坂路のぼりつかれて峠に休みたるに。力餅とて姥がすゝむるこそうれしけれ。あんのもよし。きなこのもよし。大根おろしのも更に妙なり。かゝるたのしみは旅せぬ人の知るところならんや。

廣嶋に書生してゐたる頃。しばくものせしは草津なりき。こゝには大石餅といふ名物ありて。一盆わづかに二錢。そのたのしみは天下に敵なしと思ひつることもありしを。

東海道の汽車まで賣りに来るは。草津の姥が餅と。静岡の安倍川餅とあるのみ。姥が餅は西の王といふべく。安倍川は東の將軍とや名づけん。されど將軍は近來あまり聲をきかず。

わが嘗て東海道を歩行せし日。日坂は蕨もちの名物ときゝて立ちよりに。日坂蕨餅至極美。其上軟而不粘齒。伯夷叔齊早此來。中々以可無餓死といふ聯のかゝりゐたる事。なほ記憶にあり。おもへば今より二十五年のむかし。餅もし心あらば。遙に汽車の煙を見つゝやわが身の秋をかこつらん。

いつも一月一日にあふごとに。思ひいでらるゝは。下宿屋生活の昔ぞかし。歳暮の禮にとて或る老人を訪ひたれば。これもてゆけとて。切餅あまた紙につゝみてめぐまれたり。これを翌朝の味噌汁に入れつゝ。手づくりの雑煮を祝ひたること。今は笑の種となりぬ。さるにても年のはじめに。下宿屋とは云へ。雑煮いださぬところ。東京ならばある

千鳥

まじきに。

夕風に吹きわけられて

さわぎたつ波間の千鳥

子は親のあと追ひかねて

遠近によびかはすらん

我もまた夫つままらわびて

磯ちかく立つぞ久しき

やよ千鳥あはれは同じ

つばさもて夫つまを迎へよ

朝月夜すがたうつして

鯛つまつりに出でたる夫は

夕日影雲にきえても

かへり來す舟だに見えず

折れかへり岩うつ浪は

はらわたに響きて寒し

いづかたにいま浮ぶらん

やよ千鳥わが待つ心

ゆきてつたへよ

冬の月

一

我はむかしの春の月

我はきのふの秋の月

つねに變らぬ影なれど

世界はいつか老いにけり

夜なく、敲く窓の戸を

わけて迎ふる人もなし

二

白妙ひろき園のうち

いづこに影を休らへん

そよ吹く風にさそはれて

花にあそびし朧夜は

あふるゝ戀を訴ふる

少女の歌もさゝつるに

三

ゆふべの窓に讀みのこす

その玉章も我は見し

時々あぐるゑみの眉

へだてぬ影に我は見し

寵おとろふる庭の菊

そのさかりをも我は見し

四

馴れて訪ひよる高殿の

あたりに琴の音も絶えて

ひとり時めく燈火の

聞もる光ほそりゆく

はしる霰のうしろより

廊下をめぐるさびしさよ

五

堤の木の間あらはれて

したしく向ふ水の面

いまは靨をかくしつゝ

氷の底にねむれども

我こそまもれ來ん春の

歌ををさむる汝が胸を

六

麓にいそぐ獵人を

おくりしあとの谷の空

反響に吠ゆる狼は

我なくさむる音楽か

落葉にうづむ懸橋を

嵐と二人うちわたる

七

天ぎる雪とたゝかひし

波に打たれて碎けても

うらみも敵も知らぬ身は

光しづかに笑ふのみ

はてなき海よわが舞臺

いかれる海よわが旅路

八

我は今宵の冬の月

我は來ん世の春の月

神代のまゝの影なれど

世界はまたも若やがん

かすみの衣きんにつゝまれて

高嶺のどかに立たん時

今日も別れ

一

枯野の夕日かけきえて

今日も別れになりにつり

いづこよるか響きくる

入相のかねの聲

さらでもいそぐ旅人を

里あるかたにたどらせて

二

暮の霞につゝまれて

見わたすかぎり里もなし

一つもるゝ薄あかり

ともし火か星かけか

いそげ旅人やみぢにも

神のめぐみをしるべにて

氷めぐり

歌ならひに來かよふ沖繩の人あり。はじめの雪見んと。紅葉の頃より樂しみぬたりしかば。降りて二三日のゝち來れるに。いかなる心地かせしと問へば。あまりの面白さに。双の草履を脱ぎて之に受けつゝ寒さもおぼえず。ふりくるなかを。はだしになりてもてあそびぬたる。とて。同宿の人に笑はれたりなぞいふ。

似たるものは何ぞと問へば。わが島に榕樹といふ木あり。秋になれば空よりはらくと散りくるさまこそ。是に似たれ。たゞ白妙なるは。この木の葉を綿にかへておとしたるやうなり。土にふりしきたるは。島の習として。一月にまさちらす白砂なるべし。されども其美しさ。其おもしろさ。とても想像のおよぶ處にはあらざりきと語る。

霜柱まだ見たる事なしといへば。庭なる木かげにつれゆきて。是ぞと見せたるに。手に取り指に受けてめづらしがるも。小兒の美しき獨樂など得たらんが如し。いでや氷けんぶつに打ちつれゆかんも。興なからずやは。

まづ氷柱見んとて。關口をゆくに。いつも垂るべき大掛樋は。朽ちやぶれて水なければ。望むなしくなりぬ。あなくちをしといふうしろより。あれに下れるは何ものぞと問ふ。見れば。かなたの岸より川をわたれる一筋の笈に。劍の如く藤の花の如く。きらめき垂れたるものこそあれ。遠來の客もてなさんどて。まうけし神のわざならざらんや。おもへば幼かりし日。取りてかみつゝ。齒のつよきにはこりしも是なりしに。たゞをしむ。笈高くして。今客のため取りてもてなす能はざるを。

汀に枯れたてる蘆さへ珍しげなるに。そのひまをどちて。鏡の如くはりつめたるが。少しづゝ流れうかぶさま。何にたとへてか見るらん。呼べども答へず。客の眼と心とは。たゞ氷の面にあり。

曹司谷の鬼子母神にいたれば。枯木は天をなでゝ。箒の如く角の如く立ち並みたるを。仰ぎ見つゝ。沖繩にては。火事のあとならでは。葉もなき木のかゝる様なるを。見るあたはずといへり。見ずやあの鐵槌もて。佛前の手洗鉢を碎きをる少女を。といへば。はしり近づきて。氷のかけを拾ひあつめ。と見かう見ては。水晶よりも貴とげに手まごぐりす。

おぼろ月夜の光ばかりに残れる雪。木のもとにあり。思はざりき。かくまでに妙なる花を。天の降らすべしとはと呼ぶ。おのれ北國に旅

して。天も地もたゞ白き中に。埋もれたりし夕ぐれの心など語れば。小兒の桃太郎嘶きく如くに。耳傾くるも興あり。

慕ある處にゆけば。霜柱いと白くして。二寸三寸の銀の竿。はやしをなしたり。あはれ消えぬものなりせば。袋に入れて國づともおくらましものを。と笑へば。かれは半きゝもあへず。遠く近く走り興するさまの樂しげさよ。蹈むごとに土はしやり〜と音して。するどき氷は履の下に碎け散る。

かへりには。穴八幡の社にまうでしに。廣前の大きな水瓶のもとに。割りすてられたる氷あり。かれは指もてさしはかりつゝ。厚さ二寸にあまれりとおどろく。その上に。立ちて蹈みつくれど。ひゞわれんともせず。石よりもかたし。

日かげ春に似てあたゝかなれば。里川などは。やう〜煙りつゝながれ去る。美人のおもかげみせたる鏡は何くぞ。今は珍客のために。再び夜半の寒さを祈らざるべからず。

冬至

來ん春のこゝろや下にめぐららん

南のえだの梅さきにけり」

あすよりは針の目ばかり伸びぬべき

まどの日かげに少女きぬゝふ

寒草

夜あらしに夢やいくたびさめぬらん

秋はむかしの霜の下くさ

氷

ぬきすつる櫛の筒のあつ氷

いつまで世には解けのこるらん」

きりすてし大根の枯葉さながらに

のこして氷る里川の水

霰

雲まより天つをとめのときみだす

玉かどみしはあられなりけり」

こん春のおもかげ見せてみよしの」

山風さむくあられふるなり」

時雨かどさしにおきたる窓の戸を

まろがるおとや霰なるらん

冬月

こほりたるたらひの水のおもかげに

のこるも寒し山のはの月

水鳥

きえのこる夕日うつくし池水を

うづめてうかぶ鳥のそびらに

冬曉

うちおほふ衾もこほる明方に

おきて鐘つく人もありけり

菊岡さい子は父と姉妹とを雲井のよそにへだてゝむなし
く旅寝の露ときえぬ。三十五日にあたれる日その墓をと
むらひて。

父こひて音になく聲やのこるらん

夕ぐれ寒き森のこがらし」

おちば吹く嵐の外にわれならで

とふ人もなき君のかなしさ

煤拂

一とせの月日おそろし目にみえぬ

塵だに煤となれるおもへば

貧家の歳暮

人なみに松は立てゝも立てかぬる

烟かなしき年のくれかな

年のくれに

人のよの心ばそさも知られけり

しはすのそらの有明の月

夕ぐれ

一

秋の衣をぬぎすて、

さむげに立てる枯野原

夢はむかしの春風に

吹かれし躑躅いづかたぞ

今や落つる夕日の影

ひとりのこれる松の上に

二

落葉を籠に負ひつれて

かへる少女の姉いもと

頬にかゝやく紅の

色もやうく消えてゆく

あはれ今ぞなごりの空

遠き森は霧のうちに

千鳥の聲(唱歌)

一

よせては歸る蘆間の波

友よびかはす千鳥の聲

聞かねど枕のこゆる夜を

寢覺はいかに旅泊の舟

二

汐風さむく雲弁に吹きて

あられば海人の汐屋をうつ

よそにも心のさえゆく夜を

見る人いかに漁村の月

おさづれ(唱歌)

一

尋ねて來ませわが家は

田道のはづれ右に折れ

橋をわたりて川にそひ

卯の花垣をしるしにて

父にたまひし書も見せん

母にたまひし書も見せん

二

かならずゆかん明日こそは

さしづの道を右に折れ

小川わたりて君が住む

卯の花垣をあてにして

夢も今宵は書の上に

はやも心は書の上に

千鳥日記

明治三十一年十二月

關西鐵道—奈良—大坂—住吉—明石—洲本—由良—福良—檜養—

徳島—大坂通

一 關西鐵道

名古屋より關西鐵道に乗り替へたるは。十二月三十日の午前十時五分なりき。此線路は開けてより未だ二月も立たざれば。何事も新らしく珍しき心地す。先づ三等室の腰掛にも疊表を敷き。壁には發着時間表を掲げたり。是も近來改良の一つにやあらん。愛知に着きて。窓より廣告投げ入れたるを見れば。すし辨當洋酒日本酒よりサンドウイッチ西洋菓子まで携帯して。志那忠といふ辨當屋の此汽車に乗り込み居る事を示したり。旅は便利にもなれるかな。蟹江など過ぎて桑名きたる。昔宿りつる里も見えたり。

貝焼きし少女が宿の夕けむり

かすむやいつの春のおもかげ

美濃の遠山雪白く見えて。寒さやうく加はり行く。

龜山は參宮鐵道の分岐線にして。拓植は西京に行く人の乗り替ふるところとなり。うどん餅など賣りに來る。餅は草津のにやと思ひしに。思ひきや名こそ焼なれ。似て非なる下等の品ならんとは。

上野に着く頃は。一室乗合僅かに三人を残せるのみ。老人曰く夜汽車のやうなり。晝はめづらしと。

右の方なる古寺に神さび立てる枝垂櫻あり。春ならましかばなと思ふく眼を轉すれば。左を流るゝ谷川いと白く。さながら晒せる布に似たり。岩のさま水のあなたの山の姿。何となく大井川を隔てゝ。嵐山に向ふ心地もするかな。川いまだ去らざるに大河原は來れり。羨ましきは此水を我もの顔なる驛夫の身よ。

笠置につけば。川更に大きく右に流れて。舟一つ帆を孕ませたるが上り居り。向に象の横はれるが如きこそ。聞くもゆゝしき元弘帝のましくし處なれ。

笠置山やまかせ寒し古への

うらみ忘れぬ旅の衣に

トンチル盡きて奈良いまだ見えざるに。早くも塔の九輪は仰がれたり。塔よく。汝が下には如何なる無量の懷古をか集むる。

二 奈良の上

ステーションより人力車やとひて佐保川を渡る。水さむく人遠し。

誰きゝてめでそめつらん夜なくの

佐保川ちどり波になく聲

興福寺の塔の下を過ぐれば。東金堂には娘づれの田舎人など拜みゐたり。車夫は堂の前なる松の大木を指さしつゝ。弘法大師の櫻に替へて植ゑ給ひしかば。お花の松と名づけたりなど説く。

大文字屋に宿を定めて先づ大佛に物せしに。扉はや鎖されて入るを得ず。二月堂の佛前に立ちて見おろせば。猿澤の池など唯一目なり。雲雀あがる頃ならましかば。柳櫻をこきませたらん景色もすぐれたるべきに。

むれあそぶ鹿の命もあはれなり

人はかへりし夕ぐれの山

呼びとめらるゝ三條小鍛冶を通り過して。奈良人形賣る家に入る。三笠山の麓なり。草つむ頃は此あたりより掛茶屋多く出でゝ。ことに賑ふ處とぞいふなる。

日はやう／＼暮れぬ。春日に詣でんとてゆくに。茶店の姥いでゝ。鹿の餌を買うて下されといふ。いはるゝまゝに煎餅を受け取り投げ與ふれば。土に落ちたるを拾ひもあへず。口つきいだして手に噛みつかんとす。皆になりたれば行き過ぎんとするに。あと追ひ來りて。杵の如き口を袂のあたりに突きつけ。逐へども拂へども去らぬには困りたり。あはれ始より與へざりせば。かくは甘ゆまじきを。人を使ふも是にや似たらん。

本社は御屏とちたれば。玉垣の外より拜みて若宮に詣で。石燈籠のあ

また立ちたる道を下り来る。日全く暮れて木立くらく。枯葉ふむ吾お
とならでは山意もなし。鹿なほ處々にゆるぎわりく。

さをしかの色をのこして春日山

杉の下みち日は暮れにけり

宿りに歸りて湯にも入りぬ。夕飯も終へぬ。いでや運動がてら町みあ
りかんとて出でたるに。歳の市めきたる夜店などありていと賑はし。
大坂鐵道名所案内などを求めて。猿澤の岸を歸りくる時月いでたり。塔
の影松の影。雲透に書き出だされて。身にしむさまなり。

古寺の塔より下に出でにけり

三笠の山の冬の夜の月

闇には大和巨燧など入れ設けてあり。いざ行燈に油さしそへて。矢立

の筆と親しまん。

三 奈良の下

三十一日。くもりぬ。寐覺して歌おもふに。鐘の聲とほく近く聞ゆ。

霜さむき春日の里の明方に

ひくくやいつの古寺の鐘

明けはて、欄干によれば。前の芝生霜いと白く。猿澤の堤の柳も力な
げに垂れたり。遠くは葛城山いと高く聳えて。よそにのみ見てやみぬ
べき雲も。今朝はいまだかゝらず。

ふたゝび春日に參詣す。一の鳥居に入るより。鹿はや芝生にあまた出
でぬ。伏したるもあり。立ちたるもあり。旅人みつけて群れくる
は。求むるところやあるらん。石燈籠の陰にかくれて。何やらん捜す

やうなるも見ゆ。

二の鳥居前に茶店あれど。あるじは杉の落葉かきに出で、。竈の煙ひ
どり淋しげに残れり。

若宮の神樂殿には。五色の絹垂らしたる舞鈴などならべてあり。庭に
遊び居る二人の少女。白き衣に紅の袴して作り花を房やかにかざした
るは。畫巻物にて見し心地こそせらるれ。名物の火打焼。霞酒など賣
る家の前を過ぎてゆくに。注連縄かけたる井筒のもとに。數の子あら
ひをる厨女あり。おもへば明日こそ正月元日。わが家人も屠蘇の用意
する頃なるべきを。

霜どけの露ふみしだきて三笠山に登る。今は花も葉もなき冬がれなれ
ど。奈良の町より遠くは三つ山まで一目に見わたされて。眺望たぐひ
なし。國原は大海なして朝霧の立ちこめたるも。晴れたるより中々お
もしろく。嶋めきて磯めきて山と里とのたえぐに見やらるゝなど。
たゞさながらの歌なり畫なり。出で入る汽車の音かなたより來り。又
こなたより行く。

ふるさとは冬にぎはしくなりにけり

車のけむり空にかすみて

四 大坂鐵道

かくて奈良を發せしは十二時四十七分なりしが。郡山法隆寺のあたり。
何くを見ても冬がれのけしき。目のとまるものもあらず。汽車の中
には。米價の下落。地價の増加など喋々する聲のみいと賑はし。

大和川に別れて大坂近くなれば。なつかしき天王寺の塔は。早くもあ

れに立ちたり。折しも水鳥さつと群がり來りて。白き翼をひらめかしつゝ。飛びのぼり又飛びめぐる。

大坂の宿りは梅田のステーション近きところに定めつ。友を訪ひ町をあるきなどして。今宵は早く寝んとするに。旅の年とりは久しぶりなれば。何とやらん思ひ出でらるゝは書生の昔なり。近くに響く算盤の音さへ。今は歌おもふ枕の妨ともならず。

たゞひとり旅寢の床にのこされて

世はいそがしき年ぞ暮れ行く

五 住吉詣

何くやらん御目出度うの聲す。夢破れて頭もたぐれば。あなうれし。明治三十二年の元旦は笑顔よくも早わが枕邊に立てり。

難波江の蘆のかりねの枕にも

わすれぬ春はめぐりきにけり

この花のにはひながらやいざ汲まん

なにはの里の春の若水

顔あらひて座敷にかへれば。下婢は三つ組の重箱に銚子そへて持ち來り。女あると出でゝいざ一つと勸む。旅の正月は氣樂とはいふものゝ。さびしからずしもあらざりしに。此なさけにあひて春わたゝかくこそなりにけれ。

箸を置かんとする頃。友ひとり來れり。是より住吉の初參おもひたゝすやといふ。空は雲なく晴れわたりに。日いとあたゝかなれば。いかでか否と答ふべき。打ちつれて心齋橋筋より難波ステーションに赴く。

さて道すがら新年のさまを見るに。店ある家には段だらなる又は紋を染めいだしたる幕を引き。戸のわづか明きたる處に金屏風を立て。年禮を受くるもあり。年禮者は紋附に袴羽織の出で立ち多く。必らず扇を手にして新年の御慶をと述べあるくなり。車にてまはる人と洋服なるとは。東京にくらべていと少なし。大禮服と馬車とは。一つも出で逢はざりしのみ。物足らぬ心地こそしたれ。

娘どもは春着きらびやかに装ひて。年始にゆくもあり。羽根つき居るもあり。何れも大かた紋附にて。帯のうしろには必ず扇さしたるなど。心のなしにや。古風なつかしく見ゆ。

汽車の乗手は黒山の如くにステーションを埋めたり。やうくにて切符を買ひ。二等室に割り込むが如く入りたるに。跡よりく押し込ま

るゝものおびたゝしく。こゝは三等にあらずと叱らるゝ事もしばくなりき。後れて走りくる老若男女はどんと狂するが如く。身を横にし脛もあらはにプラットホームを歩くさま。火事場にかけつくる程の騒ぎなり。乗合の一人は語れり。去年の今日などは。中等切符を持ちながら下等室にやうく乗りたり。是も殆ど残さるゝ處なりしにと。

さて發したれど人多くして窓の外も見えず。からうじて袖の下などよりのぞけば。海の方には林の如く立ち並べる舟の帆柱に。赤き白き青き旗など打ち靡けり。六甲山は薄く霞みて烟草の煙の絶間よりはのく見ゆ。

うちなびく舟の旗手も春めきて

霞ながるゝ茅渚の海原

天下茶屋より下りて松虫塚をとふ。謠に作れるも此塚の古事ぞかし。畑の中に立ちのこる一ひらの石。一もとの松。年の始に来て弔はんとするもの。吾等が外には又たれかある。

虫さし人はかへらぬ古塚に

いつまで松の立ちのこるらん

天王寺はるかに見えて。雲雀の聲のこゝかしこ聞ゆるなど。梅の頃といはんよりも。むしろ櫻の時節おもはるゝ空なり。此のあたりを阿部野といふ。

日影は暑きほどにて外套もぬぎたくなりぬ。かちにて行く人なかく多く。少女は顔を桃色にしてハンケチかざしつゝ歸りくるもあり。蝶は何くぞ。菜種は何くぞ。誰か前に寒の入の控へ居るを思ひ出づべき。

住吉は立錐の地もなき賑ひ。とても形容すべくもあらず。美しき少女の足袋はだしになりて。太鼓橋を走り下るもあり。松原より濱邊をさしてぬりゆくもあり。太平翁の。赤裳すそ引く住吉の濱とよまれたるも。かゝるさまの想像にやありけん。

すみよしの松のみどりに咲きまじる

なには少女の花を見しかな

神樂殿には今ぞ神樂の始まる處にて。立ち並べる六人の舞姫。松の枝をかざし袖扇を持ちて。左右しつゝ袖を返しつゝ舞ふ。歌は何やらん聞えねど。横笛ひとり細く長く澄みのぼれり。

住吉踊の人形つけたる麥藁傘を賣る店。道の兩側に立ち連なりて。大きなるは小供の日傘ほどのもあり。小さきは小皿ぐらゐるのもありて。そ

の賣るゝ事おびたゝしく。數十の店は客のすきまもなし。おのれも二つ三つ買ひてぞゆく。

歸りの汽車は雑踏ますゝ甚しく。プラットホームは人の堤を二重にも三重にも築きあげたるやうなり。手にゝ人形傘を携へたるさま。踊手などの揃ひたるとも見るべきか。往復列車の摺れあふ毎に。酔ひしれたるものどもは。窓から窓に蜜柑の皮を投げ。一度にどつどつ時の聲をあぐ。

六 人丸山

二日も大坂に暮らして。梅田を立ちたるは三日の朝なりき。浦江の邊は。去年も一昨年も菜種の盛りに過ぎしかばいとなかしきに。今は畑の面うちかへしたる土ならでは。見るべきなし。

神戸に着けば國旗にぎはしく翻りて。年始の客など東に西に行きかふ。

須磨の濱には網多く干したり。砂の上に平目などあまた積み上げたるが。はねをるも見ゆ。

明石にて下り城山にのぼる。天守は屋根朽ち壁落ちながらも。松の緑に包まれて立てり。その下には舊藩主の祖神を祭れる明石神社あり。松に妨げられて思ふさまに海も見えず。車夫いふ。此城は上りて見るより下で見る方まされりと。おのれ更に言はんとす。町にて見しよりも海にてながめしこそ面白かりしか。

人丸神社は高き山の上にあり。播磨灘より淡路までも。眺望のころところなし。岸に臨める茶店によりては。人毎に松葉さしたる小籠を買

ひもてゆく。何ぞと問へば此地の名物松露なりといふ。

ひろひても行かましもものを急がずは

浦風霞む松の下つゆ

淡路がよひの笛ならしつゝ呼び居るを如何せん。

ステーション前の家にて午飯せんとして。羹の蓋を取れば。頼襄の二字を物せし印影の蒔書は裏にあらはれたり。

この岡の松は知りきや打ちつれて

母と吉野の花を見し人

今ならば汽車の便ありて。春毎にも母人とのゆきとせらるべきを。

湊に至れば。舟すでに岸を離れたり。車夫力を限りに呼びとめたれと遂に及ばず。次のは二時過に出づべしといへば。待合所にわがりて湊

のさまなどながめ居り。かゝれる舟。出で入る舟。みな松飾し國旗ひるがへしたる。何れ海上の花ならざるべき。

二時十五分纜を解く。左には。松の並み立てる中に旅館白く見えたる舞子より。須磨までをながめ。前には。よそにのみ見し淡路の山影と語らんとて行く楽しさ。風さむからず波なき程に吹きて。鷗三つ四つ翔りゆくなど。愉快かぎりなし。顧みれば明石の城いよゝゝ高く立ちて。わが舟を送るにやとさへ思はる。

五十町の海上。三十分前後にて達するを得べし。乗合六七人。岩屋見物の紳士あり。夫婦づれにておのれと共に上等室を占む。其他は商人職人農夫にて。多くは年始なるべし。砂糖袋や蜜柑籠など携へたり。

七 繪島

三時十分岩屋に着く。此間五十町の海上なり。右には燈臺白く聳え。正面には町を隔て、大寺見ゆ。問へば観音なりとぞ。

車を雇ひて岩屋神社の前を過ぎ。名にのみ聞きし繪島見に行く。島とはいへど地つゞきなり。嶮しき岩を登れば。廣々と平かなる處ありて。岩ことふく赤き筋して。觀世麩の渦のやうに色どられたり。

いつの世の神のすさびの筆ならん

色どりのこす磯の白波

少し北の方に見ゆる島あり。車夫はあれがオイシマにて。是がコイシマなりといふ。圖を調べれば。大繪島小繪島の文字なりき。大繪島こそ人麿の歌によめりし大和島とよ。

いにしへの明石の門より舟出して

大和島根を今日見つるかな

車夫またいふ。此邊の枯草の緑一面の芝原となる頃は。瓢箪携へ辨當もちて。遊びに来る人多しと。潮の音。鶴の影。げにも春ならば一しほの樂しき友なるべきを。

朝霧橋といふを渡りて。大きな岩穴を右に見つゝゆく。左は晴れやかなる海づらにて舟おほし。かへりみれば松尾崎の松あをく烟りて立てり。

この春は釣にやこまし淡路がた

岩屋の松のうすがすむ頃

舞子めきたる松の立ちつゞける中など行くほどに。播磨路は跡になりて。夕日美しく山もなき海原に浮びぬ。

假屋にて日は暮れそめたり。車を繼ぎかへさせんとするに。行かんと
いふものなければ。止むを得ず洲本まで海上を渡る事となし。とかく
する程に。笛の聲して汽車は着きたり。大坂より岩屋。假屋。志筑。
洲本と通ふ船ぞかし。此間陸をゆけば。假屋より志筑まで四里。志筑
より洲本まで三里なりとぞ。

漁材の火などちらく見えて。暮れわたる磯のけしき中々あはれな
り。幼き時より百人一首の歌に聞き覚えたる千鳥の名所なれば。甲板
に立ちてながむれど。一つ二つ飛びゆくのみにて。遂にあまた群れわ
たるを見ず。海の上には黒き影して漕ぎゆくあり。火をともしたるあ
り。舟さまぐのなりはひも見ゆ。ながめの末にまがはぬ光は。苦が
島の燈臺なるべし。紅なる星の如くに打ち輝く。

空さへ暮れはてし。わが舟の外には人もなく。家もなく。淡路島ひと
り寂寞の内に残れり。

くれにけりやどりはいづく伊奘諾の

神代ながらの淡路島山

洲本につきしは六時なりき。先が峰といふに宿る。

八 由良

四日も日よし。曉深く起き出でて、見れば。かたわれ月おもしろく空に
あり。

海士の子は己がものとやながむらん

淡路の島のありあけの月

明けはてたる山に松むらくと見えて。山際べに金の砂子おき

たる如くなるは。日の出でんとする方角なるべし。火をもて來たる少女に問へば。お城の嵐山なりといふ。

洲本を立ちて磯の松原を左にしつゝ行く。海のあなたには日影見えて。沖の白帆を半ば色塗りたり。

家人にいかん語らん霞む日の

海見つゝ行く松の中道

波の上に長く横たはりて顧みらるゝは。岩屋なり。それに續きて遠く霞めるは。津の國なるべし。山鼻一つ廻れば。日は我が正面に來りて。空に昇ること二三尺。その下に鯨なしてあらはれたるこそ。紀州なれ。苦が島を中にして加太は左に。和歌山は右に。

その又左に遠く離れて帆影の見ゆるあたりや。泉州堺なるらん。中打

ち絶えて空か水か。霞の外に物なきこそ。大坂灣とは知られたれ。

餘りの面白さに物も言はれず。歌もよまれず。いつしか由良に着きたるをさへ知らざりき。洲本より二里なりといふ。

由良の港を三日月に喩へなば。その兩端の角の處に砲臺ありて。右なるはサビ。左なるはナルヤマといへり。されども大船は入りがたしとて。ナルヤマより外に帆柱を並べて居り。

町は灣に沿ひて長く立ち續き。鳴子蜜柑。鳴子菓子。干鰯。てぐす。など賣る家多し。此邊の産物はイキスなりといへど。今は取るゝ時節ならず。

砲兵の營所を右にし。あちこちと見あるけば見るほど。面白き處なり
うつせみの世はおもしろし漕ぎつれて

由良の戸わたる海士の釣舟

童二三人鳥籠提げて山に行くは。目白を落すなりと車夫いふ。折り持ちたる椿の花を見れば。冬の暖かさも知られぬべし。肴籠や風呂敷包やと戴き連れて行きちがふ女も。正月なればにや白いものなど附けたり。

九 福良

なごりを残して先が峯に歸れば。十時なり。早けれど午飯して立つ。加茂。八木。廣田。市村などいふを経て。福良に着きたるは一時なりけらし。

道に礮馭廬島と記せる石の立ちたるあり。問へば是より少し入りて。川と畑との間に松のある小高き處といへり。またゆづるは鶴羽山やまはと問へば。左の方なる山を指さし。あの並松を向へ越えたる處にて。舊の二にン月

権現様のお祭には。おびたゝしき參詣人なりなど語りしは。廣田のあたりなりけん。

市村すぎて。淳仁天皇の御陵に詣でたり。道よりや、左の方に入りたる處にて。椎櫃榎などの老木立ち茂りて神さびわたり。何ならん赤き實のなりたる木。ところづくに交じれり。此邊には人あまた出で。

麥畑打ち居るさまいと賑はし。菜の花さきたる處もありき。

仁平にんぺい焼やきの出づるは伊賀村にて。これより左のかたに當り。其土は右のかたなる池田より出づなど語りしは。加茂と八木との間にて。道に積みおきたる白土を見し時の事なりき。

八木の松原は名高きものにて。むかし船の材木に伐らんが爲め。日向の種を植ゑたりと聞きしこそ思ひ出でられたれ。枝より枝に竹さしわ

たして大根ほしかけたるが。遠くより藤の花などのやうに見えたり。福良につきて阿波への渡海を問へば。五時まで待たざるべからず。そのひまに見にゆく處は無きかといへば。岡の原といふ山に登るべしとて。懇に里人をしへくれたり。麥畑の中を縫ひつゝ、枯草ふみしだきのぼれば。小松むらがり生ひたる處ありて。其上はいと平らなり。岩に腰掛けて見わたせば。港内は一枚の繪圖廣げたるやうにて。先づ足もとなる里の家々より一目に向はるゝ海づらを。圍める右の岬は象の鼻の如く。長く波に横たはれり。中に洲ありて家めきたるものゝ見ゆるを。後に聞けば辨天なりとぞ。烟島その右に立ちて。げにも名の如くにぞ烟りわたる。

今日は風いと寒けれど。さすがは南の國とて。枯草がくれ董こゝかしこ色こく句へり。

花つみて里にや行かん行けばとて

かざしにすべき妹もあらなくに

海に出で入る舟の多きは。鯛つみたるもあらん。蜜柑つみたるもあらん。伊豫より來しか。阿波より來しか。さては遠く神戸大坂にゆかんとするか。

待ちつる船の來りしは五時半なりき。荷をおろして直に出づといふば。問屋の女に案内せられハシケに乗る。棧橋高くてこまれり。

山黒く燈赤く。空と海とのみ白く暮れ残りぬ。乗合心なし。島の名なと問はんとすれども。眠りて答へず。

撫養おやに着けば七時も過ぎにけん。夜くらくして方角も分らず。迎に來

たる女に伴なはれて宿れる家をば。明石とぞいひし。阿波ぞと思へばにや。床に入りても暖かさ昨日に似ず。

十 鳴戸

舟にて鳴戸見物にゆく約束したれば。五時頃より起きて仕度し。ラムプの下にて食事も終へたるに。船頭より未だいざと言ひ來らず。夜は遂に明けたり。何故ぞと促せば。此風にてはとても行かれねば。見合はせ居るなりといふ。げにも昨夜は戸を動かす音。夜すがら絶えざりしかば。心やすくも寝られざりけり。さらば陸よりせんとて。宿の男を案内に頼みて出づ。千疊敷といふ處まで一里半なりといへり。

海を見れば。大波は眞白になりて。鰐の口あけたる如くに寄せ來り。かゝれる千石以上の大舟は。風のまに〜ゆりわけゆりさげらるゝさま。見る目も危し。されど此海を凌ぎて向の地に渡らざるべからず。渡舟を呼べば。一人來りて權を取り押し出だすに。舟は早くもゆらめき出でたり。此間五町なりといへど。今日は十町もある心地す。

着きたる處を土佐泊とさふりといふ。撫養の港の入口に。大磯崎と相對したる鼻の裏にて。紀貫之の。來よる波をぞとよみたるは。此地なり。岡の上のに此歌彫りたる碑を建て。長命寺には貫之の遺物ありなぞいへれど。急ぐ旅なれば又をりもあらんとて。門前を過ぐ。

かくて山一つ越ゆれば。淡路は目の前に向はれ。朝日花やかに其上に出でたり。昨日は淡路にて紀伊の日の出を拜み。今日は阿波にて淡路の日の出に向ふ。面白きは旅ぞかし。

先づ見わたすさま。東南の方に海上に出でたるは阿波の大磯崎にて。

それより海のあなたに相向ひつゝ立ちたるは。淡路の南の果なる潮崎しほざきなり。その北なるは押上りの鼻おしのばとて。鶴崎の鼻と共に福良の灣を圍み。なほ北の方には砲臺のある戸崎。松をいたゞきたるまゝ波の上に臥したり。是れぞわが孫崎と相向き立ちて。鳴戸海峡の扉ともいふべき處なる。

是より一里ほどの間。はてもなき砂の上を踏みゆく道にて。足はまゝり歩きにくければ。波打際の濡れたる上を行かんとするに。荒波吠えつゝ襲ひ來りて。やゝもすれば裾を洗ひ去らんとす。高き處に逃げのぼれば。海より來る風こまかき砂を吹きあげて。顔ともいはず目ともいはず。打ち立つる事雪吹の如く霞の如し。風ますゝ力を極めて狂ひ來り。吾身さへ外套ごめに二足三足引かれゆかんとする事も。しば

しくなり。

されども案内する男の。裾も袂もちぎるゝ程に吹き靡かされつゝ。鷺毛に似て散りくる中に。進みもやらずたゝすみゐたるは。さながら佐野の渡の最明寺めきても見なさるゝかな。

阿波の海の汐風あれて袖にちる

雪おもしろし家づとにせん

今日は漁舟一つも見えず。此あたりより鳴戸にかけて。岩に附きたる貽貝いがひの取るゝ事おびたゝしといへど。風つよくて是さへ一人も出でゝあらず。肉を取り捨てたる貝の殻は。砂の上にこゝかして散りばひてあり。

鋸の目の如き石の上をゆきて。裸島はだかしまを前にせる處に着きぬ。飛島とびしま右に

離れて見やられたり。裸島は松すこしありて誠に名の如く。舟よりせば此島にのぼりて。鳴戸の渦を目の下に見おろすべしといふ。島と磯との間を銚子の口と稱へて。早潮の漲り走るさま。見る日も凄し。うしろは大毛山にて。半腹の平らなる處を千疊敷といふ。こゝにはれば鳴戸海峡残る隈もなく。かなたの戸崎より。西に續きては淡路のアナカ(村)丸山(港)などの處々。東には鶴崎押上り。潮崎。例の間ひ答へして見えわたること。おもしろけれ。あはれ昨日別れし福良の山よ。此風にも華はしばまでや立てる。

渦は引汐ならでは見られずとて。今朝の時刻をはかりて早起しつるものを。風に舟路を妨げられたると。磯づたひのひまどりたるにて。遂に間に合はざりしは残念なり。案内の男の得意げに打ち語るを聞け

ば。渦の最も見事なるは。舊の三月節句にて。高さ一丈五六尺より七八尺に至る事あり。其頃は舟にて裸島にくるもあれば。此千疊敷にのぼるもありて。賑ひ一方ならず。茶屋など出で、花見の如しと。げにも焚き捨てたる竈の跡は。冷かなる石に残れり。鯛釣る舟。若和布とる舟。また見もの、内なりとぞ。

磯菜煮る烟も見えて春ならば

少女をこめにぎはふ山ならましを

十一 里浦

明石に歸りて午飯し。浦里といふに清少納言の墓あるを訪ふ。撫養の町を少し離れて。人丸の社などを左に見つ、細道をゆけば。田の中に白壁めぐらしたる寺あり。寺は即ち墓守の庵にて。老木の松二つ立てる下

こそ。枕草子の作者が眠れる千代の枕にはあれ。

丈高き五輪に梵字しるしたるを中央として。その四方には。小さき鳥居や繪馬や手拭や白布やと。願ある人々の手向けたる數へ盡されず。瓶には檜水仙など。まだ新しきがさしてあり。

土地の人は何祈るにかと問へば。此神はじめて阿波に渡り給ひし時。船の寄るを待ち受けて。悪しき里人その衣を奪ひ。果は腰卷さへ脱がせて持ち去りにしかば。身をつみて人の苦しみを思ひ。いかで世の婦人の腰氣の病を救はゞやと遺言して。身まかり給ひぬ。よりて腰氣を病む女は。こゝに掛けてある白布を借りて結び。全快すれば新しくして返す習なり。かゝる不善をなしたる科により。里浦には目を病むもの多しなどいふ。謂ふ勿れ。今日の學者田舎に來れば専門を廢して多

藝になるの流行ありと。我國二才女の一なりし大文章家さへ。四國に渡りては醫者の兼業をなすにあらずや。

玉すだれ雪にかゝげし人の名も

知らでや海士の何いのるらん

縁日は月の十日にて。參詣群集すとぞ。

十二 德島の上

撫養を出で、德島に向ふ。三里の道なり。大河を渡ること三たび。その一は牛屋島の川とて舟橋なり。その二は鯛の濱とて橋柱のみ残れる處に渡舟あり。その三は吉野川の下流にて古川と呼ばれ。德島市に入る口にて殊に大きく。舟橋なるが風いたく吹き荒れて。手も顔も切り裂かるゝやうなり。何くにかありけん。雪さへちら〜と來りし折も

ありき。

中通町二丁目の表屋に宿る。三時も過ぎたり。餘りの寒さに風呂はなしやといへば。釜そこなはれたれば。近處に案内せんとて。少女先に立ちて三四軒ほどの隣に入る。行燈に題して萬國湯といへり。

湯はまだ客少なければ新しく清し。天井には大きな松の枝をさし。

それに赤と白との糖袋を釣り提げ。又いろいろの短冊をも添へたるは。七夕竹と餅花とを一つにせし如し。

宿に歸れば。寒からんとて巨燧こしらへなどしつゝもてなす。

十三 徳嶋の中

明方より風は少し風ぎたれど猶寒し。六時になれども宿は起きず。七時も過ぎ八時になる頃。やう／＼起きたり。夜の明くること東京に比

べて二時間ほども遅ければなるべし。されども下婢火を運び來るにもあらず。戸を明くるにもあらず。おのが顔洗ひに行きたる跡に。歸りて見れば。床あげ掃除して火鉢に鐵瓶まで掛けてありしは。心持よかりき。

朝飯終へて。見物にゆく場所をしへくれよと。女にいへば。三階の窓を開きて。あの塔のあるが瀧の山。それより續きてこなたに見ゆるが勢見山みやまにて。高きにあるは忌部神社。左なる屋根こそ金刀比羅さまよ。この前の通りを四階の牛肉屋よりたをつて。新町橋を渡り右へ／＼とおはさば。おのづと瀧に出で給ふべし。名物の焼餅かならず召しあがれなぞいふ。たをつてとは曲りての意味なる方言ぞかし。

いはれしまゝに新町橋を渡る。川いと廣く。殊に大根つみたる舟多く

集まりて。運びあぐるも中々の賑ひなり。

眞直にゆけば小高き處に天満宮あり。石段の傍なる銀杏の大木。まだ黄なる葉を残したるは。冬遅き國の陽氣を知らせがほなり。

寺町を過ぎ春日神社を拜みて。其右隣の仁王門を入れれば。瀧の寺なり。本尊は薬師如來にて。堂の前には。我手を息してあたゝめては。小娘の顔を撫で居る母もあり。人間親子の眞情は。佛もあはれと見給ふらん。

堂を下れば。右の方に餅屋二軒あり。小女など大きな金皿を火に掛けて焼きつゝ。およんなさい〜と呼ぶ。

奥なる家の二階にあがれば。焼餅を紅葉と松葉のつきたる中皿に盛り。四角なる塗盆に載せて土瓶と共に持ち來れり。餅は天保錢の形して薄

く平たく。上等の餡を入れて菊の花めきたるギザを附けたり。そのさま恰も初茸を押しつぶしたるにや喩へん。手に取りて味はふにいとうまし。此餅の粉も餡も。皆瀧にさらしたるが故に。たぐひなき味を生ずとぞいふなる。

瀧は何くぞと問へば。此雁木をお上んなされといふ。雁木とは石段の事なり。水は岩間をわちへこちへと傳ひつゝ。大きくはあらねと響さやかに落ちくだる。唐銅の不動尊。劔を引提げて睨み立ちたり。

瀧の上は料理屋などわりて俗世界なれど。朝まだ早ければにや。三絃の聲も聞えず。寂として人なき如し。

右の方へ登り〜て三重の塔の下に出づ。塔の赤き柱には。西國八十八箇所偏路同行二人などいふ札。べたく〜と張りつけてあり。格子を

のぞけば。香の煙ひやゝかに。金色こんじきの観音たふどげに拜まれ給ふ。
 なほも右に〜と急なる道を登り。はては踏めば轉ばる石の道になり
 て。いと高き處に達せり。枯草の上には遊びに來つらんと思はるゝ人
 の。吸ひ捨てたる煙草の跡さへ見ゆ。こゝよりは徳島町を始とし。海
 廣く島近く。遠近の眺望のこるところなし。

城山を中央にして立ち重なる家の左右に。川白く流るゝあり。左な
 るは昨日渡りし古川にて。右なるは沖洲川おきのすかはにやあらん。海の上遠く煙
 れるは。淡路より紀州の山なるべし。有るか無きかの影を空と波との
 間に隠さんとするは何くならん。地圖ならでは答ふるものなし。風ま
 た烈しく吹きて。廣げたる地圖をさへ奪ひがほなり。

阿波の海の波路につゞく遠山や

鯨しほふく三熊野のあたり

見おろせば。雲井に仰ぎし塔の九輪は。足もとより一丈あまりも低く立
 ちたり。招魂碑のある處も同じ山にて。谷一つ隔てたる向に見ゆ。

忌部神社は山つゞきなれど。八九町もあるべきか。芝の愛宕の如き石
 段を。鐵の手すりを力にして喘ぎ〜登る。段のかたへにはいと高き
 松の枝垂れたるなどありて。神さびたり。

御社は白木づくりの玉垣もて圍まれ。千木ちぎ高く拜まれ給ふ尊さよ。更
 に參詣人の影も見えぬなど。鈴の音にぎはしき廣前よりも。かう〜
 しさ格別なり。喩へは違へど。世にめではやさるゝ詩歌と。鬼神をの
 み泣かせつべき詩歌との別ちも。是にや似たらん。嵐ひとり松に聲し
 て櫻の枯葉を吹く。

金刀比羅神社は忌部神社の東に隣して。高からねと境内奥深く。山桃にや大きな木陰におははれつゝ宮は立たせり。瀧の方より城山まで見晴らされて眺望よき處には。繪馬堂を利用しつゝ茶汲女しきりに客を呼ぶ。

一まづ宿に歸りて午飯し。子供を案内に頼みて城山に登る。門番に請ひて許を得たるなり。薄枯草に埋められたる道を踏みしだきつゝ行けば。遂に頂に達しぬ。こゝこそ天守の跡なりけめといへば。更に知らず。今は測候所の旗立つる處よと子供いふ。

町に向ひ海に向ひたるながめ又いふべからず。されど雨少し降り出でたれば。急ぎて下りに向ふ。堇のこゝにも咲きたるを見て。

われのみと思ひし城の淺茅原

春こそ訪ひし跡はありけれ

夕より夜に掛けては。人の家に招かれてもてなさるゝ事あり。更かうた閑けて歸るに。徳島橋のうへ風いと寒し。

淡路潟沖波たかしさらでだに

友なし千鳥磯に鳴く夜を

床に入れば少女來りて。温飩賣が來ましたがいかゞといふ。それよかるべしとて持てこさすれば。東京の鍋焼うどんに似たるものを。清らなる茶碗に盛りたり。腹まで暖まる心地して枕のつめたさも忘れはてぬ。

十四 徳島の下

七日は人訪ひ暮らして。夕方沖の洲といふに遊ぶ。徳島の海邊にて。

芦多く砂廣く。面白さ書にも書かまほしき處なり。まづ東に見ゆるが和田の岬。それを廻れば大みこと稱へて鯨あわびの取るゝ處。また小松島といふ名所もあり。なほ東に出でたる山の後ろを椿泊といふなど。同行の里人は指さし語る。夕日波を別れて風氷よりも寒し。

今夜は大坂行の汽船に乗らんとすれば。送りに來たる人五六人宿に集へり。皆うちつれて福島といふ處に至る。八時半に纜を解くべしといへばなり。

こゝにて人々に別れハシケに乗る。星きらめきて海上船黒し。此内に己が東京まで伴なひ行く少女あり。家無く親なくあはれなる身の上。聞かば誰か袂をしばらくざらん。親類は送り來て岸に立てり。立つ人の心はいかに。行く人の心はいかに。

十五 汽船

汽船は沖にあり。中等室は大込合にて身を置くべき透間もなし。辛うじて入口に行李を置き。之に二人相向ひて座し。わづかに肱つきつゝ、夜を明かさんとする。いとわびし。

されど音に聞きつる鳴戸の汐筋も舟ゆれず。いつしか座したるまゝに寐入りけん。耳に入る聲は早くも兵庫に着きしと言ふなり。時計を見れば三時半。上陸する事もならず。

大坂の川口に入りたるは朝の七時なり。我は船と別るゝを喜べど。阿波の子は故郷の涙いまだ乾かず。霜白く空霞めり。心あての淡路は何くぞ。言ことづてやるべき千鳥も飛ばず。鷗も翔らず。

深山櫻終

明治三十二年十一月廿四日印刷
明治三十二年十一月廿七日發行
定價金四拾錢

著者 大和田建樹

發行者 東京日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎

印刷者 東京本郷區丸山福山町六番地 水谷景長

印刷所 東京小石川區久堅町百〇八番地 博進社工場



發兌元

東京日本橋區本町三丁目

博文館

大和田建樹君著

散文韻文

花月雪

第七版

第七版

全壹冊袖珍洋裝總クローズ美本
 ふるさど日記●故郷の山●親なくて●忘れぬ影
 ●朝なき●父の恩●短歌十二首●霞める●富士●昔
 ●初鶯●春の月●維●千里の春●海邊●都●踊●阿
 ●に似たり●中仙道●柳●蝶●の春●修善寺●六●阿
 ●彌陀●廢物利用●笛●の音●惡戯●閑窓●ガ●ル●カ●ン
 ●の聲●春の月●柳●短歌●子●首●精壁●の藤●萩●のん
 ●げ●草●山●ふ●ご●ころ●花●賣●る●翁●萩●の●若●葉●萩●の●ん
 ●若●葉●春●の●水●少●女●十●三●春●の●な●ご●り●外●數●十●篇
 ●の色●(フリートホール)●春●の●な●ご●り●外●數●十●篇
 其文は清楚婉麗、趣味掬すべく其歌は優雅流滑
 奇想天外より來て、句々風を生じ、言々花を降
 らすものは先生の筆さす、此編收むる所近作二
 百篇蓋し落莫振はざる今日文學界中の旗鼓たる
 ものには此書を措きて他に又た何かある

正價金卅五錢

郵稅六錢

大和田建樹君著

(紙數一冊三百餘頁)

全五冊洋裝菊判
正價壹冊四拾錢
郵稅壹冊八錢

新刊 日本大文學史

文學史は文學變遷の歴史なり故に苟も斯道に志す人の明にせざるべからず、本書の世に現はる偶然にあらざるなり矣。

目次

- 卷の一 總論紀元前後三藤原奈良の朝
- 卷の二 延喜天曆○源氏物語時代
- 卷の三 鎌倉時代○足利時代
- 卷の四 近世及今代文學
- 卷の五 文學年表、索引、文學史評釋

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

廿年來從事一大著書

大和田建樹
君編纂

總皮本綴紙數二千頁挿畫
數百個正價金貳圓貳拾五
錢目方四百匁

第八版
日本大辭典

全壹冊

本書の特色

日本大辭典の特色の組織の新案にあり、解釋の適切にあり、引證の博多にあり、挿圖の緻密にあり、發言の明示にあり、索引の簡便にあり、學生用として教師用として獨學用専門用として何れの社會にも利せざる處なかるべし。

本邦のウエブスタ | 辭書

第四版全

日本小辭典

大和田建樹君編

總クローズ金文字入袖珍
美本正價金壹圓郵稅八錢

解説の小辭典の特色は
解の簡約なるにあり
雅俗其中を得るにあり
搜索其宜に適應するにあり
携帶の至便なるにあり
紙質の善美なるにあり
印刷の鮮明なるにあり

新刊全

新體詩學

大和田建樹君著

袖珍洋裝
正價金拾五錢郵稅四錢

本書は
新體詩を學ぶもの、必要
くべからざる軌範なり、先
題より歴史的種類句格附
の撰方文法の變格題の附
書式讀法等の懇切に説述
なられたるもの初學者の要
なり

大和田建樹君編

作文寶典

全三冊

總皮本綴洋裝美本
正價金貳圓廿五錢小包四百目

紙數一千七百頁

本書の價値は作文の實習に便益し作文の標準を明示し作文の模範を與へ詠歌の作法を教へ文學の趣味を解せしむるに在り、其文は通俗其説は篤密を極む、直に文學者必讀の書寶典の名其實に皆かざるなり。

大和田建樹君編

全五冊

袖珍實用作文寶典

總クローズ金字文入
正價金六拾五錢郵稅六錢

紙數一千頁

嘗て大喝采を博せし作文寶典の中より其要を摘出し、更に新體詩作法等を増補して一小冊子とせしものはなり、携帶の至便此上なく燈下爐邊索引に便ならしむ。

第九版

美文韻文花紅葉

全壹冊袖珍洋裝頗美本
正價金三拾錢郵稅六錢

文學士鹽井雨江君
文學士武島羽衣君
文學士大町桂月君

合作

第五版

美文韻文黃菊白菊

正價金貳拾五錢郵稅六錢
袖珍洋裝頗美本

文學士大町桂月君著

大町君の文は蠻貌も動かすこと既に久し悲慨の聲を發しては秋風の老松に激するが如く哀痛の音を吐きては孤猿の幽澗に叫ぶか如く句々血を吐き字々珠を綴る洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、讀書家の燈下この絶好可憐の冊子なかるべからず。

(七)

(六)

土井晚 翠君著	大橋乙 羽君著	内田魯 庵君著	高山文 學士著	齋藤綠 雨君著	川崎紫 山君著
版四	版再	版再	版三	版再	版新
天地有情	風月集	文藝小品	時代管見	あられ酒	小文章
全壹册洋裝上製袖珍正價 金貳拾五錢郵稅四錢最好 評ある册なり	全壹册洋裝上製袖珍正價 金三拾五錢郵稅六錢口繪 極彩色入	洋裝上製全壹册袖珍正價 金三拾五錢郵稅六錢紙數 六百餘頁	全壹册洋裝上製袖珍正價 金三拾錢郵稅六錢附録わ が袖日記	全壹册洋裝上製袖珍正價 金貳拾五錢郵稅六錢精妙 の文最多し	全壹册洋裝上製袖珍正價 金貳拾五錢郵稅六錢□編 を甲乙丙丁の四章に分つ

